

夜を染める黒(旧題：
俺ガイル×ブラック・
ブレット)

つばゆき

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、比企谷八幡がブラック・ブレットの世界で生きていたらの物語。

ガストレアと言う未知の生物の脅威に曝される世界。

十年前に突如出現したガストレアの侵攻を受けた人類は、その圧倒的な物量と個々の能力の高さに敗走を余儀なくされた。

敗走した人類は、かつて彼らが繁栄していた土地に『モノリス』と呼ばれる最後の砦を形成し、ガストレアに対抗する為に軍備の増強、民間警備会社を組織する。

そんな非日常の中で、フリーランスの孤独な民警比企谷八幡は、様々な出来事に巻き込まれながらも日々を生きていく。

作者の日々の妄想を形にした作品その1。

目次

蛭子影胤テロ事件編

序章 | 1

見（まみ）える悪鬼 | 12

悪魔の棄児たち | 29

嗤う白貌 | 51

蛭子影胤追撃作戦 一 | 70

蛭子影胤追撃作戦 二 | 82

現出せしは塵殺の厄災 | 105

選択と後悔 | 130

血染めの大地、眩き光芒 | 147

穿たれた銃弾の先 | 180

聖天子狙撃事件編

舞い込む依頼 | 199

孤独の代価 | 222

吼ゆる野望、糾す清廉 | 234

夜闇に紛るる猛禽 | 254

敵は外側のみに非ず | 278

邂逅せし暗殺者 | 299

オーバーロングレンジ | 318

目には目を、兵士には兵士を 前編

347

目には目を、兵士には兵士を 後編

369

神算鬼謀の狙撃兵 | 390

蛭子影胤テロ事件編

序章

向かってくるステージⅡのガストレアの頭をグロック18Sで射撃する。

飛翔した弾丸は狙い過たずガストレアの脳天に直撃。脳を破壊されたステージⅡガストレアは沈黙する。

右手からステージⅠガストレアの集団。グロック18Sをセミオートからフルオートに変え、途中にリロードを加えながら連続で射撃。数体のガストレアの脳や心臓を打ち抜き、絶命させる。

傷を負いながらも未だ息のあるガストレア2体に接近すると、掌打で1体の脳を粉碎、もう1体には振り向きざまに後ろ回し蹴りを繰り出す。風を切りながら突き出される脚はガストレアの胸部に直撃し、心臓を潰す。

八幡の両腕には黒手袋と肘当てがしてある。黒手袋は一見するとただの手袋だが、バラニウムが動きを阻害しない程度に薄くコーティングされており、手の保護とガストレアに対する攻撃力の上昇を図る事ができる。

基本的に八幡は装備の重量の増加を嫌っており、防具をほとんど着用しない。所持しているのはホルスターとスリング、予備マガジンと手榴弾用のポーチ、ナイフシースくらいである。

『グギャアアアアアアッ!!』

ステージIガストレアを葬った八幡にステージIIIガストレアが迫る。

ガストレアには爬虫類と昆虫が混じったような外見で、身体の節々に外骨格のようなものがついている。

グロック18Sの牽制射撃。頭部を狙った射撃は外骨格に阻まれ甲高い音を上げながら明後日の方向に弾き飛ばされる。

「……硬いな」

グロック18Sが効かないとなるとおそらくサブマシンガンのKRISSVecterの射撃も効かない。そう悟った八幡はタクティカルナイフを抜く。繰り出される前脚の攻撃を紙一重で躲すと、頭部に接近、露出している眼球に突き刺した。

悲鳴を上げ、怒り狂うガストレア。鋭い鉤爪の付いた前足を振り回すが、八幡はそれらを全て見切り、ステップで躲していく。掻い潜る。

ガストレアが一際大きい雄叫びを上げる。前足を大きく振り上げると、そのまま横に一閃。今までより速度も威力もある一撃。だが、怒り狂っているあまり攻撃の筋が甘

い。

八幡はその攻撃を身を屈めて躲すと、その状態から地面を蹴り、懐に潜り込んだ。グロック18Sをクイックドロウ。そしてそれをガストレアの皮膚に押し付け、零距离でフルオート射撃。さすがに骨格が硬くとも、零距离でのフルオート射撃には耐えられなかったらしい。ガストレアは苦悶の声を上げながら後退する。

しかし、八幡はそれを見逃さない。後退するガストレアに一瞬のうちに追いつると、ガストレアの顔面部分に蹴りを叩き込んだ。

勢いをつけた、突風のような一撃。中距離から一気に間合いを詰め放たれた一撃は、ガストレアの骨格と牙ごと粉碎し、顔面を大きく陥没させた。

しかし、ガストレアを倒すにはまだ一歩足りない。ステージⅢだけあって他のガストレアよりも耐久力がある。

八幡は破砕手榴弾を取り出すと、ガストレアの口に放り込み、下顎を蹴り上げて蓋をした。八幡が爆発の余波を受けないようにバックステップで後退すると、数秒後ガストレアの頭部が破片や体液を撒き散らしながら吹き飛んだ。

今ので確実にガストレアは絶命しただろう。ガストレアの討伐の方法は、バラニウム製の武器で脳か心臓を破壊するしかない。

バラニウムの粉末を混ぜた手榴弾で頭部を吹き飛ばしたガストレアは、ゆっくりと倒

れ込んだあと一度大きく痙攣し、そのまま動かなくなった。

恐らく今倒したステージⅢのガストレアが集団を統率していたのだろう、残り数体となったステージⅠのガストレアは、主が撃破された事を認めると逃走を開始した。

もう追う必要もない。タクティカルナイフをナイフシースに収納すると、携帯端末を取り出し「任務完了」とだけ告げる。

端末の電源を切ると、大きく息を吐き、空を仰いだ。

比企谷八幡は、ここ最近比較的平穏な日常を過ごしていた。

朝目が覚めたら顔を洗い歯磨きをし、体力を落とさない為外でランニングをする。一人で住むにはやや広い家に戻ると簡単に朝食をすませ、録り溜めたアニメを消化し、読書をして、大体それで一日が終わる。

学校のある日は朝ギリギリまで家で粘り、帰りのホームルームが終わるや否やすぐ家に帰ってくる。

数ヶ月前までは狂ったように序列向上の為戦闘を繰り返していたが、IP序列が千番越えを果たしてからは、所属していた会社を離れ、フリーランスの民警として活動して

いる。イニシエーターは居ない。

生活費を稼ぐ為に民警の仕事はやるにはやるが、千番越えをしているだけあって比較的報酬の高い依頼が多いので、受ける頻度はそこまで多くない。

命こそ懸けるが、そこその実力さえあれば民警って結構安定している職業なんじゃないか、とまで思ってきてしまっている今日この頃である。

いや、最終的な目標はやはり専業主夫だが。

そんな比企谷八幡にも最近悩みの種が出来ていた。

里見蓮太郎（他数名）によく巻き込まれる。

なかなか切実な問題である。

同じ高校生の同じ民警として感じるものがあるのか、タイムセールに付き合わされたり本当に金欠の時は飯を食わせると家に押しかけて来たり。

八幡ほどではないがやさぐれている所や若干捻くれている所、高校でもぼつちだという事実もあいて、意外と気があってしまうから質が悪い。あとなんだかんだ言つて2人とも主夫っぽいのである。

こんな関係もまあ悪くないと思ってしまうている自分がいるのも確かだった。

「あー……疲れた」

疲れた。超疲れた。

家に帰るなり怠そうな声をあげると、リビングのソファに身体を預ける。

最近では義足をなるべく使わないようにしている為か、ステージⅢ以上のガストレアとなると若干時間がかかってしまう。それも3体だ。

3体だよ？3体。身の丈の何倍もありそうな地味にグロい生物が3体ヨダレ垂らしながら向かってくんの。超怖い。こっち一人だし。報酬は良かったからまあいいんだけどね。

義足を使わない理由は人工皮膚が剥離すると周りにビビられるってのもあるけど。

シャワーを浴びて再びリビングに戻りぼーっとしていると、インターホンがなる。

宅配便かなーっと思って「はい」と返事をし、玄関に向かう。

ドアを開けるとそこにはよく見知った顔ぶれがあった。

「比企谷……飯……飯を……」

「蓮太郎……妾もう限界なのだ……餓死しそう」

民警の里見蓮太郎とそのイニシエーターの藍原延珠である。

こいつらは天童民間警備会社なる超ブラック企業で働いており最近事あるごとに飯をたかってくる。たまに社長もくる。迷惑ここに極まりりである。

「……何やってんだお前ら」

流石にさっきのは演技だったようで普段と同じ状態に戻ると、若干申し訳無さそうに言った。

「……飯、食べさせてくれませんか」

「うむ、やっぱり八幡の料理は美味しいのだ！」

「おーサンキュな。世辞でも嬉しいぞ延珠」

「お世辞じゃないぞ！」

「はいはい」

あれから小一時間。蓮太郎と延珠に残り物で適当に料理を振舞っていた。

「にしても本当に美味いよな。お前の料理。それに加えて家事も完璧なんだからなんか敗北感覚えるわ」

「専業主夫志望だからな。一家に一台欲しいくらいだろ」

「揺るぎねえな」

里見に呆れられる。こっちは真面目なんだが。

MAXコーヒーを嚙下し、料理にがつく延珠を眺めながら里見が話を続ける。

「タイムセールの事で頭いっぱいになっちまってさ、報酬貰い忘れて木更さんにめっちゃ怒られた」

「そりやお前が悪い」

報酬貰い忘れるってとんでもねえな。命懸けのボランティアかよ。割りに合わないにも程がある。

「市民をガストレアから無償で守るのか。とんだ慈善活動だな」

「もうやめてくれ。俺のHPはもう0だ」

弄りすぎたか。普段迷惑かけられてるこっちに比べればまあ安いもんだろう。おかげさまで最近依頼を受ける回数が若干増えた。

「……なあ比企谷。うちで働かねえか？」

「ん？」

うちで？って天童民間警備会社でって事か？

食べ終わったららしい延珠が里見の言葉に敏感に反応する。

「なんだ八幡、会社に入るのか？ 妾は大歓迎だぞ！ いつでも八幡の料理が食べられるよ

うになりそうだからな！」

「飯目当てか……」

延珠は良くも悪くも素直である。そこらのやたら本音を隠したがる奴らよりはよっぽどマシだが。

俺は專業主夫志望だけあつて家事は大体こなせる。炊事洗濯買物掃除、一人暮らしを続けていると自然にこれらのスキルは上がるものだ。

「悪いが俺は今の暮らしを気に入っているんでな。スカウトなら他を当たってくれ」「だよな」

予想通りの回答だったらしく、里見が苦笑を浮かべる。

「悪い、御馳走になった。あとで仕事の話があつたら言ってくれ」

里見が席を立つ。それほど重要な案件でも無いらしい。

「ああ。この件は他の事で請求させてもらうからな」

「出来ればなるべく金のかからない方法で頼めるか？」

「ちゃんと返すならそれで構わん」

延珠にも声をかけようとして振り向くと、延珠は本棚の前で数冊を手に難しい顔をしていた。

「ほら、延珠。もう帰る時間だぞ」

「八幡、難しい本ばかり読んでいるんだな。妾にはまだわかんないものばかりだ。天誅ガールズの漫画とかは無いのか？」

そんな延珠の姿を見て俺は複雑な気分になってしまった。里見から聞いている。延珠のガストレアウイルスによる体内侵食率は40%強。果たして彼女がこれらの本を読んだり高校生活を謳歌出来るような歳までガストレア化せずに生きていられるだろうか。

里見が俺の顔の様子から心情を敏感に察知したのだろう。ゆっくり首を振ると、悲しげに目を伏せた。

「生憎天誅ガールズの漫画はねえんだよな。アニメは欠かさず観てるから後で語ろうな」

「おお！ほんとか！八幡天誅ガールズ観てるのか」

延珠がキラキラした目でこちらを見る。その屈託の無い笑顔に心を痛めながらも首肯する。

「ああ。結構面白いよな、あれ。クオリティ高いからちゃんと一期も見直したぞ」

「ど、同志だ！妾の同志がいるぞ！蓮太郎！」

延珠の興奮の度合いとは裏腹に里見は悲しいものを見るような目でこちらを見る。

「比企谷……その年齢で天誅ガールズはちよつと気持ちわりーぞ」

「なんだよ面白いじゃねえか。つーかもうちよつと齒に衣着せろよ。泣きたくなるだろ」

「なー八幡！また来ても良いか!？」

「おう、来い来い。なんならまた飯食わせてやる」

「八幡いい奴だな！イケメンに見えるぞ！なあ蓮太郎!」

「アホか俺はもともとイケメンだ」

三人での会話の応酬。意外とこういう関係も悪くないかもしれないなどと柄にも無い事を考えながら、里見達を見送る。

「じゃあな。また飯よろしく」

「タダ飯じゃねえ事をちゃんと頭に入れとけよ。……じゃあ、今度は義足のメンテナンスで博士のところ行くから、そんときにな」

「あいよ」

里見たちが帰るのを見送り、ようやく俺は食事の後片付けをし始めた。

見（まみ）える悪鬼

義肢のメンテナンス後、八幡が再び里見達と会ったのは、政府から防衛省への招聘通知が届いたときの事だった。

受付の人間に招聘状を見せると、恭しく招聘状を受け取り、中身を確認する。ロビーで待機していると、案内役であろう男性がやって来て八幡の前で礼をした。

「本日招聘された比企谷様ですね？どうぞこちらへ」

そう言って歩き出す、どうやらついて来いという事らしい。

しばらく歩くと、ふと大きな部屋の前に着く。案内役は役目を果たしたというように一礼すると去って行った。

重々しい扉を開くと、想像よりも大きな空間が広がる。

部屋の中央には大きなテーブルが一つとその周りを囲む様に置かれた椅子が約20個ほど。部屋の奥には壁の上半分を埋め尽くすほど巨大なプラズマディスプレイ。席はほとんど埋まっており、座っている人間とその後ろに付き従うように立っている人間に分かれている。おそらく民間警備会社の社長と民警ペアだろう。

序列千番以内の民警はほとんどが事務所に所属しているらしく、フリーランスの民警として招聘されたのはどうやら八幡だけのようだった。

八幡は手近な壁に近づくと、腕を組んで寄りかかる。

数分後、天童民間警備会社社長、天童木更と社員の里見蓮太郎が入ってくる。イニシエーターの藍原延珠は連れていない。

蓮太郎達は他の大柄な民警と揉めたりそのイニシエーターとなんかジエスチャーで会話してたりしていた。

蓮太郎って本当にロリコンなんだなって思いました。

「比企谷」

蓮太郎がこちらに気付いたようで、近づいてくる。

「なんでお前がここにいるんだ？お前会社に所属してないだろ？」

「序列千番以内には招聘状が届いてんだよ」

八幡の簡潔な答えに里見が納得したように鼻を鳴らす。

「序列千番ねえ……よくもまあ単独でそこまで駆け上がったもんだ」

「大きなお世話だ」

八幡はまだ新しいイニシエーターと契約を結ぶ気は無い。なんだかんだ言っつてやはり一人の方が性に合っているのだ。

そんな俺の心情を知ってか知らずか、蓮太郎が再び口を開いた。

「にしてもまあお前よく来たよな。普段のお前なら絶対面倒臭がつて来なかつたら」「防衛省と政府からのお達しなんだ、無下にしたらもう依頼が来なくなるかもだろうが。無視できんならそうしたかつたんだけどな」

蓮太郎との会話の途中で、禿頭の自衛官が部屋に入つて来た。民間警備会社の社長達
が立ち上がろうとするのを手で制し、部屋を見渡す。

「空席一、か」

そう呟いた自衛官の視線の先には、誰も座っていない三角プレート席があった。

「本件の依頼内容を説明する前に、依頼を辞退する者はすみやかに席を立ち退席してもらいたい。依頼を聞いた場合、もう断ることができないことを先に言っておく」

内容教えてくれない上に聞いたら聞いたで強制参加ですか。本当にとんでもないの
な。自衛官の言葉に気分が萎える。

誰か辞退する人は居ないのかと周りを見るが、今のところ誰も退席する様子はない。

全員が参加する意思を表明したことに自衛官は頷くと、その場から一步下がった。

突如、彼の背後にあつたプラズマディスプレイに一人の少女が映し出される。

木更達社長クラスの人間は、ディスプレイに映し出されたものを見るや否や弾かれた

よう立ち上がった。

——聖天子。現在の東京エリアの国家元首。

聖天子のすぐ傍、付かず離れずの距離には側近の天童菊之丞が立っている。

『みなさん、ごきげんよう』

精緻なレースをあしらった純白のドレスに日本人とは思えない銀髪。そして、人間離れした容姿。

もう少し幼かったら精巧なビスクドールみたいだと、それが八幡が聖天子に抱いた第一印象だった。

『依頼内容はとてもシンプルです。先日東京エリアに侵入して感染者を出したガストレアの排除とこのガストレアに取り込まれているケースの回収です』

デイスプレイにジュラルミンケースと破格の報酬額が表示される。なんかその0の多さに蓮太郎達……特に社長の方が目を剥いていた。

ガストレアの排除とケースの回収。それは理解できた。だが、それだけの事にこんな常識外の報酬をかける意味がわからない。それに不確定要素が多すぎる。ガストレアのステージも不明、モデルも不明、潜伏場所も不明。それにそもそもこんな事に何故自分と呼ばれたのか。

「質問、宜しいでしょうか」

気がつくとは質問をしていた。自分自身の予想外の行動に一瞬驚いたが、疑問を解消する良い機会だと思い、平静を取り戻す。

『貴方は?』

「比企谷八幡です」

『……質問を許可します』

「何故、自分のような何処の会社にも属さない一介の民警がここに呼ばれたのでしょうか」

『質問にお答えしましょう。比企谷さん、聞くところによるとあなたのはIP序列は994位、2年間の間イニシエーターが不在だったことを申告しなかったのはこの際不問に付しますが、それは単独で序列千番の実力に匹敵するという事実でもあります。現在政府は猫の手も借りたい状況なので、民間警備会社に所属していなくとも序列千番以内の民警はここにお呼びしている次第です。……理由として不十分でしょうか』

聖天子が手元の書類でも見ているのだろうか、時々目線を下げながら答える。

IP序列994位という単語に、何故こんな奴が、という視線が突き刺さる。とかさつき里見とどつきあつてた奴が超睨んでた。めっちゃ怖いです。

「……いえ」

やはりイニシエーターが居ないという事まで調べられていたか。居ないまま続けて

いたとしても何かペナルティがあるという訳でもでもない。頭を振ると、次の質問に移る。

「ガストレアのステージと潜伏場所は政府は把握していますか？」

『現状では行方を捜索中です』

おいおいマジで把握してないのかよ。てか潜伏場所不明って超大変じゃん。ここにいる人数で足りるの？ いやもつと増えるだろうけどさ。

『質問は以上ですか？』

「いえ、最後にもう一つ。これには依頼内容に見合わない破格の依頼料が設定されていますが……その理由は件のケースにあると見て宜しいでしょうか」

『……お答えできません』

正直最後の質問はただの興味本位だったが、質問の内容を聞いた聖天子が微かにだが動揺する素振りを見せた。他の連中は気付いていないだろうが、明らかにケースに何かあると見て良いだろう。

「ケースの中身が何か、お尋ねしても？」

天童民間警備会社社長、天童木更が質問をする。

疑問を聖天子にぶつけたことで、その疑問が解ける事は無いだろう。高確率で聖天子は口をつぐむ。個人的に興味が無い訳でも無いが――

不意に不快な視線を感じ、そちらの方を向く。そこには、燕尾服を着た、舞踏会用の仮面にシルクハットという出で立ちの男がいた。

男はついさつきまで空席だった席で卓に脚を投げ出すように座っており、腹の上で手を組んでいる。

いや、八幡が驚いているのは男の格好には無い。

……一体、いつからそこにいた？

そして、何故誰も気付いていない？

それに、俺は自身がこの部屋に入ったそのときから警戒を解かなかった。その中でどうやってここに侵入した？

銃を構えようと、腰に付けているホルスターに半ば反射的に手を伸ばす。が、銃に向かつて伸ばした手は、あえなく空を切った。

銃が無い。ほんの数分前までは腰に帯びていた筈の銃が。

銃の在り処はすぐに分かった。八幡をまるで品定めするような目で見ていた仮面の男が、銃をヒラヒラと振っていたのだ。苛立ち混じりに睨め付けると、男は大仰な素振りですでに肩を竦める。

聖天子と天童社長の会話が佳境に差し掛かったとき、不意に仮面の男がけたたましい笑い声を上げた。

『誰です』

「私だ」

男が声を上げると、両隣に居た社長クラスの人間が悲鳴を上げながら椅子から転がり落ちる。

さも今まで仮面の男の存在に気付いて居なかつたかの様な——いや、事実気付いて居なかつたのだろう。

「お前は……ッ！」

蓮太郎が仮面の男を見て驚愕に目を見開く。

男は卓上で組んでいた脚を戻すと、身体を反らせて跳ね上げるように立ち上がる。

『名乗りなさい』

突然の闖入者に聖天子の冷たい声突き刺さる。男は聖天子の言葉を受けて、シルクハットを取ると一礼した。

「これは失礼……私は蛭子、蛭子影胤という。お初にお目にかかるね、無能な国家元首殿」

蛭子……影胤？ 聞いた事の無い名だ。なんかすごい悪役っぽい。

聖天子が蛭子影胤の失礼極まりない言葉に目を細める。

「お前、どつから入って来やがった！」

「やあ、里見くん。先日振りだね」

蓮太郎が腰のXDを抜き、銃口を影胤に向けながら前に出てきた。

「何処から、と問われれば正面から堂々と、と答えるのが正しいね。もつとも、途中で突っかかって来たハエは何匹か殺したけどね」

影胤は実につまらなそうに言うのと、今度はめぼしいものでも見つけたかのような目で続ける。

「そういえば途中でその——比企谷君、だったか。彼に気付かれてしまつてね。正直誰にも気付かれないと思つていたから少々驚いたよ」

「……………そろそろ俺の銃を返してもらつても構わないか？　蛭子影胤」

「ん？　ああ、構わないとも」

影胤が銃を放る。飛んできた銃をキャッチすると、何処にも細工されてない事を確認し、ホルスターにしまった。

「良い銃だ。整備が行き届いている」

「そう思うんならもつと丁重に扱つてくれ」

「これは失敬。次からは気を付けるよ」

「次からは触らせねえよ」

「だろうね」

八幡の返答に影胤が再び肩を竦める。心なしか少し楽しそうでもある。

「そうだ、丁度良い。私のイニシエーターを紹介しよう。小比奈、おいで」

「はい、パパ」

影胤の声に少女が前に出てくる。黒髪短髪に、同様に黒いドレス。腰の後ろには小太刀を二本帯びている。

少女は卓上になると、ドレスの裾を摘まんでお辞儀をした。

「蛭子小比奈、十歳」

「私のイニシエーターにして、娘だ」

娘？イニシエーター？まさかこの男、民警なのか？

「パパあ、みんなこっち見てる。斬っていい？」

小比奈と呼ばれた少女が影胤の燕尾服の裾を引っ張る。さらっと恐ろしい事を言う少女だ。

「よしよし、だがまだ駄目だ」

「うう………。パパあ」

八幡は警戒を解かず影胤を見据えながら蓮太郎に声をかける。先程からの蓮太郎の

反応から察するに、この男について何か知っているのかもしれない。

「……里見。この男と面識があるのか？」

「面識があるも何も……先日襲われたばかりだ」

「！……よく無事でいられたな」

「まったくだ」

影胤はこちらに首を向けると「ヒヒヒ」と笑う。

「今日私がこの場に足を運んだのは、私もこのレースに参加する旨を告げる為だ」

「……………どういふことだ」

『七星の遺産』は我らが頂く、ということさ」

影胤が妙な単語を口にした。同時に聖天子が目を伏せる。あのジュラルミンケースと何か関係があるのか？

「諸君！ ルールの確認をしようじゃないか！ 私と諸君、どちらが先に七星の遺産を手にする事が出来るかの勝負だ。賭け金は……………君達の命でいかが？」

ぞわ、と肌が粟立つのを感じる。横目で隣を窺うと、蓮太郎も顔を強張らせていた。

「さつきからごちゃごちゃとうるせえんだよ」

さつきまで黙っていた（たぶん）蓮太郎に絡んでいたプロモーターが、背負っていた

バスタードソードを抜く。見た目と同様に短気な性格らしく、傍目から見ても苛ついているのがわかった。

プロモーターは蓮太郎や八幡の身長ほどもあるバスタードソードを構えると、一息で蛭子影胤の懐まで入り込む。——速い。

「ぶった斬れるやああっ!!」

プロモーターの腕が唸る。バスタードソードを片手で扱う腕力で、手にした得物を剛速で振るう。

黒く輝く刀身が影胤に迫る。

ガイイイイインツ!!

部屋に響き渡る金属質で耳障りな音。結果として、プロモーターは蛭子影胤に傷一つ付けることすら叶わなかった。刀身が影胤に到達する前に、見えない障壁のようなものにぶち当たって弾き飛ばされたのだ。弾き飛ばされた剣を彼のイニシエーターがキャッチする。

あれは………バリア？

今日何度目かの驚愕。表面にこそ出さなかったが、今日一番驚いた。まさかあんな中二感満載なモノを展開出来るとは。

「将監、下がれ!」

彼の上司らしい上質なスーツをまとった男が懐から銃を抜く。周りを見ると、銃を所持していたほとんどの人間が蛭子影胤に向かって構えていた。将監と呼ばれたプロモーターが意図を察して舌打ち混じりに飛びすぎる。

一拍おいて、連続した銃声。護身用の拳銃や短機関銃の銃弾が蛭子影胤に殺到する。だが、やはり銃弾は蛭子影胤には届かない。影胤の周囲2 m程に展開されたドーム状の障壁が全て明後日の方向に弾き飛ばしているのだ。銃弾が衝突する度に青い燐光が見える。

やがて全員が弾を撃ち尽くし、撃鉄やスライドストップが上がる。

銃口から上がった煙と鼻を刺す硝煙の匂いの中、蛭子影胤と少女は飄々と言った体で何事も無かったかのように立っていた。

果たして影胤の障壁は全ての銃弾を防ぎきった。障壁に当たった弾丸は一つの例外も無く弾き飛ばされており、跳弾がテーブルや壁を抉っている。

「そんな……………」

誰かが唾を飲み込む音がする。

影胤が自慢げに手を広げた。

「斥力フィールドだ。私は『イマジナリー・ギミック』と呼んでいる」

どうやら中二バリアの名称はイマジナリー・ギミックというらしい。蓮太郎が信じら

れないものを見るような顔で呆然と呟いた。

「バリアだと……？ お前、本当に人間なのか？」

「よくされるよそういう反応。もちろん人間だとも。もつともこれを発生させる為に内蔵のほとんどもをバラニウムの機械に詰め替えているがね」

「そういうば、と言つて影胤が首だけこちらに向ける。」

「比企谷くん、何故君は撃たなかつたんだい？」

「いや、さつき脳筋の剣弾き飛ばした時点で銃効かない事くらいわかるだろ」

銃弾だつてタダじゃないしな。

「ほう。なかなか聡いね」

「そいつはどうも」

影胤は里見の方に向き直ると、名乗りを上げた。

「名乗ろう里見くん、私は元陸上自衛隊東部方面隊第七七七機械化特殊部隊『新人類創造計画』蛭子影胤だ」

新人類創造計画。

その単語に目を見開く。おそらく蓮太郎も似たような反応をしているだろう。忘れるはずもない、八幡や蓮太郎と因縁深い計画だ。

「ガストレア戦争が生んだ対ガストレア用特殊部隊？ 実在する訳が……」

将監と呼ばれたプロモーターの上司が呟く。彼らのようにガストレア戦争やガストレアと関係のある人間からしたら当然の疑問だ。だが影胤はその疑問をにべもなく一蹴する。

「信じる信じないは君の勝手だ」

影胤は里見の前に歩み寄ると、どこからともなく箱を取り出した。卓上に箱を置くと、告げる。

「里見くん、君にプレゼントだ。私はこちら辺でお暇させてもらうよ。……………行くよ、

小比奈」

「はい。パ。パ」

二人はごく自然な動作で窓まで近付くと、影胤が半身だけ振り返った。

「絶望したまえ民警の諸君。滅亡の日は近い」

最後にそう言い残すと、窓を割り、飛び降りていった。

部屋の中が静まり返る。すると、まるで見計らったかのようなタイミングで錯乱した様子の男が部屋に入ってきた。

「たっ……大変だッ、社長が自宅でこ、殺されて……く、首がッ！」

パニック状態に陥っている男は、おそろこの会議に出席するはずだった社長の秘書だろう。それが、今は喉が裂けんばかりに悲鳴を上げている。

「じゃ、社長が自宅で殺されたッ！ 死体の首が何処にも無い！」

蓮太郎が顔を強張らせて影胤が置いていった箱に歩み寄る。震える手で包装を解くと、ゆっくりと蓋を持ち上げる。ハコの中身を目の当たりにした蓮太郎の顔が、みるみるうちに青くなっていく。

蓋を下ろした蓮太郎は、目を閉じ、ゆっくりと息を吐いた。

「……………首か」

「……………ああ」

蓮太郎が次に目を開いたときには、表情にはつきりとわかるほどの憤怒を覗かせていた。

「……………あの野郎オツ!!」

蓮太郎が力一杯に卓に拳を叩きつける。

『静粛にッ!』

聖天子の声に冷静さを欠いていた部屋の面々がはつとする。

『状況は想定外の方向に進行しつつあります。……新たにこの依頼に条件を付け加えさせて頂きます。あの男より早くケースを回収して下さい。』

聖天子は覚悟を決めたように一度目を閉じると、澄んだ声で言い放った。

『ケースの中身は、七星の遺産。使用する人間によつては東京エリアに大絶滅を引き起

こす封印指定物です』

悪魔の棄児たち

例の会議から数日後、八幡は里見達の買物に付き合わされていた。

案の定一番はしゃいでいるのは蓮太郎のイニシエーター、延珠である。

休日の都心の、凄まじい人出の中、荒れ狂う人の波に揉まれながら商店街へやって来ていた。

おのれ里見……！ 俺のせつかくの休日……！ 恨む……絶対恨んでやる……！！

「比企谷、いつになく目を腐らせながら呪詛の言葉を吐き続けるのはやめてくれ」

おっと声に出てたか。

蓮太郎がうんざりした様子で話しかけてくるが、知ったことではない。巻き込まれた張本人なのだ。多少の呪詛は許せと言ったところだ。

「つーか俺がこうなってるのも全部お前のせいなんですけど。なんなの？ 人の休日潰しておいてそんなに楽しいの？」

「……いや、それは悪かったと思ってる」

八幡の文句に蓮太郎が若干冷や汗をかきながらも答える。巻き込んだ側として若干悪いとは思っているようだ。

休日の商店街。インドア派の八幡にとつてはまさに地獄である。

こんな活気溢れたところ来るなんて俺のキャラじゃねえし。活気溢れ過ぎだし。俺文明人だから日差しとか駄目なんです。

人の波に幾度も揉まれ、長い長い行進行脚のおかげか、不意に嘔吐感が込み上げる。

「うっ……気持ち悪い」

「なっ、ちよっ比企谷？ 大丈夫か？」

「大丈夫な訳あるか……ちよっと休憩させてくれ。マジで」

蓮太郎が延珠を連れて近場の喫茶店に入り、八幡も後に続く。外の人の多さに比べて客は意外と少なく、席の半分程が空いていた。

適当な席にすわり、コーヒーを注文する。蓮太郎はコーラ、延珠は小さいケーキを頼んでいた。

「悪いな、延珠。せっかくの買い物なのに体調崩しちゃって」

「妾は別に構わないぞ。無理矢理八幡を連れて来たのは妾達の方だからな。少し申し訳ないくらいだ」

「そうか」

運ばれて来たコーヒーに大量にガムシロとミルクをぶち込む。練乳が無い事が悔やまれるが、そこは我慢だ。

その様子を眺めていた蓮太郎が顔をかなり引いた様子でしかめた。

「お前……それ甘すぎねえか？」

「美味いぞ。やってみれば？」

「遠慮しとく……」

ドン引きされていた。ちなみに延珠はにこにこしながらケーキを頬張っている。癒されるわあ。

「俺、ちよつとトイレ行つてくるわ」

蓮太郎が席を立つ。コーヒーのおかわりを注文しようか悩んでいると、不意に声をかけられた。

「……………比企谷くん？」

「あん？」

艶やかな長い黒髪、透き通るような白い肌、彫刻のような伶俐で端正な顔立ち。我ら

が奉仕部部长、雪ノ下雪乃である。

「……………雪ノ下」

「あなたこんな所でどうしたの？あなた、休日に出掛けるような人だったかしら」

「お前こそなんでここにいんだよ」

「今日は日差しが強いし、人も多いし……………そこであなたがこの喫茶店に入っていくのが見えたから、休憩ついでに寄ってみたの」

そこで雪ノ下が初めて延珠の存在に気付いたようで、あからさまに軽蔑した表情になった。まさに一瞬で。マジで背筋が凍るレベル。

「比企谷くん……………誘拐は犯罪よ？」

「いや違いし。知り合いの……………連れ子？居候？だな、うん」

「なにかしらその曖昧な反応は……………」

八幡の要領を得ない返答に雪ノ下が目頭を押さえる。

「ん？八幡の知り合いか？」

延珠も雪ノ下の存在に気付いたらしい。怪訝な声を上げる。

「いや、俺の部活の部長」

「ほー」

「そもそもあなたには休日一緒に出掛けるような知り合いなんて居る筈がないじゃない

「い」

「いや本人が言ってるんだから信用しろよ……そんな信用されてないの？ 俺」

「当たり前じゃない」

「ん？ どうした比企谷。知り合いか？」

と、丁度御手洗いから戻って来た蓮太郎が声をかける。

「おう。あつちからしたら大変遺憾ながら知り合いらしい」

「確かにその通りだけれど言い方が地味に腹立たしいのは何故かしら……」

「まあ、あれだ。部活の部長」

「お前部活なんてやってたのかよ。初耳だぞ」

蓮太郎が大仰に驚く。そりやそうだ。普段の八幡からは部活なんて想像出来ないだろう。

「聞かれなかったからな。俺も不本意なんだが」

「まあ、なんでもいいわ」

なんでもいいんですか雪ノ下さん……。先に声かけてきたのはそっちなんですけどねえ……。

「私はこの辺でもう行くわ。もともと一人で来ていたもの」

「あいよ。じゃあな」

「ええ」

その後買い物は特に何か起こる事も無く終了した。

延珠の天誅ガールズのグッズを買ったり、新刊の出ている小説を買ったり。正直疲れたといえど疲れたが、買いたい物も買えたし……と納得することにした。

延珠は蓮太郎とおそろいのブレスレットを買っていた。一つ七千円弱。クソ高え。天童民間警備会社の社長も延珠にはちゃんと給料を払っているのだから恐れ入る。

八幡がかなり引いた目でブレスレットを見ていると、延珠が「これは妾と蓮太郎の愛の結晶なので、生憎だが八幡に買ってやることは出来ん。だが違うものなら買ってやつてもいいぞ？」と言われた。クソ高いので謹んで遠慮させて頂いた。

日が傾き始めた頃、八幡達三人は買うものも買い終わり、帰り道に差し掛かったときだ。

人混みの向こう側から怒号が聞こえてきた。

「そいつを捕まえろおおっ!!」

人垣を割って出てきたのは、延珠と同じくらいの年齢の一人の少女。服のところどころがほつれ、頬は煤けている。そして、何よりも赤く変化した瞳が、その少女が何者か何よりも雄弁に語っていた。

少女が手に持っていたのは、幾つかの食料。どうやら盗品らしい。

少女は延珠の姿を認めると、一瞬はつとして足を止める。が、今の状況を思い出したらしく、再び駆け出した。

しかし、常に極限状態で生きているが故の疲労か、足をもつれさせてしまう。次の瞬間、後ろから迫って来た幾つもの手が少女を捉えた。

少女の手が、足が、衣服が、幾つもの手によつて絡め取られる。

哀れ少女はもう逃げることは叶わず、地面に引き倒された。

「はっ、放せえ!」

外周区の子供。そして赤い瞳。ガストレアウイルスに取り憑かれた『呪われた子供たち』だ。

複数の大人たちが少女の周りに群がり始め、罵声や怒声を浴びせかけている。少女の骨が軋む音が耳に痛い。こんなことがここでは日常的に起こっているのだと思うと吐き気がする。だから外出は嫌なんだ。

少女がまるで助けを求めるかのように延珠に手を伸ばす。それを見た延珠は手を震わせながらも手を伸ばすが、次の瞬間蓮太郎が少女の手を払い、睨め付けた。

少女が蓮太郎に怯えた表情を見せ、延珠が悲痛な顔をして伸ばしかけた手を下ろす。

蓮太郎の理屈はわかる。ここで延珠が手をとれば、延珠も呪われた子供たちだと周囲の観衆に露見し、ほぼ確実に集団リンチに遭う。蓮太郎にはこうするしか選択肢は無い。延珠を巻き込まない為に。

……だから。

「……………え……………?」

少女の掠れた弱々しい声。

「……………比企谷……………?」

だから、俺がその手をとった。払われた少女の手が、地面に下ろされる前にしっかりと握りしめる。

少女にのしかかっていた大人を八幡が冷めた目で見ると、何かに縛られたかのように動きを止める。その隙に少女を引き出し、背中で庇うように前に進み出た。

「なっ……………なんだテメエ! このバケモノを庇うのか!」

硬直が解けた観衆が動き始め、今度は八幡に罵声を浴びせかける。そうだ。こういう

のは俺の役目だ。

「ああ」

「そいつはガストレアだ！ 呪われた子供たちなんだぞ!!」

「だからなんだ？」

「は……？」

観衆が再び動きを止める。何を言っているかわからない、と言ったところか。

「だからなんだ？ 　って言ったんだよ。この子は万引きをしたのかも知れんが、犯罪者をランチにしてもいいなんて法律があるわけでもねえし、呪われた子供たちにだって人権はあるだろうが」

詭弁だ。こんなことを言っただってこいつらが止まる訳じゃない。今までそれが許容されて来ていて、政府からも黙認されているのだ。これは意味のある行動ではない。

蓮太郎や延珠が固まっている。八幡がこんな行動をするなんて全く思わなかったのだろう。普段の八幡からは想像出来ない行動だ。

返答の間を与えず、八幡は口元を釣り上げながら続けた。

「なんで『呪われた子供たち』に暴行を加える？ ガストレアウィルスを身に宿しているからか？ それともただの憂さ晴らしか？ まあどちらにせよ自分勝手な理由だよな。ガストレアよりお前の方がよっぽど醜い」

観衆の憎悪が自分に向けられるのが分かる。賞賛を受けたことも、誰かに認められた事もない。受けたことがあるのは侮蔑と憎悪と嘲笑だけ。昔から慣れ親しんだ感覚だ。

「お前らは呪われた子供たちを外周区に追いやって、よくもまあこの安全地帯でこのうと暮らしてるもんだ。大嫌いな『呪われた子供たち』に守ってもらってる立場だつてのに、まったく良いご身分だよな」

「貴様アツ!!」

八幡の台詞に頭のネジが飛んだのか、複数の暴漢が突っ込んでくる。もうすでに少女に危害を加えていたのだ。今更躊躇いはしないだろう。

八幡は殴りかかってきた男の鳩尾に拳を叩き込み、背後から掴みかかってきた男を避けると、手を捻りあげた。

「ぎげん!!」

更にもう一人、拳を固めて突っ込んでくる暴漢。手を捻りあげていた男を観衆の方に投げ飛ばすと、後ろから殴りかかってきた男の拳をさけ、関節を極めながら地面に組み伏せる。

組み伏せられた男は、地面に顔を擦り付けながらもなんとか抜け出そうともがくが、更に力を入れるとミシミシと骨から軋む音がし、呻き声をあげて動かなくなった。

「貴様ら何をやっている!!」

人垣が割れ、二人組の警官がやってくる。

抑えつけていた男を放すと、手をさすりながら抜け出した。先ほど殴りかかってきた暴漢たちは既に人ごみの中に紛れ退散してしまっている。

警官が何事かと詰め寄ってくる。

「集団リンチの仲裁をしていただけです。……あと、この子」

少女が万引きをした事と、身寄りが居ないだろうから保護してやって欲しいという旨を警官に告げると、警官は少女を冷たい目で見たあと、パトカーに少女を入れて去っていった。

蓮太郎と延珠のもとに戻ると、延珠が蓮太郎に何故あの少女を助けなかったのかと責め立てていた。

周りの視線に気付いたらしい蓮太郎が延珠をビルの隙間の薄暗い空間まで連れて行く。ついていくと、八幡に気付いた延珠が頭を下げて来た。

「八幡、すまない……あと、ありがとう。あのとき八幡が助けてやらなかったらあの子は

……」

「気にするな。お前だって里見が動けなかった理由くらいわかってんだろ」

「……………うん」

俯く延珠。気持ちはわからなくてもない。同じ呪われた子供たちが目の前でランチに遭っていたら是非でも助けたくなるだろう。

そう思い蓮太郎の方を向くと、蓮太郎は難しい表情をして何か考えこんでいた。突然弾かれたように顔を上げると、延珠の肩を掴む。

「延珠。家まで一人で帰れるか？」

「え？」

延珠の返事も待たずに蓮太郎が走り出す。おいおいそりや無いだろ。延珠めっちゃ困惑してんぞ。

延珠に一言断りを入れ、八幡も蓮太郎の後を追う。

少し周囲を見回すと、原付に乗った少年に声をかけてる蓮太郎の姿があった。蓮太郎は民警ライセンスを少年に提示すると、少年が困惑しているうちに原付を奪い取る。それ職権乱用だろ。

「どうした里見っ」

「あの子……もしかしたら普通に署に連れられないかもしれないかもしれない」

蓮太郎の言葉に八幡の脳に電撃が走る。あの子は『呪われた子供たち』だ。警官の中にも子供たちに私怨を燃やす輩は少なくない。あの警官たちが素直に署に連れていくかどうかと言われたら………

「あの警官達の……私刑に処されるって事か？」

「確信はもてない」

だが、「可能性は低くない、と言外に含める蓮太郎。大分不味い状況だ。下手したら人気の無いところに連れて行かれ殺されかねない。

「一旦荷物を置いてから行く。先に行つてくれ」

「わかった」

言い切るよりも早く原付を走らせる蓮太郎。あの子を、死なせる訳にはいかない。

駅のロッカーに荷物を預け、スマホの画面を見る。こんなときの為にGPSアプリを入れておいたのが幸いした。スマホに入れてある連絡先は数えるほどしかないが、仕事上関係のある蓮太郎の連絡先だけはどうしても必要だったのだ。

画面にはここから数キロ……外周区あたりにアイコンが点滅している。ここは……：廃工場か廃墟の群落だろうか？

駅から飛び出すと、運良く止まっているタクシーを見付けた。タクシーに飛び乗ると、行き先を告げ、出来るだけ早くと付け加える。

制限速度ギリギリのスピードで走るタクシーに揺られながら、少女がどうか無事でい

て欲しいと切に願った。

タクシーを飛び降りると、短く札を言って、料金を多めに払う。

飛び降りた先は廃墟群。外周区に程近く、長い間放置されていたため鉄錆の臭いが鼻を刺す。

廃墟群の中に進むとタイヤ痕がある。大分新しい為、おそらくこれがあのパトカーのものだろう。

さらに進むと、廃ビルの陰に隠れるように停められた原付があった。蓮太郎がここに来ている証拠だ。

歩いていると、突然漂ってくる濃密な血の臭い。スマホの画面を確認。血の臭いがする方向とGPSのアイコンの方向が一致。嫌な予感がする。

廃墟群の中を一気に駆ける。途端に強くなっていく血臭。嫌な予感は当たった。当たってしまった。

鉄柵のそばで、蓮太郎例の少女を抱きかかえていた。少女の体は頭を始め至るところから血が出ていて、顔面が蒼白だ。どうやら先ほどの警官たちに銃で撃たれたらしい。

その姿を見て、八幡は無力感に苛まれた。助けたつもりになってもつと酷い目に遭わせてしまった。いや、あそこで八幡が介入しなくとも結果は同じだったろう。だが、それを防げなかった自分にやり場のない怒りを覚える。

「その子が……………」

「……………さっきの警官にやられた」

蓮太郎が悔しそうに唇を噛む。

「俺は……………」の子を守れなかった」

きつと蓮太郎も八幡と似たような心情なのだろう。歯が割れんばかりに食いしばっており、奥歯がギリギリと軋みあげている。

蓮太郎が服が血で汚れるのも構わず少女を抱きしめる様を目の当たりにして、痛々しいとさえ思った。

その時、体の至るところに銃で風穴を開けられ、とうに絶命していたはずの少女がむせ返りながら血を吐いた。

「……………!!」

まだ、生きている。怪我の状態からは助かるかどうか危ういが、もしかしたら――

「里見ッ」

「わかってんよ！」

蓮太郎の返答。考える事は同じらしい。八幡と蓮太郎は少女が助かるかもしれないという一縷の望みにかけて走り出した。

「……………かなり危険な状態です。助かるか否かは五分五分といったところでしょう」

「……………それでも、まだ生きていると言うならやってくれ」

なんとか病院まで辿り着いた八幡と蓮太郎は、少女の容体について医師から話を聞いていた。八幡は手近な椅子に座っており、医師には蓮太郎が対応している。

少女は病院に着くや否や集中治療室に運び込まれ、現在手術の真つ最中だ。着いたときにはかなり呼吸も浅く、本当に助かるかどうか今も疑問だが、やはり呪われた子供たちだけあって再生力と生命力が並では無いらしい。使用された弾丸がバラニウム製でなかった事も幸いして、未だ命を繋いでいる。

「失礼ですが、あの子は……………」

「……………ああ、『呪われた子供たち』だ」

蓮太郎の返答に医師が苦い顔をする。

『呪われた子供たち』には保護者も戸籍も無い為、手術料がとれない事を懸念しているのだろう。

あるいは、この医師事態が『呪われた子供たち』を忌避しているのかもしれない。

「大変申し上げにくいのですが……………」

「手術の代金は俺が肩代わりする」

医師の言葉をさえぎる様に言う。きつと医師が言いたい事はこの事だろう。

「……………比企谷……………!?!」

蓮太郎から驚愕の声。まあそうだろう。手術料は馬鹿にならない金額の筈だ。だが、ここでその額を支払えるのは八幡しかない。

「構わねえよ。金にはある程度余裕がある。……………それでいいですか」

「は、はい」

若干気圧されたような医師の声。蓮太郎が申し訳なさそうに目を伏せる。別に蓮太郎が罪の意識を抱く必要は無い。事実こいつの現在の生活はかなり切迫している。

失礼しますと断つて、医師が場を離れる。後には八幡と蓮太郎だけが残された。夜も

遅い病院の中、二人の間に暗い沈黙が落ちる。いつまでもこうしている訳にもいかないので、壁際に置かれてある椅子に腰掛けると、先に口を開く。

「もうお前がここに居る必要は無いぞ。家で延珠が待つてるんだろ」

「あ、ああ……悪い」

蓮太郎が暗い面持ちのまま病院を後にする。八幡は未だに点灯し続ける《手術中》の表示の前で手術が終わるのをひたすら待ち続けた。

物々しい金属質な扉の上の、《手術中》の灯りが消えたのは、それから丁度六時間後の事だった。

蓮太郎が帰ってから六時間の間、何も口にしていなかったが、不思議と苦にはならなかった。

扉から神妙な面持ちをした初老の医師が出て来て、八幡の前で立ち止まる。

八幡は手術の結果がどうなったのか一刻も早く聞きたかったが、可能な限り落ち着いた所作で立ち上がった。

「手術は成功です」

思わず、安堵の溜め息を吐いてしまいたいそうになる。だが、今度は助けられて良かった。

そう思つて顔を上げると、似たような表情をしている医師と目が合う。

「ありがとうございませした」

いえいえ、と初老の医師が存外朗らかに笑う。

「しかし……手術が成功したのはほとんど奇跡のようなものです。さすがは『呪われた子供たち』と言ふべきか……普通の子供ならまず助かつていないでしょう」

そりやそうだ、と思う。胸や腹ならまだしも、頭にまで何発か銃弾を食らつてゐるのだ。普通の子供だつたら助かる道理は無い。

「……完治までどのくらいかかりますか」

『子供たち』の再生力を加味しても良いのなら、数日で完治するかと。ですが、無理に動かさず、安静にして置いた方が良いと思います」

「そうですか……」

それきり、両者は口を噤む。もともと会話は得意ではない性分だ。こんな空気の中雑談で場を盛り上げる事なんて出来るはずもない。

思い出したかのように、初老の医師が遠慮したような顔つきで聞いてくる。

「退院した後……あの子はどうするおつもりですか？」

聞いてきたのは今後の事。もし少女が回復したとしても、またそのままにすれば同じ事が起こるだろう。だが、その答えは決まっている。

「外周区寄りに、『呪われた子供たち』を匿っている場所があるんで、そこに連れていきます」

そうですか……、と医師が安心した表情を見せた。

「以上ですか？」

「いえ、あともう一つ」

医師に向き直る。

「彼女に会わせてくれませんか？」

相手が理解のある御仁だったのか、特に嫌な顔をされることも無く、彼女が寝ている部屋に通してくれた。

件の少女が寝ているのは、部屋の奥の、窓際のベッド。

時刻は既に深夜の二時を回っており、後幾らも経たないうちに三時になる。今日は満月なのか、月明かりが妙に明るく、カーテンの隙間から差し込む光が寝ている少女の顔を柔らかに照らしていた。

「……………」

その穏やかな寝顔を眺め、顔に手を伸ばす。煤けていた顔も、拭かれたおかげで綺麗

になっている。少女は存外端正な顔立ちをしていた。

口元に手をやると、呼吸することに吐き出される息が感じとれる。……良かった、生きています。

彼女は『呪われた子供たち』で、今はこのご時世だ。『奪われた世代』の憎悪に怯え、こんな風にゆっくりと眠ることなどほとんど無かったのだろう。

……………可哀想に。

彼女たちはただの被害者だ。彼女たち『無垢の世代』はガストレア戦争後に生まれた世代で、ガストレア戦争に対する知識などほとんどない。それなのに、ただガストレアウイルスを身に宿しているというだけで、他者から忌避され、憎悪され、排斥される。

きつとこの子にも親がいたのだ。この子だけじゃない、外周区のある子たちにも。

彼女たちが普通の人間として生まれてこれたらどんなに幸せだったのだろうか。

普通の人間として生まれてこれたら、両親に愛されて、学校に行つて、普通の人生を歩むことが出来たのだろうか。

仮定するだけ無駄な話だ。頭を振り、帰ろうとすると、不意に少女の脛がピクリと動いた。

「……………！」

まさか……こんなに早く意識が戻るはずがない。頭ではそう考えつつも、固唾を飲ん

で見守ってしまう。

やがて薄らと目を開けた少女は、ひとえにガストレアウイルスの恩恵なのか、確かに意識を保っていた。

その少女は回復するどころかまだ手術した直後なのにも関わらず、あろうことか喋ろうとまでした。

その唇から零れ出る言葉を、決して聞き逃すまいと耳を澄ます。

「……………」

「……ああ」

きつと微笑んだつもりなのだろう、少女はほんの少しだけ口元を綻ばせると、再び穏やかな眠りの中に落ちていった。

意識しなければ聞き逃してしまう程にか細く、小さい声だったが、確かに聴きとる事が出来た。

それが聴けただけで、自分のしたことは無駄じゃ無かったと知ることが出来た。それで満足だ。

もう帰ろう。家でカマクラが待っている。

八幡は彼女を起こさないよう、静かに病室を後にした。

嗤う白貌

家に帰ると、玄関でカマクラが丸まって待っていた。時刻は既に三時過ぎ。夜更かししたとしても本来寝ている筈の時刻だ。

「悪いな、帰るのが遅くなって」

カマクラの頭をひと撫でし、リビングに向かう。

カマクラは、んなーと鳴きながら俺の後をついてくる。

案の定エサ皿は空っぽで、キャットフードの粉しか残っていない状態だった。遅くなったときの為に多めに入れておいたがやはり足りなかったらしい。カマクラが早くしろと催促してくる。

キッチンに行つて棚を漁り、キャットフードを取り出し、ざらざらとエサ皿に流し込む。エサを入れ終えると、皿の前で律儀に待つていたカマクラが頭を突つ込むようにして食べ始めた。

しばし、カマクラがエサを食べるのを眺める。カマクラは意外に手足をちよこんと揃えて行儀良く食べている。

カマクラが半分くらいエサを食べるところまで見届け、重い足を動かしたりリビングに向かう。部屋の電気も点けず、そのままソファに沈み込んだ。

「……………疲れた」

ふとそんな言葉が口から漏れ出る。結局半日以上外出していた。蓮太郎と延珠は今どうしているだろう。多分寝てるな、うん。

そういえば、昼の喫茶店で飲んだコーヒーから今まで何も口にしていない。

それを自覚すると猛烈に喉が渴いて来た。疲労が溜まった体にはソファから起き上がることにすら重労働だが、さすがにこの喉の渴きには耐え難い。怠い体を無理矢理起こして水道に向かうと、浴びるように水を飲む。二杯、三杯と飲み干すとようやく喉の渴きも収まった。

さて、喉は潤されたが、あとに襲ってくるのはやはり空腹である。冷蔵庫を開けてみるが、大したものも入っていない。あるにはあるが、皆調理に時間がかかるものばかりだ。中に入っているもので何か作れるものはないかと考える。

小考の末、冷蔵庫から生卵とバター、スライスチーズと残り少ない冷凍ご飯と牛乳を取り出す。

材料を取り出してからほどなくして、ミルクリゾットが完成した。調理時間は約五分。我ながら上手く出来たと思う。

どんなに疲れていても食事はしっかりと摂る。八幡がここ数ヶ月の一人暮らしで身に付けた習慣の一つだ。ちなみに、一年くらい前にロクに食べ物も食べず依頼をこなしていたら戦闘中に意識を失いかけて危うく死にかけた経験がある。

キッチンで立ったままそれらを黙々と口に運ぶ。……味は悪くはない。むしろ美味いと思う。一人暮らしのおかげで家事スキルはほとんどカンストした。このまま一生やっていけるんじゃないかとすら思う。……辞めよう、鳥肌が立った。最終目標は専業主夫。八幡もここだけは揺るがない。

くだらないことを考えているうちに全て平らげてしまった。空腹が満たされ、やっと休める、と息をつく。

再びリビングに戻り、ソファに身を沈める。スマホに電源を入れると、時刻は午前四時に差し掛かるところだった。明日は学校だから、今から寝たとしても三時間も寝れない。

ソファの上で洗い顔をしていると、すぐ隣でカマクラがふすつと鳴いた。

「……………ん、どした」

カマクラの喉元に手を伸ばすと、カマクラはその手をひよいつと避けてしまった。畜生、ゴロゴロしたかったのに。

八幡の手を避けたカマクラは、のそのそと長くはない足を動かし、八幡の足元まで

やってくるごころんと丸くなった。なんですか。俺の足は湯たんぽか何かですか。

悪態をつくくと、急速に睡魔が襲ってくる。明日は早い。そう思つて八幡はゆつくりと目を閉じた。

顔にあたる光で目が覚めた。

重い瞼をこじ開けると、ここ数ヶ月の間共にしたマンションの、小綺麗な天井が目に入る。体を動かさないまま首を横に向けると、薄らとカーテンから陽光が差し込んで来ているのが見えた。

……おかしい。外が妙に明るい。

この季節こんなに朝明るかったつけ？

ふと、胸元よりやや下、腹の辺りからふすつと鳴き声が出た。視線を下に向けると、そこに居たのは我が家の愛猫カマクラ。カマクラが八幡の腹の上に乗っかっている。そして尻尾で八幡の体をペしペしと叩いている。やめれ。

おい。そこ俺の腹。俺の腹だつて。

なるほど、腹辺りに妙に圧迫感があったのはこいつのせいか。重いからどいてくれと視線で訴えかけるがカマクラは聞いてくれない。香箱座りで乗つかつて来てくれたつてのはなかなか嬉しいことなのかも知れんが、重いもんは重い。仕方なくカマクラの脇……両前足の付け根辺りに手を入れ、持ち上げる。床に下ろすと、カマクラは不満気な顔で床をたんつと尻尾で叩き、キツチンの方に向かつていつてしまった。

なんだつたんだ……。カマクラ氏は相変わらず機嫌が悪そうです。最近ろくに充電していないスマホをポケットから取り出し、時刻を確認する。

現在、午前九時半。

……………おーう……………

遅刻も遅刻、大遅刻である。さらにスマホには23件の着信履歴と、24件のメール。確認してみると、平塚先生からの着信が19件、メールが15件。材木座からの着信が4件とメールが8件。蓮太郎からのメールが1件だった。

そういえば一時間目体育だったなーとか休めてラッキーだなーとか思いつつ、平塚先生と材木座のメールをろくに内容も確認せずに片っ端から削除していく。蓮太郎には解決、とだけメールを送った。

……………カマクラにエサをやり忘れていたことを思い出した。なんだ、あれはエサを催促

していたのか。なんか損した気分だわ。やはりまだ懐かれてはいないらしい。

キッチンに行くと、カマクラがくあとあくびをしながら待っていた。猫つてマイペースで良いですね。来世は猫でも良いかも知れない。もちろんイエネコ。

棚からキャットフードを取り出し、エサ皿に入れる。すると、エサ皿の前でスタンバイしていたカマクラが、エサを入れ始めると同時に皿の中に頭を突っ込んできた。そんなに腹減っていたのか。なんだか悪いことしたな。

のろのろと学校の準備をし、制服に袖を通す。準備が終わるまでに時刻はもう十時になってしまった。あれ？さすがにゆっくりやり過ぎた？

朝食は準備が面倒臭いのでパス。……というのは流石に流儀に反するので、適当に食パンを頬張り学校に行く。

「……………いつてきます」

一応、言うだけ言っておく。気まぐれなカマクラはたまにしか俺を見送りに来ない。全く可愛げのない猫だ。

自転車の籠に鞆を投げ込み、サドルに跨る。バイクも一応あるが、仕事柄必要になるときがあるだけで、普段は使わない。勿論ちよくちよく整備はするが。それにうちの高校はバイクの免許をとってはいけないのでバレたらマズイ。

普段より大分遅い時間の為か、誰もいない通学路を自転車で進む気分はいつもよりい

くらか楽だった。

「どんな最後がお望みだ？」

「せめて苦しまず一息で死にたいですね」

「よろしい。これからたっぷりと可愛がってやろう」

現在八幡が軟き……拘留されているのは高校の生徒指導室。そして目の前で手をバキバキさせている妙齢の女性が平塚先生だ。軟禁も拘留も似たようなもんだよな。

「さて、言い訳を聞こうか比企谷八幡」

「だっ、だから言ったじゃないすか。昨日夜更かしし過ぎて」

「それは聞いた。私が言っているのは、寝坊するような原因を何故作ったかだ」

「ぐ……」

悔しいが、平塚先生の言ってる事は正論だ。だが、だからと言って昨日あったことを話すわけにはいかない。

他に何か上手く言い訳はないかと難しい顔をして悩んでいると、平塚先生が紫煙を吐き出しつつ溜め息をつく。

「まあいい。私が君を呼び出した本命は他にある」

平塚先生は組んでいた足を元に戻し、手を組むと真剣な表情になる。

「昨日、商店街の方で高校生くらいの少年が集団リンチに巻き込まれたというタレコミがあつてね」

迂闊だった。休日の商店街、しかもあの人出だ。誰か見ていたとしても不思議ではない。どうせならあるときしつかり変装でも何でもしておけば良かった。と、今更ながら後悔する。

「高校生の特徴は、目が死んだ魚のように腐っていて、頭にはアホ毛が立っていたそう
だ」

「……その高校生が俺と決まった訳では無いでしょう」

先生は八幡の返答にふっとだけ笑って答えた。

「別に君と言った訳じゃないんだがな。これを見たまえ」

平塚先生が差し出して来たのは一枚の写真。目の腐った青年が唇の端を皮肉気に歪

めて、観衆と向かい合うように立っている。

人混みが邪魔で全容は把握出来ないが、確かに俺だ。ぼっちは視線には敏感だが、あそこまで憎悪と好奇の入り混じった状況に立たされるとさすがに気づけなかつたらしい。

「誰がこの写真を？」

「クライアントの情報は明かせんな」

「なんか前もそんなこと言っていましたね」

確か、川なんとかさんがバイトやってたときの台詞か。

「今回は別に依頼じゃないから依頼人クライアントというよりも情報提供者コラボレーターと言ったところか」

いや普通にタレコミ屋か？と言って平塚先生は再び紫煙を吐き出すと、煙草の煙を指先でくゆらせた。

「あと、その情報提供者から言伝がある」

煙草を灰皿に押し付けると、ソファに寄り掛かって淡々と告げた。

「部長の知らないところで許可無く部員が荒事に巻き込まれるのは遺憾だ、だそうだ」

「……………」

雪ノ下か。確かにあの場で八幡の動向を確認するには最も可能性の高い人物だ。し

かし、こんな事に八幡が巻き込まれたとしても雪ノ下なら無関係を決め込むものだと
思っていたが……………。

「この件は私が全面的に受け持っているため、もう事が大きくなるような事はないと
思っている。そこは安心したまえ」

と、平塚先生が妙にかっこいい笑顔で言う。

「まあ、なんにせよ今日の君を見る限り特に問題はなかったようだし、次回から気をつけ
たまえ」

「……………うす」

平塚先生は頷くと、そのまま生徒指導室を出て行く。あとにはソファで俯いている八
幡だけが残された。

八幡は午後の授業をほぼ全て聞き流し、由比ヶ浜のどうして遅刻したかという追及を
はいはいといなしながら部活に行く。

部活では雪ノ下に特に何もなかったとだけ説明した。雪ノ下も特に追及はしてこな
かった。

その日、蓮太郎から延珠が小学校で『呪われた子供たち』だと露見したという連絡が

入った。

連絡を受けたときは延珠のことが心配になった。『呪われた子供たち』だと露見したときの周囲の反応は想像に難くない。

露見したことで、その小学校に延珠の居場所は無くなっただろう。今まで一緒に暮らしていた同級生に、いや学校中からのヘイトを集約した筈だ。それが小学四年生の、十歳の延珠に耐えられるだろうか。

……やめよう。考えたところで詮無い事だ。延珠は転校するだろう。また次の所で居場所を作ればいい。それまでのケアは蓮太郎がやる筈だ。

ヘリのローターの重低音が音の世界を支配する。窓の外は叩きつけるような豪雨が降り注いでいる。

あれから二、三日の間いつも通りの生活を送っていたが、今日の昼休み、木更が電話

で例の件のガストレアが発見されたという情報を寄越してきた。

ガストレアはステージⅣ、形態は飛行型らしい。なるほど、今まで見つからなかったがやつと合点がいった。東京エリアへ侵入してくるガストレアはほとんどが地上型ガストレアだ。加えて里見が初めて蛭子影胤と接触したときに出た感染者はモデル・スパイダー。陸に比べて空への警戒が疎かになるのは想像に難くない。飛行しているのは、モデルとなった蜘蛛にもともと飛行能力が備わっていたのか、ガストレアウイルスによつて進化する過程で飛行能力が付加されたのか、だ。

今乗っているのはドクターへりで、木更はコレを呼ぶために来年分の学費を注ぎ込んだらしい。この依頼が達成出来なかったら退学だそうだ。俺はガストレアの駆逐に成功したら報酬山分けという条件でへりに同乗している。

『木更が電話をかけてきたのが今日の昼休みで、報酬山分けの条件で木更との契約が成立した。』

そこまでは良かった。ただ、蓮太郎を回収したへりで学校にまで乗り込んで来たときはさすがに頭が痛くなった。

乗り込む際に平塚先生に怒鳴られるわ由比ヶ浜に詰め寄られるわ遠目に雪ノ下から物凄い目でみられるわ………おまけに学校全体からの注目の的で、もう今度から学校に行きたくないまでである。これで不登校になったらあいつのせいだ。

「比企谷、居たぞー！」

声に従って蓮太郎の目線を追うと、ヘリの遙か前方、高度はヘリより1000mくらい低いところを、巨大な蜘蛛が飛んでいる。ガストレア、依頼の駆逐対象だ。

目を凝らすと、モデル・スパイダーのガストレアは、蜘蛛糸を編んで作ったような翼でグライダーのように滑空している。なんとも器用な蜘蛛もいたものだ。

「あ、あれはなんですか!?!」とかいう操縦士に蓮太郎が蜘蛛の種類について何やら語っていたが、側で「虫オタク……」って呟いたら黙った。

ガストレアの上空50mほどに接近したとき、轟音とともにヘリが揺らされた。「つつ、何だよ一体ッ」

揺らされたヘリの中で肩をぶつけたらしい蓮太郎が悪態をつく。八幡は急な揺れにたたらを踏んだものの、そばの手すりにつかまる事で転ぶことは免れた。

「お連れのイニシエーターが後ろのドアをこじ開けたようです！」

延珠の目的に気づいた八幡と蓮太郎の背筋が凍る。開けられたドアに里見が駆け寄り、遙か下を覗き込む。見ると、延珠がガストレアに向かって落下して行くのが見えた。

「あのバカ！」

「無茶苦茶だなあいつはッ」

何にせよ延珠は飛び降りていつてしまった。延珠は『呪われた子供たち』の中でもかなり優秀な方のイニシエーターだ。まさか死ぬことは無いだろうが、ステージⅣのガスとレアとタイマンでやり合うのは避けた方がいい。

「高度下げてッ、早くー！」

焦った蓮太郎が操縦士に絶叫、操縦士は頷いて高度を下げ始める。

延珠がガストレアに激突、上空50mから落下してきた質量体にガストレアは体勢を崩して落下していく。

蓮太郎はヘリの中を見回すと、何を思ったか荷造り用のビニール紐に目を付けた。即席ロープのように二重にすると、ヘリの手すりに縛り付ける。紐の強度に不安はあっただろうが、延珠に対する懸念の方が上回ったのだろう、迷いを振り払うように頭を振ると、そのまま空中に身を踊らせた。

「うわあ……」

思わず声に出た。俺だったらあんな芸当絶対やろうなんて思わん。死にたくないし。かといって、このまま静観しているとあとで木更にどやされそうなので、フォローに回る事にする。

「高度をゆっくり下げてください。揺れをなるべく抑えて」

ここで八幡までパニックになると、操縦士を更に不安にさせる。操縦士が落ち着いた

事で、ヘリにも揺れが少なくなってきた。

八幡は未だ開け放たれているドアに近付き、アタツシケースの中身を取り出す。ここに来るまえに八幡の家に寄って取ってきたスナイパーライフル、H&K MSG90 A1だ。八幡の愛銃でもある。普段はかさばる為飛行型ガストレア相手や他の民警のバックアップ時くらいしか持ち歩かないが、今回はヘリに乗るということもあつて持つて来た。

ゼロインは100mで済ませている。安全装置を解除し、バラニウム弾の入ったマガジンを装着。だんだん高度が下がっていき、ガストレアの姿も見えてきた。

スコープを覗き込んで戦況を観察。ガストレアと延珠が交戦中、その数十m近くで蓮太郎が仰向けに横たわっていた。なにやっつてんだアイツは……まあ死んではいけないだろう。

ガストレアに狙いをつけ、発砲。ヘリに揺られているという不安定な状態のため、ガストレアの何処に当てるかまで細かい狙いはつけられなかったが、そこまで頓着する必要はない。ガストレアのサイズは10m強。いくら不安定な状態でも、これだけ目標が大きければ十分当たる。多少の揺れは八幡自身の技量でカバーすれば良い。

目標に着弾、着弾した場所は胴体。ガストレアが怯む。次弾装填、発砲。細い脚に着弾し、ガストレアの体勢が崩れる。モデル・スパイダーのガストレアは、飛行するため

に体重を軽くしているのだろう。サイズの割に脚は手で掴めそうなほど細く、胴体は驚くほど小さい。着弾した弾丸は細い脚に確実に穴を穿っている。延珠はその隙をついてガストレアの懐に潜り込み、胴体を蹴り上げる。体の下からの衝撃に大きく体を仰け反らせるガストレア。再び発砲。違う脚に着弾し、支える脚を失ったガストレアは地面に倒れ伏した。

倒れて起き上がろうともがくガストレアに延珠が近づく。延珠が大きく右脚を振り上げると、全力の踵落としをガストレアの脳天に向かつて振り下ろした。延珠の踵落としを受けたガストレアは、牙や骨格、脳を粉碎され、体液を飛び散らせながら絶命した。

蓮太郎がガストレアの皮膚の表面に癒着していたジュラルミンケースを回収する。これで聖天子にケースを引き渡せば依頼達成だ。安堵の溜め息が漏れ出る。操縦士に蓮太郎達の回収を頼もうとすると、ふと俺の目に信じられないものが映った。

燕尾服にシルクハット、舞踏会用の仮面。その姿は、紛うことなき蛭子影胤。そして、フリルの付いた黒いドレスを纏う影胤の娘、小比奈。

影胤の姿を認めた蓮太郎達と、ケースを奪おうとする影胤達が戦闘を始める。不味い。今の蓮太郎達では奴らにはとてもじゃないが敵わない。延珠はともかく、蓮太郎は影胤に圧倒されている。

「そのまま機体を安定させておいてくれ！」

仕舞いかけていたMSGを構え直し、影胤を狙う。民警ペアでのコイツさえなんとか無力化出来ればこの場は逃れられるはず。今蓮太郎達を失う訳にはいかない。それに、ケースを奪われてしまったら全てが水泡に帰す。それだけは防がなくてはならない。

影胤の掌底を受けた蓮太郎が大きく吹き飛ばされる。案の定、手も足も出ていない。

トリガーに指をかけた瞬間、影胤がこちらを見ている事に気づいた。スコープ越しに目が合う。瞬間、全身に悪寒が走る。そんな馬鹿な、200m近い上空でこの悪天候だぞ。ローター音を抑える改良を施されたヘリを、この雨の中では視認するどころか察知する事すら難しい筈。ありえない。

躊躇う暇もあればこそ。トリガーを連続で引き、発砲する。狙撃の技術には自信がある。いかに悪天候といえども降水量が凄まじいだけで風はそこまで吹いてはいない。200m以内の撃ち下ろしの射撃なら三発に一度は当てられると確信していた。何発ものライフル弾が影胤に殺到する。常人がまともに食らえば致命傷は必至だ。

しかし、影胤に直撃する寸前だった弾丸は全て青い燐光によって阻まれた。着弾コーズにあつた弾丸は全て影胤のイマジナリー・ギミックによって明後日の方向に弾き返さ

れたのだ。

「クソツ」

舌打ちをする。高度200m弱。この距離ではどうやって八幡には影胤の気を逸らす程度の事しか出来ないらしい。蓮太郎達の加勢に回るか。駄目だ、降りるまでに時間が掛かり過ぎる。それに返り討ちに遭う可能性も否定出来ない。

迷っている間に影胤は蓮太郎を川のほとりまで追い込んでいく。豪雨で川は増水しており、落ちたらただではすまないだろう。延珠の姿は既に無い。蓮太郎が逃がしたのだろう、賢明な判断だ。

影胤がカスタムベレッタをフルオート射撃、蓮太郎の体に幾つもの穴を穿ち、蓮太郎は川に落ちていった。

影胤は銃口から上がる煙を吹き消すと、カスタムベレッタをホルスターに仕舞う。すると、ちらとこちらを見た。視線が再び交錯する。視線が絡む事数瞬。

先に目を逸らしたのは影胤だった。落ちていたジュラルミンケースを回収すると、娘の小比奈とともに走り去って行く。

八幡は溜め息を吐きながら背後のシートに背中を預けた。蓮太郎は倒され、ジュラルミンケースは奪われた。任務失敗、依頼不達成。最悪だ。

「……里見を回収する。川の下流に向かってくれ」

ともかく、今は蓮太郎を回収することが最優先だ。

蛭子影胤追撃作戦 一

あの後、豪雨で増水した川の中にわざわざ飛び込み、何度か流されそうになりながらも蓮太郎を引き上げる事に成功した。蓮太郎はそのままドクターヘリに乗せ、病院へ急行。数時間に渡る手術の後、今に至る。

川から引き上げた直後の蓮太郎は酷い有様で、怪我をしていないところを探す方が困難だった程だ。蛭子影胤の斥力フィールドによって全身の骨にひびが入り、蛭子小比奈のバラニウムの刀によって二箇所も腹部を突き刺され、カスタムベレッタのフルオート射撃によって肩、胸、腹、腿と袈裟懸けに銃撃を受けていた。その上に、全身からの出血と打撲。

病院に運ぶ途中でコイツマジで死ぬんじゃないやねえの、と何回も思ったほどだ。ちなみに延珠には泣きつかれ、木更には礼を言われた。

蓮太郎を病院に送り届けた後、民警の代表者達が集められ、聖天子からケースの中身について説明があった。驚くべきことに、ケースの中身はステージV、ゾディアックガストレアを呼び出す触媒に成り得るんだそうだ。

ステージⅤ。モノリスの磁場の影響を受けず、ステージⅣを遥かに上回る体躯を持つ、大戦期に世界を滅亡寸前に追いやった十一体のガストレア。

聞いたときは耳を疑った。っていうかもう帰って寝たかった。そして次の日にも他エリア行きの航空チケットの入手に動きたかったほどだ。

だがまあ生憎と、此処で辞退を宣言すればペナルティが科されるし、その上東京エリアを見捨てた人でなし、という不名誉な称号をつけられる。なにより、八幡は今の東京エリアをそれなりに気に入っているの、無くなってしまうのはいただけない。結局依頼は続行する事に。

「ん……」

とまあ、回想に入っているうちに里見の意識が戻ったようだ。ぼうつとした目で天井を見上げている。

「おはよう。目が覚めた？」

木更が泣くまいと気丈にも、瞳を潤ませながらも里見に声をかける。里見はたった今気付いたかのようにゆっくりと首を回すと、木更を見て何度も目を瞬かせる。

「……………よお、木更さん」

予想以上に間抜けな声。若干殴りたくなかったが無事で良かった。

里見が寝ていたのは手術してから一日と数時間。木更は里見に近況報告しながらい

ちやいちゃしている。俺も戸塚に会いたいなー。

「どうして、俺が流された場所が分かったんだ？」

「俺が回収したんだよアホ」

「うおっ比企谷……………居たのか」

「風邪引くかと思っただぞ。もっとな俺に感謝しろ」

里見が大仰に驚く。ずっと部屋に居たのに、もはや此処までくるとステルスヒッキーここに極まれりって感じだな。

「比企谷くんから聞いたわ。蛭子影胤と交戦したのね」

「ああ……………あいつ、人間じゃねえ」

「当たり前だろ」

蛭子影胤の名前が出ると、里見が苦い顔をする。散々いいように弄ばれた挙句、死にかけたのだ。いい思いはするまい。

「あの悪天候の中200m上空の俺とスコープ越しに目が合ったんだ。……鳥肌が立った」

俺の話に二人が更に顔を歪ませる。全くとんでもない奴を敵に回したものだ。

その実力は、問題行動が多過ぎて序列剥奪処分を下されたものの、以前は序列134位に名を連ねる猛者だ。それを考えるとあの出鱈目さにも納得がいく。

現在の東京エリアに彼らに対抗出来る民警など居るのだろうか。

八幡が機械化兵士手術を受ける前の序列は約三十万位。全世界七十万ペアの中ではミドルラインに属するごく普通の民警だった。

蛭子影胤は序列元134位。対して現在の俺は序列994位。イニシエーターが居ないのもあるが、数年間全力でやっていてこれだ。134位がどれだけめちやくちやな存在か分かる。俺もいろんなエリアを転々としながら民警をやっていたが、現場でもここまで強力な民警ペアは見たことが無かった。

義肢のメンテナンスついでに先生と影胤について話をして来たが、彼は『四賢人』の一人、アルブレヒト・グリューネワルト博士の機械化兵士らしい。

蛭子影胤の能力について話すと、先生も影胤の斥力フィールドについては「バリアなんてぶっ飛んだ考えはさすがの私も思いつかなかったよ。そんな中二じみたもの実行に移すなんて彼ぐらいのものさファハハハハハハ」とのたまった。ぶっちゃけ何の役にも立たなかった。

不意に、俺の携帯が鳴った。画面には見覚えの無い番号が写っている。

「……誰だ？」

『比企谷さん、私です』

驚くべきことに相手は聖天子。一国の国家元首がわざわざ俺に電話らしい。蛭子影

胤の潜伏場所が判明したのだろうか。

「……失礼ながら、何故貴女が？」

『貴方はどこの会社にも属していないでしょう。天童社長にかけようかとも思いましたが、一緒にいるとは限りませんので』

「いますよ。今は里見の病室にいます。彼は先ほど目を覚ましました」

聖天子が向こうで佇まいを正す気配がする。

『比企谷さん、蛭子影胤追撃作戦が開始されます。相当数の民警が参加する、東京エリア史上最大規模の作戦です。この作戦には機械化兵士の比企谷さん、貴方と里見さんの二人にも参加して頂きたいと思います』

驚いた。いや、当然というべきか、聖天子は俺と里見が機械化兵士である事を既に知っているらしい。

「里見はついさつき意識が戻ったばかりです。蛭子影胤との戦闘に耐え得ると思いませんが」

『それは里見さんが判断することです。……比企谷さん、機械化兵士の蛭子影胤には、同様に機械化兵士である貴方と里見さんしか対抗出来ません。今回は東京エリアの命運が掛かっているのです』

「……わかりました。里見には自分から伝えます」

『ありがとうございます。……武運を、比企谷さん』

通話を切る。大きく溜め息をつき、里見と社長に向きあった。それに気付いた二人が俺に向き直る。

「……これから、蛭子影胤追撃戦が始まる。これには、俺と、里見にも参加して欲しいぞうだ」

それを聞いた里見はしばし俯いていたが、やがて顔を上げると痛み顔に顔をしかめながらベッドから起き上がり、制服に着替えていく。どうやら里見も参加するらしい。東京エリアの滅亡の危機なのだ。当たり前といえば当たり前かもしれない。

「二人とも、勝てるの？」

「さあな………わからん、としか言いようが無いな」

「勝たなきゃ駄目なんだよ」

里見が断言する。制服に袖を通し、こちらを振り返った里見は絶対の意志を持って告げる。

「俺には、木更さんや延珠がいるからな」

「嬉しい事を言うではないか蓮太郎！」

「うおっ！」

里見のキザったらしいセリフが終わると同時にベッドの中から延珠が飛び出す。い

つから潜り込んでいたんだ……………。

「延珠、俺が寝てる間もずっとそこにいたのかよ？」

「うむー！」

結構俺の場違い感が凄いんだが……………あれ、俺空気が？

「これが終われば報酬がたんまり貰えるし、家で猫が待つてる。まだまだ死なねえよ、少なくとも俺はな」

「そうだな。木更さんの学費とかあるしな」

ハハハ、と里見が笑う。それを見て木更はもう、と言つてくすくすと笑った。

「……………里見くん」

「なんだ？ 木更さん」

「社長として命令します。蛭子影胤、小比奈ペアを撃破し、ステージⅤ、ゾディアックガストレアの召喚を阻止しなさい」

「わかった。絶対に止めてやる」

「……………俺も精々頑張らせて貰う」

三人で頷く。延珠も里見に寄り添っている。蛭子影胤。勝てるかどうかなど分らない。だからと言ってステージⅤが召喚されるのを許したら全てが崩壊する。なんとかしても、作戦は成功させなければ。

「征くぞ、里見」

窓の外をみると、丁度月が雲から出るところだった。
もうすぐ夜が明ける。

午前七時頃。

作戦開始前に八幡と蓮太郎には董のいる大学病院まで来ていた。

「先生ー？ いるか？」

「ああ……いるとも……」

何処となく禍々しい雰囲気漂う部屋の奥から、更に陰鬱が声が響いてくる。少しすると、長い髪が顔の半分以上を隠した、マッドサイエンティストっぽい感じの人が現れた。

「どうしたんだよ先生。そんなゾンビみたいな声出して」

「なんだ先生、また死にかけてたのか？」

言ってみて思ったが、俺たちかなり失礼な事言っていないだろうか。

「いや、死んではいけないさ。恋人は死んでいるが自分まで死にたいとは流石に思わないのでね。……それに、死んでいるような、という修飾語は私より君たちの方が似合うんじゃないか？」

失礼な事を言ったら更に失礼な事が返って来たが、ほぼ事実なので反論は出来ない。他にも何か言えばそれを遥かに凌駕する皮肉が返ってくるから言い返すだけ無駄だと判断し、二人揃って口を噤んだ。

「うん、良い心がけだ。……そうだ、君たちのパトロンから荷物を預かっている」

ほら、と言って投げ渡される二つの袋。里見と俺が一つずつ受け取る。ずしり、と重量感のある袋は予想以上の重さで、二人とも難儀しながら床に下ろす。

「これは……凄いな、予想以上だ」

蓮太郎が声を漏らし、感嘆の吐息が漏れる。

中身を見て驚く。里見は新しく渡されたXDにサプレッサーを取り付け、道具を弄ったりしている。

八幡の袋にも同様に、武器関連のものが入っていた。

新しいグロック拳銃二丁に多弾倉マガジン、ホルスターと各種手榴弾。それらを収納するウエストポーチ、スリングと肉抜きスリットの入ったタクティカルナイフ。あとは

昼夜問わず作戦が決行されるのを見越して着脱式フラッシュサイトとサプレッサー、レーザーサイトが入っている。なんともまあ準備のいい奴だ。

奥から『領収書』と書かれた紙が出てきて反射的に床に叩きつけようとしたが、ちゃんと裏側に『冗談♪』と書かれていたので溜飲を下げた。

「とんでもねえのなお前んとこの生徒会長は」

「また礼を言わなきゃなんねえよ」

「まあこの作戦で戦果を挙げれば会社のアピールになるだろうからな」

「相変わらず捻くれてるね、君は」

三人で軽口を叩き合う。もう一つ董に用事があつたのを思い出すと、肩にかけていたキャリアバッグを開ける。

「あーそうだ……先生」

「ん？」

「うちの猫、預かつといて貰えませんかね」

「ああ、構わないとも。猫は嫌いじゃないしね」

カマクラを差し出すと、董が抱き上げてあやし始める。この野郎、俺が触ったときは逃げる癖に。

「名前はなんていうんだ？」

「カマクラです」

「カマクラくんか。飼い主に似てふてぶてしい顔をしているね」

この人はいちいち皮肉を言わないと生きていられないのか。と思つたがやはり口には出さない。もはやめんどくさい。

「なんだ、反応してくれないと弄り甲斐が無いじゃないか」

「なんだか先生の相手するのめんどくさくなつてきて」

「つれないねえ」

董がああそうだと言つて懐をゴソゴソさせると、八幡と蓮太郎に連結された注射器を三本ずつ差し出した。

「これは私からの餞別だ。いざという時にとつておきたまえ。だが、出来れば使つてくれるな」

AGV試験薬、といえは君らにも分かるだろう。と続ける。八幡は注射器内の赤い液体をまじまじと見つめたあと、懐にしまった。

「時間だ。そろそろ行くぞ、里見」

時計で時間を確認し、もうすぐ作戦が始まる事を伝える。この作戦の成否で東京エリアの命運が左右される。

だが、蓮太郎はまだ何か言うことがあるかの様に董に振り返つた。

「ああ……。先生」

「なんだい？里見くん」

「……あ、あいるびーばっく」

「は？」

董と声が重なる。何を言っているんだこいつは、という目で蓮太郎を見ると、恥ずかしかつたのか少し赤面した蓮太郎がやけくそ気味に繰り返した。

「だから、……。あいるびーばっく」

一瞬の静寂の後、研究室に董と八幡の笑い声が爆発した。

「君がそのセリフを言うのはまだ早いさ。似合うかどうかで言ったらまだ比企谷くんの方がましだろうね」

「んな事言つて、先生。俺が言ったらキャラじゃないとか目が腐つてるとか言うんだろ」

「違うない」

董と二人でクツクツと笑う。蓮太郎は二人を恨みがましそうに見ていたが、やがて諦めたかのように嘆息した。

蛭子影胤追撃作戦 二

蓮太郎を病院に送り届けたあとの、聖天子直々のブリーフィングが始まる少し前、八幡は自らが通う高校で平塚先生と会っていた。

自らが民警である事を伝えるためと、それを打ち明けた上で口止めをするためだ。

東京エリアに腰を落ち着かせてからは比較的平穩に生活を送っていた八幡だったが、最近になってそれも崩壊し始めている。学校に行けなくなる日も増えるだろう。ならば、早いうちに教師である平塚先生に打ち明けておいた方が良い。無論校長には知られる事となるだろうが、そこは致し方あるまい。生徒に知られなければ充分だ。

民警であると伝えた直後の平塚先生は、指を組んで顔を隠したまま数分間動かなかつた。だが、やがて大きく溜め息を吐くと、そうかとだけ呟いた。

平塚先生にはもう一つ、雪ノ下と由比ヶ浜にはこの事を黙っていてもらうように頼んだ。極力、彼女らには知られたくない事であったし、いずれ露見することにせよ知られるのであればなるべく後のの方が良いと判断した。

最後に、これから政府主導の大規模な作戦に参加するという事、それが原因でまだ

あと数日休むと伝えたら、彼女は引き止めるでもなくただ「死ぬな」とだけ言った。

無理に引き止めないその気遣いに思わず礼を言ってしまったが、平塚先生は苦笑しながら、明らかに間違っているような事でもない限り君の決定に茶々を入れるような事はしないさ、と付け加えた。

平塚先生には世話になった。雪ノ下たちも高校生活を数ヶ月とはいえ共にした仲だ。蓮太郎や延珠、木更も民警としてなんだかんだやって来た仲でもある。材木座？そんな奴は知らん。出来る事なら八幡の知る情報を全て教えて東京エリアから逃げ延びて欲しい。しかし、それをしたら機密漏洩の罪に問われる事になるだろう。伝えた相手にも被害が及ぶかもしれない。

以前の八幡なら自分だけ他のエリアに逃げていただろう。そして、自分がいたエリアが滅んでいく様を安全な場所から静観していたに違いない。

だが、八幡は東京エリアで自らの居場所を見つけてしまった。なにせよ、八幡には東京エリアに残って戦う以外の選択肢は残されていなかったのだ。

思索に没頭していた八幡は、ふと視線を感じて顔を上げると、急に黙り込んでしまった八幡を心配に思ったのだろう、平塚先生がじっと八幡の顔を見ていた。それを見て、八幡は自分が何処にいたのか思い出した。

もうそろそろ行くと告げると、平塚先生は少し寂しそうな顔で行ってこい、と言った。

相手は元序列134位の怪人、蛭子影胤。八幡や蓮太郎も蛭子影胤と同様機械化歩兵であるが、彼らほど序列が高いわけでもないし、戦闘の経験があるわけでもない。二人がかりで全力で挑んだとしても、下手したら返り討ちにされかねない、というのが現状だった。

「もうすぐ降下地点です！」

操縦士の声によつて八幡の意識は思索の世界から現実を引き戻された。

八幡は数日前と同じ様にへりに乗っている。今日は蛭子影胤追撃作戦当日だ。この作戦には既に何組もの民警ペアが投入されており、そろそろ他の民警達もへりでそれぞれのポイントに降下し始める頃合いだった。

窓の外を確認すると、前回とは打つて変わつて今日は雨は降っていないかった。現在の時刻は二十一時過ぎ。周囲には既に闇夜が広がっている。

後五分もせず降下する。八幡は前回乗ったへりより幾分広い機内を眺めながら装

備の再確認をする。

グロック18Sフルオート射撃拳銃が二丁、タクティカルナイフが一本、手榴弾と音響閃光弾が複数個。

グロック拳銃にはサブレッサーとフラッシュサイト、レーザーサイトを着けている。おかげで重量が増した上、取り回しも若干悪くなったが、蛭子影胤と遭遇したらそれは投棄すれば良い。手榴弾を入れてあるポーチには予備弾倉、多弾倉マガジンを詰めている。背負っている小さなリュックに入っているのは携帯食糧とサバイバルキット、照明弾だ。照明弾は蛭子影胤と遭遇した際他の民警に救援を請う為らしい。

そして、八幡は懐を確認する。

連結された三本のAGV試験薬。ガストレア並の治癒力を発揮する恐るべき薬であるが、使用者が20%という高確率でガストレア化するという無視出来ないリスクがある。これは奥の手だ。使わないことに越したことはない。

操縦士の降下地点到着の声に顔を上げると、ヘリの扉を開け放つ。グッドラック、と言う操縦士に軽く手を上げて応えようと、空中に身を躍らせた。

降下用ロープを巧みに使って降りた地点は、人間が介入しなくなつて久しい草花が伸

び放題の森林だった。

数分すると、なんとか周囲の様子を観察できる程度には目が慣れた。

草花が伸び放題の森林。……というよりも、そこはもはや樹海だった。

八幡の見たことの無い植物がわんさか生えている。すつごい毒々しい花とか。うわあれ食虫植物じゃね？

空を見上げると、木々の隙間から月明かりが見える。開けた場所ならある程度は役に立ったのだろうが、月光を木々や葉が遮り、あまり明るくない。これじゃろくに歩かずに植物に足を取られるだろう。

地形もガストレアや大戦期の人間の手によって変化しており、地図もあまり役に立たない。どこの異星起原種みたいに片っ端から地形を平坦にされるよりはマシだろうが。

正直もうここには居たくないし、さっさと市街地に向かうことにした。

民警達は降下された地点周辺を探索しろと言われているが、そんなもの知ったことではない。そもそも、蛭子影胤の性格からして森に潜んでいるよりも開けた場所で民警達を堂々と待ち構えているだろうし。ちなみに本音は純粹にここに居るの嫌だからである。虫とか超出てきそうだし。あとなんか薄気味悪いし。やだあれも食虫植物？

方位を示す以外ほとんど役に立たない地図を地面に投げ捨て、市街地方面に向かつて

歩みを進める。

足音を消す必要は無い。存在感が最初から稀薄な八幡はそもそも意識せずとも足音が立たない。長年のぼっち生活の賜物である。

ふと、前方に気配を感じた。そこもさすがはぼっちといふべきか、気配やら何やらに敏感なのだ。ぼっちで良かった。ぼっち最高。

姿勢を低くし、ほぼ無音で近くの木の側にまで移動する。木の幹に背を預けながら気配のする方を覗き見ると、若干森の開けた場所にガストレアが二匹いた。ステージIとステージIIが一匹ずつだ。

排除するか、このままやり過ぎるか迷うが、排除することにした。

なるべく音を立てず市街地に向かう必要がある為、行軍速度は自然と遅くなる。あのガストレアたちが動き出した場合、発見される可能性は無視出来ない。それに、こういう状況は今後も遭遇するだろうから今のうちに慣れていた方が良い。

グロック拳銃のセーフティを外し、手に黒いグローブを着ける。他のガストレアに気付かないようにする為手榴弾や音響閃光弾は使えない。音を立てず、迅速に無力化する必要がある。

グロックのレーザーサイトを取り外し、サブレッサーを取り付ける。彼我の距離は約30m。

木の陰から飛び出し、姿勢を低くしたまま走り出す。木の陰や茂みの間を移動しつつほとんど足音を立てず対象に接近する。

距離20m。グロックを構える。ステージIIの方のガストレアの頭部を狙い、発砲。司馬重工のサブレッサーは発砲音の他マズルフラッシュも低減させていて、想像以上の高性能さに正直舌を巻いた。

飛翔した弾丸が狙い過たずガストレアステージIIの頭部に直撃。モデルは何かしらの哺乳類らしく、骨格もそこまで硬く無かった為、今の一発で脳を破壊出来た。

距離10m。自身の側でガストレアが倒れ伏した様を目の当たりにして、ステージIが何事かと首を巡らせる。流石に距離が近かった為か、ついに八幡はガストレアに発見された。仲間を呼ぼうとしたのだろう、ガストレアが大きく息を吸い込む。

しかし、それを許す八幡ではない。10mの距離を一秒未満の速度で一気に詰め、ガストレアに肉薄。右手にはタクティカルナイフが握られている。

地面を踏みしめ、左手をガストレアに向かって突き出す。凄まじい速度で繰り出された掌打はガストレアの喉を叩き潰し、頸椎をへし折る。結果声を出せなくなったガストレアは抵抗する間もなく次の瞬間八幡の右手に握られたナイフで心臓を貫かれた。

二匹のガストレアを無力化するまで十秒未満。戦闘行動に移ってからは五秒にも満たない。まあ及第点だろう。地面に崩れ落ちたガストレアを一瞥し、時刻を確認する。

現在二十三時。八幡が森に降下してから二時間が経過した。日付けが代わるまでと一時間。夜を明かす場所を確保した方が良いのかもしれない。

タクティカルナイフをナイフシースに収納し、再びグロック拳銃を片手に行軍を開始する。あと二時間以内には休憩場所を確保したい所だ。睡眠時間も三時間は欲しい。作戦はいつまで続くかわからないのだ、何事も早目に行動するに限る。

歩いていると、途中で不発弾らしいミサイルっぽいものを見ついたり、危うく地雷を踏みかけたりした。こういうものは昔も何度か経験しているため、一度発見してからは比較的早い段階で見つけられるようになり、的確な対応ができた。不発弾に銃弾撃ち込んだら爆発すんのかなーとか考えたが、命はまだ惜しいのでやめた。

時折、ガストレアの足跡——ステージⅢや、Ⅳくらいのものがあり、その度に進路を変えながら進んだ。ステージⅢや、Ⅳは倒せないわけでもないが、無音で倒すのは流石に難しい。遭遇したら倒す前に大量のガストレアが集まってくるのは想像に難くなかった。市街地のようにゲリラ戦が可能な場所ならともかく、可能であっても慣れていない上、乱戦状態では簡単に居場所の露見する森林の中で、それらを対処しきる自信はなかった。

慎重に行軍を続けていると、不意に森の中に爆発音が響いた。

「なっ……………!!？」

他の民警が手榴弾かグレネードランチャーでも使用したらしい。音に驚いたのだろう、木に止まっていた鳥たちがバサバサと羽根をはためかせながら飛び立つ。

これが昼ならまだ良い。だが、夜は不味い。ガストレアも睡眠をとる。その睡眠をとっていたガストレアが一斉に目を覚ますのだ。そして、音の発生地点に殺到するだろう。

近い。距離からして約100m。加勢に回るため音の発生点に向かって走り始める。が、走り始めて数秒もしないうちに八幡の視界の端に巨大なシルエツトが映った。

ガストレアだ。それもステージIV。倒すのは得策ではない。時間がかかり過ぎるし、その間に確実に他のガストレアが集まってくる。必然的に選択肢は逃げるしかない。だが、あの巨体を相手に逃げ切れるのか？

自問していると、近くの茂みから一人の少女が飛び出した。シヨットガンとウエストポーチを身につけている。その少女は八幡の姿を認めるや否や叫んだ。

「何をしているんですか!?! 早く逃げて下さい!!」

言われるまでもない。踵を返そうとすると、少女の背後にいたガストレアが少女に向かって、鋭い牙のついた口で噛み付いて来た。爬虫類やら鳥類やらいろいろ混じり過ぎて元がなんなのか見当もつかないが、あれに捕まったらヤバいということとは分かる。少女は八幡と比べて一拍遅れて気付いた為、反応が遅れてしまっている。腕に牙が引っ掛

けられ、牙が触れた部分が容赦なく抉られた。

「あぐっー！」

少女から苦悶の声上がる。このままでは逃げ切れないと悟った八幡は、少女とガストレアの間に飛び出すと、嘯み付いて来たことにより位置の下がったガストレアの頭部に向かって中段後ろ回し蹴りを繰り返した。

「——ッ！！」

八幡の靴の裏が、ガストレアの顔面に激突する。

手持ちの武器の中では、手榴弾以外にガストレアステージIVにまともにダメージの与えられる武器はない。

アサルトライフルやサブマシンガンも今回の作戦では身軽さを意識したため持つてきていない。

グロック18Sも零距离射撃ならダメージを与えられるかもしれないが、余計な弾を消費するのは躊躇われた。

従って、残された選択肢は己の身体を使い攻撃をすること。一般人や素人の蹴りは銃火器の打撃力に遠く及ばないが、生憎八幡は一般人とは程遠い。

プロレスラーのパンチや蹴りは、数百kgから一tにまで及ぶらしい。細身で体重の軽い八幡にはそこまで重い蹴りを出すのは難しいが、蓮太郎の天童式戦闘術のように独

自の戦闘法を持つ八幡の蹴りは、プロレスラーのそれに近い、決して侮れない威力を持つていた。

確かな手応え。延珠の靴と同様バラニウムで補強された八幡の靴は、インパクトの瞬間確実にガストレアの鼻面をへし折っていた。ガストレアが苦悶の声をあげて大きく仰け反る。

少女は八幡の行動に一瞬驚いたようだが、すぐにガストレアに接近すると、至近距離からサプレッサーがついているのだろう、発砲音が極端に抑えられたショットガンを頭部に照準し、引き金を引く。

立て続けに攻撃を受け、怯んだガストレアは逆方向に向かって逃げて行った。

「ここにもすぐにガストレアが集まってくる。さっさと移動するぞ」

追い払ったという刹那の安堵からか八幡は小さく溜め息をつき、振り返った。目の前には少女が佇んでいる。この少女に文句や嫌味の一つでも言ってやりたかったが、それは場所を変えた後だ。

その後、八幡と少女が移動した先は、ほとんど朽ちかけていた石造りのトーチカだった。

いつ造られたのかわからないほどボロボロになったそれは形こそトーチカの風を保っているものの、ひとたび強い風が吹けば崩れてしまいそうなほど風化していた。

そのトーチカの中で、適当に拾い集めた焚き木を一箇所にとめ、火を着ける。最初は小さかった火もやがて大きくなり、体を暖められる程には勢いも強くなった。

リュックの中から応急キットを取り出し、血がどくどくと流れ続ける少女の腕を慣れた手つきで止血し、消毒する。

「……………う、くっ……………」

相当痛いのだろう、菌型に挟られた腕を消毒するたび少女の顔が苦痛に歪む。傷口が大き過ぎて止血には苦労したが、これだけ挟られているのに骨が見えていない分だけマシだと思い、淡々と応急処置を施していく。

「……………痛いかな？」

声を出すことすら辛いのか、少女は苦痛に耐え、歯を食いしばりながらもなんとか首肯する。

同年代の子供なら痛み之余り泣き叫んで当然な程の怪我だが、大分肝の据わった少女

のようだ。

ポケットをまさぐり、ハンカチを取り出す。家を出る際に入れたばかりだし、衛生面には問題ないだろう。

ハンカチの余分な部分を千切り、適当な大きさに調整して畳むと少女の口元に寄せた。

「噛んでろ。歯が割れるぞ」

これは経験則だ。八幡も重傷を負ったことはそれなりにあったし、応急処置の際に歯を食い縛り過ぎて奥歯が欠けた事がある。

少女は少し躊躇う様子を見せたが、これ以上余計な醜態を晒すよりは、とでも思ったのだろうか、諦めたようにそれを啜えた。

それを見て応急処置を再開する。八幡自体イニシエーターを失って久しいためどの程度で回復するのかわからなかったが、目の前の少女の再生速度は早いとは言えない。放置するよりはマシだろう。

「~~~~~!!」

なるべく優しくやっているつもりだったが、やはり痛いようだ。自分の傷の処置をするときは痛みなど度外視していたため、応急処置自体には慣れていても痛みを気を使うのは慣れていない。

少女は耐え難い苦痛にぎゅっと目を瞑っており、必死でハンカチを噛み締めている。それに、負傷していないもう片方の手で八幡の腕を痛い程に握りしめており、爪が立って八幡の皮膚からは血が滲んでいた。

「ほら、終わったぞ」

傷口を圧迫し過ぎないように包帯を巻くと、頭をぼんと叩く。全身の力を抜いた少女はゆつくりと顔を上げると、大きく息をついた。

「……………ありがとうございました」

礼を言われて初めて八幡は違和感に気付く。

痛みに涙を滲ませ耐える様は年相応の少女のようだが、如何せん雰囲気年齢の割に落ち着きすぎている。感情が読めない…………というより、つかみ所が無い印象、といったところか。

「自己紹介が遅れました。三ヶ島ロイヤルガード所属、千寿夏世と言います。モデル・ドルフィン of イニシエーターです」

モデル・ドルフィン。イルカの因子を持つイニシエーター。聞いてはみたものの、正直ぴんとこない。イルカと言えば、超音波を発して敵味方を補足するような能力だろうか。水中ならともかく地上では大したアドバンテージにはなるまい。

俺の怪訝そうな表情を察したのだろう、千寿夏世と名乗った少女が付け足すように言

う。

「……まあ、確かに私のモデルとなったイルカには、戦闘に何かしら特別な恩恵があるわけではありません。私の場合、戦闘に向いていない代わりに知能が高くなっています。今は将監さんが前衛、私が後衛、といったところですよ」

プロモーターが前衛で、イニシエーターが後衛。いままで単独で民警をやってきた八幡が言えることでは無いが、このスタイルでやるのは珍しい例ではないのだろうか。それとも、高位序列者故にプロモーターの戦闘力が高いからか。

「確か一度……防衛省で顔を合わせてたな」

彼女の事は蓮太郎に絡んでいたプロモーターの相棒、として記憶している。

「はい。確か比企谷八幡さん、でしたね」

「覚えていたのか」

「ええ、このくらいしか取り柄が無いものですから」

そう言つて夏世は、少しいだけ自虐風に笑った。

「それに、将監さんには後衛なんて向いてません」

「性格的にアレなんだろ」

夏世は八幡の身も蓋もない言葉に頷きを返す。

八幡は、以前一度だけ目にした夏世のプロモーターを思い出す。身の丈ほどもあるバ

スタードソードを持った、ドクロのフェイスマスクの巨漢。あのときいち早く影胤に攻撃を仕掛けたのも彼だ。動きを見る限り相当な使い手だと分かった。確かに彼には後衛は向いていないだろう。

改めて夏世の姿を見ると、あまり戦場には似つかわしくない格好をしていた。茶色いネックウオーマーに長袖のワンピース、そしてスパッツ。黒を基調とした八幡の戦闘服とは随分な違いだ。

「そういえば、比企谷さん。貴方のイニシエーターはどうしたんですか？はぐれたのならすぐにでも合流をした方が………」

「……………っ！」

俺の……………イニシエーター？

そのとき八幡の身体が震えた。八幡はイニシエーターを失ってから久しい。あのときからもう二年以上立っている。だから、八幡の側には誰もいないのが当たり前となっていたのだろう。

質問を投げかけられたとき、八幡は久し振りに動揺する素振りを見せた。一瞬息が詰まり、八幡の顔が強張る。夏世はそれだけで八幡が過去に何があったのか理解した。

「……………すみません。配慮が足りませんでした」

年端もいかない少女の謝罪を八幡は手で制すと、勢いが弱まりつつある火に身体の向

きを変え、後ろに手をつけてボロボロの天井を見上げると、溜め息をついた。

「……………数年前に、殉職した」

良い子だった。明るくて、年齢の割りに気配りが出来て、その実意外と繊細で。卑屈な八幡に嫌な顔ひとつせず接してくれていた。

「……………」

夏世は、膝を抱えて俯いている。聞くんじやなかったと、後悔した。答えは容易に想像出来た筈なのに、不用意に聞いてしまった自分の迂闊さが恨めしい、と戒めるように自分の唇を噛む。

八幡は、ゆっくりと目を閉じた。

今でもたまに、夢に見る。

二年以上前に起こった、自らの不用意さが引き起こした悲劇。

民警になってまだ数ヶ月のときの出来事だ。モノリス付近に出現したステージⅠガストレアの討伐という依頼を達成し、帰っている途中にステージⅣのに襲われた。まだ実戦経験に乏しかった八幡は、ステージⅣに対抗する力は当然持ち合わせて居なかった。ガストレアの奇襲を最初に受けた彼のイニシエーターは、抵抗する間もなく左腕と

右脚をもがれ、腹部を貫かれた。

激昂した八幡は勇敢にも、……愚かにもそのガストレアに立ち向かうが、当然の如く歯が立たず、結果股から下、両脚を喰い千切られ、為す術もなく近くにあった廃墟の壁に叩きつけられた。

その後、八幡が目を覚ますとガストレアは去った後だった。暗くなり始めた空には雲がかかっている、月を覆い隠している。周囲を見回すと彼のインシエーターがうつ伏せに倒れていた。駆け寄ろうとするが、立ち上がれない。半分パニックに陥りながら下半身を見下ろすと、やっと自分の両脚が無いことを思い出した。

脚以外にも身体全体に打撲や裂傷ができ、酷い有様だったが、それでも八幡は無事だった両腕を駆使し、彼女の元に必死に這って行く。やっとの思いで彼女の元に辿り着くと、なんとか彼女の身体を抱き起こした。抱き起こされた彼女は目を薄らと開け、八幡の姿を認めると、既に青くなっていた唇をゆっくりと開いた。

『せめて………ヒトのまままで死なせてください』

彼女の身体はもう限界だった。左腕と右脚をもがれ、腹部を貫かれた状態でここまで持っていたのが奇跡といえたほどだった。彼女の呼吸はかなり浅く、今にも息絶えそうなのに、傷口は凄まじい速度で再生していく。八幡の脳裏にガストレア化の文字がよぎる。彼女の体内侵食率は確実に50%を超えていた。

まだ十代の半ばに差し掛かったばかりの八幡にはそれは受け入れ難い現実だった。自分の目の前で、自分のせいでイニシエーターが命を落とすということも、その命を自ら奪うということも。

……でも、それが彼女の望みなら。

……きつと辛かったのは彼女も同じの筈だった。まだ十年も生きていないのに、死ぬのは凄く怖かっただろうに。それを受け入れた上で、彼女は八幡に自分を殺してくれと訴えてくる。

八幡は震える手で銃を取り出し、彼女の額に銃口を向けた。

目からは涙がとめどなく溢れ出ている。奥歯が割れんばかりに歯を食い縛り、今にも漏れ出そうな悲鳴を必死で嘯み殺す。

そんな八幡を彼女は困ったような顔で見上げると、ただ一言、

『ごめんね』

と言った。

それが彼女の最期の言葉だった。それを聞き届けた八幡は震える手でゆつくりと引き金を絞った。乾いた銃声が夜空に響き渡り、彼女の残った左腕が力なく垂れ下がった。

そしてそのまま八幡は、出血多量で気を失った。

今でもたまに、夢に見る。

八幡は暗闇の中、血塗れの死体に囲まれていた。

それらはゆつくりと立ち上がり、眼球を抉られて光を失った双眸を八幡に向け、傷だらけの生々しい腕を彼に伸ばす。

「どうして、貴方は生き残ったの……?」

「どうして、貴方は生き永らえているの……?」

「どうして、どうして私を助けてくれなかったの……!?!」

「……まだ、引きずっているのですか?」

はつとする。その声によって、八幡は現実引き戻された。そこは死体に囲まれた暗闇などではなく、勢いの弱まった火がボロボロの壁を照らす、朽ちかけたトーチ力だった。

常人離れた頭脳を持つ夏世は八幡の心情を敏感に感じ取り、乾いた唇を開く。

「私が何かを言えた立場では無い事は分かっています。ですが、過去を引きずっていて

も今に何も益をもたらさしませし、ただ自分の心を蝕むだけです。後悔するのも自身を責めるのも自由ですが、それは何も意味のない行為です」

諭すように告げる夏世の声には、その内容ほどの険は無い。ただ、責めるでもなくじつと八幡を見つめている。

「俺は、……………」

何かを言おうとして、そこで八幡は気付いた。こんな少女に何か言ったとして、それが何になる。それこそ何の益ももたらさない。

「……………すまん、ぼーっとしてた」

「はっ」

付け足すように言うと、夏世も追従するように頷く。何か言おうとした、というのは夏世も気付いているのだろうが、それを追及する気はないらしい。どこまでも大人びた少女である。

不意に、トーチカの外に気配を感じた。

人数は二人。誰なのかは分からないが、警戒しながら足音を消しトーチカにゆつくり近づいてくる。索敵能力に長けているのは、なにもソナーを持つ夏世だけではない。長年のぼっち生活によって培われ、董の伝手の下で訓練し、精度を増した八幡の気配探知能力も相当なものである。

「……千寿」

「ええ」

やはりというべきか夏世も気配は感じていたらしい。八幡がグロック拳銃を取り出すと、夏世も壁に立てかけてあつたショットガンを構える。相手はおそらく民警だろうが、万に一つ、蛭子影胤という可能性もなくはない。

ハンドサインで合図すると、入り口の近くの物陰に身を潜ませた。

静寂が場を支配すること数秒。

先に動きを見せたのは外の人間の方だった。一人目がトーチカの入り口に近づくと、を敏感に察知した夏世が物陰から飛び出す。

「動くんじゃねえー!」

怒声。怯まず夏世もショットガンを入り口に向け、相手のハンドガンとほぼ同時に照準した。

間髪入れず、完全に気配を遮断した状態で接近していた八幡がその頭部にグロックの銃口を押し付ける。

「動くな。……そのイニシエーターもだ」

裏口から入ってきたイニシエーターの方にもすかさず腰からもう片方のグロックをドロウし、銃口を向けて動きを止めた。

「銃を捨てて両手を……つて、マジか」

「え、あ、比企谷？」

「………里見か………」

トーチカに現れた予想外の相手に、八幡は気の抜けた声を出した。

現出せしは麿殺の厄災

トーチカ内にて。

なんだかんだでこのトーチカで夜を明かすことになったわけだが、蓮太郎達がここに辿り着いた理由は八幡達と似たようなものだった。

蓮太郎と延珠ステージⅣのガストレアに追われてここに来たと言うが、特に目立った傷も無く、二人ともぴんぴんしていた。相変わらず元気だけは有り余っているようだ（特に延珠が）。

延珠と夏世は同じ境遇の同年代と久し振りに接したらしく、性格的にはほぼ真逆の二人だったが案外意気投合していた。

「あの子、随分落ち着いてるんだな」

「モデルとなったものがイルカだからな。知能が高いらしい」

「ええ。IQは大体210くらいあります」

I Q 210。凄まじい数値だ。八幡でもせいぜい120そこそしかないというのに。ちなみに、東大合格者平均IQは130ちよいくらいである。

「IQ210ってそんなに凄いのか？蓮太郎」

そういう知識には疎いらしい延珠が蓮太郎に問い掛ける。対して蓮太郎はその数値に目を剥いていた。

「210!? 俺の倍以上あるのかよッ？」

里見よ。それは少なすぎだ。………いや普通か。一般人の平均IQはせいぜい100くらいだったと記憶している。つまり俺はめちやくちや頭良いということだ。やったね！

「千寿」

「なんででしょうか」

「その銃……見せてくれないか？」

八幡が指したのは、壁に立て掛けてある夏世のショットガンだ。

夏世は八幡の問いに少し迷う素振りを見せたが、すぐにショットガンを手渡した。
「どうぞ」

手渡されたのは、専用サプレッサーとグレネードランチャーユニットのついたフルオートショットガン。夏世の体軀でも扱えるように全体的にコンパクトに製作されている。製作は司馬重工。なるほど、完成度が高いわけだ。

感心した様子でショットガンを眺めていると、それを見咎めた蓮太郎がやや驚いたよ

うな声を上げる。

「随分あっさりと渡すんだな」

「比企谷さんは、ほとんど初対面の私を何も言わずに助けてくれましたから」

「……………だから？」

「……………その、ありがとう、ございました」

「……………」

八幡は夏世の存外直接的な物言いに気恥ずかしくなつて顔を背ける。それに気付いた蓮太郎がまたもや反応する。

「比企谷、もしかして……………照れてんのか？」

「照れてない」

「いや、だって」

「いや照れてねえし」

八幡は蓮太郎の追及に大きな溜め息で応じると、やや投げやりに応えた。

「あの状況でこいつを助けられたのは俺だけだからな。別にこいつだから助けたってわけじゃない。助けなかったら後味悪かっただろうし、後でそれが他の奴らに知れたら面倒だ」

それに、となおも畳み掛けるようにして続ける。

「だからといって、こいつに礼を言われる筋合いもないし、ましてや俺が照れる要素なんて何処にもない」

と、そこまで言い切ってから八幡は蓮太郎と夏世がぼかんと自分を見ていることに気付いた。

気付いたときにはもう遅い。八幡はぼつが悪そうに口を噤むが、蓮太郎は不幸顔をぼかんとした表情から一瞬で歪めると、納得したように手を打った。

「やっぱり照れてんだな」

「なんでそうなんだよ」

八幡は大きく咳払いをすると、夏世に向き直る。手元にあるのはショットガンに付いていたグレネードランチャーユニット。中身は空で仄かに硝煙の臭いが漂っている。

「……………何故、森で爆発物を使った？あそこでグレネードランチャーを使ったらどうなるかくらい、お前なら想像するのは難しいことじゃ無かった筈だ」

今回蛭子影胤追撃作戦のステージとなっているこの未踏査領域では、少しでも音を立てるとその音を聞きつけた周囲のガストレア達が一齐に集まってくる。その上グレネードランチャーを、昼間はおろか夜間に音を立てるなど言語道断どころの話ではない。夏世の腕の生々しい傷がその結果だ。

「この程度の怪我で済んだからまだ良かったものの……」

夏世は反省するように顔を伏せると、再び膝を抱えた。

中央では新しく焚き木を放り込まれた炎がパチパチと音を立てて燃えている。

「私と将監さんは罨にかかりましてね。ヘリから森に降下したあと、森の奥に青いぼんやりとしたライトパターンの光が見えたんです。同じ民警だと思って近付いていったのですが……」

「ガストレアだった、と」

夏世の途中で切れた言葉を引き継ぐ。しかし、光を発するガストレアか……。

「里見、何か分かるか？」

蓮太郎は少し考える素振りを見せたが、それだけの情報では足りなかったのだろう。

「他には何かあったか？」

はい、と思いつくことすら嫌そうに夏世は声を絞り出す。

「近付くにつれ、腐肉のような強烈な腐臭が漂って来ました。歩を進める毎にそれはどんどん強くなっていきました。本来ここで気付くべきでした。あんな色のライトなんて誰も使っている訳がないと、こんな腐臭が漂っている場所に誰も来る筈がないと」

夏世はその姿を思い出したのか、自分の身体をかき抱くようにして手を回すと、顔を俯かせた。

「そのガストレアは全体がぶよぶよとした肉や、昆虫のような甲殻に覆われていて、ところどころに毒々しい花が咲いていました。臭いに誘われたのか色々な虫が群がっていて、尾部が青く発光していたんです。きつとこの光が私たちを誘き寄せたのでしょうか。それはこつちの姿を認めると身体全体を大きく蠕動させて、粘着質な音の混じったような気色の悪い奇声を発しました。慣れない暗闇の所為もあつたのか、訳の分からない恐怖に駆られて咄嗟に榴弾を使つてしまいました」

八幡はその姿を想像して鳥肌がたつた。知能の高い夏世故に豊富な語彙を以つて語られたそれは、八幡の脳内に鮮明な姿を描かせるのに十分過ぎたほどだった。

「……きつとそれは、ホタルのガストレアだ」

ホタル？と、八幡と夏世の怪訝な声が重なる。蓮太郎は二人の反応に頷くと、説明を続けた。

「いんだよ、ホタルの中には。ホタルつてのは普通川辺で光つてて水しか飲まないイメージがあるだろ？夏世が見たのはおそらく肉食のホタルで、仲間だと思わせるようなライトパターンの光を発したり、腐臭を漂わせたりして近付いて来たところを捕食するやつだ。他の植物やら昆虫やら哺乳類が混じつて判断付きにくかつただらうけどな。

ステージは大体ⅢからⅣってところか」

蓮太郎の説明で納得がいった。夏世もああ、なるほどといった風体をしている。

「ガストレアが意図的に罠を掛けたんじゃないやなく、元となった個体から引き継いだ習性か」

「ああ。知能の高いガストレアなんて増えたら簡単に人間側は負けちゃう」

「まあ、確かに純粋に強い個体よりも知能の高い個体の方が面倒臭いからな。このままじゃガストレアを統率するガストレアが出てくるかも知れんぞ?」

「やめてくれ、ぞつとしない」

人間側がガストレア戦争を経て生き残れたのは、ひとえにガストレアが協調性を持たないからでもある。ガストレアは人間側を圧倒する物量と、人間側を軽く凌駕する単体戦闘力を持っている。今までは対地ミサイルや絨毯爆撃など兵器を以って侵攻を凌いできたが、仮にモノリスの一角が崩壊し、ガストレアが戦術、戦略を用いて侵攻してきた場合人間側はろくな抵抗も出来ずに蹂躪されるだろう。

「驚きました、里見さん、詳しいのですね」

夏世も蓮太郎の推理に驚いているようだった。蓮太郎の事をよく知らない人間からすれば、確かに異様だろう。

「こいつは重度の虫オタクだからな。俺も軽く引くレベルだ」

「おいやめろ」

八幡の補足に蓮太郎からツツコミが入る。

「虫オタクはやめろって前から何度も……」

「……貴方たちのようなプロモーターと一緒にいられたら、毎日が退屈しなくて済みそうですね。比企谷さんはぶつきらぼうだけど優しいですし、里見さんは愉快ですし。

……延珠さんが少しだけ羨ましいです」

ふと、焚き火を見つめていた夏世が、いつの間にか蓮太郎の膝の上で眠ってしまった。いる延珠を見て口を開いた。その口調は何処か達観しているようにも見える。

「……なんか俺だけ複雑なんだが」

ちなみに今の発言の主は蓮太郎だ。

「……千寿。やはり今のプロモーターに不満があるのか？」

「イニシエーターはプロモーターの、戦闘の為の道具に過ぎませんから。そこにパートナーを選ぶ権利などありません」

「……………」

夏世は八幡の疑問に一切の淀みなく答える。そこに感情など存在しないかのように。

「延珠さんは、人を殺した事がありませんね。純粹で無垢な瞳をしています」

「お前はしたことがあると?」

「ええ。ここに来る途中に他のペアを二組ほど」

八幡は、蓮太郎の顔色が変わったのを察した。

「どうしてそんなッ」

「——大方、あのプロモーターの指示つてところか?」

八幡は蓮太郎の言葉を遮るようにして言う。

「その通りです。将監さんは蛭子影胤討伐の手柄を独占するつもりらしいので」

「お前は、それが正しい事だとも思っているのか?」

「いいえ。でも、命令でしたから」

「殺すことに躊躇いは無かったか?」

八幡は問いを続けた。今この子にどんな言葉をかけるべきか、少し迷っていたからだ。これが有象無象の人間なら関わりようともしなかっただろうが、八幡はイニシエーター、呪われた子供たちには気をかけている。

「怖かったです。手が震えて、脚が竦みました。でも、それだけです。そのうち慣れます」

「慣れる、じゃない。怖いっていう気持ちが無くなる前に、殺人という行為からとっと足を洗え」

「……何故ですか？」

「お前はそのうち慣れる、と言ったな」

八幡は大きく息を吐くと続けた。

「お前のそれは、人が殺人鬼になる過程に酷似してる。人間はな、犯した罪が罰せられないと知ったあと、それを繰り返すようになるんだ。ほとんどの例外なく、な」

「それは……あなたの体験談ですか？」

八幡は夏世の問いに小さく首を横に振った。

「……いいや。俺は初めから怖くなかったからな」

そうだ。八幡は今の序列に駆け上がるまでの過程で、ガストレアの他、依頼で人間も多く殺してきた。一匹でも多くのガストレアを葬る、という目的と、その為の序列向上の手段が入れ替わってしまったが故の悲劇。当然、あの頃の八幡は護衛、暗殺、諜報、輸送、破壊工作など様々なエリアの政治的上層部からの依頼も、多額の依頼料と序列向上を報酬に請け負っていた。昨日護衛したばかりの要人を翌日暗殺することなど、そう珍しいことではなかった。

そこまで思い至って、八幡はやはり自分がそんなこと言えた義理ではないと思った。でもこの子がイニシエーターだからか、そういう悪事に手を染めて欲しくないという気持ちがあるのも事実である。

「だが、千寿。一つだけ言える事がある」

「なんですか？」

「……………お前は人間だ」

夏世がその台詞に瞳を大きく瞬かせる。八幡は何事も無かったように立ち上がると、服についていた埃を払う。

「もう寝ろ。子供が起きていて良い時間じゃない」

「比企谷、お前……………」

「里見、もういい。少し眠れ。俺は外を見てくる」

蓮太郎に皆まで言わず、八幡はトーチカの外に出た。すると、予想外に冷たい空気がトーチカ内で火照っていた八幡の身体を冷やしていく。

「……………満月か……………」

八幡は空を仰ぐと、誰に言うでもなくそう呟く。

口の中は、土の味がした。

見張りと称してトーチカ外の小高い岩の上で夜空を見上げていると、不意に後ろから声がかかった。

「……なに黄昏れてんだよ」

肩越しに流し見るように声のした方を見ると、そこには腰に手を当てた蓮太郎が八幡を見上げていた。外に出てから二時間以上。疲労が溜まっていたのか、蓮太郎の接近に気付かなかつたらしい。

「……仮眠はいいのか？」

そう言つて、視線を戻す。ところどころが曇っていた空は、今は雲一つなく澄み渡つており、星が良く見える。皮肉なことに、ガストレア戦争のはじまる十年前にはとても見られなかつた景色だ。

「夏世のプロモーターの伊熊将監から蛭子影胤を発見したとの報告が入つたらしい。今
は周囲にいる民警総出で奇襲をする手筈になつてるとよ」

「全滅するだろうな」

蓮太郎の報告に八幡はにべもなく即答で返す。蓮太郎は否定するでもなく頷いた。

八幡は岩から飛び降りる。

「で、行くのか?」

「行く。夏世も行くつつってるからよ。俺たちも行く」

「そうか」

「それに、あいつは俺がやんなきゃなんねえ」

蓮太郎の目には未だ隠しきれない迷いがあったが、それでも自らの役割を果たそうとしてるのがわかる。

蛭子影胤に奇襲を敢行する民警チームは多くても十数組。中には影胤に迫るほどの序列の民警もいるのだろうが、影胤のイマジナリー・ギミックを破れる民警がいるとは思えないし、イニシエーターの小比奈の戦闘力も、八幡が今まで見てきた中でも突出している。蓮太郎がどう思っているのかは分からないが、民警チームの勝算は薄いように思えた。

背後では、延珠と夏世が各々の武装を持って来ている。

「千寿、傷は治ったのか?」

聞くと、夏世はこくと頷き、八幡の巻いた包帯をとってみせた。

「おかげさまで」

骨が見えそうなほど抉られていた生々しい傷は、跡がわからない程に完治していた。これなら戦闘も問題なく行える筈だ。

八幡は夏世から武装を受け取る。

「行くか」

未だ暗いが、もうすぐ夜も明けようといった時刻に八幡たちは海に隣接している旧市街地に向かって行軍を開始した。

夏世のソナーなどを利用してガストレアのいそうな場所を避けつつも順調に行軍を続ける。やがて、市街地が見下ろせそうな小高い丘に着いた。

旧市街地はもう十年も放置された街だけあって完全なる廃墟と化していたが、建物の中でも一際目立つ教会のような建物がぼんやりと光っているのが見えた。

「……あそこか」

「おそろくな」

教会のすぐそばには港の為の倉庫街やコンテナが立ち並んでおり、ほど近い場所の湾には漁船やボートが係留してある。

眺めていると、教会の方から突如銃撃音が響いてきた。蛭子影胤・小比奈ペアと民警チームの戦闘が始まったらしい。

「蓮太郎ッ」

「分かってる！」

蓮太郎と延珠が旧市街地に向けて走りだそうとするが、八幡と夏世は全くの逆方向を向いていた。

「私はここに残ります」

夏世の声。予想外の言葉に蓮太郎は困惑したような表情で叫んだ。

「なんでッ」

「里見、見てみる」

夏世が向いている方向を顎で示すと、八幡たちが抜けてきた森から獣の唸り声が聞こえてくる。見えるのは無数の赤い光点ブリップ。ガストレア特有の赤く光る目だ。

「尾けられていたようです。里見さんなら分かる筈です。ここで誰かが食い止める必要があります」

そう言って夏世は手持ちの弾薬をありったけ出すと、地面に置く。何がなんでもここで食い止める気らしい。八幡は森に降下したときには持つていなかった古いバッグを下ろすと、中身を夏世に投げ渡す。

「これは……」

「さっきのトーチカから持ってきた弾薬だ。フルオートショットガンとハンドガンの分だけ持ってきた。弾の規格はあつてる筈だからそのショットガンでも使える。多分な」

夏世は驚きに目を見開く。

「俺もここに残る。一人より二人の方が良い」

「……ありがとうございます」

「だったら俺たちも……」

里見がそう言った瞬間、暗闇から一体のガストレアが飛び出してくる。夏世がショットガンを構えるより早く八幡が地面を蹴り、ガストレアに肉薄する。

ブオン、と風切り音が聞こえるほどの強烈な蹴り。八幡の蹴りを横つ面に受けたガストレアは体液を撒き散らしながら吹き飛ぶ。すかさずグロック拳銃をドロウし、頭部に照準、射撃。脳を破壊されたガストレアは動かなくなった。

「行け、里見。ここは俺たちに任せろ。蛭子影胤を倒すんじゃないのか」

「……わかった。行くぞ、延珠」

「う、うむ」

蓮太郎と延珠が丘を駆け下り、やがて姿が小さくなる。

八幡と夏世は得物を構え、無数のガストレアたちと相対した。

「……やるか」

「はい」

ポーチの中から取り出した手榴弾をガストレア群に向かって投擲する。集団の中央で炸裂した手榴弾は一撃で多数のガストレアを屠っていく。火薬の量を増やし、バラニウムの粉末を混ぜて対ガストレア用に特化した手榴弾は、甲殻の薄いガストレアの身体を根こそぎ吹き飛ばし、至近で爆風を受けたガストレアを確実に絶命させていた。市街地からの爆音でもう手榴弾の使用を憚る必要もない。

しばらくの間静かだった市街地から、先ほどとは比にならないほどの轟音と金属音が響いてきた。蛭子影胤、小比奈ペアと里見蓮太郎、藍原延珠ペアの戦闘が始まったらしい。

蓮太郎は今までに蛭子影胤と二回戦闘し、二回とも惨敗している。それを引きずつてはいまいか、それとも使用を忌避していた義肢に抵抗を覚えていないか。心配だが、今は彼らを信じる他はない。

考えごとをしていると、ステージⅡ相当ほどのガストレアが目の前まで迫ってきてい

ることに気がついた。既に銃で対応出来る間合いではなく、慌ててタクティカルナイフを抜こうとするが、間に合わない。

「――！」

突如、八幡に迫っていたガストレアの顔面が銃撃音と共に吹き飛んだ。遅れて夏世がフォローに入ってくれた事に気付く。

「すまん」

「考え事をしている暇はありませんよ！」

休む暇もなくガストレアが次から次へと二人に迫ってくる。最初の方こそそこまで数は多くなかったが、それらに対応していくうちにどんどん数が増えてきている。トーチカから持ってきたおかげで弾薬にはまだ余裕はあるが、それが尽きるのは時間の問題だと思われた。

「多いな……！」

「全くです……！」

右手からステージIと思われる小型ガストレア集団。多弾倉マガジンで装弾数の向上したグロックで横薙ぎに掃射する。数秒後弾が尽き、マガジンをリロード。集団のうちほとんどが今の銃撃で地に臥したが、未だ数体が健在で傷付きながらも突進してくる。グロックをホルスターに収納し、ナイフシースを展開、タクティカルナイフを取り

出す。

至近にまで接近された敵には銃よりナイフの方が応じやすい。なにより状況が状況のため、弾薬はなるべく節約する必要がある。

ガストレアたちの突進を、間を縫うように躲し、すれ違いざまにナイフを一閃する。胴体を裂かれたガストレアは血を吹き出しながら地面に倒れた。バラニウム製の刀身を長めに作られた八幡のタクティカルナイフは、刃さえ通ればステージⅡ、Ⅲのガストレアとて十分に殺傷可能である。

ガストレア集団を排除すると、ほとんど間を置かずに巨大な哺乳類のガストレアが殴りかかってくる。大きさからしてステージⅡだろう。八幡は背後から殴りかかってくるガストレアの腕を屈んで躲すと、地面に手をつきつつほとんど垂直に足を蹴り上げる。

ほぼ真下からの蹴りを受けたガストレアは、八幡の脚の直撃を受けた胸部を陥没させ、衝撃に身体を浮かせる。僅かな隙で態勢を立て直した八幡は、陥没した胸部に追い打ちをかけるように掌打を叩き込む。空中で姿勢を崩していたガストレアは吹き飛ばされ絶命した。

左手では夏世がショットガンや手榴弾を駆使しながらなんとかガストレアの侵攻を押しとどめている。イニシエーター故に力技に訴えられるのは強みだが、戦闘特化でな

彼女の能力では遠からず体力の限界がくる。ただでさえ攻撃の手段をショットガンと手榴弾に頼っている状態なのに、その数が限られているとなっては火力不足が否めない。

「ッ!!」

夏世に気をとられ接近を許してしまったガストレアの前腕を地面に身体を投げ出すようにして避ける。受け身を取りながらグロックをドロウし、前腕を振り抜いた姿勢のガストレアの頭部に向かって射撃、命中させる。好機と思ったのか倒れた状態の八幡に向かつて一体の狼のガストレアが噛み付いてきたが、八幡は跳ね起きざまに膝蹴りをガストレアの顎に叩き込み、グロックを眉間に押し付け射撃。零距离で撃たれた銃弾はガストレアの頭蓋を貫通し脳を破壊する。

走り寄ってくるゴリラが元であろうガストレアには、クロスカウンターの要領で顔面に拳を叩き込む。その態勢のままガストレアの右腕をホールドし、鳩尾に膝蹴り、すかさずグロックの銃把で眼球を潰す。そして怯んだガストレアの胸部にタクティカルナイフを突き刺した。

ドズツ!という音と共にナイフが刃の根元まで埋まる。ガストレアの頑強な皮膚を貫いた刀身は確実に心臓を穿っていた。

全身から力が抜けるガストレアを蹴り倒し、息を吐く。振り向くと、夏世も同様に息

を切らせていた。今丁度周りのガストレアを倒しきったようだ。やつと第二波が過ぎ去った、というところらしい。ほどなくして第三波がやってくる。おそらく今以上の物量で。このままではジリ貧だ。だが、この状況を打開する策がない。八幡は焦燥の余り舌打ちをする。

「はっ……はっ……千寿」

激戦を抜けて、体力の消耗も激しいなかなかんとか声を絞り出す。

「ツ、ハアツ、ハアツ、な、なんですか？」

夏世も息も絶え絶えに返事をする。夏世は先ほど説明したように攻撃の手段がシヨットガンと手榴弾しかない。近接戦闘を不得手としない八幡と違い、戦闘に柔軟性が無いため、体力の消耗が激しいのだろう。右手は八幡、左手は夏世といった風に請け負い、真ん中は状況に応じて対処しやすい方が、という取り決めだったが、八幡が率先して倒していた。だが、それでもこの消耗ぶりである。これからは更にガストレアの物量に圧倒されるだろうから、最悪の可能性も考慮し、早々に撤退の選択肢も考えた方が良くかもしれない。

だが、今はまだ駄目だ。背後の旧市街地では未だ大きな銃撃音や破碎音が響いており、蓮太郎たちが戦闘を続けているのが分かる。彼らの邪魔をしてはならない。

八幡は軽く息を整える。

「千寿、フォーメーション変更だ。俺が前衛、お前が後衛でサポートをしてくれ」

これは苦肉の策だ。これをやってどうにかなるとは到底思えなかったが、少なくとも夏世の負担を減らすことができる。ただし、八幡の消耗は遥かに大きくなるだろう。しかし、これしか方法が無いのも事実である。

「そんな、比企谷さん！それでは貴方の負担が——」

「いいから体力の温存をしろ。子供は黙って年上の言うことを聞け」

有無を言わず、八幡は夏世の前に立つ。

「お前に先に倒れられちゃ面倒だからな。辛くなったらフォロー頼む」

「……すみません」

あれからどのくらい経ったのだろうか。数分か、数十分か、はたまた数時間か。少なくとも八幡の体感では何時間も経っているような錯覚を受けていた。

「はあッ、はあッ、はあッ……」

膝に手をつきながら荒い息を吐き出す。討ち漏らしたガストレアの処理だけを夏世に任せ、あとは雪崩のようなガストレアの奔流をたった一人で受け止めていたのだ。こうなるのも無理はない。今は何時だ？時間を確認したいがスマホを取り出す気力もな

く、立っているだけでも辛いくらいだった。五体満足でこの場に立っているのが奇跡にも感じる。未だ目立った外傷は無いが、いつ集中力が切れてダメージを負うかも分からない状況だった。

「比企谷さん……」

夏世が悲痛な声を絞り出す。目の前で自分を庇って身を擦り減らす八幡を見て、良心が苛んでいるのかもしれない。

八幡はなんとか呼吸を整え、体力がある程度回復したのを確認する。弾薬の節約のためガストレアの六、七割がたを近接戦闘で葬ってきたため四肢の至るところが痛み、全身が鉛のように重い。できることならこのまま地面に倒れ伏し、薄れゆく意識にこの身を任せたかった。だが、かろうじて残っている理性がなんとか意識を繋ぎ止める。

周囲には無数のガストレアの死骸が積み重なっており、濃密な血臭が鼻をつく。何体倒したのか……。五十体目を倒してからはもう覚えていない。

ここ数分ではガストレアの襲撃も散発的になり、幾らか楽になったがいつまたさつきのような波がくるかわからない。

「はあ……はあ……、千寿、大丈夫か？」

「……はっ」

返ってきた返事は重い。やはり八幡に対して罪悪感を感じているようだ。

「貴方は、どうしてそこまで……」

「……………」

不意に、八幡のポケットからスマホのバイブレーションが鳴る。苛立ち混じりに電話に出ると、耳に澄んだ声が聞こえてきた。

『比企谷さん、私です』

「……………聖天子様？」

驚いた事に八幡にかけてきたのは聖天子だった。驚きの余り呆気にとられてしまうが、それでも努めて冷静さを欠かないようにする。

『本作戦において私たちは貴方たち民警全ての行動を把握しています。もちろん、あくまでも推測ですが、何故貴方がそこでガストレアとの戦闘を続けているのかも』

聖天子の声は静かだったが何処か焦っているようにも感じる。

『比企谷さん、朗報が一つと凶報が二つあります。…………どちらから先に聞きますか？』

「…………朗報から聞くのがお約束でしょうか？」

『わかりました。まずは、朗報からです。とりあえず、里見さん、藍原さんペアは生きています。ただし、両名とも満身創痍ですが』

それはわかる。未だ背後の市街地では銃撃音や破砕音が響いてきている。それが彼らが生きている何よりの証拠だ。だが、それは蛭子影胤、小比奈ペアが未だ健在だとい

うこことも意味する。

『次は凶報です。一つ目は、里見さんたちが到達する前に蛭子影胤に奇襲をかけた民警チームは……全滅しました』

やはり全滅していたか……。今更驚くことでもないが、聞くと改めて蛭子影胤の強大さを思い知らされる。

『次が最後です。比企谷さん、落ち着いて聞いて下さい』
そう告げた聖天子は俄然緊張した声になった。

『ステージV、ゾディアックガストレアが出現しました』

選択と後悔

ステージⅤが、召還された……!?

その報せは、極限状態でもなお諦めず戦闘を辞めなかつた八幡を、容赦なく打ちのめした。

ステージⅤの召還。モノリスの崩壊。引き起こされる大絶滅。

東京湾に姿を現したゾディアックガストレア・スコープオンは、その姿が認められるや否や即時展開された陸海空の自衛隊によって集中攻撃を受けたが、損傷らしい損傷を一切見せずに行軍を続けているらしい。

その強固な外骨格にはミサイルや魚雷、戦車砲ですら傷を付けられず、バラニウム徹甲弾でも甲殻に衝突した瞬間明後日の方向に弾き飛ばされて終わったという。ガストレアウイルスの恩恵故か化学兵器である細菌兵器まで投入されたが、スコープオンはその細菌を取り込むことで抗体を持つだけに留まった。戦闘機は触手に絡め取られ、あるいは叩き落とされ撃墜し、艦砲射撃を行っていた水上打撃部隊もスコープオンの触手に

薙ぎ払われるか、巨体が引き起こす波に吞まれ轟沈した。

蛭子ペアと里見ペアの戦闘を固唾を飲んで見守っていた司令部も、スコープオン出現の報せを受け、現在恐慌状態に陥っているという。

「俺たちは、間に合わなかったと……?」

『落ち着いて下さい比企谷さん。ここで貴方までパニックに陥ってしまわれては困ります』

聖天子の物言いに僅かばかりの違和感を抱く。

『比企谷さん。この状況を打開できるかもしれない策が一つあります』

「策……? ステージVに対して一体何が……」

『南の空をご覧下さい』

八幡は聖天子に言われた通り南の空へ顔を向け、言葉を失った。

満月をバックに、細長い長方形の物体が空に向かって伸びている。雲を貫いてなお先端の見通せない異様なほどの長さを誇るそれは、見るもの全てに畏敬の念を刻み付けさせた。

「まさか……ッ」

『《天の梯子》。東京エリアを救う可能性を唯一秘めた、私達の最後の希望です』

比企谷八幡は、迷っていた。一体自分はどうすべきなのかと。

夏世とここに残って周囲のガストレアを一掃してから向かう？ 駄目だ、ガストレアの総数は異常な程に多く、全く現実味が無い。

交戦中の蓮太郎の援護に回る？ 影胤は延珠と共に三人でかかればあるいは倒せるかもしれない。だが、時間がかかり過ぎ、スコープオンが手遅れのところにまで到達してしまうかもしれない。

夏世も蓮太郎たちも見捨てて単身レールガンモジュールに向かう？ それこそ悪手だ。単独では何か起こったときのリスクが格段に跳ね上がるし、八幡が倒れば本当に打つ手が無くなる。それにレールガンモジュールを起動させれば自然と影胤にも目論見が露見することとなり、満身創痍の蓮太郎たちには食い止め切れるかわからない。

となると、最も現実味があるのは……。

夏世にこの場を任せ、蓮太郎たちをレールガンモジュールに向かわせた上で八幡が蛭子影胤の追撃を食い止める。

夏世はガストレアの物量にやられて死ぬかもしれない。八幡も蛭子影胤に殺されるかもしれない。だが、蓮太郎が《天の梯子》に辿り着き、レールガン発射までの時間さえ稼げれば――

東京エリアは救われる。八幡たちの犠牲を伴って。

……駄目だ。

何故だ？何故今になって躊躇う？100を生かす為に10を殺すなど、もうとつく慣れていた筈だろう？なのに、なのに何故、今更躊躇う？

今更――

「……行かないのですか？」

自問を続けていると、すつと夏世の声が頭に溶けるように響いてきた。

「千寿……」

夏世は既に呼吸も落ち着いたのか、フルオートショットガンのリロードを終え、残り少ない弾薬の全てを自分の周りに集めている。自分はここに残って戦うという、これ以上ない程の意思表示。それを見て、夏世の戦う気力が未だ失せていない事を改めて認識する。

「……さっきの電話、聴いていたのか」

「耳は良いものですから」

八幡の方を見ないまま夏世は続け、それからゆっくりと八幡の方を向いた。

「貴方は、どうするつもりなのですか？」

夏世の声に言葉が詰まった。

俺は、どうしたいのか？

昔の八幡なら迷わず選べた選択肢を、今の八幡は選べないでいた。まるで、誰を殺すか、と言われているかのように。

誰を殺すか。誰を生かすか。誰が救われるのか。

誰かが犠牲になることが確実なのだとすれば、最も被害の少ない選択肢を選ぶしかない。最も生存者が多くなる選択肢を。

となると、おそらく一つしかない。

八幡は意を決して口を開く。

「俺は………」

俺は……。

……。

開いた口からは、それ以上言葉が紡がれる事は無かった。まるで、その選択を本能が

拒否しているかのようで。

「……貴方は行くべきです。ここで動けるのは貴方しかいません」

「……………無理だ。もう、スコープオンが召還された時点で手遅れだ。諦めて他のエリアに脱出を図った方がまだ助かる可能性が高い」

「まだ終わった訳ではありません。助かる方法を模索して、全力で事にあたれば……まだ、東京エリアを救える余地があります」

「……東京エリアを救うために自分たちの身まで危うくしてどうする？ 仮にそれをするとしても……二人でここ一帯のガストレアをどうにかしないと……」

そんな気はないのに、自分の口は意思とは関係なく言い訳を並べ立てる。まるで、選択することから逃げようとしているかのようだ。そんな自分に嫌気がさす。だが、それでも口は止まらない。

仮に鍛錬を怠っていなかったとしても、平和で平穏な日々は確実に八幡を弱くしていつていたのだ。

心が弱くなった、という表現は余りに俗的かも知れないが、きつとこれはまちがってはいないのだろう。

夏世は意外なほど穏やかで、尚且つ寂しそうな表情で告げる。

「比企谷さん、どうか自分を責めないで。悪いのはこんな選択を強いる世界なんだから

……」

論すかのような夏世の声を聴いて、八幡は悟ってしまった。

………ああ、きっとこの子は分かってて言っているんだ。

八幡がどれを選んでも、自分は助からないという事を。

脳内で問答を続けていくうちに、自己嫌悪の海に引き摺り込まれていく。仕方ないと諦めてしまう自分の横で、もう一人の自分が嘲るように笑っている。

一番嫌だったのは、どれを選んでも夏世が死ぬという事実を、自分の意思で選んだんじゃないと、まるで免罪符を持ったかのように安堵している自分がいる事だった。

二年以上前に死んだ筈の八幡のイニシエーターが、幾つもの亡霊となって彼の周囲で呪詛を唱え始める。

『またそうやって殺すんだ』

『みんなみんな、貴方のせい。この子が死ぬのも、あの民警たちが死んだのも』

『結局、貴方がみんな殺したの』

「俺は……」

「貴方がっ!!!」

響き渡る絶叫。驚いて振り返ると夏世が髪を振り乱して叫んでいる。

「貴方が！ 貴方がやらなければならぬんです！ 貴方にしか出来ないんです!!」

「お願いです比企谷さん……。東京エリアを……。世界を、救ってください……」

はつとして顔を上げる。東京エリア全市民と命二つ。どちらが尊いかなど、そんなもの天秤にかけるまでもない。だが、そんな押し付けられた事実よりも八幡を驚かせたのは、その選択を自ら迫る夏世の方だった。

東京エリアが滅んだら、誰が死ぬ？

蓮太郎が死ぬ。延珠が死ぬ。木更が死ぬ。聖天子が死ぬ。董が死ぬ。雪ノ下も由比ヶ浜も平塚先生も戸塚も川崎もめぐりもいろはも葉山たちも陽乃さんも材木座も。

ここで八幡が動かなければ、全員が死ぬ。

ガストレアに四肢をもがれて。崩落する家屋に押し潰されて。燃え盛る街の中で絶

望に屈して。

あげていった全員の顔が脳内にフラッシュバックする。

「……千寿。お前は……」

「……私なら大丈夫です。劣勢になったら逃げますから」

彼女の背後の森を見る。森の億に赤い光点が幾つも現れ、低い唸り声が何重にもなつて響いてくる。度重なる襲撃を経て得た束の間の休息も、もうすぐ終わろうとした。

「行つてあげてください、比企谷さん」

そう言つて、夏世は少しだけ寂しそうに笑つた。

「……わかつた」

八幡は僅かな逡巡のあと、走り出した。

「……ありがとう」

夏世は何処か満足げな表情でそう呟くと、フルオートショットガンをゆつくりと構える。

か細い声で呟かれたその言葉は、踏み締める葉や枝の立てる音によつて掻き消され、八幡に届く事はなかった。

ふとした拍子に止まってしまいそうになる自分の足に鞭を打ち、ひたすらに市街地に

向かって走り続ける。背後から聞こえてくる銃撃音に後ろ髪を引かれながらも、八幡は必死に足を前に送り続けた。

遠目から見て随分朽ちているなど思っていた旧市街地は、近付くとより一層荒廃ぶりを露わにさせた。

ビルや家屋は元の形こそ保っているものの、所々に亀裂や苔がある。人の手の加えられなくなった市街は十年間のうちにここまで風化と侵食を進ませた。ガストレアの活動の影響か、一部が倒壊した建物もあり、まさに廃墟群といった風体だ。

海に隣接しているこの市街地は、港部分に倉庫街やボート、小型船が係留しており、錆びついていたり半壊しているのがほとんどだった。

廃墟と化した市街地を延々と走り続けていた八幡だったが、それも半ばまで到達した頃に走るのを辞めた。教会からはほど近い。影胤に捕捉される可能性がある。走るのを辞めた八幡は隠密性を重視し、姿勢を低くしながら廃墟の影に隠れるように進んだ。

教会の方からは凄まじい破壊音と銃撃音、剣戟音が響いてくる。どれだけの戦いを繰り広げているのかはここからは分からないが、それが既に人智を超えた域にあるということとは嫌でも分かった。

近付くにつれだんだんと血臭が濃くなっていく。鼻をつまみたい衝動に駆られながらも歩みを止めずにいると、ふと、足に何かがあたる。手持ちのライトでそれを照らすと、人間の右腕だと言うことが分かった。周りを見渡すと、至るところに死体が転がっている。両眼の眼窩を撃ち抜かれている者、上顎から上をもぎ取られている者、右半身と左半身に切り裂かれている者、さまざま。首だけになったイニシエーターを見つけたときは、怒りよりも先に戦慄した。これが、奴らの所業だと言うのか。暗殺、拷問など様々な事をやって来た八幡でも、ここまで残虐非道な殺し方はしたことがなかった。

教会をゆっくりと回り込み、すぐそばのコンテナの影へ。倉庫の屋根に登り、戦場が俯瞰出来る場所まで移動した。

—— 見つけた。近い。距離は50mにも満たない。

対峙する里見ペアと蛭子ペア。蓮太郎はあれだけ毛嫌いしていた義肢を解放しており、影胤と正面から渡り合っている。

漆黒の剛拳を青い燐光が受け止める。黒い刀身をブーツの靴底が弾き返す。十合、二

十合がほんの数秒のうちに打ち合わされ、互いの位置が目まぐるしく入れ替わる。

影胤のカスタムベレッタの銃弾が蓮太郎の左肩を捕らえた。激痛に呻き肩を抑える蓮太郎に影胤は一瞬のうちに距離を詰めると、ボディブローを入れる。たたらを踏む蓮太郎の顔を細長い五指で掴むと、地面に叩きつけた。

「蓮太郎！」

延珠が叫ぶ。小比奈のバラニウムの刀身を靴底で受け止めると、その態勢で静止した。

蓮太郎が頭をあげると、額に影胤のベレッタの銃口が照準され、蓮太郎は動きを止めた。

八幡は腰のホルスターからグロックを取り出し、影胤に照準する。——発砲。

着脱式のサブレッサーを取り付けて減音されたグロックは、銃らしい音をほとんど立てない。影胤に向かって高速で飛翔した弾丸は、命中する寸前で青い燐光に阻まれた。甲高い音を響かせながら強制的に方向転換させられた弾丸は、明後日の方向に飛び去る。蓮太郎は影胤の意識が八幡に向けた隙に距離をとった。

「君を呼んだつもりはないが……決闘の邪魔とは、随分と無粋な真似をするね。比企谷くん」

弾丸を弾き返したのは影胤のイマジナリー・ギミックだった。やはり自分の存在を悟られていたのかと八幡は内心歯噛みする。

「生憎だが今そいつに死なれるとこっちも困るんでな」

「比企谷……!?!」

「なんで八幡がここにいるのだ!?!」

「とりあえず双方共に引いて貰おうか」

影胤はやれやれとでも言うように肩を竦めると、ベレッタを下ろし下がる。それに呼応するように小比奈も小太刀をしまい飛びすさった。

「どういうことだ比企谷。千寿夏世は……伊熊将監のイニシエーターはどうした?」

「大丈夫だ。死んではない」

「でも、あそこに置いてきたのであろう? 妾たちがいなくて大丈夫なのか?」

「……ステージV、ゾディアックガストレアが召還された」

八幡のもたらしした情報に二人は驚愕に目を見開く。

「そんな……」

「落ち着け。まだ手はある」

狼狽を露わにする二人を制すと、視線を南東に向ける。

「《天の梯子》」

「……………」

「お前がやれ。俺に《英雄》は似合わん。ここは俺に任せろ」

蓮太郎は悔しそうに目を伏せたが、やがて顔を上げた。

「…………死ぬんじやねえぞ」

「死なねえよ。先生んところでカマクラも待たせてる」

「…………八幡？」

延珠が心配そうな様子で八幡の顔を覗き込む。蛭子影胤、蛭子小比奈の二人に対し、一人で挑む八幡を気にかけてのことだろう。

「延珠、お前も行け。里見にはお前が必要だ」

「…………うむ、そうだな」

延珠は頷くと、蓮太郎とともに駆けて行く。

だが、それを見咎めた小比奈が小太刀を抜き放ちつつ飛び出した。

「延珠ツ、逃がさない！」

八幡はグロツクをクイツクドロウ、小比奈の足元に銃弾を撃ち込んだ。

「っ！」

小比奈の動きを止めると、影胤と向き直る。

「…………どういふつもりだい？ 比企谷くん」

「悪いが、あいつらを追いたければ俺を殺してから行くことだな」

行く手に立ち塞がる八幡を見て、影胤は心底不思議そうに言った。

「何故だ？　多くの民警は殺され、ステージVは召還された。東京エリアの大絶滅は必ずだ。君が戦う理由など……」

影胤はそこまで言ってから何かに気付いたように言葉を切った。

「……なるほど、《天の梯子》か。面白い事を考える」

「ああ。これがステージVをどうにか出来る最後の可能性なんだな」

「なら、なおさら里見くんたちを追わなくてはね」

「それをさせないのが俺の役目だ」

「……いいだろう。ならば君から先に始末してあげよう」

影胤が言い終わると同時に八幡も一步踏み出す。八幡の両脚の人工皮膚が戦闘服を破りながら剥離し、真っ黒な金属の表面が顔を出した。漆黒の義肢は表面に独特の光沢を出し、異様な存在感を放っている。

次世代合金、超パラニウムの義肢。試作型ながらも、神医室戸董に最高傑作と言われめたうちの一人である。

パラニウムの義肢を持つ機械化兵士といえ、大口径カートリッジの撃発による瞬間的な攻撃力を持つ里見蓮太郎が筆頭に挙げられるが、八幡のものはそれとは異なり両脚

にスラストユニットを搭載している。これにより瞬間的な攻撃力ではなく継続的な機動力の確保に成功した。燃費の面も考慮した代償として長時間の滞空こそ不可能なもの、跳躍距離の増大や義肢による直接攻撃の威力上昇が成されている。

「バラニウムの、義肢……？　ク、クククツ、ハハハハハハツ！」

それを見ていた影胤は不意に肩を震わせ、初めて邂逅したときのように大笑を始めた。八幡の胡乱な視線が刺さるが、影胤は気にした様子もなく笑い続ける。

「ああそうか！　そういうことかツ！　素晴らしいツ!!　いやまさか一晩のうちに二人もの同類に会えるとは！」

何が面白かったのかは分からないが、影胤はひとときしり笑うとゆっくりと八幡を見た。二人の視線が絡む。

こちらからは仮面の奥の表情は読めない。だが、今影胤は唇を歪ませ嗤っている事を、直感で感じ取った。そんな八幡に影胤が名乗りを上げる。

「……君に名乗るのは二度目だったね。私は序列元134位、元陸上自衛隊東部方面隊第七七七機械化特殊部隊『新人類創造計画』蛭子影胤」

序列134位。何度聞いても驚異的な数字だ。全世界民警70万ペアの中で134位、実に上位0.0002%の猛者である。

八幡は中途半端に弾薬の残ったマガジンを潔く捨て、フルオート射撃に対応した多弾

倉マガジンをリロードする。右脚を後ろに下げ、腰を落として影胤を見据えた。対する影胤は踵同士をぴったりと付け、両手を腰の後ろで重ねたまま。小比奈は二本ある小太刀を直角に交差させている。

「俺も名乗ろう影胤。序列994位、元陸上自衛隊東部方面隊第七八七機械化特殊部隊『新人類創造計画』比企谷八幡。——推して参る」

血染めの大地、眩き光芒

八幡が影胤との死闘に身を投じる数分前、蛭子影胤追撃作戦本部は不気味なほどの静寂を保っていた。

大型スクリーンからは、衛星から絶え間無く送られてくる戦場の様子が窺える。画面には比企谷八幡と、蛭子影胤、小比奈の三人が映し出されていた。

「天童社長。比企谷さんは……」

聖天子の声音には隠しきれないほどの焦燥、そして不安の色が滲み出ている。ステーションスコピーオンの召喚が成され、唯一の撃退の可能性である《天の梯子》による狙撃すら影胤によって妨害されようとしている。当たり前前といえば当たり前なのかもしれない。

「……確かに彼の選択は理に適っています。アクシデントが起こった際に対処しきれない可能性の高い単独での《天の梯子》到達は避け、里見くんたちを先行させた上で自らは殿を務める——この状況下、1%でも可能性を上げるためには最も合理的な判断とも言えるでしょう」

木更は言いながらも自分で分かっていた。聖天子が言いたいことはこんなことではないと。

おそらく、東京エリアが減ぶ減ばないに関係無く八幡は死ぬ。蛭子ペアを撃破しない限りは生き残れない。それは八幡自身も分かっていることだろうし、八幡自身が選択したことでもあった。

「里見くん曰く、白兵戦にかけては自身と比企谷くんの実力は拮抗しているとの事。時間を稼ぐという点においては十分のはずです」

聖天子が何か言いたげな顔で口を噤む。八幡をどうにか助けたいという気持ちがあるのだろうか、それは無理な相談だった。仮に八幡が単独で《天の梯子》到達を目指したとしても、起動させれば影胤に目論見が露見する。

そして、今ここで里見ペアを八幡のもとに引き返させれば東京エリアの大絶滅が確実なものになる。東京エリアが助かるのかもしれない最後の可能性までも踏みこむことは出来ない。それがどんなに薄い希望だったとしても。大局を忘れて私情に走るのは権力者として下の下の行為だ。それを分かっているからこそ、聖天子は何も言えずに黙り込むしか無かったのである。

影胤と八幡が対峙する。足元の砂利が耳障りな音を立てる。

蛭子影胤。今まで何百体もの死体の山を築き上げてきた悪鬼。それが今、目の前にいる。

蛭子影胤の武装——遠距離では、スパイクと銃剣を取り付けたフルオートカスタムベレッタ二挺。多弾倉マガジンにより継戦能力の増大が図られている。

近距離においては先ほどのカスタムベレッタに取り付けてあるスパイク及び銃剣による近接攻撃。そして蛭子影胤の代名詞とも呼べる斥力フィールドの展開。斥力フィールドは範囲の拡大が可能で中距離までカバー。格闘能力においては近接戦闘に特化した里見蓮太郎を以ってしても手に余る実力。他の武装は確認されていない。

蛭子影胤のパートナーであり、娘である蛭子小比奈の戦闘能力。腰に差した二本の小太刀による近接攻撃が戦闘の要。カマキリの因子を持つ、モデル・マンティスのイニシエーターであり、足を止めての近接戦闘は自殺行為。

遠距離攻撃の手段こそ無いものの、高精度の小太刀の投擲が可能。更に中距離程度ならば一瞬で距離を詰めてくるほどの身体能力を有する。

対して、比企谷八幡の武装。遠距離では司馬重工によって改良されたフルオートグロック拳銃、グロック18Sが二挺。こちらも蛭子影胤と同様に、多弾倉マガジンにより継戦能力の向上が図られている。更に破碎手榴弾と閃光音響弾が一つずつ。スナイパーライフルと短機関銃、その他銃火器は近接戦闘に支障が出るため持って来ていない。

近距離ではバラニウム製のタクティカルナイフが一本。ただし通常のナイフより若干刃渡りが長く、バラニウムの純度も高いため壊れ難い。こちらは小比奈との近接戦闘の補助として扱う事となるだろう。それに、グローブや戦闘服の各所に隠された暗器。これは暗殺専用の武器の為此の場では役に立たない。

そして、比企谷八幡の切り札にして最大の武器である、両脚の義脚による攻撃。脚部に搭載されたスラストユニットの推進力による基本攻撃力の底上げと三次元高速機動だ。現状の八幡の頼みの綱は前述の通りスラストユニットの加速を主とした機動力だが、身体に甚大な負担がかかるため濫用は出来ない。一対一ならまだ手の打ちようがあったが、相手が二人では攻撃を回避するだけで手一杯だった。正直、手詰まりだ。

だが、現在の八幡には《奥の手》なるものが存在する。

《AGV試験薬》。20%もの超高確率でガストレリア化する危険を孕んでいるものの、

それに耐えればガストレア並の再生力を發揮出来る禁断の一手。無論、これを使うときは賭けの成分が大きくなる。しかも、仮にガストレア化しなかったとしてもそれが決定打には成り得ない。だが、事実これしかないのだ。最悪これを行使すればある程度の被弾は無視出来る。そこから活路を見出すしかない。

足を止めてのお互いの初手の読み合い。この僅かな均衡を先に破ったのは小比奈だった。

延珠の追跡を阻まれたという憤怒を滲ませ、小比奈がコンクリートの大地を踏み締める。彼我の距離は二十m弱。弾丸のように飛び出した小比奈はその距離を一秒もせず詰めてくる。

「邪魔を、するなあああつ!!」

次の瞬間振るわれる二本の凶刃。凄まじい速度で振るわれるそれらを超バラニウム
の右脚で応じる。甲高い金属同士の摩擦音を立て、八幡は支えとなっている左脚を地面
に陥没させながらも小比奈をなんとか押し返す。先の一撃で小比奈のイレギュラーさ
を身を以て思い知る。小比奈の攻撃を押し返せたのは一重に彼我の体格差があったか
らだ。仮に小比奈の体格が八幡と同等か、もしくは筋力特化型イニシエーターだったと

したらそのまま押し込まれた可能性が高い。八幡は戦慄しながら態勢を立て直す。

小比奈に向かってグロツクをドロウ、セミオートで牽制射撃。小比奈は放たれた弾丸を全て小太刀で斬り伏せながら後退する。

射撃を継続しようとして不意に強い殺気を感じる。咄嗟に身を屈めると、爆音の如き銃撃音と共に八幡の頭があった場所を銃弾が飛び去った。小比奈が後退するや否や今度は影胤のカスタムベレッタから放たれた銃弾が八幡に迫る。銃口の向きやトリガーに意識を集中し、紙一重で回避。直後に義脚を解放し、スラスターユニットから蒼白い炎を迸らせながら加速、影胤に向かう。八幡はフルオートで乱射される弾幕のなかに僅かな間隙を見出し、そこに身体を躍らせる。加速した八幡の服や髪をカスタムベレッタの弾丸が掠め、すぐ後ろの地面を穿つ。

スラスターユニットを行使し、全力疾走の数倍——否、それを軽く超えるスピードを誇る八幡を、目で追いながら銃撃を行っているのだ。凄まじい精密射撃。とても二挺拳銃を使っているとは思えない。

「マキシマム・ペインツ！」

影胤が腕を振るうと、青白く輝くドーム状のフィールドが八幡に迫る。斥力フィールドでの迎撃。八幡にとっては既に想定済みの一手法。だからこそ八幡はそれを避けない。それよりも斥力フィールドの展開を認識した上で更に加速を凶っている。

その様子を無謀と受け取ったのか、はたまた蛮勇と評したのか、影胤が一瞬哀れむような視線を向ける。八幡はそれに対し不敵に笑ってみせた。

眼前に迫り来る燐光に八幡は何ら臆することなく挑みかかる。脚部ユニットから燃料を燃焼爆発させ、ジェットエンジン排気と共にスラスタから排出、超加速。

轟然と風を切る音を立てながら八幡の義脚が円い弧の軌跡を描く。次の瞬間、超バラニウムの義脚と対戦車ライフルの弾丸をも弾く斥力フィールドが轟音と共に空中で衝突した。衝撃波が大気を震動させ、足元の砂利を円弧状に吹き飛ばす。

数秒にも満たない刹那の拮抗の後、盛大な音を立てながら両者互いに大きくノックバック。常人ではまず見ることものない膨大な力と力の衝突。果たして競り勝ったのは八幡の方だった。

「斥力フィールドを押し返したのか……！」

斥力フィールドは破られてこそいないものの、最大出力だったにも関わらず障壁は軌み上げ、影胤の内蔵にも負荷がかかっている。

噴射加速機構を十全に使い、十分な加速を果たした八幡の義脚は、本来のスペック以上の性能を発揮した。先の一撃はおそらく蓮太郎の義肢に匹敵する威力だったに違いない。影胤は自らの斥力フィールドに真正面から対抗し、なおも立っている八幡の姿に瞳目する。

「……あまり舐めて貰っては困る」

「ほう……ならば、認めよう。どうやら君は、私が全力を出すに値する敵のようだ」

「……そいつは光栄だ」

口元に若干の笑みを浮かべて肩を竦めると、再びスラスターを吹かして再び影胤との距離を詰める。ここで防御に徹するのは下策だ。人数で劣っている以上、戦闘の流れが完全に向こうに回れば撃破されるのは時間の問題となる。ならばせめて戦いの主導権はこちらが握っておかなければならない。

影胤の前に小比奈が立ち塞がる。八幡は今まで『呪われた子供たち』のことを気にかけてきたが、今眼前にいる小比奈は敵だ。それも快楽と悦のままに人を斬り続けてきた殺人鬼。ならば手加減などする余地も無い。全力で以って叩き潰す。

加速した勢いを乗せて八幡が脚を振り下ろす。高速で繰り出された踵落としを小比奈は二本の小太刀を交差させて受け止めた。細い腕を軋ませ、両足を地面に陥没させる。先ほどとは真逆の構図。

八幡の攻撃力を甘く見ていたらしい、想像以上の重い一撃を受け止めた小比奈が僅かに苦悶の表情を見せる。小比奈の出鱈目な剣技ではなく、修練を積んだ研ぎ澄まされた一撃。蛭子影胤に屠られた、今は亡き伊熊将監のように筋力に物を言わせた一撃ではな

い。同じ体格同士でも、武術に通じているか否かでは決定的な威力の差がある。今の八幡がそうだろう。それに義脚の加速を重ねた一撃は、『呪われた子供たち』である小比奈と同等以上の攻撃力を発揮している。だが、イニシエーターの脅力はこの程度では屈しないらしい。

「防ぎきつたか……ッ」

悪態をつく。が、その間にも八幡の義脚を弾き返した小比奈はすぐに態勢を立て直し、凄まじい速度で追い縋ってくる。八幡は一旦バックステップで距離をとると、ナイフシースからタクティカルナイフを展開し、小比奈を迎え撃った。

右手にナイフ、左手に拳銃。対して小比奈は両手に小太刀の二刀流。互いの立ち位置を目まぐるしく変えながら八幡は小比奈と互角に切り結ぶ。……互角？ 否、現状では八幡が優勢だ。

何故か。それはリーチの長さだ。仮にも高校生である八幡と、たかだか十歳の小比奈の間には、手足の長さ、埋め難いリーチの差がある。八幡は常に小比奈の小太刀の届く範囲に入らないよう立ち位置に気を使うことで、小比奈の土俵に立たないようにしていたのだ。加えて、八幡の左手にはグロック拳銃が握られている。不用意に近づけば迎撃不可能な超至近距離からフルオートで銃弾を叩き込まれかねない。その上、小太刀を捌く、いなす事に注力していれば拳銃でも対応可能。両手の小太刀しか使えない小比奈に

対し、八幡は両手両脚を使えるというアドバンテージを持っている。

立ち位置に気を使い、小太刀を上手くしのげれば、八幡は小比奈の攻撃範囲外から圧倒的な手数で一方的に攻撃出来る。事実小比奈は苛立ちの表情を露わにさせている。八幡は内心ほくそ笑んだ。感情の昂ふりと比例してだんだんと太刀筋も直情で読み易くなつていつている。だが、決して油断だけはしない。充分に加速の得られない状況では、小比奈と比べて一撃の攻撃力の差がある。八幡も小比奈が重い一撃を出しにくいようにしているのだが……

八幡と小比奈の間には、もう一つ決して埋められない差があった。それが、技術の差だ。小比奈はイニシエーターらしく、身体能力において八幡を圧倒している。だが、八幡はそれを埋め合わせるだけの技術を持っていた。幾度も修羅場を潜り抜けてきた八幡の技巧と経験は、小比奈との身体能力の差を補って余りある。

八幡は小比奈を懐に入れないように小太刀をしのぎ、牽制射撃を繰り返す。影胤からの援護射撃も小比奈との立ち位置を工夫することで避け、器用に立ち回る。そのお陰で攻めきれないというのもあるが、大した問題ではない。そう遠くないうちに小比奈の集中力も途切れる。攻勢はそのときに仕掛ければ良い。

銃撃音が途絶えた。そう悟ってから数秒。間近に強烈な殺気を感じて飛びさすると、

八幡の鼻先を白い手袋のついた拳が擦過した。八幡は再びバックステップで距離をとると、大きく舌打ちをする。

「よく避ける……。想像以上だよ、比企谷くん」

「二人揃って前衛かよ……。全く、大人げ無いな」

「このままでは埒があかなそうなんですね」

それに、舐めて貰っては困ると言ったのは君だろう、と付け加える。拳を振り抜いた姿勢から手を開閉させ、首の筋をコキコキと鳴らしながら影胤がこちらに向き直った。

状況は極めて良くない。影胤もこのままではジリ貧、最悪小比奈が撃破されると踏んだのだろう。的確な状況判断。加えて自ら前衛に出て来る大胆さもある。やはり、手強い。今まで有利に戦況を運んでいたが、それはあくまでも一時的なもの。イニシエーターの小比奈はともかく影胤の戦闘力は未だ計り知れない。

影胤と小比奈が二人掛かりで八幡を襲う。影胤が八幡のグロックの射撃を斥力フィールドで弾きながら接近、右脚を振り上げ回し蹴りを放つ。八幡はすんでのところで上体を反らして回避、勢いを殺さず倒立背転を繰り返し、距離をとる。顔を上げると影胤の仮面の奥の目と視線が絡んだ。

滑らかに滑り込むように踏み込み、繰り出された影胤の鋭い拳が八幡の拳打と打ち合

わされる。八幡の総身を衝撃がビリビリと走り抜け、鈍い痛みにも歯を食い縛る。

弾き返されそうになる勢いを無理矢理殺し、影胤の懐に飛び出す。超至近距離でグロツクをドロウ、影胤も同様にベレッタをドロウ。

次の瞬間始まるガンⅡカタ。照準したグロツクの銃口は影胤の手甲によって弾かれ、鼻先に突きつけられたベレッタはグロツクの銃把で照準をずらす。連続する銃撃。飛び出る弾丸が八幡の頬を掠め、影胤の燕尾服を破く。ナイフを抜く暇はない。距離をとる隙もない。ならばこの超至近距離の銃撃戦で活路を見出すしかない。

凄まじい殺気とともに風を切る音が耳に響く。今まで培った勘に任せて身を反らすと、八幡の首があつた場所を鈍く輝く小太刀が過ぎ去つた。思い切り後方に跳躍し、続く二撃を回避する。間髪入れず放たれる影胤の追い打ちの射撃。スラストーナユニットを吹かし、加速しながら空中で強引に身を捻る。地面を穿つ弾丸のうち一発が八幡の肩に命中し、バランスを崩させた。なんとか姿勢を立て直し、靴の跡を引きながら着地する。

激痛に疼く肩の銃創を抑えながら影胤を睨めつける。傷口が燃えるように痛い。だがどうしようもない。部位が部位ならナイフを突き刺しても除去したが、肩の、それもかなり深くまで入り込んでいるためそれもできない。銃撃を受けた方の腕の動きが鈍るのも必至だ。

そして八幡は未だ劣勢のまま、戦闘は佳境に突入した。

一転して変わった戦況で、八幡は影胤と小比奈に圧倒される。これでも親子というベキか、想像以上の連携に八幡は舌を巻いていた。銃剣付きのベレッタと斥力フィールドを巧みに使い分ける影胤も然ることながら、小比奈も先ほどとは一転、本来の鬼神の如き強さを発揮している。先ほど圧倒されていた鬱憤を晴らすかのように小太刀を振るっている。小太刀の二刀流も攻撃を重ねていくうちにどんどん回転数が上がっており、いずれ八幡も対応しきれなくなるだろう。

言いやうのない焦燥が八幡を襲う。先ほど無理をしても小比奈を仕留めておくベキだったか。今更のように後悔するが、もう過ぎたことは覆せない。

「考え事とは、随分と余裕だね」

「ッ!？」

防御の際に生じた一瞬の隙を狙ったのか、影胤が至近にまで接近していた。悪趣味な装飾のついたカスタムベレッタが八幡の眉間に照準される。必死に頭を逸らしてベレッタの射線から逃れる。すると影胤は逃れた八幡を追うようにさらに深く、大きく踏み込み、ベレッタのスパイク部分で八幡の頭部を殴打した。

「ぐっ！」

よろめいた八幡を追い打つように小比奈が距離を詰めてくる。一撃、二撃。三撃目を防いだところで不意に顎を強烈な衝撃が襲った。小比奈が八幡の顎を蹴り上げたのだ。全くもって出鱈目な剣技だ。四肢全てが凶器と成り得るのか。揺らされた脳でそんなことを考える。

たたらを踏む八幡目掛けて更に振るわれる漆黒の刀身。何人もの人間、ガストレアの血を吸ったそれは、反応が遅れた八幡の胸、腹を容赦無く斬り裂いた。

「がああああッ!!」

次の瞬間、傷口からおびただしい量の血が吹き出し、返り血が小比奈の凶相と影胤の白貌を紅く染める。怨敵の血潮に小比奈が口元を歪める。更に一瞬後、八幡は衝撃と共に紙屑のように吹き飛ばされた。小比奈が小太刀を振り抜いた姿勢から思い切り体当たりをしたのだ。

吹き飛ばされた八幡は風化して脆くなったコンクリート製の廃ビルに激突した。十年来放置され続けた廃ビルは想定外の衝撃に耐えきれず、激突した一階部分の壁を圧壊させる。

瓦礫の山の中、粉塵と自らの血に塗れながらも八幡はゆっくりと身を起こした。

……立ち上がれなかった。

体が重い。視界が暗い。胸部、腹部から足元にかけておびただしい量の血が八幡の体を濡らしている。このままでは失血多量で死ぬだろう。

死ぬ？冗談じゃない。死んでたまるか。ここで死んだら世界が終わる。

まだ終われない。

八幡はおぼつかない手で懐から一つの注射器を取り出した。

《AGV試験薬》。緩慢な動作でキャップを取り外すと、おもむろに針を腹部に突き刺した。中の液体を全て体内に注入しきつたのを確認すると、針を引き抜いて注射器を投げ捨てる。変化はその直後に起こった。

心拍数が急上昇し、呼吸が荒くなる。体が灼けるように熱い。鼓動の音が大きくなり、自分の鼓動の音しか聞こえなくなる。

頭部、胸部、腹部に負った傷が目に見えて再生していく。めり込んだ弾丸も外に押し出され、切創、銃創が癒着していく。まるで自分の体じゃないようだ——と、他人事のように考える。体の内側からの突き上げるような衝撃に上体を仰け反らせ、咯血した。

傷が治癒しきつたようだ。視野が明るくなっている。依然として体は重い上に、痛み、の残滓も残っている。が、痛いだけだ。動けないわけではない。

瓦礫と粉塵の舞う中、八幡はゆらり、と幽鬼のように立ち上がった。その姿を見咎めた影胤が瞠目する。

「……………まだ、立ち上がるのか」

戦慄する影胤に八幡は凄絶な笑みを浮かべる。普段の玲瓏な印象とは程遠い——
—見る者全ての背筋を凍らせる、凄味を帯びた表情。暗殺者としての八幡ではない、八幡が初めて見せる、機械化兵士としての顔だった。

義脚を完全に解放した加速。今までにないほどの加速を見せた八幡は、風を切りながら敢然と二人に挑み掛かる。全身の重量をその脚に乗せ、先ほどと同様の凄まじい威力の踵落としを繰り出す。

また同じ攻撃か——と、影胤が両腕を交差させてその攻撃を受け止めた。受け止めた腕を軋ませながら、影胤は想像以上の重い一撃に両足を地面に陥没させる。

八幡は先の一撃とは異なり、受け止められた脚を軸に全身を持ち上げる。完全に全身を宙に浮かせた状態で再加速。空中でスラスタノズルを後方に展開し、一気に影胤の背後に回り込む。

一瞬で後ろに回り込まれた驚きよりも、影胤には長年培った勘が勝った。後方からの二連撃をどうにか躲すと、裏拳を叩き込む。が、繰り出された拳はあえなく空を切った。

不意に全身に怖気が走り、上体を反らすと一瞬前まで影胤の頭があつた場所を側面から繰り出された八幡の義脚が擦過する。

鳥肌が立ち、バックステップで距離を取ろうとするが、八幡はそれ以上の反応速度で影胤に追いつがる。

十合、二十合と影胤の拳や小比奈の小太刀が八幡の義脚と切り結ぶ。通常の戦闘ではありえない機動をする八幡に、影胤や小比奈も対応が追いつかない。今の二人は銃弾や拳打、一撃が致命傷と成り得る蹴りなどが四方八方から降り注いでいる状態に等しいのだ。

地を這うように駆け、隼の如く宙を鋭角に舞う八幡を捕捉するのは正しく至難。一挙手一投足どころか総体すらブレて視認もままならないほどである。八幡が踏み締めた地面は罅割れて陥没し、足場として蹴った壁面は金属部分がひしゃげて捻じ曲がっている。

「なっ——！！」

攻撃を受けたと思つたら後方に回り込まれている。カウンターとして放つた拳は嘲笑うかのように回避され、一撃一撃が嘘のように重い。それに対し影胤と小比奈が劣勢ながらも対抗している時点で尋常ならざる事態ではあるが、その状態が長続きするとは想像に難かつた。

八幡の表情が苦悶に歪む。視認不能な程の高速で機動を繰り返すあまり、内蔵が甚大なダメージを受けている。塞がりかけている傷も再び開き、血が滲み出している。だが

AGV試験薬の効果は想像以上だった。小比奈に切り裂かれた傷は開きながらも治療を開始し、内蔵は凄まじいダメージを受けながらもそれでも機能している。身体が動くなからそれで構わない、と八幡は口角から血を飛ばしながら更に加速する。

八幡が空中で何度もノズルの向きを変えながら跳躍し、噴射された炎が蒼い軌跡となって八幡の機動の凄まじさを物語る。スラストユニットを使用した多角形三次元機動こそが機械化兵士、比企谷八幡の真骨頂。地表空中関係無く縦横無尽に舞うその姿は人の耐えられる限界を超えてなおも加速する。

「うおおおおあああッ!!」

身体に掛かる負担を度外視し、更なる加速を図る八幡が喉も張り裂けんばかりに咆哮する。身体に掛かる無視出来ないほどのGが、八幡の身体を軋ませ、至る所で内出血。いつ何処で全身の腱が切れるか、骨が折れるか分からない。否、既に何本かに罅が入っているが、それすらも無視して機動を続ける。

小比奈のガードが崩れた。好機と判断した八幡が更に踏み込む。凄まじい速度の蹴り上げ。小比奈の小太刀が跳ね上がる。横合いからの影胤の拳を左腕でいなし、手持

ちのグロックで牽制射撃。グロックの弾薬が尽き、リロードをしながら後方上空に飛び上がる。

「——ッ」

ポーチから閃光音響弾を取り出し、影胤と小比奈の中間に投擲する。

「くっ……………！」

影胤が斥力フィールドを展開し、小比奈が後方に跳躍する。直後、網膜を覆う程の閃光が視界を真っ白に焼き尽くす。

「っあ、ああっ！」

「——クッ」

小比奈の悲鳴と影胤の舌打ち。咄嗟に破碎手榴弾と閃光音響弾の区別がつかなかったのだから、斥力フィールドの展開に成功した影胤は衝撃波こそ最小限に抑えたものの、発した光に網膜を焼かれその場から動けなくなっている。斥力フィールドの恩恵を受けられず、後方に跳躍しただけの小比奈は言わずもがな、衝撃波と閃光、大音響の全てをまともに受け、着地すら危うい。

手持ちの手榴弾はこれで尽きた。AGV試験薬の効果も既に消えかかっている。これでどちらか一方を脱落もしくは負傷させなければ、押し込まれる。

腰のホルスターからもう一挺のグロックをドロウ、さながら二挺拳銃のように銃口を

小比奈に向けつつ接近、フルオート射撃。腕を蹴り上げる二挺の感覚は反動を軽減させる改良を施したとはいえ無視出来ないほど大きい。

小比奈は未だ視力の回復仕切っていない目をこじ開けながら応戦する。だが、相手は毎分1200発もの弾丸を吐き出すフルオート射撃拳銃二挺だ。驚異的な動体視力で何発も斬り伏せていくが、捌き切れずに肩、腹、腿と被弾していき、苦痛にその顔を歪ませ、衝撃に身体を躍らせる。両手のグロックがほぼ同時に弾切れ。ホルスターに二挺を仕舞い流れるような動作でナイフシースを展開し、タクティカルナイフを取り出す。

―― 投擲。

「ぐっー」

身体の各箇所を被弾していた小比奈が強引に投擲されたナイフを弾く。だが、刀身が長くそれなりに質量のあるナイフを強引に弾いた代償は、小比奈の態勢を大きく崩すという形で現れた。

「―― シッ!!」

スラスターユニットを使用し、至近距離で放つ全力の蹴り上げ。その一撃は小比奈のガードに使われたもう一本の小太刀を遙か遠くまで弾き飛ばした。そして――

「がっ……………かはっ」

八幡の拳が小比奈の鳩尾に捻じ込まれ、動きを止めた小比奈はゆつくりとその場に崩

れ落ちた。

やつと一人。それを認識するとほぼ同時に全身の骨、筋肉が軋み上げ、悲鳴をあげた。負担を無視して無理矢理機動を続けた代償だろう。骨に罅が入り、腱がボロボロになっている。無茶をした代償がこれだ。その痛みが認識出来るようになって初めて八幡も自身の身体の損耗の酷さを思い知る。

不意に、左肩に激痛。痛みに呻く暇もなく振り返ると、カスタムベレッタを構え、その目を憎悪に燃やした蛭子影胤がいた。

「……何故だ。何故私達の邪魔をする？ ソディアックスコーピオンは既に召還された。もう幾らもしないうちに東京エリアまで到達する。私達、機械化兵士は殺す為に造られた。戦争が始まれば、私達の存在意義が証明される。再度のガストレア戦争の勃発こそが、我々新人類創造計画の兵士の勝利のはずだ！」

「ふざけるな。新人類創造計画の兵士の勝利？ 再度のガストレア戦争の勃発？ 俺はそんなもの望んじやない。里見たちもまた然りだ。お前等の勝手な都合で、関係のない俺たちを巻き込むんじやねえ！」

八幡のどろりと淀んだ眼が凄みを帯び、影胤の紅蓮に燃える双眸と正面から睨み合う。

「君には分からないのか？ 呪われた子供たちは、未だ社会から人を人とは思わぬよう

な扱いを受けている。私達もこのままでは誰からも必要されないまま朽ちていくだけだ。憎しみは消えない。戦争は終わらない。私達は必要とされる！ さあ戦争をもっと闘争をツ!! これは私の私による私のための戦争だ。誰にも邪魔はさせない」

「貴様一人の都合で、一体何人の人間が犠牲になると思っている!! 貴様がやっていることはただのテロだ。貴様が垂れ流しているのはただの妄想だ! 貴様こそ分からないのか! 貴様の語る馬鹿げた理想とやらで、人類が滅ぶかも知れねえんだぞ!!」

「テロか。ああ、テロで構わないとも。人類の滅亡? そんな事は些事に過ぎん。所詮この程度のことです生き残れないようでは、どのみち私の掲げる理想郷の中で、ガストレアに屠られるだけだ」

影胤の演説は続く。

「——私は選ばれた。里見くんたちも選ばれた。君も、君がかつて失ったあの子どもだ。君だつて里見くんのイニシエーターが学校で受けた事の顛末を、知らない訳ではないだろう? 君は今の立場に甘んじたままで良いのか? 自己顕示欲は無いのか? 私に従えば、君の欲望の全てが満たされる。さあ、比企谷八幡。私と共に来い!」

「黙れ!! 俺は貴様には従わない。それと——」

八幡は拳を握り締め、血走った目で続けた。

「二度と俺の目の前で、その子の事を口にするんじゃないやねえ……!!」

「ならば、死ね!!」

影胤が八幡に向かって飛び出す。こちらの消耗を鑑み、もう義脚がほとんど使えないと踏んでの事だろう。その判断は正しい。事実八幡の酷使された身体は既に限界に近い。骨の至るところには亀裂が入り、激痛を発している。特に損傷が酷い左腕は腱が切れかかり、その上影胤の銃撃を受けてほとんど動かない。鎮痛剤を注射したとしてもせいぜいがグロツクの射撃程度だろう。だが、ここで殺されるわけにはいかない。

影胤と練り広げる近接格闘。ナイフは喪失。手榴弾は既に二種類とも使い切った。残る武装は戦闘服やグローブに仕込んだ暗器とグロツク拳銃二挺のみ。暗器は当然暗殺用のため使用に耐えない。グロツクは残りマガジンは二つ。数は限られている。弾幕を張ればすぐに弾切れを起こすだろう。

影胤の損耗はほとんど無いと言つていい。あるとすれば最初に八幡の義脚と斥力フィールドがぶつかり合った際、影胤の内蔵にどれだけダメージがあったかだが、期待は出来ない。だが、見る限りは相当疲弊しているはずだ。武装は当初と変わらずカスタムベレッタ二挺のみ。どれだけ控えめに見たとしても圧倒的に八幡が不利。

両者の拳がぶつかる。走る激痛に顔を歪ませながら振り上げた右脚は影胤の左腕に阻まれた。首筋を狙った手刀を頭を屈めて躲し、肘を鳩尾に叩き込もうとするが、不意に跳ね上がった影胤の膝が二の腕を蹴り上げる。走る鈍痛——腕を庇いながら半

歩後退。腹部を狙って踵から入る回し蹴り。下げられた腕と上げられた脚によつて防御される。一合、二合が全身に激痛をもたらし、苦痛に声を上げそうになる。

中途半端に距離があいたことにより、影胤がカスタムベレッタを構えた。狙うは八幡の頭部。背中に流れる冷や汗。勘に従つて咄嗟に上体を反らせると、一瞬前まで八幡の頭部があつた場所を銃弾が通り過ぎた。

銃撃が途絶える。おそらく弾切れ。反らせた勢いのまま再び倒立背転を繰り返し、距離をとる。

始まる銃撃戦。互いに弾数の限られているなかでの撃ち合い。八幡の放つ弾丸を影胤は斥力フィールドで防ぎ、影胤の放つ弾丸は高機動で回避する。三次元機動こそ出来ないもののそれでも機動力は折り紙付きだ。あとは銃撃のときに途切れる斥力フィールドの合間を狙つて撃てばいい。

弾薬が切れたのか、はたまたここで決着を着ける気か。ここが正念場だと彼とて弁えているのだろう、影胤が八幡に向かって突つ込んできた。近付かせてはいけないと、八幡の本能がそう叫ぶ。両手のグロックでフルオート射撃をしながら後退。斥力フィールドは貫けなくとも、気を散らすことは出来るはず――

突如、鈍い金属音と共にトリガーが固まった。八幡が戦場に於いて数えるほどしか遭遇したことのない、それでいて致命的な――

まさか……弾詰まり!?

表情を凍らせた直後、影胤がすぐ近くまで接近していることに気付いた。不味い、そう思ったときにはもう遅い。紅い燕尾服の長身が、蛇のように滑らかに、八幡の懐に滑り込む。右腕を身体の後ろに引き絞り、八幡の身体を貫かんと力を込める。手の形からして繰り出されるのは掌底。全力で跳躍しようとするが間に合わない。

「エンドレスツ——」

「しまっ——」

「スクリイイイイムツ!!」

瞬間、抗い難い衝撃が八幡の全身を襲った。影胤の右腕が炸裂した腹部を中心に、頭部から爪先まで凄まじい衝撃が駆け抜ける。吹き飛ばされた八幡は紙屑のように宙を舞い、コンクリートの壁面に、再び強かに叩きつけられた。受身などとする余地もない。内蔵を滅茶苦茶にかき混ぜられたような影胤の掌底は、八幡の脳内を激痛だけで支配するには十分過ぎる威力を持っていた。

痛みが全身を支配するなかで、八幡は無理矢理身を起こす。先ほどの掌底は、威力こそ凄まじかったものの、それでもまだ身体は動く。ならば、影胤に追撃の隙を与えてはいけない——

そう思い、立ち上がろうとした瞬間、八幡は大量に喀血し、力を込めたはずの脚はあ

まりにも呆気なく地面に屈した。

「な……………」

理解出来なかつた。何故身体に力が入らないのか、何故足元に大量の血溜まりが出来ているのか、何故こんなにも頭がぼんやりとするのか。

八幡は自らの腹部の惨状を見て、ああ、と呟いた。

八幡の脇腹には、円い大きな穴が空き、色鮮やかな内蔵が覗いていた。

八幡は影胤の掌底を食らう直前に一瞬見えた、右腕の周りの燐光を思い出した。あれは影胤がいつも斥力フィールドを発生させるときに生じる光だ。そして、先の八幡の腹部を貫通せしめた技はその応用。おそらく斥力フィールドを円錐の槍状にして腕の周りを覆つたのだろう。

背後への咄嗟の跳躍は間に合つたとは言い難い。槍が完全に貫通し、内蔵を根こそぎ吹き飛ばされる事こそ防げたものの、内蔵が一部潰れている。頭がおかしくなりそうなほどの激痛に、声すら上がらない。いや、仮に跳躍しなかつたら確実に即死していたのだ。それを考えればまだ間に合つたと考えていいかも知れない——と、そこまで思い至つてこの考察が無意味な事に気が付いた。……この傷では、どちらにせよ助からない。早いか遅いかの違いだ。

頭を上げると、影胤の仮面の奥の双眸と目があつた。

「……………君の、負けだ」

その言葉を聞き届けたあと、八幡はゆっくりと地面に倒れ伏した。

薄れゆく視界の中、影胤が十字を切っている。

視線を下ろすと、すぐそばには民警の骸が転がっている。今の自分もこの遺骸とそう変わらないような有様なのだろう。そう自嘲し、瞼を閉じようとしたとき、ふと右手に何かに触れた。

これ、は——

影胤は潰えゆく怨敵の姿を見据え、ゆっくりと十字を切った。これは、彼が認めた戦士を葬る際に行う、もはや慣習とも言つて差し支えない行いだ。目の前の骸からは既に生気が失われ、貫いた腹部から血が広がっていく。

不意に訪れた鈍痛に、影胤は怪訝そうに自らの腹部を抑えた。二度に渡り受けた八幡の蹴りによって、斥力フィールドで受けた方は内蔵へ、両腕で防御した方は右腕に罅を入れるという形で影響を来たしている。

思えば、まともにダメージを受けたのは何年振りだろうか。そう思うと、殺してしまつた事が惜しく感じてしまう。だが、もう終わったことだ。もう、殺してしまつた。

呆気ないと言えば、あまりにも呆気ない。

その骸は目の前に転がっている。今まで刃向かって来た者を何人も屠ってきたが、彼もそのうちの一人に過ぎないのだ。

そう割り切つてしまえば後は早い。小比奈を回収しようと踵を返すと、ほんの僅かな金属音が耳に響いた。聞き慣れた金属音。まるで、拳銃のスライドストップを上げたときのような――

嫌な予感が走り、先ほど仕留めた敵の骸を確認しようと咄嗟に振り向く。その瞬間、銃撃音と共に影胤の顔面に鈍い衝撃が走った。

――防がれた？ いや、まさか。

疑問が脳を満たすよりも早く、八幡はフルオート射撃で影胤の動きを足止めする。

防がれたのではない。正確には、頭部を狙った弾丸は命中したものの入る角度が浅く、仮面を貫通することなく弾かれたのだ。その証拠に、仮面の左眼の上辺りに弾丸を受けた罅が入っている。

影胤は斥力フィールドで弾幕を防ぎながら驚愕する。何故だ。槍状に編み上げた斥力フィールドは確かに八幡の腹部を貫いた。即死とまではいかなくとも、確実に致命傷

のはず。仮にまだ息があったとしても、激痛で身じろぎすらも出来ないだろう。それが、あまつさえ不意打ちを行うなどと。

八幡とて、自分がここまで動けるとは想定外だった。

倒れ込んだ直後、八幡は歯に仕込んであったモルヒネで痛みを緩和し、反撃の機会を伺っていたのだ。本来ならこのまま出血多量で死亡、もしくは昏倒していたところだが、八幡の精神力がそれを良しとしなかった。

本来なら全て諦めてしまふところだったのに、何故こんなにも足掻くのか。生に執着しているのか、東京エリアを救わなくてはいけないという使命感か。皮肉なものだ、と思う。全く変な方向にしか成長していない。

グロツクの弾丸が切れた。ジャムを起こしたもう片方は吹き飛ばされた衝撃で何処かに飛んでいってしまったのだろう。八幡は弾丸の切れたグロツクを躊躇なく投げ捨て、足元のカラシニコフを構える。八幡の近くの首なしの遺体の手元にあったものだ。マガジンの中身はまだほとんど残っている。

八幡はカラシニコフで射撃を開始する。グロツクよりも遥かに凄まじいその反動が傷口を刺激する。気絶してしまいそうになるほどの激痛。歯を食い縛った口元からは血が滲んでいる。それでも八幡は決して射撃を辞めず、トリガーを引き絞り続ける。

八幡は射撃と同時に懐から取り出した残り二本のAGV試験薬を、歯でキャップを抜

き身体に突き刺した。注入される赤い液体。ともすれば血とも見紛うほどのその液体は、八幡の身体に流れ込んだ瞬間甚大な変化をもたらした。

四肢が熱い。最初に使ったときとは比べものにならないほどの苦痛が八幡を襲う。銃創や吹き飛ばされたときについた切創、打撲はほぼ一瞬で完治、腹部に空いた大穴こそ完治とはいかないが、じわじわと再生を開始している。身体の内側で始まる再生と治癒が影響し、射撃しながらも八幡が血を吐く。

腕が動く。脚にも力が入る。戦闘行動に支障は無い。弾丸の尽きたカラシニコフを投げ捨てる、影胤目掛けて飛び出した。後のことなど顧みない全力加速。総身を急加速によるGとそれによる激痛が蹂躪する。影胤のカスタムベレッタが放つ銃弾を三次元機動で回避すると、驚異的な速度で肉薄する。

再び腹部から血が吹き出す、そんな事は些事だと気にもとめない。これだけ無理をすれば、遠からず動けなくもなるだろう。持つて一分。いや、30秒。だが、今身体が動くのなら、影胤を撃破するまでの時間身体が持つなら、問題は無い。

「おおおおッ!!」

全力で放つ回し蹴り。義脚と斥力フィールドの再びの激突。凄まじい運動エネルギーと運動エネルギーが衝突し、大気を震わせる。斥力フィールドを大きく軋ませるが、まだ破壊には至らない。

押し返されそうになる衝撃をスラストユニットの後方展開で強引に押し殺すと、八幡はその場で身を捻って回転し、更に蹴りを放つ。一撃。更に一撃。凶器と化した爪先が螺旋を描き、轟然と唸りを上げて何度も斥力フィールドに降り注ぐ。

十発、二十発。蹴りを放つごとに加速していくソレは、音速を超えて竜巻を生まんばかりの勢いで更にスピードを上げていく。何十もの蹴りを受けた斥力フィールドは衝撃に軋み上げ、表面に罅を入れさせた。

これだけの負荷を身体にかければ、無論八幡とて無事では済まない。凄まじいGに視界が真っ赤に染まり、身体中の至る所で血管が切れて全身から血が吹き出す。そして、有り得ない負荷に崩壊する肉体を、二本まとめて注入したAGV試験薬の効果が再生させていく。

何度も鋼の暴風に曝された斥力フィールドが、凄まじい破砕音と破片を撒き散らしてついに圧壊した。斥力フィールドを破られたことにより内蔵に極度のダメージを受けた影胤が大きくよろめく。

斥力フィールドを粉碎し、着地した八幡が影胤に迫る。逆転する立場。たたらを踏んだ影胤の懐に黒衣の瘦身が死神の如く滑り込む。叩きつけられた義脚がコンクリートの地面を踏み砕き、相手を貫かんと突き出された拳が影胤の腹部に捻じり込まれる。肋骨の二、三本——骨を砕いた手応えを感じながら八幡はその腕を振り抜いた。もろ

に受けた影胤は斜め上空へと吹き飛ばされる。

八幡の攻勢はそれでは終わらない。スラスターユニットを再び点火、空中の影胤に追いつく。

飛び上がった八幡は影胤の真横で身を捻る。スラスターユニットの出力全開。

——これで、仕留める。

黒い光沢が目に焼き付く。蒼い炎が軌跡を残す。

全力で放たれる義脚はインパクトと同時に分解するだろうが問題ない。次の一撃で確実に仕留める。

躊躇もない。焦燥もない。あるのは眼前の敵を打ち砕く一念のみ。

「はあああああああッ!!」

衝撃。

義脚の一撃を腹部に食らった影胤は身体をくの字に折り曲げ、凄まじい速度で海面に水柱を立てながら着水した。

八幡は蹴りの衝撃をなんとか殺し、空中で姿勢制御しながら着地する。

——終わった。

八幡が悟るのにそう時間はかからなかった。憎たらしいほどに澄み切った空の下、八幡は顔を血の絡んだ唾を吐き天を仰ぐ。

勝ったというのに、清々しい気分も得られるはずの達成感も何一つ無い。

八幡は夜空に輝く蠍座スコルピオンに、血に塗れた手を伸ばした。

骨身を削り、血肉を注ぎ、手にした勝利のなんと苦々しいことか。

身体の限界が来たのだろう、八幡はゆつくりとその場に崩れ落ちた。

言うことの聴いてくれない身体に嘆息し、薄れゆく意識に身を任せる。

暗転していく視界の端に、夜空に伸びる一条の光芒が見えた。

穿たれた銃弾の先

何度か電車を乗り継いで来た聖居の内装は、一般の人間が一生掛かってもお目にかかれないような様相だった。一言で表すと、派手だ。

装飾華美だとか、金をかけ過ぎだとか、その金をもつと違うところに使えだとか、言いたいところは山ほどあるが、目がチカチカしてそれどころじゃない。

まあ、要するに八幡が招待されたのは、蛭子影胤追撃作戦の叙勲式である。

作戦に参加したほとんどの民警は影胤の手にかかって殉職し、この叙勲式での主賓は八幡と蓮太郎のみだ。

正直、肩身が狭過ぎて死にそう。今すぐにでも帰りたいためである。

それでも着慣れない上質なスーツに袖を通し、ここまでやって来たことには褒められて然るべきではないのか。もし八幡が普通の民警だったら諸手を挙げて喜んでいてもおかしくはない状況なのだが、生憎そういうものは好まない性分である。面倒臭いものはとことんやりたくない。

目が腐っているというのも考えもので、聖居に来たときに不審者を見るような目で守衛に見られたので、仕方なくトイレでコンタクトをつける。あらやだイケメン。でも慣

れないコンタクトのせいでトイレを出た今も目がゴロゴロして痛い。

式典会場に続く大扉の前には、黒いドレスをまとった木更が立っていた。

「こんにちは、比企谷くん」

「……天童か」

こうして見ると、木更は凄まじい美人だと思う。見た目に関しては言わずもがな、美和女に通う頭脳といい、スタイルの良さといい、およそ欠点の見つからないような美人。極貧ということを除けば凄まじい優良物件だ。とことん蓮太郎には爆発しろと思う。

どこか雪ノ下にも通ずるところがあるような気がする。……いや、あいつは金持ってる代わりに貧相だよな。どこが、とは言わないが。

「天童と言うのはやめてっていつも言ってるでしょ」

「悪かったな、社長さん」

少しの間木更は半眼で八幡を睨んでいたが、反省の色がないのを見て嘆息する。

「里見くん、見なかった？」

「いいや、見てないな」

木更のふくよかな胸部に目が行きそうになるのを堪え、今しがた通って来た道を見ながら言う。すると、木更はこめかみに手を当てて大きく溜め息をついた。

「まったく、何をやっているのかしら。今日は大事な式典だつていうのに」

八幡は正直蓮太郎は叙勲式自体を放り出すんじゃないのかとすら思っている。実際そんなことされたら絶対恨むけど。一人で叙勲式とか死ねる。

そんなこんなでしばらく木更と待っていると、やっとこさ蓮太郎がやって来た。ぶすつとした不幸面に真つ白なフォーマルスーツを着ている。着ている、というよりも服に着られている、といった印象の方が強いか。

八幡は蓮太郎の姿を見て、自分の黒いスーツというチョイスは間違いだったか、と思つた。だが、溜め息とともに首を振る。今更遅い。

「……比企谷。なんだか地味に似合つてんな」

「そいつはどうも。そういうお前は全然似合つてねえぞ」

「うるせえ」

蓮太郎よりも背の高い八幡はこういう服が上手く着こなせているのだろう。高校生つばさがないと言われると少し複雑だが、似合つてないよりは数段マシだ。

隣では木更が蓮太郎のずれていたネクタイを締め直していたりイチャイチャしている。もう結婚しろよこいつら。

八幡は董に作つて貰つた即席の義足を庇うように歩くと、式典会場に続く大扉を開けた。

想像以上——いや、ある意味想定内の様相に息を飲む。想像以上なのが想定内。やはり、派手だ。

入り口の大扉から、大理石の階段を登った上座まで一直線にレッドカーペットが伸びている。

レッドカーペットの両側、やや離れた位置では、豪華なドレスや上品なスーツに身を包んだ上流階級の人々が、東京エリアの救世主の姿を見ようとひしめいている。まるで、中世の貴族のようだ。

上座に向かって歩いてしていると、自然周りからの視線が強くなる。その途中、何気なく周囲を見回したとき、八幡はそれを見咎めた。

「……………」

その人物は黒く長い艶やかな髪を後頭部でひとまとめにしており、艶かしくうなじを見せている。限りなく黒に近い紺のドレスは肩口を露出させており、スレンダーな体型をより引き立てていた。

雪ノ下雪乃、その人である。

上座……いや、玉座に歩いている途中、足を止めてしまう。すると、向こうもこちらに気付いたようで大きく目を見開いていた。その隣には対照的にワインレッドのドレスを着た姉の陽乃が悠然と立っており、何故ここに居るのかとまるで咎めるかのように

目を細めている。

「おい、比企谷？」

不意に蓮太郎に声を掛けられ、硬直していた時間が元に戻る。八幡は何事も無かったかのように視線を前に戻すと、歩き始めた。

玉座の前にまで来ると、座っていた聖天子が柔らかい笑みを浮かべながら大理石の階段を降りてくる。

「比企谷さんに里見さん。お二人とも、よく来られましたね」

初めて生で見るのだろう、その神々しさに息を飲む。隣の蓮太郎も背筋を正していた。

「怪我は大丈夫なのですか？」

「はい。問題有りません」

この場では蓮太郎の代わりに八幡が代表して答える。聖天子も了解したらしく、澄んだ声で問い掛けた。

「如何ですか？東京エリアの救世主になった感想は」

「はい。周囲からの反応が一転して変わり、未だ慣れません」

「そうですね。当然です。貴方方は今回の作戦を経て正に英雄となられたのですか

ら

その後、東京エリアで展開された蛭子影胤追撃作戦は、史上最大数の民警を動員し、多数の犠牲者を出したにも関わらず、東京エリア市民にはその内情な明かされていない。

突如出現したゾディアックスコーピオンを《天の梯子》周辺にいた民警が、レールガンによる超長距離狙撃によって撃滅した、ということになっている。

八幡は同時出現した多数のガストレア——およそ数百体を撃破した武勲を讃えられてここにいる、ということになっているらしい。

隣で蓮太郎が何か物思いに耽っているような表情を見せている。

「貴方方のような有為な人材が東京エリアに居てくれたことを、私は誇りに思います。比企谷さん、里見さん。これからも東京エリアの為に尽力してくださいますか？」

聖天子の問いを受けて、八幡はその場に優雅に跪いた。蓮太郎もそれに倣う。

「——はい、一命に替えて」

「——はい、この命に替えても」

聖天子はその返答に満足したように頷くと、両手を広げた。

「お集まりの皆様、お聴きになられたでしょうか？ たった今、ここにいる英雄はこれからも東京エリアの為に戦ってくれると誓いました。」

——ゾディアック『天蠍宮』の撃滅、並びにIP序列元134位、蛭子影胤、蛭子小比奈ペアの撃破。以上のことから私とIISOは協議の結果、今回の戦果を『特一級戦果』と見なし、里見蓮太郎、藍原延珠ペアをIP序列千番、比企谷八幡をIP序列500位に昇格することと決めました」

聖天子の言葉に周囲のギャラリーが歓喜に沸き、賛辞の言葉と拍手が送られる。聖天子は頷くと、八幡に向かつて微笑む。その様子に息を飲みながらも、その目を見返した。

「比企谷八幡、並びに里見蓮太郎。貴方はこの決定を受けますか？」

八幡と蓮太郎は恭しくこうべを垂れた。

「至らぬこの身に、願ってもない御言葉。感謝の言葉も有りません」

「その決定、謹んでお受け致します」

八幡の言葉に蓮太郎が続く。

「では最後に、何か言っておきたいことは有りますか？」

「いいえ——」

「あります」

本来ならここでいいえと言うのが正しい。八幡はそれを知っていたし、蓮太郎にも木更がしっかりと言い含めているものだとばかり思っていた。

疑問に思うよりも早く、こいつは何か良くないことを言う、という感覚が脳内を支配し、八幡は蓮太郎を止めるべく動き出していった。

「里見」

「俺は……ケースの中身を見た」

だが、八幡が蓮太郎を制止するよりも一瞬早く蓮太郎が告げる。

周囲は聖天子と蓮太郎の話についていけなくなり、徐々に喧騒が大きくなりつつある。

それよりも、これは八幡にとっても気になる案件だったのだ。制止しようと思っても、止まってしまおう。

「スコープピオンを倒したあと、教会でケースを取り返し、開けたんだ。中には——壊れた、三輪車が入っていた。聖天子様、どういうことなんだ。なんであれがステージVを喚び出す触媒に成り得たんだ!? そもそも、ガストレアって一体何なんだ! 教えてくれ、聖天子様!」

聖天子は目を伏せると八幡と蓮太郎にだけ聞こえるような小声で告げた。

「七星の遺産は未踏査領域に隠しておいたものなのですが、その一つが今回奪われてしまったのです。あれは破壊したらどうなるか予想のつかないものでした。ゾディアックはそれを奪い返しに来たのです。……それ以上は、お教え出来ません」

「お教え出来ませんって……」

「民警には序列が向上することに様々な特権が与えられます。擬似階級から機密情報アクセスキー。里見さんは現在序列千番なのでアクセスレベルは三、500位の比企谷さんは四です。IP序列十番以内に入れば最高のアクセスレベルが与えられます。里見さん、貴方がそれを知るのは今では有りません」

聖天子は息を吐くと、蓮太郎を見据えた。

「里見さん、強くなりなさい。貴方が里見貴春と里見舞風優の息子を名乗るのなら、貴方はそれを知る義務がある」

蓮太郎は聖天子の言葉に目を見開くと、立ち上がって詰め寄る。

「どういうことだよ！ どうしてここで父さんと母さんの名前が出てくんだッ！」

「里見ッ、よせ！」

里見を制止するがもう遅い。里見は聖天子に掴みかからんばかりの勢いで捲し立てている。

前に出ようとした瞬間、聖天子の冷めた眼光に背筋を凍らせた。

「やめなさい。この場で私に掴みかかれれば不敬罪で処刑されますよ」

ふと、凄まじい殺気が会場に満ちていることに気付いた。

腰に手が伸びそうになるのをすんでのところで堪え、そこで武器を持っていない事を

思い出した。

相手の実力は知れないが、八幡や蓮太郎がどう足掻いても勝ち目がないほどだというのは嫌でも分かる。

蓮太郎は俯いて拳を握り締めると、大きく息を吐いた。

「……………失礼します」

それだけ言うと、蓮太郎は去って行った。

あのバカ……………!

舌打ちを堪え、聖天子に礼をすると、足早に蓮太郎の後を追った。

数日前

空が白み始め、夜の闇が淡く溶け出している。

あれから意識を取り戻した八幡は、悲鳴を上げる身体に鞭を打ち、戦場となった海沿

いの市街地が臨める小高い丘に来ていた。

分解しかかっている義脚を底いながらなんとか歩く八幡は、ここにくるまでの間相当な時間を費やしていた。

歩いて行くにつれ、徐々に血臭が濃くなっていく。血と硝煙の混ざりあつたこの臭い。慣れ親しんだ臭いでありながら、一生かかっても好きになることは出来ない臭いだ。

ガストレアの死骸が増えていく。ステージⅠの小さな個体からステージⅣの最大種まで。ある個体は首から上を吹き飛ばされ、ある個体は胸部を撃ち抜かれ、ある個体は四肢をもぎ取られている。

そう、ここは蓮太郎と影胤が戦闘をしていたときに、八幡が夏世とガストレアの集団を食い止めていた場所だ。

……………多い。あまりにも多い。

点在する岩石や、森ということもあつて木々が生い茂っていたが、それでも視界を覆い尽くすほどのガストレアの死骸が転がっている。

八幡でもこれだけの数を相手に勝ち抜くことは難しい。ましてや密集格闘戦など、八幡の最も不得手とする分野だ。

八幡は自責の念に押しつぶされそうになりながら死骸の山を歩き回る。蛭子影胤ペアとの戦闘を終えて、満身創痍の彼の身体は血がこびり付いて紅く染まっている。視界が霞み、足元も覚束ない。

それでも八幡は歩き続ける。血臭の濃い方へ。硝煙の臭いの強い方へ。歩いて、歩いて、歩き続ける。

何度も倒れこみそうになりながら、何度も崩れ落ちそうになりながら。

歩いていると、まだ年端のいかない子供のものだろうと推察できる右足が転がっていった。

更に歩くと、無造作に食い千切られたのだろう左腕が転がっている。

そして見えたのは空のマガジン。半ばから折れ曲がっている見覚えのあるフルオートショットガン。

聞こえるのは、砂利の音。八幡の靴が踏み締める砂利の摩擦音。

そして、微かにだが。微かに聞こえる、とても浅い呼吸音。

——見つけた。いや、見つけてしまった。

一枚岩に背を預けた、浅い呼吸音の持ち主。

「……………千寿」

その浅い呼吸音の持ち主は、声を掛けられたことに気付いたのか、ゆつくりと顔を上げた。

「あ……………比企谷、さん……………」

千寿夏世。息も絶え絶えなほど消耗仕切った彼女は、疲弊と苦痛の残滓が色濃く残った表情を見せた。

八幡は声を掛ける。表面上は無表情に、内心は罪悪感に苛まれながら。

「……………あれからずっと、戦っていたのか」

すると彼女は返答に窮したのか、困ったような、申し訳無さそうな笑みを浮かべた。

「……………約束、……………守れなくて、すみません……………」

ああ、そういえば。そんな約束をしていたっけ。

その言葉に、何も気に病む必要はないと、ゆつくりと首を振る。

「……………いいんだ。お前は、よくやってくれた。……………ありがとう」

ガストレアを食い止める。その役目を十全に終えてくれた。その労いを込めて、礼を

述べる。

夏世は、きつと咎められるものだと、予想だにしなかった礼の言葉に一瞬戸惑い、……やはり、困ったような笑みを浮かべる。

その光景に、声が詰まった。

あのとときの光景と全く同じだったから。

喪われた左腕と右足。腹部に空いた大きな穴。凄まじい速度で再生されるそれらと、全て悟ったかのような笑みを浮かべる少女。

何もかもが同じだったのだ。あのととき失った彼女と、目の前の彼女の姿が重なり、どこか穏やかな目で八幡を見据えていて。

もつとかけるべき言葉があるはずだったのに、言わねばならない言葉があったはずなのに、枯れきった喉はただの一言も発してくれない。乾いた唇は微かに痙攣するだけだ。

「比企谷さん、将監さんは……？」

そうだ。彼女に、告げなければいけないことがあったのだ。

「……………死んだ。影胤に、殺された」

どこまでも冷静に、ただ事実を告げる。ともすれば残酷なその言葉を、夏世はしっか

りと受け止める。

「ありがとうございます……正直に答えてくれて……」

不意に、夏世が咳き込んだ。血を吐きながら何度か苦しそうに咳をする。血で汚れた口元を残った右腕で拭おうとするが……拭おうとした右腕は、持ち上がらなかつた。

「比企谷さん……私は……」

もう分かりきっているだろうに、それでも発せられる確認の言葉。もしかしたらそれは、それを見ている八幡の覚悟を問う問いだったのかもしれない。

そんな彼女に、意思とは裏腹に鉄面皮を取り戻した八幡の唇は、冷徹に彼女の状態を紡ぎ出す。

「……ああ。侵食率が確実に50%を超えている。……もう、助からない。お前はここで、死ぬ」

「……そう、ですか……」

そこで、決壊した。

八幡は彼女の前で両膝をつくと、まるで大切な壊れ物にするかのように彼女を胸にかき抱く。

「すまない……助けられなくて、すまない」

胸に抱いた状態からは、彼女の表情は何えない。そう考えると、そんな笑い方を見たくなくて、逃げているかのようで。そんな自分が嫌になる。

普段は自分が大好きだと、愛していると大言壮語していたのが嘘のようだ。

「……………すまん」

「比企谷さん……………お願いだから、もう、謝らないで」

何度も謝罪の言葉を述べる八幡を諭すように夏世はゆっくりと首を振る。

「……………東京エリアを、救ってくれたんですね」

「いいや……………やったのは里見たちだ。俺は何もしていない」

八幡の否定の言葉を、夏世は更に否定する。

「いいえ……………確かに、見えるところで貴方がやったのは些細なことかもしれませんが……………でも、貴方があそこであの決断をしてくれなかったら、蛭子影胤の足止めをしてくれなかったら、東京エリアは破滅していました」

「……………」

八幡は、答えない。ただ彼女の末期の言葉を聴き続ける。

「……………里見さんに、お礼を言っておいて下さい。私には、もう無理ですから」

「ああ」

夏世は目を伏せると、息を吐いた。呼吸することに生命力が抜けていくように、夏世

の眼窩も虚ろになっていく。

「比企谷さん」

「……………なんだ？」

彼女は、その顔に微笑みさえ浮かべて言った。

「私を……………ヒトのまま、死なせてください」

八幡は目を閉じる。避け得ない結末だと、半ばまで受け入れていたものが、今八幡に突き付けられる。

あのとときの、かつて八幡が介錯をしたイニシエーターと同じ言葉。聴いてしまえば心が折れてしまうかもしれないと覚悟をしていたが、不思議と八幡の心情は冷静だった。

腰のホルスターに手を伸ばす。銃撃の余熱も消え、冷たくなっていたグロック拳銃を抜くと、夏世を胸にかき抱いたままこめかみに銃口を押し付けた。

「……………ねえ、比企谷さん。私、貴方に感謝しているんです。

あのととき、貴方は私を人間だと言ってくれた。生きてて良いんだと、人殺しの私を赦してくれた。だから、頑張れた。貴方のために、戦えた」

夏世が途切れ途切れに言う。

「私の人生には、慚愧も、悔恨も有りません。それらは全て貴方が取り払ってくれた。今、私の胸は感謝の念で一杯です。……貴方を守るために戦えて、良かった」

運命に翻弄され、呪われていると罵られ。ガストレアの血が混じっているという理由だけで良いように使われてきた少女が、自らの人生に何の悔恨もないと、思い残すことは何もないと、……生きてて良かったと言う。

その痛烈な皮肉に、八幡はただ歯を食い縛ることしか出来なかった。

「こんな役目を貴方に押し付けてしまって、申し訳ありません」

「……………いいんだ」

胸の中で、夏世が微笑んだ気がした。

夏世を切り捨てると決めたのは自分。蛭子影胤と戦って東京エリアを救うと決めたのも自分。その果てに辿り着いた結果がこれならば、それにケリをつけるのも自分でなければならぬ。

彼女が、もう話すことはない、これで終わりだと告げるように言う。

「比企谷さん」

「……………ああ」

八幡は目を閉じた。細い腕に、華奢な肩に、手を回したままゆつくりとトリガーを引

き絞る。

「……ありがとう」

乾いた銃声が、澄み切った夜明けの空に響き渡った。

あとに残ったのは大きな後悔と、残り僅かだった命を奪った銃の冷たい感触だけ。八幡は、自分が殺した少女を腕に抱きながら、いつまでもその空を見上げていた。

胸の中の彼女は、もう動かない。

人災に於いて東京エリア史上最大規模の戦いとされる蛭子影胤追撃作戦は、イニシエーター、千寿夏世の犠牲を伴って完遂した。

——比企谷八幡は、また守れなかった。

聖天子狙撃事件編

舞い込む依頼

涼しい、というよりもやや肌寒い、という表現が似合うような早朝。八幡は古びた道場を前に腰に手を当てて溜め息をついていた。

何故八幡がここにいるかと問われると、数日前に蓮太郎と木更が道場で稽古をつけるから来てくれ、と頼まれたのだ。無論八幡は間髪入れずに断つたのだが、結局木更に押し負けてしまった。なんだか妙に迫力あるのね、あの子。

本来八幡はこの時刻、まだ自宅のベッドで暖かい毛布にくるまれながら微睡んでいる時間帯なのだ。ちなみに俺は昨日夜更かしたため絶賛寝不足である。

帰りたい気持ちも山々なのだが、このまま帰ったら木更にどやされるのは明白だった。道場の前で突っ立ってる訳にもいかなないので、とりあえず入る事にする。

「邪魔するぞ」

一応声を掛けて道場に入ると、刀に手を掛けて腰を落としている木更と、正座してその様子を見守っている蓮太郎がいた。

木更の正面約五、六m程離れたところに、腰を落とした木更と同じくらしいの高さの的がある。

木更はふうつと吐息を漏らし、目を見開いた。

「天童式抜刀術一の型一番」

たおやかな指が刀の柄に絡まり、一切の淀みのない動作で刀が抜き放たれる。

『滴水成氷』

ほとんど視認不可能な速度で斬り払われた刀は、数m先にあつた的を過たず切り裂いた。

吹き飛んだ的の上半分が放物線を描きながら飛来する。入り口の八幡に向かって。

「危ねっ」

八幡はそれを難なく避けながら歩いていく。避けられた的の残骸は畳敷きの床に何度かバウンドして動きを止めた。

「よお」

「ちよつと比企谷くん、避けないでよ。道場の畳に傷が付いちやつたじゃない」

「いや普通避けるから」

相変わらずの木更の破天荒ぶりをいなし、欠伸を噛み殺しながら素直な感想を言う。

本当に凄まじいと思う。飛ぶ斬撃と言うのは、木更と出会うまではマンガの世界でく

らしいしかお目にかかれなかったから、初めて見たときなにそれラノベ？ ってなったほどだ。

材木座のなんちゃって剣術とは格が違う。ほら、秘劍鏡サウザンブレイド・オブ・ミラージュたる千劍の閃光とか、秘太刀『虚無』とか。なんかあつたじゃん。

飛ぶ斬撃は属性的に鈍い『打撃』ではなく、文字通り鋭い『斬撃』であるから、最初から受けるという選択肢がない。相手に避けるといふ行動を強制させるから中々に面倒だ。下手したら八幡や蓮太郎の義肢さえ損傷させるかもしれない。

抜刀術には、いや抜刀術に限った話では無いが、刃の届く間合いというものがある。達人の域となるとその間合いが文字通り視えるようになるらしい。神速の斬撃と、完全なる間合いの把握。木更レベルの剣客ともなると、たとえ蠅程度でも間合いに入ってきた瞬間に両断出来るだろう。木更は自身の周囲に不可視の結界を持っているに等しいのだ。個人的には飛ぶ斬撃よりもこちらの方が恐ろしいが。

「相つ変わらずとんでもねえのな、お前んとこの社長さん」
「全くだな」

それに同意の言葉を返したのは蓮太郎だ。天童式の木更の弟分でもある。蓮太郎は木更にタオルを投げ渡しながら話しかけて来た。

「流石は天童式抜刀術皆伝。このくらいはお手の物ってか」

「そんなことないわ、里見くん。私はまだまだ未熟なもの
まったたく謙虚なことです。」

そんな皮肉を堪えつつ再び欠伸を噛み殺す。どういうわけかここ数日木更の八幡に
対する扱いが冷たい。特に何かした記憶は無いが、面倒事を増やすのは御免被る。

「……………ふむ、天童。突然なんだが俺なんかした?」

というわけで直接聞いてみる。あまりに直球過ぎたかなーとか思ったが、生憎とこ
う聞き方しか出来ない。

対する木更はそんな八幡をキツと睨み付けると、苛立たしげに鼻をならした。

「なんかしたって、なんかしたに決まってるじゃない」

「は?」

木更はここぞとばかりに捲し立てる。そんな強く言われても、心当たりが無いものは
無い。

「最近の貴方の行動よ。この前ガストレアが出たときは里見くんたちが到着する前に倒
しちゃうし、襲われてた民間人だって一足早く救出しちゃうし、飛行型が出て里見くんた
ちが四苦八苦してたときだってすいっとライフルで撃ち落としていっちゃやし、天童民
間警備会社に何か恨みでもあるの!?!」

……………。

「……………その、なんかすまん」

あー、あつたわ、そんなこと。なるほどだからか。

「でもなあ、俺もこの仕事を生業としてるし。狩れなかつたら死活問題な訳よ。それにさ、ほら、民警つて出現したガストレアをいかに他の民警より早く狩るか競争みたいなものだろ？　しょうがないじゃん」

「貴方の言は確かに一理あるわ。…………じゃあ聞くけど、なんでピンポイントで私たちが行こうとしたところに居るのよ」

「……………すまん」

なんか、あれじゃね？　波長的な？　うん、あれ。…………違うか。だがまあそこはわざとじゃないので勘弁願いたい。

木更は再びふんつと鼻をならすと、髪をかき上げた。

「貴方の所為で里見くんや延珠ちゃんに払う給料もなくなつちゃうのよ」

「……………え、マジ？」

確認の意味を込めて蓮太郎の方を振り返ると、蓮太郎は苦笑いを浮かべながら頷いた。

「……………今度飯奢つてやるよ」

彼等のその状況に思わず憐憫の情が浮かぶ。あ、原因俺か。

そんな事を考えていると、ふと木更の手にしている刀に目がついた。

「……………殺人刀・雪影、か」

「木更さん、最近その刀を取ることが無かったのに、急に持ち出したんだ」

八幡の呟きに呼応したように蓮太郎が告げる。木更の事については八幡より近くにいる蓮太郎の方が詳しいだらう。

「そうよ。里見くんには殺人刀の意味って言ったことあつたかしら？」

「いや」

「禅で、活人剣かつにんけんの対極に在って人の妄執を否定する刀。……これはね、全ての天童を狩る為の刀なの」

木更の笑みに蓮太郎が息を飲む。対して八幡は冷めた表情でそれを見ていた。

——ああ、またこの眼だ。

木更が時折見せる眼。復讐者の眼。八幡とて天童家で二人が巻き込まれた事件は聞き及んでいる。先ほどの天童を『斬る』ではなく『狩る』という表現から木更の復讐心がどれだけのものか伺えるほどだ。十年間という長いときを経て未だに身内を手にかげようとしている。木更は本気なのだ。八幡にそれを止める気は無いが、いずれ自滅するのではないか、という何の益体の無い予想を立てていた。

結局そのあと延珠と稽古をつけたり、むくれた木更を宥めたりして解散した。あれ？俺なんで呼ばれたの？

今日の稽古を見て思ったことだが、蓮太郎はともかく木更と延珠は以前見たときよりも更に強くなっていることが推察された。

木更の飛ぶ斬撃も前回見たときよりも射程が伸びていたようだし、構え、抜刀、斬撃、残心と心なしか洗練されていた。

延珠の動きもだが、こちらは純粹にスピードが上がったといった感じだろうか。対イニシエーター戦に於いて、その下地となる身体能力の差は大きい。特に延珠は優秀なイニシエーターで、実戦を経て動きに無駄が無くなつて来ている。

個人的には未だ木更の方が誰よりも恐ろしい。相性が悪いという訳でもないが、時折見せる復讐者の表情や、殺気を浴びせられたとき、近くを通つたときに感じる仄暗い感覚に、長年培つたぼつちのセンサーが反応しているのだ。わかりやすく言えば、アホ毛が反応している。

それに彼女は天童を狩るといふ行為を邪魔されたら、八幡は言うに及ばず、蓮太郎や延珠でさえ寸分の躊躇いなく刃を向けるだろう。

藍原延珠というイニシエーターは、八幡が今まで見てきたイニシエーターの中では小比奈同様に突出している。特に、スピード特化型イニシエーターである彼女のもつスピードは、銃器を主武装とする人間にとつてすこぶる相性が悪い。

八幡も過去の仕事の関係で対イニシエーター戦もこなしてきたし、可能な限り慈悲も与えて来たが、必要とあらば情け容赦無く排除して来た。

身体能力でプロモーターに対して圧倒的優位に立つイニシエーターの彼女等が彼らに後れを取る場合。基本的に戦闘が開始される前に無力化される場合が往々にしてある。

無論、食物に毒を仕込まれた、とか罠に嵌められたという訳ではない。刃物や銃器を構え、剥き出しの戦意や掛け値なしの殺意を向けられた場合、彼女等は十歳の女兒という精神的な脆弱性を晒す。

今まで八幡は戦場で彼女等と相見えたとき、効率を最優先とする八幡は、非発見時は不意打ち、発見時は可能であればこれで彼女等を無力化してきた。戦う相手が特定出来れば麻痺毒や罠を仕掛けていたが(戦闘の回避が出来ない場合)、突発的な戦闘が頻発する戦場ではそうはいかない。そして、稀、とまではいかないが刃物や銃器を恐れないイニシエーターもいる。やはり最も苦戦させられたのが彼女等だ。そして彼女等を八幡は実力でねじ伏せてきた。

その事に罪悪感が無かった訳では無かったが、当時心が荒んでいた八幡はそんな感情自体が稀薄だったし、目的を阻害する相手には現在の木更同様一切の容赦をしなかった。イニシエーターには比較的温情を与えて来たが、あくまでも比較的だった。

道場を出ると道が違う蓮太郎たちと別れる。彼等と同様今日は学校なのでさっさと準備をしなければならぬ。と、大きな欠伸をしながら足早に家に向かった。

家に着くと意外なことにカマクラ氏がお出迎え。蛭子影胤追撃作戦後に妙に董に懐いた状態で帰ってきたカマクラは、俺の顔をみるなりうへえ、という顔をした。

董の意外な動物好きという一面を知れたので一応溜飲を下げたが、カマクラの反応は物凄く微妙である。でも文句も言わずここに居座っているのは家族だから、ということでは無いのだろうか。だからこの態度も家族だから、ということに違いない。え、違う？

「はいはい、飯な」

エサを催促するカマクラの頭を一撫でし、キツチンに向かつてエサ皿にキャットフードをザラザラ流し込む。ちなみになんだかんだ言つて八幡も動物好きであり、ちゃんと

分量とか体調管理とかには気を使っている。おかげでカマクラは健康体そのものだ。董の所から帰って来たとき妙に毛並みがツヤツヤしていたのはなんだったのかと考えながら学校の準備をした。

学校のHRに滑り込むようなギリギリのタイミングで登校した八幡は、由比ヶ浜や戸塚、葉山に変な視線を向けられていることに気付いた。

そういえば、蛭子影胤追撃作戦から初めての登校になるのか、と思い出し、納得する。八幡は董から新しい義脚を受け取るまで登校しなかったので、蓮太郎より遅くから学生生活に復帰したことになる。蓮太郎は包帯ぐるぐる巻きのミイラ状態で学校に行つたことがあるらしく、それでも誰からも気に留められなかったので片腕喪失状態でも普通に登校したらしいのだが、周囲に民警であることを隠している八幡ではそうはいかない。

右脚ぶつ飛んだ状態で松葉杖付きながら学校なんざ行つたらとんでもないことになるのは目に見えている。左脚が残っていたのも奇跡だったつてのに。

それでも今まで休んでいたことの詰問はあるだろう。雪ノ下は何も言わないと思うが、由比ヶ浜にそれが当てはまるとは思えない。幸いなことに平塚先生に職員室に来る

よう言われたので、逃げるようにして教室を後にした。

職員室の中にある応接室に通され、ソファに座らせられる。その途中に他の教師達の視線を感じたが、そんなことで同様する八幡ではない。

平塚先生は対面のソファに座り、いつも通りの態度で紫煙を吐き出すと本題に入った。

「どうだ？ 東京エリアの救世主になった感想は」

やはりその事か、と溜め息を吐く。口調こそこれだが、平塚先生がからかっているのではない事を悟ると、素直に口にした。

「いいえ、別段変わりありませんよ」

そんな八幡の簡潔な答えに苦笑を漏らすと、平塚先生は再び紫煙を吐き出した。おっさん臭い動作が妙に様になる先生である。

「……まあ、そうだろうな。民警やその筋の中では君はかなりの有名人だが、基本的には調べないとわからないしな。テレビで放送もされたが幸いなことに君の知名度は校内では低い。由比ヶ浜たちも気付いていない様だから安心していいぞ」

「はあ、ありがとうございます」

「ん、気にするな。だがまあ校長や他の教師は結構知っているからな。まさか生徒にバラすような事はすまいが、そのところは留意しておきたまえ」

もしかしたら後で校長に呼ばれるかも知れん、と付け足される。めちやくちや面倒臭いのが顔に出ていたのか、先生は苦笑すると手をヒラヒラと振った。

無言で平塚先生に礼をすると、応接室を後にする。相変わらず好奇の視線が気持ち悪かったが、それらは全て無視した。

「ほむん、久しいな英雄よ！」

「なんでてめえがそれを知ってんだよ材木座」

昼休み。誰に話しかけられるより早く教室を出た八幡は、いつものベストプレイスに來ていた。

え？ 誰も話しかけないって？ そういうツツコミは無しだゾ☆ そんで、まあ目の前の中二デブは俺を待ち伏せしていたのだろう。いつも通りの鬱陶しいオーラを発しながら仁王立ちしている。

「けぶこんけぶこん。愚問であるぞ比企谷八幡！ 世の中には便利なものがあってだなあ、その名も、i n t e r n e t !」

「なんでちよつと発音良いんだよ腹立つなお前」

確かに今じや検索すればすぐに八幡の名は出てくるが。

ちなみに、材木座は八幡が民警だという事実を知っている数少ない人物だったりする。あの平塚先生よりも前に知っていたのだ。

バレた理由は護身用に隠し持っていた銃が見つかったから。……あれ、間違つて持ってきたんだっけ？ 咄嗟にエアガンつて誤魔化したんだがこのデブ一発で本物つて看破しやがった。そのとき一緒に民警ライセンスを落としてしまったのが最大の失態である。

「ガストレア数百体とか我が戦ったらマジ死ぬ。お主も無茶したよのお八幡」

「ちよつと黙ろうかお前。それバラしたらお前の贅肉物理的に削ぎ落とすからね？」

「ほほう、お主、まさか我に話す相手がいると思つてはいるまいな？」

「いないな」

それなら納得だ。なんだかんだ言つてこいつは口が固いからまだ良いんだが。

八幡は、今日何度目かわからない溜め息を零した。

放課後になって奉仕部を早退する旨を告げ、一度帰つて荷物を置いてから家を出る。

夕方になって気が進まないまま空を見上げると、想像以上に外は明るかった。嫌だなあ億劫だなあ帰りたいなあなどと開いた口からはそんな言葉しか出てこない。

家出た瞬間から帰りたいがるとか超俺ホームシック。全く実家は最高だぜ！

物凄くどうでもいい思考に脳内を支配されながら重い足をなんとか前に送り出す。面倒臭きことこの上なし。今すぐ回れ右して家に帰りたいまでである。あ、また同じこと言ったな。要するにそれだけ行きたくないってことだ。

数日前と同じように電車を何度か乗り継いで東京エリア第一区に向かう。荷物は少なく財布とグロツクと暗器くらいだ。………暗器はもう性分というか、あつたら落ち着くので持って行っている。

依然として景気の悪い表情をしながら八幡は聖居前に降り立つ。

白を基調とした洋風建築物。全体に幾重にも曲線が描かれており、細部まで精巧に作られている。

現在八幡が来ている所。

そう、さつきも言ったが聖居である。

正門の守衛に要件を告げ、取り次ぐこと数分。胡乱な目で見られながら通されたのは無駄に広い記者会見室。本来であれば所狭しと並べられたパイプ椅子に記者たちが座っているのだろうが、今は数人しかない。

そして、壇の上で演説……いや演説の練習でもやっているのだろう、そこには聖天子がいた。

こうして生で彼女を見るのは二度目だが、鼻屑でも誇張でもなく凄まじい美人だ。同じ美人としてのジャンルに入る雪ノ下姉妹とは違うベクトルの美しさを持っている。近付きがたい雰囲気というのは同じだが、聖天子には神々しさが加わっている。

部屋の隅で演説の終了を待っていると、切り上げたらしい聖天子が近づいて来た。

「ごきげんよう比企谷さん」

聖天子の柔和な対応に、八幡も姿勢を正す。

「聖天子様、先日は失礼致しました」

「いいえ、気にしていません」

「本日はどのようなご用件で？」

はい、と言って聖天子は人払いをする。後には聖天子と聖天子の秘書らしき人物、そして八幡が残された。

「比企谷さん、大阪エリア代表の齊武大統領が明後日、非公式に東京エリアを訪れます」

八幡がその言葉に少しだけ目を細める。

「……あの齊武大統領が？」

「ええ。東京エリアに寄る用事があるので会談を用意したとの事です」

齊武大統領。現在の日本の五つのエリアのうち、大阪エリアを統治する大統領だ。その手腕でガストレア戦争後荒廃した土地をもとの数年で立て直した人物だ。

何故今になって、というのは想像出来ない話では無かった。齊武大統領は、東京エリアの天童菊之丞聖天子補佐と政治的なライバル関係にあるのだ。その菊之丞が現在他国のエリアを訪問中で不在である。タイミングとしては申し分ない。

だが、

「それが、自分と何の関係が？」

「貴方には、菊之丞さんが不在の間、私の護衛をして貰います」

八幡は眉をひそめる。

「つまり私に菊之丞閣下の代役を担え、と」

「端的に言えばそうなります」

「……しかし解せませんね」

「……どういふことですか？」

「貴女には専属の護衛が居たはずですが」

そうだ。聖天子には、専属の護衛隊のようなものを組織して周囲を守らせていたはずだ。なのに、菊之丞一人居なくなっただけで代役をたてるなど、意図が読めない。

「それを今、紹介しようとしていたところです。……入って来て下さい」

聖天子が声をかけると、規則正しい軍靴の音と共に、部屋の中に数人の男が入ってくる。そして、聖天子のやや後ろで足を止めた。

白い制服。腰に差した拳銃。ぱつと見て思った感想は、なんだかナチスドイツ時代のゲシュタポのようだ。国家保安省シュタージュという方がよりしっくりくる。

「こちらが、隊長の保脇さんです」

整列した白服の中から、一人の男が歩み出てくる。

「ご紹介に預かりました、隊長の保脇卓人三尉です」

保脇卓人と名乗った男は、顔に柔和な笑みを浮かべながら手を差し出して来た。歳の頃は三十を過ぎたあたりだろうか。

その男の目を見て八幡はすつと目を細める。

……気に入らない。

この世に生を受けて十数年間悪意や侮蔑、嘲笑を受けてきた八幡は、その表情の裏側に秘められた感情を敏感に察知する。

「あの………比企谷、さん？」

聖天子から上がる困惑の声。大方動かない八幡を怪訝に思つてのことだろう。だが、八幡はそれには答えず、能面のような無表情をその顔に貼り付けていた。

たつぷりと間を置いてから、ゆっくりと保脇の手を握る。そして、力の込められる事のない手を見て確信した。

この男は、八幡に対して敵意しか抱いていない。

「……………どうも」

限りなく簡潔に、短く返答する。

その反応を不快に思ったのか、保脇は眼光を一瞬だけ強めると、手を下げて一歩さがった。

「では、依頼を受けて頂ける場合はこの契約書にサインを」

聖天子の側に控えていた秘書から契約書を受け取る。事は済んだようで、一言断つて聖天子は去って行った。護衛隊もそれに続く。

部屋には、八幡だけが取り残された。

聖居内での用事も済んだ八幡は、あまりお目に掛かれない聖居を眺めながら出口へと向かう。

この聖居だが、無駄に広い。雪ノ下あたりなら絶対に迷いそうな構造をしている。ふと、八幡は足を止めた。

後ろに、五、六人ほどの気配がする。八幡が止まればあちらも止まり、歩けば距離を離さず着いてくる。まず確実に尾けているのだろう。

八幡は手近な場所にある広々としたトイレに入った。そして、振り返る。

「何の用だ」

入って来たのは先ほど記者会見室で見た聖天子付護衛官。隊長の保協と他五人だ。随分と剣呑な雰囲気醸し出している。

保協は鋭い眼光で八幡を睨むと、後ろの五人に告げた。

「拘束しろ」

近付き、拘束しようと手を伸ばしてくる護衛官。八幡はその手を払い、再度問いかける。

「……もう一度言う。何の用だ」

保協は忌々しげに舌打ちをすると、再び八幡を睨み据える。そして八幡に歩み寄り、おもむろにナイフを取り出して首筋に押し付けた。

余談だが、八幡が保協にここまでの行為を許したのは、ひとえにこの状況下から全員を無力化する算段がついていたからである。保協の挙動を見る限りは、彼の動きは多少刃物の扱いに慣れた程度であり練度の低さが見て取れた。

「比企谷八幡。この依頼を断れ」

保脇は押し殺した声でそう呟く。

「……………理由は？」

「目障りなんだ。何故貴様のようない介の民警が聖天子様の護衛役を任される？　そこは本来僕の場所だ。貴様がいていい場所じゃない」

八幡はその言葉で大体の事情を察した。つまるところこの男は八幡に嫉妬しているのだ。

「天童閣下は留守中にその場所を僕に託された。そこに貴様が入って来ていい道理はない」

表情を憤怒に歪め、首元でナイフを揺らしながら言う。

「それに、だ」

保脇は嗜虐的な笑みをその顔に浮かべながら囁いた。

「聖天子様は今年で十六歳になられた。何が起こるか分からない世の中だ……………貴様も、次代の東京エリアの世継ぎが必要だと、そう思うだろ？」

「……………」

首元にナイフを押し付けながら言う目の前の男を、八幡は冷めた目で見据えていた。

保脇は一步下がると、ナイフを八幡の鼻先に突き付けながら言った。

「返答を聞こうか」

これはもとより脅しだ。返答もクソも無いだろうと考えながら八幡は吐き捨てる。

「本来なら断るつもりだったが……気が変わった。貴様に指図される謂れはない」

保脇は無表情のまま八幡の返答に応えると、背後の護衛官たちに向けて軽く手を振った。

「手足の骨を粉碎しろ」

どうやら保脇は想像以上の屑だったようだ。八幡は冷めた思考の中そう悟ると、向かつてくる男たちに冷たい視線を向けた。

視線を向けられた男はうっと呻き声を漏らし、動きを止める。

「何をしている！ 早くしろ」

保脇に叱咤され動き始めた男たちが、八幡に歩み寄る。

八幡は伸びて来た腕を捻り上げると、腹に膝蹴りをかまし、力の抜けた身体を投げ捨てた。

「貴様ツ！」

殴り掛かって来た男の拳をいなし、顎に掌底を繰り出しながら脚を刈る。顎から伝わる衝撃と、硬質な床に後頭部を強打した男は脳震盪を起こし昏倒。

八幡に向けて拳を振り上げる二人の男。一人は頭を屈めて回避しながら肘を鳩尾に叩き込み、横合いからの拳は腕を絡めるようにして巻き取ってバランスを崩させた上で

壁に叩き付ける。

もう終わりか、と言った目で五人目を睨み付けると、その表情を憤怒に滲ませながら掴みかかってくる。八幡はそれを難なく避けると、足払いをかけ関節を極めながら床に組み伏せた。

保脇は、僅か十秒足らずで五人を無力化した八幡を、恐怖と憎悪の入り混じった表情で見つめる。

彼らとて八幡が何故序列500位に昇格され、護衛役に抜擢されたか経緯は知っているはずだ。事実はどうあれ、自分たちが八幡に手も足も出ないことは想定出来た筈なのだ。それなのに襲い掛かってくるのは相手の力量も推し量れないほどの馬鹿なのか、隊長がそれほど無能なのか。

「貴様……ッ、殺す。必ず殺してやる」

保脇は物騒極まりない捨て台詞を吐き、未だ床で呻いている護衛官を叩き起こして去って行った。

「……………ふん」

唇を皮肉げに歪め、自嘲するように鼻を鳴らす。

ああ、そうだ。この扱いだ。昔からよくこんな扱いを受けて来たが、最近はご無沙汰だった。幾らなんでもいきなり暴力沙汰にまで発展した事は少ないが、あそこまでクズ

だともはや清々しい。

この後、八幡が依頼の受理を決意したのは言うまでも無い。

孤独の代価

聖居を出て間もなく。八幡は一体どうしたものかと腕を組みながら唸っていた。視線の先にあるのは、自転車漕ぐ一人の少女。

まあ、そこまでは良い。そこまでは良いのだ。問題は、先ほどからずっと聖居前の水の周りを周回していることだ。そして服装はパジャマ。極めつけは、自転車を漕いでいる彼女はほとんど瞼も落ちかかっている状態で意識も有るのか無いのか判然としていない。

面倒事に巻き込まれるのはゴメンだ。面倒臭がりの極地にいる八幡はとりあえず無関係を決め込む。何が悲しゆうてあんな色々やバイ幼女の相手をせにやなんのだ。最悪俺が犯罪者扱いされて通報されるまである。

組んでいた腕を下ろして踵を返そうとする。普段来ることの無い聖居なんてどころに来たせいで割と疲れているのだ。

今見た光景を忘れようとしながら帰路につこうとするが、不意に後方から先ほどの自転車のものだろう転倒音が聞こえた。

「つてえなコラアアツ!! どこ見てんだよクソガツ!!」

そして響き渡る大音声。あまりにも耳障りなそれに八幡はげんなりとした表情を見せながら振り返る。そこにはツンツンした金髪の青年が三人ほど自転車に群がっていた。

そこに容赦なく浴びせられる蹴り。少女の呻き声や自転車が軋む音が聞こえる。関わり合いになるまいとそそくさと距離を取る民間人に辟易としながらも、八幡は眼をいつもの二割増しくらいに濁らせながら振り返った。

大方、先の自転車に乗っていた少女が彼等にぶつかつたか、もしくは彼等が故意にぶつかつて難癖をつけてきたかどちらかだろう。

八幡は今日一番の大きな溜め息をつくとき、ズボンのポケットに手を入れながら凄む青年達に歩み寄った。

未だ少女に蹴りを入れようとしている青年の肩に手を置くと、気だるげな声を出しながら振り向く。

「おいコラてめえ聞いてんのか——ああ？ んだよてめえ」

同様、凄まれる。だがこの程度の威圧など、八幡ならば慣れたものだ。かつて彼が相対した蛭子影胤に比べればこの程度無いに等しい。

「オイ、舐めてんのか、ああ？」

汚い言葉を吐きながら胸ぐらを掴み上げられるも、八幡は冷めた目で見返すだけで行

動を起こさない。まるで自分からは何もしないとも言うように。

「おいこいつ、カツコつけたのはいいけど竦み上がっちゃったみたいだぜ」

「何にも言えねえみたいだなあ」

勘違いをしたまま下卑た笑い声を上げる青年たち。しかし、青年のうちの一人があることに気づき、動きを硬直させた。

「お、おい……………やばくねえか」

「ああ？」

声を上げた青年の視線の先にあるものは、胸倉を掴み上げられている八幡の腰元。より正確に言うならば、腰元のホルスターに収まっている拳銃だった。

視線を追いその存在を見咎めた青年たちは瞠目し、緊張に顔を引きつらせると、それ以上何も言葉を発する事無く退散していった。

金髪の青年たちが視界から消えたのを確認すると、八幡は事の元凶たる背後の少女にむけてどろりとした視線を向ける。パジャマ姿の矮躯の少女は、恐怖に身を縮めているかと思いきや、大きな瞳を見開き、その小さな口を開けながらこちらを眺めていた。

「ありがとう、ごさいます……。正義のヒーロー、生まれて初めて見ました……」

八幡は、また面倒なものと関わってしまったと嘆息した。

「……それで、お前なんであんなここにいたんだ」

汚れていた彼女の顔をタオルで拭き、ベンチに座らせてから八幡はようやく口を開いた。

八幡は存外に自分がおせっかいであるという事を認めつつあるが、今回ののは少々度が過ぎるというのが否めない。八幡は断じてロリコンなどではないし、自分から面倒事に突っ込むようなお人好しでもない。今度からこういう手合いは無視を決め込もうと心に決めると、目の前の少女が早くも眠りこけている事に気がついた。

「……………」

声を掛けると少女ははつと顔を上げ、周囲を見回したあとにようやく八幡の存在を認めた。

「えつと……なんででしょうか」

どうやら何も聞いていなかったらしい。想像以上に手強い相手だと嘆息する八幡に、金髪の少女は不思議そうに小首を傾げる。その様子に顔を顰めながら八幡は再び問いた。

「あ………お前、どっから来た？ 名前は？ あと住所分かるか？」

問われた少女は少し考えこむ仕草をした後にゆつくりと顔を上げる。そして、うつか

りこちらもペースに巻き込まれてしまいそうになるほどの緩慢さで言葉を紡ぎ出した。
「……名前は、ティナ。ティナ・スプラウトです」

名前を問うだけでもここまで時間が掛かるのか……と早くも辟易とし始めた八幡であるが、そんな事は露知らず、再び夢の世界へと誘われるティナである。

そんなティナを鑑みて、八幡は一つの妙案を思いついた。彼には彼と同等以上に面倒見の——特にティナのような少女相手に——良い人間を知っていた。字面では危険人物と思われるかも知れないが、あれでリスクリターンの計算の出来る男である。犯罪であることを分かっている、それも聖居前の公園で手を出すほど能無しでもない筈だし、最悪彼の居候が諫めるだろうと彼はポケットからスマホを取り出した。

完全に面倒事を押し付けているだけだが、この男、面倒事は可能な限り避けるか他人に押し付けるタイプである。一切悪びれる様子も無く連絡先の画面を立ち上げた彼は、片手で数えられるほどの寂しい連絡先から、さ行の相手を見出す。

通話のアイコンをタップして数コール、そして出た相手の反応を待たずに畳み掛ける。
る。

「——里見か？ ああ、俺だ、比企谷。とりあえず今から聖居の前の公園に来い。拒否権は無いからな。公園のベンチに幼女がいるから、面倒見てやれ。俺には手に負えない。何？ 無茶言うな？ んなこと知るか。たかが数駅程度の距離だろうが。喜べ、金

髪ロリの美少女だぞ？ 良かったな日頃からの妄想がついに叶うな。でも犯罪はやめろよ。おっとどうやら電波が悪いらしい。あーあー聞こえない聞こえない——つと、これでいいか」

通話に満足した八幡は言うことだけ言ってさっさと通話を切ってしまう。端から見ればなんとという暴挙だろうか。見る人が見れば相当な外道である。

「これから超お人好しで面倒見の良い不幸面の奴が来るから、『眼の腐ったお兄さんが言つてた』つて言えば面倒見てくれるぞ。たぶん」

「……はい」

未だ寝ぼけ眼のティナは、船を漕ぎながらも取り出したボトルからカフェインの錠剤を鷲掴むように取り出し、無造作に口に放り込んでいた。

少女の口元から、錠剤を噛み砕く咀嚼音が聞こえてくる。そんなにカフェインを摂取して大丈夫なのだろうか。確かカフェイン中毒というものは割と危ないものだった筈だが……。少しの逡巡ののち、八幡は“どうでもいい”という結論を出した。絡まれていた相手を助けた挙句、摂取するものの栄養バランスにまで口を出すほどお節介ではない。

ティナは噛み砕いた大量の錠剤を嚥下すると、心なしか覚醒した様子で顔を上げた。

「あの、どうもご迷惑をおかけしました」

「……………いや、気にするな」

少女の存外に礼儀正しい一面に少しだけ面食らったが、八幡は適当に返事をすると言を返す。里見と鉢合わせをするとなかなか面倒な状況になるだろう。あとで何か奢つてやろうと思いつつ、八幡はその場を後にする。

公園を去り際に後ろを振り返ると、よだれを垂らしながらベンチで爆睡するティナの姿が見えた。

夜も滔々と更けてくるこの季節。

時刻は六時をもうすぐ回るかという時間帯にも関わらず、窓の外は既に暗澹とした闇が広がり始めている。

八幡はガタン、ゴトンという規則的な電車の振動に揺られつつ、窓の外に広がる闇と、その闇に対抗するかのよう眩いばかりの光を放つ都心を眺めていた。

ガストレア戦争以降、人類の総数は激減し、日本は五つのエリアに分かたれる事を余儀無くされた。だが、いくら総人口が減ったとはいえ、分断されたエリアの限られた総面積ではエリア内の市民を収容するのには限界があった。

結果として、政府は苦肉の策として都内に超高層ビルを乱立させることとなる。限ら

れたエリア内での高過ぎる人口密度が限りなく分かりやすくなって顕現した形がこれだろう。ガストレアが現出した十年前ではとても見られなかった光景に違いない。

既にゆうに二百メートルを越すビルがそう目立たなくなってきた程だ。八幡もときたま“直下型の大地震でも来たら東京エリアは壊滅するのではないか？”というすこぶるどうでもいい懸念を抱いた事があるのだが、周囲の人間はそれ以上の分かり易い脅威がガストレアという明確な形で表されている為、そちに対しての危機感は一瞬もレアの方へ流れてしまつてほとんどないらしい。

窓の外で流れるどこか単調な景色をどろりと濁つた眼で傍観しつつ、頬杖をついて最近伸びてきた髪を弄ぶ。

今日は久方ぶりに面倒事に巻き込まれた。聖天子の護衛。天童菊之丞の不在。聖天子付き護衛官の干渉。その中で遂行せねばならないのに、非公式会談の相手はあの悪名高き大坂エリア国家元首、齊武大統領なのだ。聖天子とは致命的なまでに反りが合わないだろう。暗殺を企てる可能性も否定できない。蛭子影胤追撃作戦からやつと一息つけると思つていたばかりに、今回の依頼の面倒さには辟易とした。断るにしても、依頼主は東京エリアの最大権力者である聖天子だ。断るに断れない。

八幡の心情を物語るように、その顔にはありありと不満が浮かんでいる。直後に襲つてきた一際大きな振動に頬杖を外され、八幡はあからさまに顔を顰めた。

幸いにして八幡の電車内にはそれほど多くの客が居なかつた為か、八幡の醜態が晒される事態は免れた。それを目線だけで確認しつつ、八幡は憮然とした表情のまま本日何度目かの溜め息をついた。

電車内の定期的に起こる振動に仄かな心地良さを覚え、目蓋は重く、微睡み始めた頃に車内にアナウンスが流れる。目的地を知らせるアナウンスに半ば強制的に覚醒させられた八幡は、疲労を訴える身体に鞭を入れ、軽くかぶりを振って眠気を飛ばすと重い腰を上げる。

今日一日だけで精神的に随分と疲れた。もう何事も無いと思いたい。

そして、車内との気温の差に軽く身震いしながら八幡は人の少ないホームに降り立った。あとは置いてある自転車を漕いで家に帰るだけ。そのはずだった。

去つていく電車を尻目に駐輪場に向かおうと足を向けたホームの階段から、コツコツと規則正しい足音が響いてくる。

人が少ないとはいえ、閑散としているという程ではない。別段この時間帯に人が来る事としてそう珍しい事でもないのだ。八幡は特に何を考えるでもなく、ただ無感動のまま視線を向ける。

そして、あまりにも見知ったその少女が視界に入った。

華奢な肩を、儂げな物腰を、艶やかな黒髪を、ふと彼は見咎めた。見咎めてしまった。

雪ノ下——

向こうも同様に此方に気付いたようで、足を止めて少しだけ驚いたようにこちらを見据えた。

「……………」

二人の間に重い沈黙が流れる。

普段の二人の関係ならば、他愛のない言葉を投げかけ、皮肉げに唇を歪ませ、ちくりとした嫌味の応酬のあとに、どちらからともなく去ったであろう。今回もきつとそうだと、彼女を見た瞬間はそう思っていた。

雪乃は八幡と視線が絡むと、何を話すでもなく、その形の良い唇をきゅつと噛み締めると、だが毅然とした態度で八幡を睨め付けた。

八幡は一瞬混乱した。およそ彼の知る限り、彼女はこんな表情を彼に見せた事はほとんど無かったのだ。それが、今は。

そして、自分が彼女に対してどんな態度をとれば良いのか分からなくなった。

「……………あなた、民警だったのね」

一瞬にして思考の海に引き摺り込まれた八幡に、雪乃の冷たく、それでいて何かを抑

えたような声が問いかけられる。

「……ああ」

返答に窮した八幡だったが、なんとかそれだけ絞り出した。そして瞬時に理解する。彼女が自分を問い詰めようとするその理由を。

「……どうして……どうして言ってくれなかったの」

何故。何故民警であることを言ってくれなかったのか。八幡はその問いに対する答えを持つていなかった。

何故だろうか。民警だと知られたら距離を取られると思ったから？ 辞めるように諭されると思ったから？ 違う。彼女は決してそんなことをするような人物ではない。知ったとしても、それがどうしたと言わんばかりの澄まし顔で、我関せずとばかりに己を貫く。それが八幡が知っている雪ノ下雪乃だ。

だが、目の前にいる雪ノ下雪乃はどうだ。何かを堪えるかのように唇を噛み締め、よく見ないと気付かないが——肩にかけてバッグに添えるように握り締めた手は、力を込め過ぎて指先が白くなっているではないか。

「……聞かれなかったからだ」

口を開こうにも言い訳など思いつかない。そもそも言い訳などする気にもなれなかった。

きっと彼女はいつ死ぬかもわからない仕事をしていて、それを言ってくれなかった事に憤っているのだ。

何故言ってくれなかったのだ。明日にも死ぬかも知れないのに、と。

彼女が憤っているのはあるいは、八幡がいつ死ぬかもわからない、いつ居なくなってしまうかもわからない戦場に身を置いている八幡の現状を知りもせず、ただ一人のほほんとして日常を謳歌している自分自身に対してなのかもしれない。

「……………そう」

雪乃は八幡から目を逸らし、消え入りそうな声でそれだけ呟くと、顔を背けたまま八幡の横を通り過ぎていった。

八幡は苦虫を噛み潰したような表情で舌打ちをすると、駐輪場に向かって歩き出した。

吼ゆる野望、糾す清廉

全身の体重を柔らかく受け止める革張りのシートに、重厚なドア。豪勢な内装には備え付けの小型の冷蔵庫やテレビすらあるというのに、閉塞感など微塵も感じさせない。大の大人数人が身を投げ出してくつろいだとしても尚余裕のあるほどの開放感。豪華なカーテンや車内を照らす光源は、俗に言うセレブ感を出しながらも決して装飾華美ではなく、上品な高級感を醸し出している。

八幡はそのあまりにも場違いな空間に辟易としながら、目の前の人物に気取られぬよう密かに息を吐き出した。

現在八幡がいる場所は、高級リムジンの車内——もつと言えば、今回の八幡の依頼人、そして東京エリアの君主たる聖天子の搭乗するリムジンである。

無論、八幡としてリムジンに乗るのはこれが初めてという訳ではない。過去の依頼で二、三度乗った程度だが経験はあるにはある。故に慣れているとは言いがたいものの八幡はこういう状況のときに自分が取るべき態度というものを弁えていた。

「……………」

八幡は窓の外に向いていた視線を、さりげなく前方の人物へと移す。視線の先にいる

人物は凛とした表情で、先ほどの八幡と同様窓の外を見つめていた。東京エリアの君主、聖天子その人である。

弱冠十六歳にして国家元首として東京エリアに君臨し、まだ目立つた実績がないにも関わらず国民から圧倒的な支持を得ているこの少女は、なるほどその支持率に納得出来るほどの容姿と人徳、器量を兼ね備えていた。

色白の端正な美人——否、美人というのも烏滸がましいと言えるほど、人間離れた容姿と神々しさを持つ人物。大きく、それでいて切れ長な瞳や、すつと通った鼻梁は異性だけに留まらず同性をして感嘆の溜め息を禁じ得ないほど整っており、銀を溶かしたかのような銀髪は遠目から見ても柔らかさが伺えて神々しさに拍車を掛けている。

白く精緻な刺繍をあしらった瀟洒な礼装はいつもより若干露出が多く、後ろから覗けばうなじや肩など聖天子の白い陶器のような肌が窺えるだろう。

八幡はそこまで考えてから、思考に邪なものよこしまが混じる前に視線を外そうとする。が、それよりも一瞬早くこちらを向いた聖天子と目が合った。バツの悪い顔をして顔を背けようとする八幡だったが、聖天子の顔が強張っているのを見咎める。

「……………」

何か声を掛けるべきかと口を開けるが、結局良い言葉も見つからずに再び口を閉じる。

ボディガードと言うのは依頼主のメンタルケアも仕事の内に入っているのだろうか
と疑問に思うが、八幡の観点からすれば仕事は依頼主の身の安全を護る護衛だけで、精
神面の管理などその手の仕事は専門家に任せるべきだろうと結論が出る。結局要らぬ
世話だったのだろうが、自然に気遣おうとしてしまふあたりは相手である聖天子の人徳
か、はたまた彼女の立場ゆえか。どちらにせよ八幡にその答えなど出るはずもなく、そ
んな己に若干の不甲斐なさを感じながらも視線を伏せた。

これが雪ノ下雪乃の姉たる陽乃ならば、こういうときの淑女に対する気遣い方などま
るで説法をするかのように説いたのかもしれないが、八幡にそんな気遣いなど求めるべ
くもない。もとより聖天子ほどの立場の人間を完璧にエスコート出来るほどに経験が
豊富ならば、八幡はとつくの昔に執事にでも転職していただろう。

特に気まずい訳でもない、妙な空気に終わりが訪れたのは、非公式会談の目的地たる
超高層ビルに到着したことを告げるリムジンのドライバーによってだった。

車内に揺れらしい揺れをほとんど感じさせず滑らかに停車したリムジンから一足早
く出た八幡は、久方ぶりながらも一切の無駄のない洗練された動きでリムジンの反対側
まで移動し、ドアを開け放つ。

このような動きをしたのはもう何ヶ月も前なのにも関わらず、存外に衰えていない事に内心驚きつつも黒い手袋を外し聖天子に手を差し出した。

教科書通りというべきか、こういつた当然の事を当然のようにこなす事なら出来るのだが、とポーカーフェイスの裏で思う。

差し出された手を少し驚いた顔で見つめる聖天子を目にしたとき、八幡は己のミスを痛感した。彼が本当に執事だったならばこの行動は正しかったのだろうが、要人警護で——それも、聖天子のような身分、地位の人間に対してはむしろ失礼にあたるのではないか、という考えに至ったのだ。

自らのミスに若干の羞恥を覚え、渋い顔をしながら戻そうとした八幡の手に、白くたおやかな指先が重ねられる。

まさか予想だになかった細く柔らかな感触に、八幡は思わず瞠目する。そんな八幡の心情とは裏腹に、八幡の腕は半ば反射的に聖天子を引き上げていた。実のところは聖天子も、ところどころ硬さが有りながらも何処か繊細さの窺える八幡の手に驚きを抱いていたが。

「……失礼」

「いいえ」

礼を失したことによる八幡からの謝罪を、聖天子は小さく微笑んで応えた。

できた人だ、と八幡は思う。

なるほどこれほどの人格者ならば、人に好かれ、民に慕われるのも道理だと。

理想を掲げ、理想を体現し、人の上に立つ者として能力と人徳を兼ね備えた人物。

清廉にして潔白。だがそれゆえに野心を持った他者からすれば、疎ましく受け入れがたい。

彼女の掲げる理想。それは未だ迫害の続けられている『呪われた子供たち』の人権を保証すること。

ガストレアの因子を持っているならば、我が子ですら躊躇わず捨てる世の中では、実現がたい理想とも言えるだろう。

しかし、その理想は八幡にとつては歓迎すべきものである。

八幡がガストレアを屠る理由が、彼が救えなかつたイニシエーターに対する贖罪と復讐であるならば、似た目的を持つ聖天子に八幡が協力することに何の不満があるうか。

姿勢を正して歩み始める聖天子を傍らに、八幡もまた歩を進めた。

超高層ビル——というよりは超高層ホテルと言った方がより正確だろうか。

八幡自身このような建物自体利用する機会など無いに等しいため、どう言ったら良いものかわかりかねる部分もあるが。どちらかと言えば八幡は、素性を隠す場合などに適当なビジネスホテルを利用することが多い。最も利用客の客層が広いからだ。

今回来たホテルの様に無駄に高級感の漂う調度品やソファなど、八幡の趣味にはとてもでは無いが合わない。

聖天子の来訪に慌てて出てきた、引き攣った笑顔の支配人に取り次ぎ、エレベーターに乗り込む。会談の場所は超高層ホテルの最上階。普通の客であれば本来利用出来ないどころか、支配人を含めた一部の人間しか立ち入りの出来ない場所である。

「聖天子様」

上昇するエレベーターの微かな倦怠感を覚えながらも、八幡が口を開く。この場には聖天子と八幡の二人しかない。よって多少の言動を咎める人間もいない。もつとも、八幡自身粗相を働くつもりは毛頭無いが。

「なんででしょう？ 比企谷さん」

問いを受けた聖天子が澄んだソプラノの声で応える。

「何故今回の護衛役に私が選ばれたのでしょうか。里見、藍原ペアのように他にも民警はいたと思いますか」

疑問はそこなのだ。戦力という面に於いては単独で依頼を遂行する八幡よりは、ペアで行動する蓮太郎達の方が高いのだ。無論、八幡とて戦闘能力で蓮太郎達に劣るつもりは無いのだが。やはり一人よりは二人の方が良い筈だろう。

「里見さん達は……その、品位、というべきか。……齊武大統領に粗相を働いてしまう可能性があるので」

それを聞いて八幡は納得した。というよりは納得せざるを得なかった。

蓮太郎は東京エリアの国家元首にして最大権力者である聖天子に対し、一切の躊躇いなくタメ口で接するのだ。大阪エリア国家元首の齊武大統領にも同様の態度をとったとしても何ら違和感がない。それどころか、蓮太郎は多くの政治家を輩出している天童家の元養子である。下手に交流などもっていたとすれば、タメ口どころか挑発すらしかねない。

「腕の立つ者、という事ならば他にも適任は居たでしょう。例えば……式典のとき会場に居た者とか」

それを口にした瞬間、聖天子の眉がぴくりと動いた。その反応に八幡は僅かに目を細める。

八幡が気になっっている存在はそれなのだ。式典会場で、蓮太郎が聖天子に掴みかかろうとしたときに感じた圧倒的なまでの殺意の奔流。気を抜けば瞬時に命を刈り取られ

ていただろう実力差。実際に戦ったところで八幡では数分と持つまい。

「……さて、何のことだか私にはわかりかねます」

予想通りの反応だった。

世界で七十万ペア存在する民警のトップランカーは、単独でエリア間の軍事バランスをも左右する。聖居で感じたあの存在は、民警のIP序列で鑑みれば優に百番台は超えてくるだろう。それだけの実力者ならば、政府がその存在を隠蔽するのも領ける。

エレベーターの階数をふと見てみれば、まだ半分に到達した頃だった。エリア内有数の超高層ホテルならば、地上数百メートルに達するまで相応の時間がかかるというものだろうか。

「聖天子様。今回何故齊武大統領は会談の場を設けたのですか？」

会話が途切れたのを察した八幡が、ふと疑問に思った事を口に出す。

「……わからないのです」

聖天子は、やや困惑したような声音で答えた。

「私は、今まで齊武大統領と一度も会った事がありません。過去二代の聖天子は何度かこういった会談などで面識があるのででしょうか」

なるほど、と八幡は納得する。

聖天子の母君にあたる二代目は、一代目が崩御してからたった一年弱で病没している

のだ。聖天子は現在十六歳。即位してから一年未満で、未だ政治家としては未成熟なのだ。

(だからあんなに緊張していたのか)

八幡は車内での聖天子の表情を思い出す。普段の凜とした印象からは想像出来ない、強張って緊張した表情。

「里見さんが言っていました。齊武大統領はアドルフ・ヒトラーのような人物だと。ガストリア大戦後の荒廃期よりたった一代でエリアを立て直した猛者とも」

アドルフ・ヒトラー。

確かに言い得て妙だと八幡は思った。上手い例えだ。

齊武大統領や日本の他のエリアの国家元首達が一代でそれぞれのエリアを立て直したように、ヒトラーもまた第一次世界大戦で荒廃したドイツを、たった数年足らずで再び世界を相手に戦争を仕掛けられるほどにまで立て直した人物である。

ヒトラーは戦争さえ起こさなければドイツの歴史上最も偉大な人物として後世に語られただろうと言われているが、齊武もまた好戦的な性格さえ無ければ同様の評価が得られたのだろうか。

聖天子の顔を見ると、先ほどまでは強張っていた面持ちが、今では眉根を寄せて随分と不安げな表情をしていた。

八幡は内心であのバカ、と蓮太郎を罵る。会談の前で余計なプレッシャーを与えてどうするのだ。

聖天子は不安がありありと見てとれる表情で八幡を見上げた。

「……比企谷さん、私の傍そば、離れないでくださいね」

こちらの眼を覗き込むような濡れた瞳に息が詰まる。八幡は一瞬だけ瞑目すると、口を開いた。

「……は、お側に」

聖天子はそれを聞き、ほんの少しだけ安心したように表情を和らげると、小さな声で礼を述べた。

頼られているとするならば男冥利に尽きる。

八幡はらしくもなく思考を意識的にポジティブな方向に切り替えると、ごくり、と唾液を嚥下した。

ごく普通の——例えば、安価なビジネスホテルでのエレベーターとは比べ物にならないほどの装飾華美な重々しい扉がゆっくりと開く。

そして、扉が開ききったあとに見えた景色を目の当たりにし、八幡は目を見開いた。階層のほぼ全方位がガラス張りの部屋は、開放感に溢れており、地上二百メートル越えの高さからは東京エリアの景色が一望できる。確かに各エリア首脳の非公式会談に利用されるだけはある、と八幡は感嘆の溜め息を飲み込みながら思った。

気配のする方向にちらり、と視線を向けると、背の高い八幡に比べてもなお高く感じられる逞しい身体付きの、おそらく斉武の護衛官と思われる男が一礼した。その相手は当然の如く聖天子だろう。

聖天子は目礼だけすると、会談の為に設けられたのだろう豪華なしつらえのソファに向かつてしずしずと歩を進める。

ある程度の距離まで近づくと、先に着席していた白髪の男がソファから腰を上げこちらへ振り向いた。

「はじめまして、聖天子様」

このがつしりとした体躯の高身長な男こそが、大阪エリア国家元首の斉武宗玄大統領だ。既に還暦を過ぎて数年と経っているものにも関わらず、歳を全く感じさせない立ち居振る舞い。顎髭や口髭が不敵な印象を持たせる、傲岸不遜な態度が様になる男である。

「隣に居るのは……ほう、貴様か」

齊武の視線がこちらに向いたのを感じ取り、八幡は何を発するでもなく恭しく頭こうべを垂れた。

「久しいな、比企谷」

「……………」

いやらしい笑みを浮かべる齊武に対し、黙したまま応える八幡。こちらからは何も語ることはない、という意思表示。

「つれないな、比企谷。久々の邂逅よ、何か言ったらどうだ？」

「……お久しぶりうございませう齊武閣下。ご壮健なようですねにより」

「他人行儀な奴だな。俺とお前の仲だろうか？ 全く可愛げのない」

齊武の言葉に早々に唾を吐き捨てたい気分になる八幡だったが、不快感を一切顔に出さずにポーカーフェイスを貫く。すると、何が気に入らなかつたのかつまらなそうに齊武は鼻を鳴らした。

八幡にとつてはあまり良い思い出では無いのだが、実は八幡と齊武は面識がある。とはいっても、プライベートな関係というものではないのだが。そんなものは八幡自体お断りである。単純に依頼する側とされる側だった、というだけだ。

八幡はかつて要人警護から暗殺まで様々な依頼を請け負ってきたが、その中でも相当

数の暗殺の依頼を八幡に課したのは斉武である。

彼は純粋な政治的手腕も去る事ながら、ライバルを蹴落とすだけでなく闇に葬る事も躊躇なくやってきたのだ。八幡としては思い出したくもないが、過去二回ほど、見せしめの為に公衆の面前で狙撃をさせたり原型を留めぬような惨殺をさせた事もある。最も狙撃に關しては逃走経路など様々なバックアップがあつたが。

それ以来対抗馬となる存在が随分減つたらしい。

嫌な思ひ出に顔を顰めそうになるのを堪える。その様子を斉武が察したのかはわからないが、先ほどと変わらぬいやらしい笑みから鑑みるに察したわけではないようだ。

斉武が聖天子に席を勧め、聖天子が頷いて応える。両エリアの首脳は、ほとんど同じタイミングで向かいのソファにおさまつた。

八幡も斉武の護衛に倣い聖天子から数歩ほど離れた場所に立つが、聖天子の継るような視線を受けて、エレベーター内で聖天子に言われた言葉を思ひ出す。

『私の傍、離れないでくださいね——』

聖天子の斜め後方に位置していた八幡は、その位置から数歩ほど移動し、聖天子のすぐ後ろ——手を伸ばせば彼女の肩に触れられるほどの位置に立つ。

先ほどのやり取りは斉武には気付かれていないようだが、やはり弱味はなるべく悟られない方がよい。後で彼女には言い含めておく必要があるかもしれない。

聖天子は政治的手腕も人徳もあるが、まだ十六歳という事もあつて精神的な脆弱性が窺える。それは政治家として老練した斉武を相手にするには致命的だ。

「……比企谷。蓮太郎もそうだが、貴様、ステージⅤのガストレアを倒す際、レールガンモジュールを使つて修復不能な状態にまで破壊したそうだな。随分な事をやつてくれたものだ」

これから権謀術数を巡らした政治的な交渉が展開されるのだと思つていたばかりに、八幡は再三に渡る斉武からの問いかけに胡乱な表情を隠しきれなかった。

レールガンモジュールについては八幡が直接関与したわけではない為弁明など幾らでも出来るが、蓮太郎とは既知の仲だ。それに、斉武には幾ら言い繕ったところで無駄なのは知れている。聖天子も、こう何度も無視されては眈を釣り上げて何かしら言つてもいいだろうに、未だ緊張が緩んでいないのか。だが、少なくとも良い気分をしているわけでは無いだろうが。

「その件についてはこちらの配慮が足りなかったこと、大変申し訳なく思っております。なにぶん東京エリアの危機でしたもので」

話を振られたからには返さなければならぬ。この返しは及第点といったところだろうか。とはいつても、これ以上の返しを八幡自身思い付かないが。

「全く、余計な事をしてくれたものよ。いいか、比企谷八幡。戦争とはな、常に敵の上を

とつた者が勝つと古来より決まっておるのだ。丘の上より矢を射掛けた軍が勝ち、爆撃機で制空権を奪つた軍が勝ち、衛星で敵の行動を予測した軍が勝つ。では次はなんだ？

次は——」

「……月面、ですか」

齊武の演説にかぶせるように放たれた八幡の言葉に、齊武が眉根を寄せる。

「ほう……？ 貴様、それを何処で知つた？」

八幡は黙して答えない。

過去に齊武より依頼を受けていたときなら聞く機会など幾らでもあつたのだ。それをわかつているのか齊武は、にやり、と口元を歪ませる。

「そうとも。あのレールガンモジュールは本来月面に移設し、月面より地表を狙撃する算段だったのだ。全く、それを貴様らは……」

「そこまでです齊武閣下。それ以上は比企谷さんに対する侮辱と受け取ります」

顎髭をさすりながら忌々しげに八幡を睨め付ける齊武を、凜とした声で聖天子が制する。

月面にレールガンモジュールを移設し、地表を狙撃するとは言つたが、ガストレアのみを狙うなどと八幡は毛ほども思つていない。おそらく齊武はガストレア戦争終結後の事まで見据えているのだ。ガストレアを根絶出来る事が前提となつている辺り相

当な樂觀的主義者のように感じるが、あの齊武の事だ。大真面目に言っているに違いない。

「あれは次代の抑止力としても機能する筈だった。月面よりのレールガンは今までの大陸間弾道ミサイルとは異なり地表の何処でも狙い撃てる。月面よりの高威力高速度にして、迎撃不可能な兵器よ。これほどの兵器を保有しておれば、ガストレア戦争終結後に日本を世界の超大国に押し上げる事も不可能ではあるまいて」

「貴方は……貴方は武力で他国を脅そうというのですか……!?!」

聖天子が口を挟むが、齊武は全く動揺した素振りもみせず、さも当然の如く言い放った。

「聖天子様、貴女にはビジョンがない！ 我々は全てのガストレアを駆逐した後の世界のことまで見据えねばならないのだよ。ガストレアを駆逐したのちに、どの国よりもいち早く国家を回復させた国こそが次代の世界を導き統べる者としての権利を得られるのです。日本は、世界の超大国として君臨すべきなのだ」

聖天子の理想論は八幡にとつても結構なものだが、それは齊武を超えてなお、ある意味樂觀的すぎる。そんな綺麗事が世の中まかり通るならば世界はもつと平和だったろうし、何より十年前のガストレア大戦時に人類は滅亡していただろう。

ガストレアを根絶し世界の覇者になるという世迷言を大真面目にのたまう齊武も齊

武だが。

八幡はそんな齊武を見て、人間とは随分醜いものだと思つていた。ガストレアを駆逐するなど理論上ほぼ不可能だと世界中の科学者が声を大にして言つていふと言うのに、この後に及んで人間間の戦争をしようというのだ。各エリアの首脳が如何にして他エリアより有利に立とうと権謀術数を巡らせているというのに、この男はよりにもよつて、日本を世界のリーダーに押し上げるなどと豪語している。

「比企谷八幡。俺もまた、将たる器の一人よ。貴様に贖罪の機会をやらんでもない……」再び話し掛けられた八幡が怪訝そうに目を細める。今度はどんな世迷言を吐くのか。

「貴様はIP序列元百三十四位のペアを単独で下したらしいな。比企谷よ、東京エリアなどという脆弱なエリアはいずれ滅ぶ。他のエリアもまた然りよ。悪いことは言わん俺の下へ来い。我ら二人で国取りをしようではないか。二人で盃片手に見渡す創世の風景、さぞや見物となろうぞ」

顎髭をさすりながら破顔する齊武に聖天子が激昂しかけるが、八幡は立ち上がりかける聖天子を押しとどめ、淡々と告げた。

「——お断りします」

そこには何事にも揺るがない断固とした意思があつた。

「……蓮太郎。あやつもそれなりの実力者よ。あやつも誘いをかけるつもりだが？」

「俺は現在には既に東京エリアの民であり、今の俺の主は聖天子様です。貴方に与する事はありません」

いつになく強い口調になってしまったが、これで良い。相手は齊武なのだ。曖昧な態度だと押し切られる可能性がある。

聖天子が驚いたように目を見開いてこちらを見上げるが、八幡はそれに気付かずその目は齊武を見据えていた。

齊武は豪華なソファに尊大な態度で寄りかかると、口角を釣り上げて笑う。

「俺の権力ならば貴様の望むものなど容易く揃えられるぞ？ 貴様の大好きなあの赤イニシエーターもそうだが——」

齊武はそこで一旦口を噤むと、ちら、と意味ありげに聖天子に目をやってから下卑た笑みを浮かべた。

「それとも……貴様は清纯そうな女が好みか？」

瞬間、部屋の中の空気が変わった。

八幡から表情の一切が消え失せ、総身を支配する激情をすんでのところで抑え込む。

いつもと変わらぬ彫像のような無表情に見える八幡の表情も、その憤怒に煮え滾る眼を直視すれば誰もが異常を悟るだろう。否、眼だけではない。八幡が押しとどめている殺意が、それでも尚抑えきれずに全身から垂れ流される。

その中で身構えたのは齊武の護衛ただ一人のみだった。

八幡の全身から垂れ流される濃密な殺気は、その男からするとまるで大瀑布の水圧と見紛うほどのものであつただろう。

全身に冷や汗をかきながら、せめて齊武の盾になるべきと一步前に進み出ようとするも、自らの足はまるで石になつたかのようにぴくりとも動かなかつた。

「……殺気が漏れているぞ？ 比企谷八幡」

対しソファに身を預ける齊武は、押し殺しきれなかつた八幡の怒気を全身に浴びているにも関わらず、悠然と座して構えていた。

この男とはどうあつても相容れない。その頸椎を手ずからへし折つてやりたい衝動を堪えつつ、八幡はそれを理解した。

「齊武閣下。そろそろ本題の方に入つても？」

緊迫した空気の中、居住まいを正した聖天子の声が響いた。

突如響き渡つた澄んだ声に八幡が振り向く。すると、こちらを諭すような視線の聖天子と目が合った。

総身を支配していた怒気がすつと収まっていく。

「……ああ。わかつた」

途中で遮られ無然とした表情をかくそうともしない齊武は、忌々しそうに眼を細める

と適当な相槌を打った。

そして数時間ののち、第一回非公式会談が終了した。

八幡は最後まで、齊武の聖天子を見る目が剣呑な光を帯びていたことに気付かなかつた。

夜闇に紛るる猛禽

東京、大阪両エリア首脳による非公式会談の終了後、八幡は聖天子を伴って高層ホテルのフロントからリムジンまで向かおうとしていた。

既に時刻は夜の帳も下りる頃合い。案の定ホテルの外は十数メートルも見渡せないような濃い闇に覆われている。

ホテルの外に出た八幡は、夜間にも関わらず頬を撫ぜた生暖かい風に不快感を隠そうともせず顔をしかめた。

迎えのリムジンに乗り込んだ八幡と聖天子は、互いに言葉を発する事なく沈黙を貫いていた。

リムジンが滑らかに発車し、僅かな振動が車内の二人を揺らす。車の質もドライバーの腕も標準以上、文句のつけようも無いのだろうが、数時間前の八幡の内心の荒れようからは僅かな揺れすらも気に障った。

向かう先は聖居だ。本日の依頼は彼女を聖居まで送り届けることによって完遂する。願わくばこのまま何も起こらずに、無事到着してくれと切に願う。会談の相手が悪名高い斉武からすると、移動中すらも油断出来なかつた。

濃い闇が支配する夜の中では、都会の光が目眩しい。街灯が暗い車内を照らす中、八幡は窓の外から視線を戻した。

膝の上で手を重ねたまま窓の外を眺める聖天子は沈鬱な表情を浮かべていた。

それもそうかもしれない。

純粹に自らを侮辱され、愚弄されるだけに留まった八幡からすれば、聖天子は自らが正しいと疑わなかった信条を真つ向から否定されたに等しいのだ。

潇洒な礼装の裾を握りしめたまま溜め息をつく聖天子に、何かしら声をかけようとして——かける言葉も見つからず、八幡は口を閉じた。

「私は……」

車内の静寂を破るように、聖天子が重い声で呟いた。

「私は、今まで……どんな相手でも、こちらが誠意を持つて真摯に話し合えばわかってくれるものとはばかり思っていました」

まるで独白するかのように内心を吐露する聖天子の姿には、何処か哀愁が漂っていた。

街灯に照らされるその横顔には、色濃く疲労が滲んでいる。

一昨年、彼女の母である先代の聖天子が病没してから齡十六歳である彼女が三代目聖天子として即位し、一政治家として活動を始めてから約一年半。一般家庭の少女ならた

だの女子高校生として学校生活を送っていてもおかしくない年齢である。その神がかつたカリスマと美貌、手腕によって東京エリア市民からは熱狂的な支持を受けているものの、その内面はただの十六歳の少女なのだ。

「……貴女に非がある訳ではありません。齊武大統領が一筋縄ではいかない人物であるのはわかりきっていたことです。どうか、お気になさらぬよう」

相手はあの齊武大統領だ。数あるエリアの元首の中でも抜きん出て異常な人物といえ、彼の名が真つ先にあがる。聖天子とは思想が百八十度違うと言っても過言ではない。そんな人物と対話を求めようとする考え自体が間違っていると云わざるを得ないが、八幡は口には出さなかった。

人の善性を信じられるというのは聖天子の美德ではあるが、そのような考え方は八幡から言わせてみれば「甘い」としか言いようがない。そう思いつつ八幡自身その考えを嫌いにはなれないが。そこは彼女の補佐である菊之丞や側近達が上手くフォローしているのだろう。

「……お氣遣い、ありがとうございます。存外に優しいんですね」

聖天子は驚いたように目を瞬かせると、八幡の不器用な氣遣いにはにかんだ。

彼女にとって自分ほどのように映っているのだろうか。今まで接点がそれほど多い訳では無かったが、まさか冷血動物のような人物像を持たれているのだとしたら八幡が

らすれば心外である。無論、表情に出すようなことはしないが。

「それと、意外と感情は豊かなようです」

「……お戯れを」

隠し通せたとは思ったが、聖天子は八幡の懽然とした雰囲気を観察したようだった。経験が薄いとはいえ腐つても政治家である。人の感情の機微を観察するだけの能力は備えているようだった。

くすくすと笑う聖天子に更に八幡は仏頂面になっていくだけだったが、蓮太郎に影響されたのだろうか。以前は一切の表情を出さずポーカーフェイスを貫けたというのに。

「今日は驚かされました。比企谷さんは斉武大統領と面識があつたのですか？」

「それは……以前、民警の依頼の関係で」

八幡が僅かに口ごもる。しかし、聡い彼女はそれだけで過去のことをある程度察したようだった。

「すみません。差し出がましい真似を」

「構いません」

いずれこのことは話してくれると嬉しい、と思いつながら聖天子は話を切る。目の前の人物について分かっていることは、有能な民警であり、自分と同年代であることくらいしか無いのだ。

八幡自体は全く予想していないが、聖天子はいずれ子飼いの民警を持つことを視野に入れている。里見蓮太郎、藍原延珠ペアに続き、八幡もその中の有力候補の一人ではあった。傘下に入れれば、優秀な駒となつてくれる事だろう。

「比企谷さん。齊武大統領は外国との関係が噂されています」

一度会話が途切れたことで、聖天子は本題を切り出した。

重要な響きを帯びたその話題に八幡も顔を上げる。

「……続けてください」

「アメリカ、ロシアなどの二大国を始めとした諸外国が秘密裏に齊武大統領と接触し、資金、武器等の給与を行っている疑いがあるのです」

八幡は眉をひそめた。

「……外国側のメリットは？」

「比企谷さん、貴方も予想は出来るでしょう。人類がガストレアに対抗する為に必要不可欠で、同時に政治的影響力も大きい——」

「——バラニウム」

「その通りです」

バラニウムは、各国軍隊や八幡のような民警が使用する武装に使われている、鉄鉱に代わる地下資源だ。

十年前の時点では確な対抗策も得られなかったガストレアに対し、現状唯一と言って良い対抗可能な可能性を秘めた鉱石。

およそ弱点が存在しないガストレアでさえ、バラニウムに対しては著しい忌避性を示す。ダメージを与えることは出来ても再生し、殺し尽くすことは至難だった通常兵器でも、バラニウムを混合した兵器ならばその再生能力を阻害することが出来る。

そのバラニウムは火山列島、わけても日本列島に偏って偏在している。その埋蔵量は他を圧倒するほどであり、ガストレア戦争後日本の経済的優位を保っているのもバラニウムの恩恵である。

「バラニウムを得た後も、人類にとってガストレアは依然として脅威です。世界に偏在するバラニウム……そのすべてを掻き集めても、ガストレアを殺し尽くすことは不可能。そして、ステージV——ゾディアックガストレアはバラニウムを以ってしても撃滅は困難です。比企谷さん。これがどういう事なのか、貴方なら想像できないことは無いでしょう」

バラニウムという資源を巡った政治的な争いが、世界中で起こっている——
それほどの価値を持つバラニウムが、政治的にどんな意味を持つか。

「では、齊武大統領が外国の援助を得てまでしたいことと言うのは……」

「おそらく、大阪エリアを中心とした、東京、札幌、仙台、博多エリアの武力統一。外国

に対する見返りは、バラニウムの安定供与としか考えられません」
「……………。……齊武大統領のバックに外国が……」

八幡は自分で反駁しながらもその内容の違和感を感じていた。

あの齊武大統領が、ただ諸外国に操られることを良しとするのか。

短い間とはいえ、八幡は齊武からの依頼を請け負っていた時期がある。その人間性の強烈さは記憶に新しい。

「外国は齊武大統領を上手く飼い慣らすつもりでしょうし、齊武大統領は外国を上手く出し抜くつもりでしょう。彼がただ外国に操られるような人物とは思えません」

八幡は聖天子の言葉に頷いた。

聖天子が居住まいを正す。

「戦後より今に至るまでの十年間、各国は国力を回復するためだけにエリア周辺にモリスを建設し、その中に閉じ籠って来ました。これより先は、内にはなく、外へ向かう領土奪還の時代となります。そしていち早く国力を回復した国が、次世代を導く存在たり得るといふ齊武大統領の思想に間違いはありません。その為に必要なのはバラニウム。つまりバラニウムを制した国こそが世界を制するのです。」

比企谷さん、これからは世界中の国がバラニウムを求めて、協力的、非協力的問わず日本へ接触してくるでしょう。次世代の戦争とは、弾道ミサイルや爆撃機を用いた直接

的なものではなく、世界の軍事バランスを単独で左右するような民警の高位序列者ペアによる暗殺や破壊工作が中心となります。

……里見さんはゾディアック・スコープピオンを撃滅し、貴方は蛭子影胤ペアを撃退してしまつた。今の東京エリアに有能な民警を遊ばせておく余裕はありません。貴方達にはこれからも働いてもらう必要があります」

勝手な話だ。

自分の為に、東京エリアの為に、彼に戦えと言うのか。それがどんな意味を持つのか分かつていながら。

「……勝手は承知しています」

八幡の視線を受け止めた聖天子は、沈鬱な表情を浮かべて俯いた。その両手は、下腹部へと当てられている。

「……私も、いつ騒動の渦中で斃れるかわかりません。先代のように病に斃れるかもしれませんし、私を狙つた民警に暗殺されるかもしれません。」

私はもう子供を産める体なので、世継ぎを残すよう聖室の側近から散々言い含められています。傲慢かもしれませんが、私は有能な遺伝子を残すため機械的に産んだ子供より、愛によつて産まれた子供が欲しいのです」

「……」

それは、確かに傲慢だ。

聖天子は仮にも国家元首。権謀術数乱れる今の世の中で愛で産まれた子が欲しいなどと、他の政治家にとっては失笑ものだろう。

しかし、八幡はなにも言わなかった。彼に政治は理解出来ようと政治家ではないし、精々が利用される程度のものだ。

だが、聖天子の気持ちは理解出来ない訳ではなかった。彼女は政治家としてではなく、人として子を産みたいのだ。

「……何も、仰らないのですか？」

聖天子が、おそろおそろと言った風体で顔を上げた。八幡はその言葉の意図がわからず首を傾げる。

「何、とは？」

「菊之丞さんは、私に戦えと仰りました。死ぬことを考えるなど、外国に屈するなど。私はそのうは思いません」

聖天子は一度言葉を切った。

「私はこれから東京エリアの領土をガストレアから取り戻して行き、やがては仙台エリアや大阪エリアと土地を直結させるつもりです。いつの日か、すべてのエリアが繋がったとき、国民は思い出すでしょう。十年前、日本は一つの国であり、同じ空を見上げて

いた同胞であったことを。

私は侵略行為は行いません。暗殺にも謀殺にも、政治的圧力にも決して膝を屈しません。復讐など以ての外です。

比企谷さん、貴方は戦争で最初に犠牲になるのが誰だかご存知ですか？ それは目も開かない子供や老人です。私は戦後の混乱期、荒廃した東京エリアの各地を先代の聖天子と視察に回りました。そこにあったのは何だと思えますか？」

聖天子の声音に悲嘆の色が入り混じる。両手を胸の前で握り締める姿は、まるで恐怖に怯える少女のようだ。

「劣悪な衛生環境の中、病気になり身動きのとれない子供や老人達が、けれど私が微笑みかけると懸命に微笑み返してくれる。私は次代の聖天子という自覚がありました。病に斃れる人々に駆け寄り手を取ることも、悲哀に顔を歪ませることも許されず、ただ笑顔を向けることしか出来ませんでした。そして私に微笑み返してくれたその笑顔は、次の日には冷たい骸となって蠅がたかっている……！」

聖天子は強く首を振った。それが彼女の原風景だ。それが彼女を急き立てる過去の罪科だ。

彼女は飢え渴き、病に悶え死んでいく国民の姿に、他でもない彼女自身が彼女を罰している。

「……あんな恐ろしい事はもう二度とあつてはなりません。私は平和を体現しなければなりません。言葉ではなく行動によつて」

聖天子はその手で自分の体を抱き締めた。その肩は小さく震えている。

「私はこれ以上この世界に悲しみの種が撒かれることに耐えられない……ッ」

衝撃が八幡の総身を震わせた。

聖天子は、十代の少女に科せられるには重すぎる責務に震えているのではない。苦しむ国民に何もしてやれなかった己の無力を罰しているのだ。

八幡は何も言えなかった。かける言葉も見つからなかった。慰めの言葉ですら。もとより彼女は慰めの言葉など求めていなかった。

彼女はどうしようもないほどの夢想家であり……どうしようもないほどに愚かだった。だが、八幡はその愚かさが嫌いではなかった。

「……俺は別段、貴女の考えに思うところはありません」

微かに驚いたように顔を上げた聖天子の表情には、縋るようなものが混じっていた。「貴女の好きにすればいい。俺はそれに従います。俺はそれが間違つてとは思わない」

八幡のその台詞に、聖天子は顔を綻ばせた。胸に手をあてて安堵の溜め息をつく。

「……ありがとう。少し楽になりました」

聖天子は張り詰めていた緊張をほぐすように、今まで伸ばしていた背をリムジンの背もたれに預ける。安堵の表情を浮かべる彼女は、年相応の少女のようだ。

「比企谷さん、貴方に一つお願いがあるのですが……」

こちらの顔を伺うように控えめに声をかけてくる聖天子に、八幡は反射的に身構える。

「……なんででしょうか」

「私に対してそんな改まった態度ではなく、もっと気安く接して欲しいのです」

「……はっ？」

まさか予想だにしなかった聖天子の『お願い』に、八幡は素つ頓狂な声を上げた。

何故？ 意味がわからない。そして何故自分に？

「……駄目でしょうか？」

「ええと……理由を聞かせて貰っても？」

「私には同年代の友人がほとんど居なくて……里見さんのように私にもはつきりと物言う人が新鮮で」

「……だから、俺にもと？」

「はい」

まさかの展開に、八幡といえども脳がついていけない。混乱する八幡は、頭痛を抑え

るかのように頭を抱える。

一方の聖天子はまるで子供が大人の機嫌を伺うかのように八幡の顔を覗き込んでおり、普段とのギャップに八幡は再び思考を乱される。

葛藤の末、ようやく八幡は声を絞り出した。

「……お戯れを。俺と貴女はあくまでも一市民と国家元首の関係です。周囲の誤解を招くような事はどうかお控えください」

「そんな事は些末な事です。それに比企谷さん。私は、貴方の主なんでしょう?」

……なんだって?

「……俺が、そんな事を?」

「ええ。齊武大統領との会談中に」

聖天子の言葉に、八幡の脳裏で齊武との会談中の出来事がフラッシュバックする。

自陣へ八幡を引き込もうとする齊武と、それを毅然とした態度で拒む八幡……。

『——俺は既に東京エリアの民であり、今の俺の主は聖天子様です。貴方に与する事はありません——』

愕然とした表情で顔を上げる八幡に、聖天子は悪戯を成功させた幼子のような表情を浮かべた。

してやられた。

腐つても政治家、人が発した言葉はしつかり覚えていられるらしい。とうとう八幡は項垂れた。

「……せめて、敬語を抜きにするのは二人きりのときだけで」

「はっ」

八幡は聖天子の前だというのに深々と溜め息をついた。

渋い顔で項垂れる八幡を見て、聖天子がくすりと微笑む。唐突に嫌な予感のした八幡は、反射的に聖天子の顔を見つめた。

「それと比企谷さん。貴方が齊武大統領にそう言ってくれたとき、私は結構嬉しかったんですよ?」

笑顔で聖天子が特大の爆弾を投下する。

その言葉に、今度こそ八幡は聖天子から顔を逸らした。

してやられた、という思いよりは最早圧倒的に羞恥の方が勝っていた。

「……勘弁してくれ」

くすくすと笑い声を漏らす聖天子に八幡は小さな声を漏らす。当初車内に満ちていた重い雰囲気は、今はどうに霧散していた。

八幡も聖天子も願っていた。浮かべた笑顔の裏で、どうかこのまま無事にリムジンが聖居に到着する事を。

×

×

×

深夜の街中を走る黒塗りのリムジン——その車内を覗く猛禽の眼があった。

場所はリムジンの走るビル街より南東に約一キロ強。東京エリア南端部と外周区にほど近い人気のなくなつた廃ビル群。その乱立するビル群の中でも一際高いオフィスビルの屋上に、金糸のように繊細な金髪を強風に煽られながら眼下を見下ろす少女の姿があつた。

名を、ティナ・スプラウト。

暗い色を基調としたドレスのような戦闘服に、身の丈ほどもある銃を携えた狙撃手。

高位序列者たるティナは、彼女の主より一つの重大極まる密命を受けていた。

聖天子暗殺指令。

彼女がスコープの先に覗く白き国家元首こそ、今回の暗殺のターゲットである。

「こちらティナ・スプラウト。目標を捕捉。これより任務を開始します」

『了解した。速やかに対象を抹殺せよ』

ティナは口元のインコムへ囁くように告げると、通信機越しに主より指令が下る。

ティナは伏せ撃ちの姿勢で銃を構えたまま深く呼吸を落ち着けた。息を吸って、長く吐く。それだけで、ティナは一人の少女から一個の暗殺機械へと変貌を遂げる。

機械的な思考のままティナは、細い指先で黒塗りの銃身を撫ぜた。

単に狙撃銃と呼ぶには余りにも長大な銃身を持つそれは、俗にアンチマテリアライフルと呼ばれる大口径、高火力を誇る対物狙撃銃である。

バレット・ファイアーームズ社の開発した大型狙撃銃。バレットM82”こそが、この銃の正式名称。

使用される弾丸は、弾道直進率の高い12.7mm弾。風の影響も受けにくく、描く弧の大きさもある弾丸を使用するこの銃ならば、超長距離狙撃においてこれ以上の適任はない。

今こそティナは、スコープ越しに映る聖天子に殺意の視線を送る。常人とは掛け離れた視力を持つティナは、一キロ以上の距離を離れた移動目標すら難なく捉えていた。

天候は雨天、そして横殴りに叩きつける強風。並の狙撃手ならば狙撃を諦めるような条件ですら、ティナにとっては狙撃を取り止める理由足り得ない。何故なら、彼女はその程度では外さない。

信号に足止めされたリムジンが、再びエンジンを吹かせ走行を始める。狙点を左へ、

零^{ゼロ}点補正調整された一キロ点より照準を僅かに上へ……

必殺の確信を得たティナが、ついに極限の集中でもって銃爪を引き絞る。

銃爪と同化した指先が、鋼鉄製の機構を介して12.7mm NATO弾の雷管を叩き、炸薬の轟音を無人の空へと響かせる。

マズルブレーキより噴出した燃焼ガスが廃ビルの屋上に積もった塵を吹き飛ばし、十分な加速を果たした必殺の弾丸が標的を穿たと飛翔する——

×

×

×

信号のLEDライトが赤から青へと変わり、止まっていたリムジンが再び動き出す。車内に重苦しい雰囲気はすでになく、あとは聖天子を聖居へと送り届けるのみとなっていた。

余談ではあるが。比企谷八幡は、民警であると同時に暗殺者である。それゆえに当然狙撃の経験もあったし、その膨大な経験からなる狙撃の際に生じる殺意というものを敏感に感じ取ることが出来た。

ビル街の十字の交差点を過ぎた直後、抑えがたい悪寒が八幡の総身を襲った。

幾度となく戦場を渡り歩いてきた経験が、幾度となく死線を潜り抜けてきた勘が、なによりも雄弁に八幡の本能へと語りかける。

——誰かが、見ている。定められた標的を仕留めんと、車内の二人へ殺意の視線を向けている。

南東——

弾かれたように窓の外へと八幡が顔を向けた。その刹那、視線の先の廃ビル群の中央、一際高いビルの屋上が確かに明滅した。

それが狙撃だと判断するよりも早く、本能と戦闘勘に従った八幡が聖天子に覆い被さるように引き倒す。

その僅かに一瞬後、耳をつんざく轟音と衝撃が二人を襲った。

リムジンの防弾ガラスを容易く粉碎した狙撃弾は反対側の分厚いドアを紙屑同然に穿ち貫通し、金属のひしやげ捻じれ曲がる不快音を響かせる。

唐突に襲い来る厄災にパニック同然に陥ったドライバーがハンドルを切りながら急ブレーキを入れ、リムジンが盛大にタイヤ痕を引きながらスピンする。

怪我をさせまいと聖天子の頭を抱えながら体を丸める八幡は、受ける衝撃を一手に引き受け全身の至るところを車内に打ち付ける。

回転する車体が電柱に激突し、吹き飛ばされるように横転する。激突した衝撃で肺の空気を強制的に全て吐き出された八幡は、咳き込む暇も惜しいとばかりにひしゃげたドアを蹴り破る。

聖天子の手を引きながらなんとか車外へ脱出した八幡が再びビルへと目を向けると、二度目の銃口炎が夜の闇で閃いた。

僅かに一秒後、八幡達が脱出したリムジンのエンジンを狙い過たず撃ち抜き、黒塗りの車体を爆発炎上させる。

吹き付ける熱波と爆発の衝撃波に八幡と聖天子が吹き飛ばされるようにして転倒する。身を起こした八幡は、首を巡らせて数メートル先の聖天子を見咎める。今の衝撃で聖天子との距離が離れてしまったことに愕然とした。

「——聖天子様！」

「ひ、比企谷さん、私、腰が抜けて……」

声をかける八幡に、聖天子が強張った表情で首を振る。駆け寄ろうとしても間に合わない。彼我の距離は数歩の距離だ。たかが数メートル、されど数メートル。駆け寄るときに生じる隙は致命的だ。飛来した弾丸は八幡を貫通し、今度こそ聖天子を撃ち抜くだろう。

ビルの屋上から現在の交差点まで目算で約一キロメートル、弾丸の到達まで約一秒。

使用されている弾丸はおそらく12.7mmの大口径。命中は死を意味する。

そして、三度目の銃マズルフラッシュ口炎が廃ビル群の頂上で明滅する。

寸分の躊躇いもなく、八幡は義足を解放した。

鋭い痛みと共に義足をコーティングしていた人工皮膚がダークスーツを破りながら剥離、ブラッククローム特有の金属光沢を放つ。

弾丸の撃発から到達まで一秒強。脳内で所要時間タイムを慎重に推し量り、脚部に装着されたスラストユニットを解放する。

八幡が庇うように立った背後には、聖天子がぺたんとコンクリートの路上に座り込んでいる。

彼の狙撃手に、その必殺の弾丸が八幡を貫通せしめ聖天子へ命中させ得るだけの技量と自負を持つならば、躊躇うことなく二人を葬らんとするだろう。

「いちかばちか……ッ！」

ビル群の頂上から聖天子までの直線、弾道予測。12.7mm NATO弾を使用するその銃が真に一撃必殺の威力を持つならば、頭部に命中させることにこだわりはすまない。

瞬時に狙撃手の思考を脳内にトレースし、弾道を推し量るとついに八幡は跳躍した。

八幡の瘦身が空中で回転し、義足から発される炎が夜の住宅街に蒼い軌跡を残す。

次の瞬間大気を切り裂いて飛来した弾丸と、超バラニウム合金の義足が空中で衝突した。

掠め過ぎるように大口径の弾丸と衝突した義足は、甲高い金属の擦過音を立てながら遂に12.7mm NATO弾の軌道を逸らす事に成功した。強制的に軌道を逸らされた弾丸は聖天子の直上から背後のコンクリート壁を粉碎し、破片と粉塵を飛び散らせる。

舗装された交差点の道路に靴の後を引きながら着地した八幡は、スラスターユニットによる加速で聖天子を抱き上げ、通りの影へと身を滑り込ませた。

ようやく事態を飲み込んだのか、聖天子付護衛官が浮き足立った様子で聖天子の下へと駆け寄ってきた。

「ひ、比企谷さん……」

彼らの一人に聖天子の矮躯を任せると、聖天子が恐怖に上擦った声音で八幡の名を呼んだ。護衛官達に周囲を固められながら後退していく彼女の顔は、真っ青になって怯えが色濃く浮かんでいた。

彼女に軽く手を上げて応えると、八幡は通りの陰から小型のハンドミラーで廃ビル群の様子を観察する。やがてもう弾丸が襲って来ないことを確認した八幡は、今回の襲撃者が撤退したことを悟った。

それを悟った直後、八幡の耳に虫の羽音のような音が響いた。咄嗟に首を巡らせるが、何も無い。

事態を乗り切ったことでようやく八幡は周囲の様子に気を回すことが出来た。

残骸となったリムジンは炎上し、吹き付ける熱波と市民の狂騒は野次馬を次々と呼び寄せる。雨脚が強くなり、しとしとと八幡の身体を濡らしていた雨は舗装された地面を強く叩いている。

髪が濡れ、つたつた雨が顎から滴り落ちながら、八幡はオフィスビルの陰から廃ビル群の頂上を観察した。

目算にして距離は一キロ強。放たれた狙撃弾は雨天、強風の中移動目標に対し寸分の狂いなく飛来してきた。それよりあとの二発、計三発の弾丸すら、至近弾ではなく全てがそうなるべくあつたかの如き正確さで目標を追い込んできた。

凄まじい技量だ。射撃の名手たる八幡ですらこの芸当は到底不可能だろう。

八幡は雨に濡れることすら厭わずに、廃ビルの頂上を睨み上げる。

雨脚は次第に強くなり、やがて深夜の喧騒すら雨音が覆い隠していった。

×

×

×

ティナ・スプラウトは驚愕に息を飲んでた。

コンデイションは万全だった。他一切に問題はなかったはずだった。だが、彼女が放った計三発の弾丸は全てが回避され、最後の一発に至っては弾丸を弾かれたのだ。

初速二八〇〇フィート、一三〇〇〇フットポンドにも及ぶ運動エネルギーを、イニシエーターですらない一般人の範疇に収まらないプロモーターが防いだのだ。

「……すみませんマスター。任務は失敗です。護衛に手練れの民警がいました」
内心の驚愕を押さええつけるようにティナは努めて冷静にインコムから主へと報告する。

『馬鹿な、民警だと……!?』
情報にないぞ、聖天子の周囲を囲っているのはあの無能な護衛官どもではないのか!？」

ティナの主が無線越しに激昂する。民警というイレギュラーさえなければ、最初の狙撃で目的は達していたはずだったのだ。

ティナはM82アンチマテリアルライフルをカモフラージュ用のバイオリンケースに収納すると、廃ビルの屋上で立ち上がって眼下の闇を見下ろした。

相手は一体何者なのか？ ティナの持つアンチマテリアルライフルは、個人携行火器

の中では最高峰の威力を保有する武装だ。それを弾いたのだ。只者ではないだろう。

バイオリンケースを担いだティナは、一度だけ背後を振り返ると、金髪をたなびかせながら廃ビル群の闇の中に身を翻した。

敵は外側のみならず

カーテンの隙間から射した曙光が、フローリングの上を滑っていく。

築数年の比較的新しいマンションの一室、一人で住むにはやや広々としたそこには、生活感の薄い寒々とした空間が広がっていた。

ダイニングと隣接したリビングには、大型の液晶テレビとカーペット、簡素なテーブルと家具は最低限のものしか置かれていない。色鮮やかというには程遠い、シックでシンプルな色合いはこの家の住人の趣味だろうか。

早朝のやや肌寒い空気がリビングを満たす中、フローリングの上をカリカリと小さな足音を立てて歩く猫が一匹。

見るからにふてぶてしい表情をしたその猫は、簡素ながらも人一人横になれそうなソファの前で立ち止まる。不機嫌そうにふすつと鳴いた猫は、ソファの上で微睡むこの家の主人の上に飛び乗った。

不意に胸のあたりに感じた重量で、比企谷八幡は覚醒した。

重い目蓋をこじ開けるように目を開くと、胸の上で不機嫌そうな表情をした彼の愛猫カマクラがこちらを見つめている。そこでようやく八幡は猫に餌をやり忘れていたこ

とに気付いた。

八幡は寝起きののろのろとした手付きで飼い猫へと手を伸ばす。おい、あまり触るなと抵抗するカマクラを抱き上げると、フローリングの上を下ろす。僅かな頭痛に顔をしかめながら気怠い半身を起こすと、カーテンの隙間から射した朝日にまぶしそうに目を細めた。

軽度の低血圧を患っている彼は朝に弱く、睡眠が足りていないときは意識も朦朧としている。今朝の具合はそれほど悪いというわけではないが、さりとて良好とも言いがたかった。

ベッドではなくソファで眠りこけてしまった代償は大きく、全身のどこどこに筋肉痛を及ぼしている。野営などで立地条件の悪いところで睡眠をとることは慣れっこしているものの、やはり現代を生きる文明人としてはベッドで寝たいのが本音である。気を抜くとすぐにソファで寝てしまう癖は直したほうがいいのかもしれない。

気怠い身体を無理矢理起こし、ベランダと繋がっているサッシのカーテンを開け放つ。

部屋に入ってくる日光が目にも痛い。欠伸を噛み殺しながらダイニングへ向かうと、エサ皿の前でカマクラが丸くなっていた。戸棚からキャットフードの袋を取り出す傍ら、八幡は全く別のことを考えていた。

先日の聖天子の護衛任務より数日が経過していた。

東京エリアに來訪した齊武大統領と非公式の会談——その終了直後、聖天子が聖居への帰りにその暗殺未遂事件は起こった。

無論、護衛にあたっていた民警である八幡も招集され、とりあえず体裁だけを整えたデブリーフィングが開かれた。

聖居内の会議室にて、聖天子付護衛官、聖室の側近、護衛の八幡というメンバーで構成された対策会議。それは八幡が半ば予想していた通り、『如何にして聖天子暗殺を阻止するか』ではなく、『何故狙撃手が護衛ルートに待ち伏せしていたのか』という責任の押し付け合いに瞬く間に転化した。その展開たるや、あまりの想像通りの展開に八幡をして内心失笑を禁じ得ないほどであった。

しかし、予想外の事態が起こったのはその直後だった。

聖天子付き護衛隊長の保脇卓人が、あろうことか全ての罪を八幡になすり付けようとしたのだ。

無論、本来その場で責められるべきは警護計画書を作成した聖天子付護衛官であり、その隊長である保脇が此度の暗殺未遂事件の全責任を負うのが道理というものである。しかし、当の保脇は頑なにそれを認めようとしない。

保脇曰く、『今まで一度として聖天子が暗殺者に狙われることな無かったが、護衛とし

て八幡が雇用された途端聖天子の暗殺未遂が起きています。ゆえに八幡は暗殺者と内通している』というものだった。

当然、罪をなすり付けられかけた八幡としては堪ったものではない。

当然の事実ではあるが、八幡は勿論今回の暗殺未遂の首謀者との繋がりはない。それ以前に、八幡は聖天子の護衛ルート自体を知らされていなかった。

おそらく八幡を心良く思わない保協を始めとした護衛官達が意図的に情報を八幡まで流さなかったのだろう。私的感情からくる完全な嫌がらせ——職務怠慢によって、八幡は情報を得られないまま護衛任務に就かざるを得なくなった。だが、結果としてそれが八幡のアリバイとして成立されている。八幡には最初から流す情報すら得られていなかったのだ。

そう八幡は弁明した。容疑が掛けられても自分は内通などしておらず、そもそも流す情報すら無いと。

当然保協も黙ってはいなかった。八幡に罪を被せない限り納得しないらしい保協は、弁明の最中八幡を幾度となく大声で遮り聖室側近や情報官を丸め込もうとする。三十二歳の若さで聖天子付護衛隊長ともなったからには、それなりに弁の立つ自負があったのだろう。口角泡を飛ばしながら捲し立てる保協には、八幡の口元を引きつらせるほどの妙な迫力があつた。

しかし八幡とて言われたまま引き下がるような人間ではない。このまま罪をなすり付けられて解雇などされれば、八幡の経歴キリヤに傷がつくのだ。そも、弁が立つという点においては八幡もまた同様である。正当性はこちらにあると言わんばかりの保脇に対し、絶妙なタイミングで保脇の弁を遮り矛盾点を淡々と指摘していく様子は更に保脇を逆上させたが、いかんせんそれを押し通すのには無理があり過ぎた。

どう考えても八幡に正当性があるのだが、生憎その場に召集されたうちの半数は八幡を快く思わない連中である。聖室側近や情報官の幾人かは八幡に同情的な視線を向けていたが、保脇を始めとする聖天子付護衛官は場の半数を占めていた。このままではなし崩し的に八幡に責任を押し付けられかねない。正当性こそ八幡にあれど、保脇がその気になれば聖居職員を脅しつけることも辞さないだろう。普段より聖居内での横暴ぶりが目立つ護衛官ならばその程度容易いはずだ。

焦れる思いが八幡の思考を鈍らせる。

膠着の様相を呈し始めた会議を取束させたのは、途中で会議の場に乱入してきた聖天子だった。

厳粛な面持ちで会議の場に乱入をした聖天子は騒然とする職員たちを一瞥すると、やおら声を張り上げ熱弁を振るっていたはずの保脇を一喝した。

『比企谷さんを指名したのは私の意思であります。そしてその比企谷さんを疑うという

ことは、即ち私の判断を疑うということ。なにより保脇さん、東京エリアの救世主を犯人扱いは何事ですか！』

聖天子の叱声を浴びた保脇は表面上は引き下がったが、席に座り込んだあと憤怒の形相で歯を軋らせながら八幡を睨み付けていた。

聖天子が命を狙われたというのに八幡に頑なに罪を押し付けようとする保脇には、ほとほと辟易させられた八幡ではあったが、相手にするだけ無駄だと悟った八幡は無視することを決め込んだ。

聖居内で保脇が、八幡と聖天子の仲がただならぬものであると吹聴していると聞いたときには八幡は呆れを通り越して失笑した。たかが民警と仮にも国家元首に、ただならぬ関係も何もあるまいに。

なによりも現状で憂慮すべきなのは、これからの聖天子の予定、即ち聖天子狙撃事件の原因ともいえる齊武大統領との非公式会談を続行するか否かということである。

齊武大統領との会談はあくまでも非公式であり、会談があったということは勿論齊武が東京エリアまで来訪していることという情報すら、両エリアの上層部しか把握してはいはずである。つまり会談があることを知っているのは東京エリア、大阪エリア首脳のみであり、状況的に言って暗殺を企てる可能性があるのは齊武しかいないのだ。

そう八幡は進言した。八幡は護衛のために雇われただけの存在であり、聖天子の政務

に口出しするのはお門違い——そうわかった上ではあるが、このままでは次回も狙撃されるということは分かりきっていた。

だが、聖天子はそれを——八幡の進言を却下した。

人と人は手を取り合える。今こそ分かたれてはいるものの、いつかエリア間の隔たりなど無くなるものと夢想する彼女からすれば、エリア間を武力統一させようとする斉武との会談が平行線のまま終わることに納得が出来ないらしい。

この頑なさは聖天子の美德であり欠点でもあるが、暗殺を企てているのであろう斉武からすれば僥倖だろう。

何も出来ない歯痒さに八幡は舌打ちしかけるが、ふと目に入ったデジタルの時計を見ると頭かぶりを振った。

考え過ぎるのは自分の悪い癖だ。思考が巡っているうちに時間が過ぎ去っていく。漠然とした焦燥感を胸に、八幡は気怠い身体を持ち上げた。

×

×

×

ティナ・スプラウトにとって、昼下がりの街中の喧騒と、燦々と降り注ぐ日光は煩わしいものでしかなかった。

それには彼女のやや怠惰な気性も原因の内に入ってはいるのだろうが、それ以上に彼女の生来の特徴に依るものが大きかった。

ティナ・スプラウトはインシエーターである。彼女の身体に発現した因子はフクロウ——モデル・オウルである彼女は、モデルとなった動物が夜行性であるある事もあいまって朝や昼に著しく弱い。普段からカフェインの錠剤を摂取することで朝や昼の行動に対応してはいるが、やはり夜と比べると大した動きが出来ないのが常であった。

現在彼女がいる場所は、東京エリア内に存在する数少ない公園——周囲に急ピッチで進められている近代開発の波にぼつんと取り残されたかのような、しかしそれ故に休日はその人気のある場所である。

公園の敷地はそれなりに広く、中心近くには人工的な滝が作られており、日中の蒸し暑さを和らげてくれる。

藍色のドレスを纏った彼女は、まるで仕事に追われるキャリアウーマンのような忙しなさで公園から離れていた。

公園には、以前彼女を暴漢から助けしてくれた青年——その友人がいた。見知らぬ少女である自分を助けてくれた奇特定の人物でこそあるが、不幸そうな外見から伺える面倒見

の良さは、ティナをして知らずのうち心許してしまいそうなほどだった。だが、今は駄目だ。彼女の主よりつきつき連絡があつたのだ。彼女が、現在何よりも優先させなければならぬモノ。彼女という殺人機械を産み出した張本人にして、彼女へ存在意義を与えた存在。

足早に元いた場所から離れつつ、ティナは懐から小型の通信機を手を取った。

「私です」

『遅いぞ。何をしていた』

「申し訳ありません。どうしても電話を取れない状況にありました」

『……。意識を会話が可能レベルまで回復させよ』

ティナの主——エイン・ランドは、彼女のバックアップの他にメデイカルチェックも担当している。ティナの声に入り混じる意識の混濁具合を目敏く感じ取ったエインは、限りなく事務的な、冷たい声音で小さな暗殺者に命令を下した。

ティナはカフェインの錠剤のボトルを取り出すと、ボトルの中に残っていた錠剤をすべて口の中に放り込む。硬い錠剤を乱雑に噛み砕くと、口内にカフェイン独特の苦味が広がり顔をしかめた。空になったボトルを近くのゴミ箱に投げ捨てると、ほどなくして意識が鮮明になってくる。

未だ眠気は残っているが、会話が出来ないほどではない。ある程度覚醒した意識の中

周囲を見渡し、声の聞こえる範囲に誰もいない事を確認すると再び通信機を手取る。

「——それで?」

『第二回の聖天子警護計画書が流れてきた』

まさか今回も情報の漏洩があるとは思っていなかったばかりに、ティナは主からもたらされた情報に驚愕した。前回の暗殺計画——それが失敗した以上、聖居側も内通者の存在にもっと敏感になるはずである。それが為されず、なおも再び警護計画の情報が流れてくるとなると、聖天子の側近には余程の無能が揃っているのだろう。

暗殺する側であるティナからすれば願ったり的狀況ではあるが、無能な部下の所為で命の危機に瀕する聖天子を憐れまずにはいられない。

通信機の奥でエインが声を抑えてくつくつと笑う。通信機を通して漏れる忍び笑いは、声の主の陰湿さを秘めていた。

『我らに情報を提供してくれる聖居職員には感謝せねばなるまいな』

「……………どういった人なのですか? その情報提供者は^{コラボレーター}」

『目の前でガストレアに子供を喰われたらしい。よくある話にすぎんさ』

聖天子は『呪われた子供たち』の基本的人權の尊重と共存をスローガンの一つに入れている。その政策からは人道的かつ聖天子の慈悲深い側面が見て取れたが、生憎『奪われた世代』の九割は『無垢の世代』——中でも『呪われた子供たち』に対し根強い差別

意識を持つている。

『呪われた子供たち』を救済しようとする政策のおかげで聖居内から裏切り者を出し、そこから漏洩した情報でティナのような『呪われた子供たち』の暗殺者に標的にされている。その皮肉な運命に、ティナは憐憫の情を抱かずにはいられなかった。

ティナのその思考に割って入るように無機質な声音が通信機から響く。

『我々の依頼主は東京エリアに逗留中に事を済ませよとのことだ』

「しかしマスター。またあの民警が妨害します」

『その民警の身元がわかった』

ティナは声もなく感心した。相変わらずの手際の良さだ。

『そいつは民間警備会社に所属しないフリーランスの民警らしい。経歴については東京エリアがブロックしているのかわからなかったが……住所も確認した』

通信機の方こうで主の口元が歪んだことに、ティナは直感で気付いた。

『第二回非公式会談までまだ時間に余裕がある……私が何が言いたいか、わかるな？』

「はい、マスター」

『ティナ・スプラウト、次の任務だ。聖天子暗殺計画の障害を速やかに排除せよ』

×

×

×

事務室の人の良さそうな壮年の男性に用件を告げると、存外にあっさり八幡を通してくれた。

ふと窓の外に目を向けると、部活動をやっているのだろう運動部の生徒たちが思い思いの練習に励んでいる。

その喧騒をどこか他人事のように感じながら、八幡は昼下がりの光が差し込む廊下へと踏み出した。

休日の勾田高校の校内は、校庭の喧騒と比べて閑散としている。運動部の練習風景を眺めるような趣味をもたない八幡は、一切の興味が無いと言わんばかりに足早に古びた校舎を急ぐ。ときたますれ違う生徒たちは八幡の身に纏う総武高校の制服に目を白黒させていたが、八幡はそんなものには一切頓着しなかった。

ほどなくして到着した『生徒会室』のプレートが下がるドアの前に立つと、コンコンとノックする。

どうぞ、という返答を聞いてからノブを回し、無言のまま部屋の中に入ると八幡は後手にドアを閉めた。

「いらつしやい、比企谷ちゃん」

「司馬」

訛りのあるイントネーションで八幡を出迎えたのは、和服を身に纏った色白の端正な美人だった。良家の淑女然とした立ち居振る舞いとは裏腹に、左目の下あたりにある泣きぼくろと特徴的な垂れ目が妙な妖艶さを醸し出している。未織は八幡と同年代、というより年下のはずだったが、年に見合わない艶めかしさが八幡は少し苦手だった。

「久しぶりやね。少し背え伸びた？」

「流石にそろそろ止まるだろ。——解析は済んだのか？」

「滞りなく。んもう、里見ちゃんみたくせっかちなあ」

ブラインドの降ろされた薄暗い執務室のような部屋から、更に奥の未織の私室へと案内される。そこには、およそ一生徒には似つかわしくない光景が広がっていた。

近未来的な曲線を描く椅子やシステムデスク、空中に浮かぶホロディスプレイ。

中央に据え付けられた前衛的なデザインの椅子を中心に、数十枚と並ぶホロディスプレイが青白い光を放っており、それだけで他の光源が要らないほどだ。

株価や経済ニュースについて表示していたディスプレイを未織が手を払って打ち消すと、霧散したホロディスプレイが再構成され一つの大きな画面を形成した。

『『聖天子狙撃事件証拠物件』』

未織がディスプレイに向かってそう呟くと、たちまちのうちにディスプレイから先日の狙撃事件の現場写真や、銃に使用された銃弾の写真が並べ立てられる。

未織は陳列された写真のうち一枚を拡大させると八幡の方へ振り向いた。

「これは、先日の聖天子狙撃事件で使用された弾丸の弾頭。比企谷ちゃんも気付いたとは思うけど口径は12.7mmの大口径弾。ここまではええな？」

未織の確認に、八幡はそれで間違いないと頷いた。先日の弾丸の破壊力からも通常の狙撃弾である7.62mm弾であることはありえない。

「弾丸を調べたんやけど、犯罪使用歴は無し。施条痕は六条右回り。発射間隔の短さからポルトアクシヨンライフルじゃなくてセミオートライフル。ここまですで使用された銃はある程度絞られる」

「そもそも施条痕をちよこつと確認すれば、ある程度目星はつくんやけどな？」と未織が付け足す。

施条痕とは、銃の銃身に施された螺旋状の溝の事である。施条痕の施されていない銃は弾丸が何処に飛んでいくか知れたものではないが、この螺旋状の溝で加速した弾丸に旋回運動を付加することで弾丸の直進率を向上させている。

「使用された狙撃銃は？」

「おそらくバレット社製M82アンチマテリアルライフル」

打てば響くような速やかさで、未織は八幡の質問に応える。

そして未織は弾丸の画像を縮小させ、新たに一枚の画像を引つ張りだす。先日聖天子と八幡が乗っていたリムジンと、件の狙撃手が伏せていた廃ビル群の屋上を映し出したモデリング画像である。

未織が手に持った扇子で指差すように両者の場所をドラッグすると、千百二十一メートルという直線距離で表示された。全体像が把握できるようにモデリング画像を拡大させると、未織は八幡に向き直った。

「念のため確認するんやけど、比企谷ちゃん。敵の狙撃手は本当にこのビルから撃ってきたん？ この距離で、リムジンに乗った移動目標に？」

八幡は苦い顔をして頷いた。未織が複雑な表情で眉をひそめる。

「比企谷ちゃんは狙撃にはどんくらい詳しいん？」

「それなりにだが。経験もな」

「腕は？」

「ドラグノフで六〇〇メートル先の西瓜をぶち抜ける程度には」

その言葉に未織は素直に感嘆の声を上げた。目の前の濁った目をした青年は、十二分に“一流”と呼べるだけの技量を備えている。

本来ドラグノフなどのマークスマンライフルは狙撃には向いていない。装弾数の多

いセミオートライフルであるドラグノフは、狙撃銃というよりは分隊支援火器という運用思想で設計された銃だ。それゆえに精度はそれほど高くはなく、ボルトアクション系のライフルのそれと比べると大きく劣る。

ドラグノフの有効射程距離はAK系が三〇〇メートル、SVDが六〇〇メートルである。有効射程ギリギリを命中させられるという彼は相応の実力を持っているに違いない。

「比企谷ちゃんはスナイパーライフルとマークスマンライフル、どっちが得意なん？」

「……昔は比較的スナイパーライフルを扱ってたが、俺はゲリラ戦の方が向いてるらしい。今じゃマークスマンライフルの方が経験は多いぞ」

「ああ、そういうえば比企谷ちゃんの方が担当してるんやったね」

八幡が使用しているライフルはH&K MSG90A1である。

H&K社が設計したMSG90A1ライフルは、連射可能な狙撃銃として有名だったPSG1を、射撃精度はそのままに二キロ近く減量に成功した高性能狙撃銃である。

八幡のMSG90は未織の司馬重工に個人的なチューニングを依頼し、銃床に穴を開けたスケルトンストック式にしたものである。スケルトンストックにしたことでバランスが若干崩れたものの、全体的に更に軽量化し運搬が容易となっている。有効射程は七〇〇メートルを超える名銃である。

「それでもこれはちよつと信じられんわなあ」

「事実だが」

「射撃角度から言つてもここから撃たれたのは間違いないんやけど……」

渋い顔をして続ける未織は、未だ信じがたいと言つた表情をしている。八幡もまた同様だった。狙撃手として確かな腕を持つている八幡からすれば、今回の件は映画か、夕子の悪い悪夢の中で見れないものだ。

「二〇三二年にもなつて、狙撃スコープやライフルの精度も相応に上がつとる。でもな、結局命中率を左右する重要なファクターは人間なんよ。そして人間である以上、呼吸はするし心臓の鼓動もする。手が震えるから正確な射撃がどんだけ難しいかは、比企谷ちゃんもようわかつとるやろ？」

「ああ」

他でもない八幡が最も分かっている。狙撃手として相応の鍛錬を積んだ八幡は、ほんの些細な手の震え、吐き出す呼気の一つに至るまで十全の集中力を以つて挑まなくてはいけないことを、経験として識っている。

マークスマンライフルで六〇〇メートルの射撃を成功させる八幡も然りだが、スナイパーライフルで八〇〇メートルの狙撃をする狙撃手も十分“一流”である。それが今回は一キロ以上先の標的を雨天、強風の中、リムジン内の移動目標に対し正確な狙撃弾

を放ってきた。人間業ではない。

狙撃の世界では、二〇〇メートル先の移動目標に命中させることすら至難と呼ばれているのだ。

今回の顛末を同業者に話したところで、狙撃の事をろくに判っていないひよっこが大妄想を繰り広げていると笑われるか、精神病院を紹介されるかの二択だろう。

「比企谷ちゃんだつて同じ条件で三〇〇メートル先の移動目標を狙撃しろつて依頼されてもやらんやろ?」

「当たり前だろ。依頼人の正気を疑うぞ」

「それが正常な反応やなあ」

「……狙撃を防ぐ方法はないのか?」

未織は少しの間逡巡したが、諦めたように首を振った。

「聖天子が聖居から出ないつてのが一番現実的な案やな。でもそれは出来へんのやろ?」

「知っているのか?」

「聖天子つて意外と頑固そうな顔しとるやん? 女の直感やけどな」

そういつて未織はからからと笑った。だが八幡にとっては笑い事ではない。複雑な表情で未織を見ると、未織はおどけたように言った。

「そんな表情せん^{かお}と。怖い顔しとるとイケメンが台無しやないか。せつかく素材はええのに」

「あまりからかうんじゃねーよ。とうか司馬、お前里見に気があるんじやなかったのかよ」

「あら、嫌そな顔。いい男にちよつと粉をかけるくらい許されてもええんとちやう？」

「気の多い女は嫌われるぞ」

「つれへんなあ。ま、うちは里見ちゃんがおるうちは、そうそう他には靡かんけどな」

未織は展示されていたホロディスプレイを腕を払って霧散させた。部屋の光源が減って僅かに暗くなる。

「他になんか聞きたいことある？」

八幡は少しの間考え込み、思い出したかのように問うた。

「確か司馬重工は警察や自衛隊にも武器を卸していたよな」

「せやけど、どしたん？」

「聖天子付護衛官について、お前の権限で調べられるか？ 護衛隊長の保脇卓人だ」

「んー……やってみる」

未織が保脇卓人と呟くと、空中に浮かんだホロディスプレイが目まぐるしく動き出し検索を始める。待つことものの数秒で検索を終えると、空中のディスプレイには保脇卓

人の顔写真とその横に経歴などが並べ立てられる。

未織がそれを読み上げた。

「保脇卓人、三十二歳。一九九九年生まれ、男性。聖天子付護衛隊長を務めており、階級は三尉———そういうえば比企谷ちゃんも階級は？」

「民警に与えられる疑似階級だっけか。俺は五百位だから確か———」

「保脇と同じ三尉。旧軍での少尉やね」

聖天子付護衛隊は大体小隊規模の組織だった。他にどれだけいるかは知らないが、小隊を預かる身としては三尉という階級はまあ妥当なものだろう。

民警に与えられる疑似階級は、あくまでも「疑似」であって本物ではない。命令権こそあれど指揮権は存在しないのだ。

つまるところほとんど何も出来ない、というのが真相である。

では何故そんなものが存在するかというと、民警の士気昂揚、そして民警は国が管理していることを他国へ示しておきたいのだろう。

「民間警備会社とは言っても、所詮は政府の紐付きだな。軍が足りず、かと言って増強して維持するだけのコストもない。そこで民間企業に軍事力を与えるが、いざという時には国が管理する。それを容易にさせるのが疑似階級ってか。政府の思惑が透けて見えるな」

「比企谷ちゃんも結構毒舌やわあ。ほんまその通りなんやけどな。最強の民警は単独で世界の軍事バランスすら左右するっていうやる？ 国が管理したがるのも当然や」

序列一位や二位の民警は、単独でゾディアックガストレアを葬るほどの実力者だという。それだけで想像を絶するまでの力を備えているのだろう。

ゾディアックガストレアには現状あらゆる近代兵器が効かない。唯一効果が期待できるのは戦略核だが、それは各国間の協定によって使用は禁止されている。他に例外があるとするれば、以前蓮太郎が天蠍宮スコレピオンを葬った《天の梯子》だが、それも現在は破壊され使用不可だ。

「ごめんなあ、比企谷ちゃん。あんまりわかること無かったわ」

申し訳なさそうに告げる未織に、八幡は軽く手を振って応えた。

「いや、いい。助かった。また来る」

「うん、またね」

にっこりと笑う未織を尻目に、生徒会室を通して廊下に出る。結局事態が好転するよ
うな報告は得られなかった。やはり自分でどうにかするしかないようだ。だが、どう
やって？

答えの出ない自問を繰り返しつつ、八幡は帰路を急いだ。

邂逅せし暗殺者

午後の斜陽が山の稜線の隙間から差し込む中、コンクリートジャングルに飲み込まれんとする都市の一角にそれは存在していた。

東京エリアの政府が意図的に残したのであるう、広々とした自然公園。あと数年もすれば近代開発の波にのまれ跡形もなく消え去ってしまうかも知れない儂い土地でこそあるが、モノリスという壁の中ではあまり見ることの出来ない豊かな緑を持つそこには、道行く人を惹きつけるような美しい景色が見て取れた。

ティナ・スプラウトは自然公園の遊歩道を歩きながら、あと十五分もすれば沈んでしまおう夕暮れに見入っていた。

朝の駅前のラッシュも、昼の繁華街の喧騒も、静謐を好むティナからすれば煩わしいものでしかなかったが、この自然公園から臨める夕日の美しさだけは別だった。

任務に追われているティナには、指示の合間に景色を眺めることくらいしかすることがない。だがその限られた時間の中で、この美しい景色に出会えたのは僥倖だった。

しばしのあいだ夕暮れに見入っていたティナは、思い出したかのように歩みを再開させる懐から通信機を手にとった。

「マスター」

『——なんだ』

声をかけると、即座に応答が返ってきた。その早さに感心しながらティナは疑問を口にする。

「今回襲撃する相手について教えてください」

『いいだろう。ふむ……』

エインは暫しの間考え込むと、この主にしては珍しく言葉を選ぶように告げる。

『こいつの経歴は、国にプロックされているところ以外は粗方洗ってあるんだが、プロモーターの方が少々特殊でな』

ぱらり、と通信機の向こうでエインが書類を手繰る音がする。

『イニシエーターの名前は××。プロモーターの方は比企谷八幡というらしい』

「比企谷、八幡」

×

ティナの反駁にエインは頷いて応える。無論、ティナも聞き覚えのある名前ではない。珍しい名前だとは思いますが別段特筆すべきという訳でもないだろう。

『ああ。幼少期に父親を病気で喪い、ジュニア・ハイスクール 中学時代に母親と妹をガストレアに喰い殺されたらしい。ガストレアへの恨みが募って中学卒業と同時に民警になった、というこころまでは特に珍しくもないパターンなんだがな』

「何か不明瞭な点でも？」

『うむ。そのプロモーターなんだが、民警になってから数ヶ月と経たずして消息が不明となっている。依頼遂行中の行方不明——イニシエーターともどもな』

菌に物が挟まったかのような言い方をする主にティナが首を傾げる。

「純粹にガストレアに殺されたのでは？」

『それが自然な考え方なんだが、解せんことにまた半年と経たずにひよつこりと顔を出したのだ。プロモーターの方だけな』

「それは……」

確かに奇妙な話だった。基本的に依頼中に行方不明となった民警は高確率でガストレアに殺されたと判断され、一ヶ月も戻らないと戦死認定される。

それが半年経つてから何故か生き残っていたと。今までなにをしていたのか、どうやって生きながらえてきたのか。

ティナはそれを聞いたが何故かIISOは深く追及しなかったという。

『それで、そいつはIISOには何故かイニシエーターを喪つたことを報告せず、侵食抑制剤だけ受け取りながら民警として過ごしていた。孤高を気取っていたのかは知らんがな』

エインの言にティナは黙して続きを促した。

『イニシエーターが居ないがゆえに他の民警と比べると戦闘力に劣るのは必定。だからかどうかは知らんが、そこで奴は裏の世界に身をやつしている。その筋ではそこそ有名だったらしい。』イニシエーターを持たない若い民警が、裏社会で暗殺や破壊工作を請け負っている』とな。多額の報酬と序列の向上を引き換えにな』

それはまた、随分と過激な生き方を選んだものだ。

青年期の最も多感な時期を、苛烈に過ぎる経験の中で過ごしたという彼は一体どんな風貌をしているのだろうか。

それはまさに、一種の地獄と評するに値するものだったのかもしれない。

『そのまま数年過ごし——つい半年ほど前だな。序列が千番を超えたあたりで東京エリアに腰を落ち着けたらしい。年齢は十代後半から二十前後。若くして隠居気取りか。金なら腐る程あるだろうからな。ちまちまと小遣い稼ぎをしながら、さぞ優雅な暮らしをしているのだろうかよ』

それで現在は東京エリアの総武高校に二年生として在学している。年齢も同級生と大して変わらないから怪しまれることもないのだろう。たかが一、二歳程度だ。

そう言つてエインはくつくつと笑つた。

彼が何故わざわざ高校生になつたのかはティナにはわからない。かつて喪つたはずの学生生活を今になって埋めようとしているのだろうか。もしそうだとしたら、エイン

ならばきつと哀れで滑稽だと嗤うだろう。一度裏社会で地獄を味わった人間が、再び日の当たる場所でもともに暮らせるはずがない。必ず何処かで齟齬が出る。そうした人間は、いつ自分の経歴が露見するかという恐怖と、裏の世界からの追手に怯えながら隠れるように生きるしかないのだ。

テイナのそんな思考は露知らず、エインは情報を分析する科学者の声音で手元の資料を考察する。

『東京エリアに入ってから情報は情報管理されているらしくあまり情報は入って来ていない。東京エリアの上層部も奴を利用したいのだろうが』

「なるほど」

そこで会話は途切れた。

今回の標的は特殊な経歴を持つ人物だが、余計なことを考える必要はない。いつも通りに任務をこなすだけだ。

日が沈み始めた東京エリアは、昼と夜とでは別の顔を見せ始める。

繁華街では喧しく、オフィスビルでは静謐に満ち、駅前では学生や定時で帰宅する会社員で溢れかえる。

自然公園を抜け、幾つかの交差点を渡り、人混みを掻き分けてビル群を抜けた先に目的の地点は現れた。

東京エリア、都市部にある近代的であり無機質な、そして無個性な公団マンション。一般家庭より中の上あたりの収入を持つ世帯の多くが在住しているというマンションに、目的の人物は一人で住んでいるという。

住んでいるのは十四階建てマンションの八階。

この時間帯では他の住人に見つかる可能性も考慮しなくてはならない。迅速に事を運ぶ必要がある。

そう行動を始める直前に、ティナは確認するようにインコムに問いかける。

「マスター、私は彼に負けますか？」

それは、前回の失敗からの負い目というよりは、無くしかけた自信と存在意義を確かめるような問いだった。口に出してからそれに気づいたティナはぼつが悪そうに視線を伏せる。

しかしその様子を通信機の向こうのエインが察せるはずもなく——目の前にいたとしても察せたとは思えないが——何を馬鹿な、といった風体で鼻で笑う。

『有り得んな。奴は高位序列者でこそあるが、それは自分の実力で勝ち取ったものではない。なるほど裏社会でやっていくにはそれなりの才能はあったのだろうが、そうなる奴の本分は奇襲や暗殺——直接的な戦闘力はそれほど高くはないだろう。お前ならば恐るるに足りん』

なるほど最もな推理だ。イニシエーターを持たないがゆえに裏稼業に身をやつたのだから、本人の戦闘力は序列とイコールではないのだろう。

イニシエーターであり身体能力に於いては常人を遥かに上回るこちらが有利、ととるべきだ。

エインは通信機越しのティナの耳朶に、ねつとりと陰湿な響きの籠った声で囁きかける。

『ティナ・スプラウト。私の可愛い作品……お前に任務を与える。比企谷八幡を仕留め、計画の後顧の憂いを断て』

その声からは発声者の歪んだ陰惨な笑みが容易に想起できた。

しかしティナにとってその事実は然程気にかかるものでもなかった。ティナにとってエインは自分の存在意義。それさえ証明できるならば、他のことは些細なことではない——そう、不幸顔の少年や淀んだ目をした青年に出会ってから心の奥底で燻る違和感を押し隠しながら、ティナはいつになく硬質な声で応答する。

「仰せのままに。マスター」

その応答に満足したかのような雰囲気漂わせながら、エインは通信を終了した。数瞬、複雑な感情を持って余しながら通信の切れたインコムを眺めたティナは、頭かぶりを振ってそれを懐にしまった。

ティナはさも知った風を装ってマンションのロビーを通り、シンブルな構造のエレベーターに乗り込み八階へと向かう。

白を基調としたマンションは、何処にでもあるような模範的とも言える構造をしており把握するのは容易だった。

標的が住んでいる八〇八号室まで誰にも見咎められずに辿り着けたのは幸運だった。死角を通りながらとはいえ回避しきれなかった監視カメラの映像は、エインが、もしくは彼に連なる者が工作し消去してくれるだろう。

八〇八号室のドアの前に立ち、ノブに手を掛けようとしたところでティナは違和感を感じ取った。

部屋の中に一切の気配が感じられないのである。

フクロウの因子を持つイニシエーターである彼女は、動体を感じする器官……とりわけ聴覚に秀でた能力を持っている。たとえドアに隔てられていようとも、室内の全容を把握し、物音がしないことを確認することなど造作も無かった。

標的は不在——当初立てていた奇襲の算段は崩れたが、何も悪いことではない。相手待ち伏せすることでより確実に仕留める算段をつけられる。

ティナは素早く周囲を確認し、同じ階層に人影が見られないことを確認すると、金糸のような繊細な髪に手を伸ばしヘアピンを抜き取る。

鍵穴に取り付くこと二十秒弱。ティナがピッキングに要した時間はそれだけだった。ピッキング用に捻じ曲げたことで使い物にならなくなったヘアピンを外へと投げ捨てると、ティナは猫の如き素早さでドアの内側へと滑り込んだ。

×

×

×

比企谷八幡は、今まさに沈みきる直前の夕日を見つめながら、歩き慣れた帰路についていた。

日没も間近な住宅街には人影も疎^{まば}らで、夕焼けがアスファルトを赤錆色に染め上げている。

ややもせず到着した自宅のマンションを前にして、彼の靴がジャリ、と妙な音を立てた。

“……ん?”

金属片を踏んだかのような妙な感触に、八幡は首を傾げながらなんの気はなしに足元を覗き込む。

「……へアピン？」

怪訝に思いながらつまみ上げたそれは、果たしてへアピンだった。

妙な形に捻れ曲がったそれは、もはやへアピンとしての機能を残してはいない。だが、八幡の心に引つかかったのは、それがまるで意図的に捻じ曲げたかのように感じたからである。

結局その疑問が解消されることはなく、道端にへアピンを投げ捨てた八幡は、見慣れたロビーからエレベーターに乗り込み八階のボタンを押し込む。

八幡は妙な違和感を感じ、エレベーターを降りたところで周囲をを見渡してみた。別段何も変わっているところなどない。この時間帯にどの住人も顔を合わせないこともままあることだ。視線を感じる、というわけでもない。

しかし八幡は自身の住処である八〇八号室の前に至って、幾度めかの違和感に遭遇した。

ドアのロックを開けようと、懐から鍵を取り出したところで八幡の動きが静止する。鍵穴に目線を合わせてみると、不可思議な跡が目に残った。

鈍い銀色の光沢を放つ鍵穴の周りに、まるで何かで引つ搔いたかのような跡が残っているのである。

昔からあったものではない。それにしても新しすぎる。このマンションの一室はほ

ぼ新築であるから賃貸した物件だ。

だとすると、八幡ではない他の第三者がつけたものである可能性がある。

無論、ただの考え過ぎということもある。いやむしろその可能性が高い。それでも八幡は心のどこかで気のせいではないと悟っていた。

「……」

鍵を鍵穴に差し込み回している間も、八幡の脳裏には警報が大音量で響いていた。やがて聞き慣れた金属音と共にロックが外れるが、警報は収まりがつかない。——むしろ大きくなるばかりだ。

そして握り締めたノブをゆっくりと回し——回しきる直前に覚えのない抵抗を感じ、八幡は動物めいた本能に近い部分で自分の直感が間違いはなかったことを察した。

ノブを回しきりドアを開け放つよりも先んじて、真横に向かって全力で跳躍する。

その一秒にも満たない直後に、ドアの内側から轟音と共に爆炎と衝撃波が吹き荒れた。

耳を聳する爆音とともに、吹き飛んだ鉄扉が宙を舞い八階の高さから舗装されたアスファルトの上へと落下していく。舞った砂塵が総武高校の制服を白く汚す中、八幡は転がり立ち上がるまでのコンマ数秒で、ホルスターから隠し持ったグロック拳銃を抜き放っていた。

——ブービートラップ。

ゲリラ戦——中でも市街戦を得手とする八幡にとって、この手のトラップは馴染みの深いものである。

八幡がドアのノブを回したその瞬間、繋がれていたワイヤーが設置されていた手榴弾のピンを抜き、爆発せしめたのだ。手榴弾内部に内臓された時限装置に細工されていたのだろう。安全ピンが抜かれて撃針が雷管を叩き点火されるまでの時間が短縮されたことで、飛び退いてから一秒という短時間で爆発に至ったのだ。

幸運なことに使用された手榴弾は、炸裂時に破片を飛散させる破片型手榴弾ではなく、炸裂時の爆風によって殺傷効果をもたらす攻撃型手榴弾だったことだ。そのおかげで加害半径が狭まり八幡は特に目立った外傷を受けずに済んだ。

グロック拳銃にフラッシュライトを装着し、油断なく鉄扉の吹き飛んだドア部に歩み寄る。外から見える玄関の様子は爆風が入ってすぐの姿見を粉々に破壊しており、靴入れがあった場所を無残にも抉り取っている。

——これを仕掛けた張本人が、中に潜んでいるかもしれない。照明の落ちた室内で、闇に潜み八幡の命を刈り取る機会を虎視眈々と狙っているかもしれないのだ。

息を殺した八幡は、静かな足取りで油断なく屋内へと足を踏み入れる。

普段は濁っている瞳も今ばかりはどんな些細な動きも見逃さない兵士の目となって、

視覚と聴覚を周囲に張り巡らすように一帯を探る。自分以外の全ての動体を把握せんと、かつての経験を総動員する。

踏み込んだ室内で、まず目についたのが不自然に盛り上がったカーペット。

普通ならば迂回するか除去しようとするのだろう。だがその付近、椅子の脚に括り付けられたワイヤーの存在を見咎めて、八幡の警戒度は跳ね上がる。

遮光カーテンで光がほとんど入ってこない室内で見つけられたのはある意味奇跡だろう。

他にも見え辛い部分に多々のトラップが巧妙に仕掛けられている。

——相手は素人ではない。

八幡はグロックを発砲すると同時に、素早く通路の影へと身を滑り込ませる。

フルメタルジャケットの弾丸が設置されていた信管を撃ち抜いて、瞬間耳を聳する轟音が畏の仕掛けられたリビングを支配する。

再び踏み込んだ八幡を、廃墟同然となつたりビングが出迎える。調度品は粉々に破壊され、デジタルの掛け時計は見る影もない。テレビはほとんど原形を留めていない状態で横倒しになっていた。

クリアリングを続ける八幡の背後に、音も無く影が忍び寄る。息を押し殺しながら歩を進める八幡は、その存在に気付かない。

誰も存在しないはずの空間に、空を裂く風切り音が響く。

その一撃を躲せたのは、全くの僥倖だった。

風切り音を耳が捉えたその刹那、八幡は後方に振り向くことをせず前方へと転がっていた。八幡の頸動脈を切り裂くはずだったダガーは敢え無く空を切り、八幡はフロアリングの上を転がりながら大腿部に装備していたスローイングナイフを投擲する。

計三本のナイフは大気を切り裂きながら飛翔するが、八幡を切りつけた当の本人はこの暗闇の中まるで見えているかのように手に持ったダガーで全てを叩き落とした。

咄嗟に銃口を頭部に照準、フラッシュサイトの強烈な光で照らすと僅かに怯む。発砲するも、銃爪を絞ったそのときには狙った矮躯は射線から身を翻していた。

その常人離れた身体能力を目の当たりにして、相手の正体について一つの可能性が頭をよぎる。

「まさか——イニシエーター!？」

弾丸の如き速度で八幡へと向かって肉薄する影が、ダガーの致命的な金属の輝きを閃かせる。

咄嗟に右脚を跳ね上げ防御したものの、ダガーと義足が衝突した瞬間、衝撃波がリビングの中を走り抜け、落ちかけていた遮光カーテンを取り払った。

左脚がフロアリングに陥没し、右脚の切りつけられた部分の人工皮膚が抉られるよう

に剥離する。僅かな拮抗のあとほぼ同じタイミングでノックバックした両者は、差し込んだ夕陽に照らされた互いの顔を、ついに確認するに至った。

瞬間、リビングのなかの空気が凍りついた。

「嘘……そんな………」

「……お前は」

まさか想像だにしなかった驚愕が、両者の間に充ち満ちる。

八幡はつい一週間前に出会ったばかりの金髪の少女の顔を、ティナはつい一週間前に窮地を救ってくれた恩人である青年の顔を、互いに驚愕の面持ちで以って凝視する。

昏い色のドレスを身にまとったティナは、ダガーを取り落としそうなほどに狼狽した様子で八幡を見ていた。

まさか標的ターゲットが、見知った人間だとは思わなかった。いつも通り滞りなく任務を全うし、また見知らぬ誰かを殺すだけの仕事だと思っていた。そう信じていたばかりに——だからこそ、その相手が以前自分を救ってくれた恩人であることを知ってしまった驚愕はひとしおだった。

「どうして……」

ティナの口から意味のない問いが零れ落ちる。

その問いに、八幡は応えなかった。ひとたび刃を向けられた以上、いかなる理由が存

在すれど銃が向けられても文句は言えない。それが八幡やティナの生きる世界の常識だ。

だがティナは目の前の光景が信じられないとばかりに、武器を構えることすら忘れて八幡の顔を凝視している。

対する八幡も、油断なく銃を構えながらも銃爪を引き絞りがねていた。

目の前のイニシエーターが兵士として向かってくるならば、八幡もまた応じる覚悟があった。もとより無抵抗な少女すら、今後の障害と成り得るならば躊躇なく殺せるだけの外道さを持っているはずだった。だが今の八幡は、目の前の動揺も露わなイニシエーターを撃つことを、心の何処かで躊躇っていた。相手が動きを見せるまでこちらもまた動かないのがその何よりの証左だ。

「……お前が、何故ここにいる?」

「それは……貴方が、……暗殺の障害になるからです」

ティナがさも言いたくなさそうに、しかし律儀にも質問に答えた。

八幡はそれだけで全てを察した。自分の推理に間違いはなかった。ティナは聖天子暗殺を盤石のものとするために、障害と成り得る八幡を葬りに来たのだ。

八幡はティナに何故と問うた。自分が彼女を殺す理由を得るために。弱くなった自分の心に対する、免罪符を得るために。そして答えは得られた。ならば躊躇する理由は

ない。あつてはならない。

そう自らに言い聞かせた八幡は短く呼気を吐いてティナを見据えた。

それだけで彼女は察したのだろう。目の前の人間に、どんな言い訳も通用しないのだと。

「待つて……待つてください。私は……」

ティナが首を振りながら言葉を紡ぐ前に、八幡は銃爪を絞っていた。その言葉を聞いてはならない。心に余計な傷を負う前に、目の前のイニシエーターは迅速に排除しなくてはならない。心の底の一番冷めた部分が、八幡にそう語りかける。

放たれた弾丸は、しかしティナの身体を抉ることなくダガーに弾かれ金属の衝突音を響かせていた。

凄まじい反応速度で弾丸に対応してみせたティナに、だが想定内だとばかりに立て続けに発砲しながら八幡が距離を詰める。

弾丸を弾くティナも、先ほどまでの動きのキレはない。見るからに精彩を欠いたその動きは、弾丸に対応するだけで精一杯とばかりに体勢を崩す。

一瞬で肉薄した八幡がタクティカルナイフを一閃させると、何とかそれに合わせたダガーが鈍い金属の摩擦音を立てる。

「そんな、嘘です！……やめてください！」

八幡とて、声を震わせて叫ぶテイナに、反撃の意思が残っていないことを察していた。目の前の少女に、一片たりとも戦意など残ってはいない。彼を害する気などありはしない。

そんな少女を仕留めることなど、いくら普段の戦闘力が高かろうと難しいことではなかつたはずだ。なのに——八幡の放つた銃弾やナイフは、あと一步のところまで届かない。それは八幡が心の何処かで躊躇っている証拠だつた。

八幡は心の中で齒噛みする。——何故だ。何故殺せない。どうして俺は躊躇っている……！

銃弾が、ナイフが、テイナの柔肌を掠めるたびに、彼女の口から漏れ出る掠れた悲鳴が八幡の無機質な無表情に罅を入れていく。

ついに八幡の義足が、テイナのダガーを蹴り上げ明後日の方向へと弾き飛ばす。たたらを踏んだテイナは、塗装が剥離した壁に背中をついて、八幡の顔を見てとつた。

八幡の顔は、怒りや苦しみがない交ぜになった内心を、無表情で無理矢理封じ込めているような顔をしていた。

「嫌……」

首を振りながらそう呟いたテイナの頭部に、体勢を整えた八幡がグロック拳銃を照準する。

テイナにはもう抵抗する気力もなかった。次の一発は避けることすら出来ない。

恐懼に肩を震わせるテイナに、容赦なく八幡は銃爪を引き絞る。

「話を聞いて八幡さんッ！」

涙を散らしながら叫んだテイナに、八幡の照準が僅かにブレた。放たれた弾丸はテイナの頭部を抉ることはなく、頬を掠めて背後の壁面を穿っていた。

泣き腫らした顔のテイナと、どこまでも昏い眼をした八幡との視線が絡みあう。

数秒間の沈黙を、先に破ったのは八幡だった。

「……今すぐここから出て行け。俺の気が変わらないうちに」

押し殺した声でそう呟く八幡の指先は、銃爪にかかったまま小さく揺れていた。

それを見て取ったテイナは、彼とは決して相容れないことを悟った。

悲哀に満ちた表情で、廃墟に座り込むテイナはもう何も言葉を紡ぐことはなく――

数分後には、廃墟同然となった部屋には八幡しかし残つてはいなかった。

オーバードロングレンジ

不意に鋭い針が神経に突き刺さるような痛みが走り、比企谷八幡は右脚を抑えながら膝をついた。

制服のズボンを膝の上まで捲り上げると、下腿の外側、脛からふくらはぎにかけて大きな裂傷が亀裂のように走っている。

ティナのダガーによる鋭い一閃は、並みの威力ではなかったらしく裂傷部分からブラッククロームに覆われた義足部分が覗いて見えた。

対峙した両者とも並みの技量ではなかったため、痛覚のカットオフが間に合わなかったのである。むしろそんな事に気を回している余裕など微塵もなかったと言っている。

狙われたのは胴体、それも回避が難しくそれでいて致命傷となりやすい肝臓部分。後ろに避けられてもすぐに肉薄出来るよう深く踏み込み、結果として斬撃の威力も高まっている。恐るべきはティナの手練である。幼ながらに相当の修練を積み、それをイニシエーターの身体能力で昇華させたのだろう。生半な腕では深手を負っただけでは済まなかっただろう。下手を打てばこの部屋には八幡の骸が転がっていたとしてもおかしくはない。

容易い相手ではない、と八幡は考察する。なにより情報が足りない。遠近中距離どれを得手とするのかも、弱点はあるのか、得物はなにかすらわからない。わかったのは少なくとも並外れた近接格闘能力をもつ事、兵器の扱いにある程度精通していることくらいである。

あれを相手にするにはまずは情報が必要だと八幡は断じた。

その為には聖天子とコンタクトを取る必要がある。彼女なら国家元首の権限で機密事項など関係なく情報を手に入れられる。あとはこの最近ティナとそれなりの頻度で会っていた蓮太郎からも話を聞くべきだろう。得られる情報は多いに越した事はない。

そう黙考に耽っていたとき、小山となっていた部屋の隅の瓦礫が音を立てた。

稲妻もかくやという反応速度で抜き放たれた銃口の先で、灰に汚れた三毛の猫がのそりと瓦礫から這い出てくる。

「お前か……」

身体に幾ばくかの裂傷を負っている八幡よりもなお不機嫌そうに、三毛猫——カマクラは尻尾でフローリングを叩いた。

昔からそうだが、この猫は飼い主に似てなかなかどうして悪運の強い所がある。

八幡は銃を太腿のホルスターにしまうと、革の部分が破れスポンジが飛び出たポロポロのソファに座り込む。本人も気づかぬうちに呆れたような薄い苦笑いがその口元に

は浮かんでいた。

×

×

×

蓮太郎が八幡のマンションに駆けつけたときにはもう、八幡の住処である八〇八号室は惨憺たる有様だった。

部屋へ入るドアは、蝶番が爆発物で粉碎されており忽然と消え去っている。マンションのエントランスの前のアスファルトで舗装された道路に落下していたものがそうだったのだろう。

踏み込んだ室内の様相は蓮太郎の予想を裏切る物ではなく、局地的な台風に曝されたかの如く滅茶苦茶に荒らされている。質素な形の椅子やテーブル、シンプルな造形の食器など家具や調度品は軒並み粉碎され、遮光カーテンはずたずたに破れその機能を失っている。

一体ここでなにがあつたのか——問うまでもない、家主が襲撃にあつたのだ。それが誰に依るものなのかはともかく、少なくとも軍事的な訓練を受けた『兵士』であること

は間違いないだろう。

蓮太郎は生唾を飲み込むと、家主を呼ぼうとする気持ちを抑え、慎重に部屋の中に踏み入った。

じり、と蓮太郎のブーツが瓦礫の欠片を踏みにじる音がする。油断なく愛銃であるスプリングフィールドXDを構えながら室内を探索する。ベランダに続くガラス戸に、申し訳程度にかかっていた遮光カーテンを取り払うと、山の稜線に消えかかっていた夕陽が室内をオレンジ色の光で満たした。

差し込む陽光に蓮太郎が目を細めたその刹那、部屋の隅の暗闇に溶けるように潜んでいた影が、蓮太郎へと忍び寄り静かに銃口をこめかみに押し付ける。

蓮太郎はもはや誰かも分かりきっていた銃の持ち主を視線だけで確認すると、前にもこんな事があったと懐かしむように息をついた。

「インターホンくらい押せ、不法侵入者」

「押すべきインターホンが消し飛んでたんだよ」

蓮太郎の返答に鼻で笑うと、銃を押し付けていた影——八幡は銃を下ろした。

久々に見る制服姿はどこどころが破れているが、本人には大した負傷があるようには見られない。部屋の惨状からは考えにくい姿である。

八幡は部屋の隅に横倒しになっていた半壊の冷蔵庫からコーヒー缶を取り出すと、蓮

太郎に投げ渡す。

「いきなり銃を押し付けんのはやめろよ。肝が冷えるだろうが」

この手の遭遇戦では蓮太郎より八幡の方が一枚上手である。兵士であると同時に武術家気質も持ち合わせている蓮太郎にとってはそもそもが苦手な分野でもあった。姿を見せての殴り合いならば話は違ってくるのだろうが——悪態をつきながら缶コーヒーをあおった蓮太郎は、むせ返るような甘さに大いに顔をしかめる。

「うげっ甘え……マックスコーヒーかよ」

「あとはブラックだけでぞ。諦めろ」

コーヒー以外は置いてないのかと思いつながら蓮太郎は残った缶の中身を思い切り飲み干すと、一際大きい瓦礫の山に放り投げた。間拔けな音を立てて空き缶が部屋を転がるものの、家主の八幡は気にも留めない。最早廃墟も同然の自室に何を気遣う意味があるろうか。

「里見」

声をかける八幡に、なんだよ、と蓮太郎は鷹揚に応じる。一切の声音を変えず何気なく語られた話の内容は、蓮太郎にとってある意味で予想通りであり、またある意味で予想外であった。

「襲撃の相手は、ティナ・スプラウトだ」

その言葉に蓮太郎は表情を強張らせた。霧囲気を一変させる蓮太郎に対し、八幡はまるで世間話でもするかのように何気なく、発せられる霧囲気も自然だった。

「あいつは聖天子狙撃事件に大なり小なり関わっている。首謀者なのか末端の使い捨てなのかはわからんがな」

「……………」

「情報が足りない。お前からも話を聞く必要がある。次の護衛計画まで可能な限り情報収集をすべきだ」

蓮太郎はボロボロのソファに前屈みで座り込んだまま、俯くように転がっている空き缶を見つめていた。

つい先日まで会っていた少女がそういった世界の人間であることに戸惑いを隠せないのか、そもそも信じられないのか。八幡ほど血生臭い世界に生きてきた訳ではないが、そういったものにも理解は出来ていたはずだった。しかし、いざ直面すると存外に衝撃は大きいらしい。

まだ思考がまとまらないままに、蓮太郎は口を開いた。

「……………それで、どうすんだよ」

「必要なら当然、殺す」

蓮太郎の漠然とした問いに、八幡はどこまでも素っ気なく応じた。さも当然だと言わ

んばかりに。

その態度に思わず蓮太郎は顔を上げる。そこで蓮太郎が見たのは、八幡のどこまでも冷めた目だった。

銃撃の余韻も消え、熱も冷めてフローリングの床を転がるばかりだった空薬莖を拾い上げ、長い指先で弄びながら視線を蓮太郎へと向ける。

お前だつて、部屋に害虫が出たら殺すだろう？——そう言外に問われた気がした。

蓮太郎は八幡の目から視線を逸らす事が出来なかつた。その目に映っていたものは、毅然と突き進む意志でも、悲壯を滲ませた覚悟でもない。そこにはただ「斯く在れかし」と定められた数式のように、機械的な思考によつて導かれた「解」が存在しているのだろう。

——阻むなら、除くまでだ。

蓮太郎から逸らした瞳が僅かに揺れる。八幡の自身に言い聞かせるように呟いた言葉は、夕闇の中で溶けるように消えていった。

×

×

×

「ティナ・スプラウトですか……？ いいえ、聞いたことのない名前ですが……」

困惑したような声音でティナの名前を反駁する聖天子に、八幡は予想通りだと言わんばかりの表情で頷いた。

もとより、聖天子の記憶にその名があるかなど期待はしていない。八幡が求めているものは、聖天子本人などではなく国家元首たる聖天子の権限である。無論そう言ったら側近たちが激怒するだろうが。

「聖天子、貴女の権限でその名を調べて頂きたい。民警だけでなく、各国の医療機関や東京エリアの空港、ホテルの顧客名簿に至るまで」

八幡の聖天子に対する言葉遣いは、以前と比べて幾分くだけていた。蓮太郎ほど雑な態度ではないにせよ、一般市民にとっては雲の上の存在と言っても過言ではない聖天子に対し敬語の一つもない言い草は、聖天子付きの侍女がその場に居たりしたらまず間違いないく眉を顰めるだろう。

襲撃より数日の間、八幡は情報収集に奔走したが、これといった収穫はほぼないに等しかった。蓮太郎に対する接触もあれ以来ないらしい。それも当然である。蓮太郎の連絡先を紹介したのは他ならぬ八幡であり、そもそも蓮太郎に情報戦での活躍などはなから期待しては居なかった。

苦肉の策として八幡が提案したのは、聖天子が乗るはずだったリムジンを囿にし、聖天子本人は八幡が事前に用意したライトバンに乗車して貰うことで、襲撃者の目を眩ますというものである。最早作戦というのも烏滸がましい、土壇場の方針変更であった。更に八幡は、既に漏洩しているものと言っている護衛計画を完全に無視し、全く違うルートで会談場所である料亭 に向かうという案を出した。この提案は八幡自身が疑惑の対象となりかねない致命的なものである。しかし、聖居職員の非難がましい視線を受けながら出した八幡の案に、聖天子は肅々と従った。八幡が疑惑の対象となること、聖天子を民間用の乗用車に乗せるといふ非常識な部分を除けばこの案は確かに有用ではある。もちろん、襲撃者がこちらが聖天子の護衛計画が漏洩しているという事実には全く気付いていないものだと言っている限りではあるが。

聖天子自身形式に囚われない人間性であることも幸いし、八幡の提案は受け入れられた。

それよりも聖天子が気にかけたのは、襲撃を受けた八幡のマンションについてである。間接的とはいえ己の所為で住む場所を失った八幡に、聖天子は眉根を寄せ申し訳なさそうな表情で頭を下げる。

「此度の襲撃……その責の一端は貴方に依頼した私わたくしにあります。せめて損害の保証はさせてください」

それを押し留めながらも、八幡は聖天子の申し出を受け入れた。八幡のマンションの一室が人が住めるような部屋ではなくなった理由は、間違いなく聖天子の依頼を受けたからだ。そこに筋は通っている。

ただ、聖天子が最初に狙撃された段階で八幡自身襲撃される可能性を想定していなかったわけではない。事実として、八幡は東京エリアに移住してきた段階で別の拠点を複数用意していた。ただ、こんなに早く襲撃されるとは思ってもみなかったが。

聖天子を乗り込ませる直前に聖居職員によって簡易的ながら最低限の「掃除」を受けたライトバンは、ただでさえ良いとは言えなかった乗り心地を更に悪化させた。最早数日前に乗ったリムジンとは比べるべくもなく、中堅以下の一般家庭もかくやである。

「狙撃犯の黒幕……目星は？」

「……」

「……状況証拠だけを言うなら——」

「言わないでください」

能面のような無表情に反し、内心焦れていた八幡の口上を聖天子は遮った。

「確たる証拠もないままで、迂闊な事を口走ってはなりません」

静かに、しかし断固とした姿勢でそう断じる聖天子に八幡は目を細める。

そう、状況証拠だけでいうなら間違いなく黒幕は齊武宗玄大統領である。聖天子と齊

武の間で行われる。『非公式』会談では、その特性上両者とその側近以外にはまず知られることのないものである。

それが、漏れた。聖居職員へ箝口令が敷かれている事を考えると、まず大元となったのは齊武と考えていい。

そして八幡がそれを確信するに至ったのは、八幡自身齊武の人柄を知っているからである。今の地位にのし上がるためにライバルを蹴落として来た齊武……その齊武のやり口を一時とはいえ見届けたことのある八幡だからこそ、確信出来た。おそらく蓮太郎も八幡と立場が変わらなければ、同じことを言っただろう。

聖天子は聡明である。過去二代敏腕を奮った聖天子と比べても遜色ないと言っている。そんな彼女が八幡と同じ結論に至っていない筈がない。八幡には聖天子の頑なな態度が、今となつては何処までも愚かしく見えてならなかった。

「貴女は——」

愚鈍だ、と言いかけて、辞めた。

毅然とした態度を貫く、聖天子のその視線に射竦められた訳ではない。

聖天子は揺るがない。もとよりそれは承知していたはずだ。愚鈍なのはむしろ、それを知つていてなお諛言を弄しようとする八幡の方なのだ。

そもそも、八幡は護衛を依頼されただけのボディガードという立場である。聖天子

の行動に口を挟むのは筋違いも甚だしい。

「俺はただの護衛だが、その上で一言言わせていただきたい」

「なんでしようか」

「俺は依頼は遂行する。だが、自ら進んで死に行くような奴を守ることは出来ない」

言いたいことは言ったとばかりに、八幡は目を閉じた。あくまで八幡は聖天子を守るつもりではあるが、叶わずに聖天子が死ぬようであればそれまでの事。仕方のない事と割り切って他のエリアに高飛びでも図ろうと決めた。

「……承知しております」

八幡の言葉を聖天子はどのように受け取ったか、あくまで厳粛な態度を崩さず静かに受け止める。

聖天子の態度に目を眇めた八幡は、黙したままシートに背中を預けた。

×

×

×

寒風吹き荒ぶ高層ビルの屋上で、ティナ・スプラウトは眼下の街並みを睥睨した。

今宵の夜空には月明かりなどなく、ティナの矮軀を照らす光源は眼下に見える人工灯のみだ。

高さ故の強風と、日も沈んだあとの冷気に身を竦ませながらも猛禽の目を標的へと向ける。

標的たる聖天子は、ティナのマスターの雇用主たる齊武宗玄大統領と、午後九時に非公式会談をする予定だ。聖天子を射殺する——固い決意が総身を強張らせる。

彼女は聖天子が会談場所たる高級料亭『鶉登呂亭』に入店すべく、料亭の前に停めた車から降りて店の入り口に歩いている間にのみ、トリガーチャンスは与えられる。それは時間にして、約十数秒間しかない。

時計の針は、間も無く九時に至る。

『間も無く聖天子が会談場所に乗り付ける。今度はしくじるなよ……確実に排除しろ』

「はい、マスター……仰せのままに」

耳元のインコムから響く冷たい声に、ティナは感情を押し殺して応える。

聖天子を、殺さなくては。

ティナの心を支配するのはそれだけである。

ティナは東京エリアに来てから二度もミスを犯した。一度目は最初に聖天子を狙撃

したとき。二度目は聖天子の護衛の民警を襲撃したとき。

どちらとも、テイナのマスターからすればただの一度でテイナを見限るに足る理由になつただろう。だが、こうしてテイナが三度目のチャンスを与えられているのは、ひとえにテイナのマスターが寛大であつたことと、聖天子暗殺を遂行出来るのが彼女だけだつたが故だ。

幸いにして、非公式会談はあと数回続く。聖天子は愚直なまでの誠実さでもつて会談には足を運び続けるだろうし、護衛計画の漏洩元である聖居職員をどれほど洗おうともこちらの情報収集態勢は万全だ。

テイナは何も気負う必要はない。ただいつも通りに事を成し遂げ、大手を振つてマスターの元へと帰還するのだ。それだけの実力と自信がテイナにはある。

だが——それでもまた失敗したら？

万が一、あと数回の非公式会談をすべて行つて、それでもなお聖天子を抹殺することが叶わなかつたら？ きつとテイナは捨てられる。もう必要ないと、手元に置いておく意味はないと、まるで子供が飽いた玩具をごみ箱に放るかのよう処分される。

“もう要らない”と言われるのが怖かつた。人を殺すことでしか自分の価値を証明出来なかつた。今までも、きつとこれからもそうだろう。テイナにとつて、誰にも必要とされなくなる”という事実は何よりも恐ろしい事だつたのだ。

任務を達成しろ。聖天子を射殺して、自分の存在価値を証明するのだ。そして自らのマスターに、自分はやり遂げたと、自分を必要としてくれと、任務の完了を報告しなければ。そうでなくては、自分は――

テイナの手に、極限まで艶消しされた銃身が横たわる。それは、今までにテイナが手にしてきたアンチマテリアライフルよりも、なお長大な鋼の銃身だった。

バレット社製M82をモデルとして、テイナのマスターが改造を施した彼女の専用火器である。

その本質は、加工された銃身にある。

薬室チャンバーから通常圧力で激発された砲弾の通過に伴って、銃身側面に複数配列された薬室が随時点火し弾丸を極音速にまで加速させる。

これは、第一次世界大戦でドイツが研究したV3 15センチ高圧ポンプ砲と呼ばれる多薬室砲――俗称「ムカデ砲」からヒントを得たものであり、弾丸を複数回加速する事で初速と射程を大幅に増大させる事を目的として設計された。

元々は炸薬の複数点火による砲身の耐久性と、薬室の点火タイミングを精密に測る機械制御技術が未発達さが設計段階で問題視されお蔵入りとなった兵器であり、それを個人携行火器の域にまでスケールダウンしようという時点で実現の困難さは想像に難くなかった。しかし、テイナのマスターたる天才、エイン・ランドは砲身の耐久、耐熱性

を超バラニウム合金で、点火タイミングを測る機械制御技術は自身の開発した最新の精密機械で克服し、見事実現にまで至ったのだ。

結果、バレットM82「改」はその特性である炸薬の順次点火による恩恵を十全に受けるべく、その銃身は個人携行火器としては異様なほどに長大に、また弾丸もアンチマテリアルライフルの域を超えた大口径となり、装甲車程度の装甲であれば容易く貫通するほどの威力を得た。そも、聖天子一人の暗殺の為に過剰なまでの火力は必要では無いが……着弾速度の向上は、弾道計算などの点であらゆる状況に置いて恐ろしい程の有用性を誇る。

無論、メリットに比例してデメリットも数多くある。

まず、アンチマテリアルライフルの域を超えた大口径の弾丸は個人携行火器としては存在せず、完全な特注品としてしか入手が出来ない事。多葉室銃であるが故に超バラニウム合金でさえ強度は十全とは言えず、約二十発撃つたびに完全分解整備フルオーバーホールが必要な事。銃の特性上、装填、装薬に時間がかかる事。

兵器としてはどれもが致命的な欠陥ではあるが、コンセプトとしては完全なティナの専用火器だったが故にコスト度外視で設計されたため、さしたる問題にはならなかった。

そしてティナの手元には、二メートル余りもの銃身を誇る鋼鉄の異形が納められてい

る。これこそが、テイナの専用火器バレットM82 改^改である。

有効射程は二八〇〇メートル。その初速は秒間一三〇〇メートル。モデルとなったバレットM82の実に一・五倍の速度である。まさに怪物と言つていい非常識な性能に、テイナは聞かされた当初は耳を疑つたものだ。

そして、今こそ怪物狙撃銃はテイナの腕の中で咆哮を上げる時を待っている。

吐き出した弾丸が、標的を粉碎せしめるその時を――

×

×

×

間も無くライトバンが高級料亭に到着する。

料亭の看板が見えて来た頃にあたつて一人の男の姿を見咎めた八幡は辟易とした溜め息を禁じ得なかつた。

素早くバンを降りた八幡は聖天子側の席へと周り、ドアを開け放つ。

聖天子をバンから降り立たせ、振り向いた頃には白い護衛官の制服を纏った保脇が、つかつかとブーツの音を響かせながら八幡に詰め寄つた。

「貴様——！ 聖天子様をこのような粗末な車に乗せるなど！ 不敬だぞ！」

憤怒の表情で口角から泡を飛ばしながら八幡に詰め寄る保協は、聖天子の前であることすら失念してヒステリックに怒鳴り散らす。

「リムジンでは危険だと判断した。警護計画が漏れている可能性がある以上、現場の判断で奇襲の機会を潰したまでだ」

「黙れッ！ 貴様がその情報漏洩者だろうが！」

「だが結果として聖天子様は襲撃を受けていない。俺が狙撃犯の黒幕と繋がってるなら護衛計画のルートを外れた時点で襲わせているはずだ」

「貴っ様ああ……！」

激して鼻先が触れんばかりに詰め寄る保協が、怒り余って腰元のホルスターに手を伸ばす。その挙動に目を眇めた八幡は、保協の手がルガーに触れるより先にその行動を目で制した。

「……止めておけ。聖天子様の御前だぞ」

「ぐっ……！」

保協が引き下がるとともに弛緩した空気の中で、八幡の神経が警報を発する。

八幡の耳に、聞き覚えのある風切り音が響いた。例えるなら、蜂や虻が耳元で飛んでいるときに聞こえる、不快な虫の羽音のような……

またか、と八幡の心境は知らず臨戦態勢に切り替わっていた。

一度目の狙撃のときにも聞こえた、あの音である。油断なく周囲を警戒しながら傍に控える八幡に、聖天子もまた何かを察したかのように寄り添うように立った。

もとより、八幡は他者の視線には敏感な性質である。それが悪意の類であればすぐにそれと察しがつき、実戦で鍛えられた第六感には既^ちに殺意の視線を感じ取っていた。

八幡はすばやく周囲を見渡すと、既にあたりをつけておいた狙撃ポイントを確認した。鶉登呂亭の入り口を狙える狙撃ポイントは数箇所に限られている。接近して奇襲を仕掛けてくるのでなければ、その何れかから狙撃を仕掛けてくるはずだ。

油断なく構えていた八幡の視界の中で、ビルの上が明滅した。

それを狙撃の銃マズルフラッシュ口炎と断じるよりも早く、半ば脊髄反射とも言えるほどの反応速度で聖天子を押し倒す。僅かに一瞬後、大気を切り裂きながら飛翔した弾丸は八幡と聖天子がいた場所を通過してコンクリートで舗装された地面を粉碎した。

八幡は聖天子とともにコンクリートを転がりながら遥か先に立つビルに顔を向けた。

〃超長距離狙撃——ティナ・スプラウトか……!〃

一瞬ののち、場に絹を裂くような悲鳴が響き渡る。悲鳴と叫声が入り混じる中、八幡に僅かに遅れて護衛隊が聖天子を囲むように展開した。そのまま聖天子をリムジンまで護送しようとするが、再び飛来した狙撃弾の第二射が、護衛隊のバリステイクシュー

ルドを粉碎し、構えていた護衛官の胴体を文字通り四散させた。

飛び散った四肢や臓物、転がる頭部を目の当たりにした護衛隊は、今度こそ壊乱状態に陥った。上半身を失った下半身が無様に痙攣し、パニックをさらに助長させる。

既に意識が完全に切り替わっていた八幡は、至近距離で血飛沫を浴びて真っ青になっている聖天子を抱きかかえると、既にドアの開いていたライトバンに飛び乗った。

「南からの狙撃だ！ 建物の陰に隠れろ！」

八幡の意を汲んだドライバーは、ドアが閉まることすら待たずに急発進する。

轍を引きながら発進したバンに向けて、三度目の狙撃弾が迫る。背部のリアガラスから既に銃口炎を察知していた八幡は、後部座席から運転席のステアリングを蹴り上げて強引に方向転換させる。しかし、バンが強引な方向転換にスピンするよりも早く飛来した弾丸が、ルーフを突き破ってドライバーの頭部を吹き飛ばし、ステアリングごとエンジンを粉碎させる。

「馬鹿な——着弾が早すぎる！」

完全に操縦不能に追い込まれ、滑走するバンからドアを蹴り破って八幡が飛び出した。腕に気を失った聖天子を抱きながらアスファルトの上を転がった八幡は、傍にあつたビルの地下駐車場を見咎める。駆け込もうとするも、背筋が凍るほどの殺意に晒された八幡は退路を断つように放たれた第四射を辛くも回避した。

「——クソッ！」

粉碎され、粉々になったコンリートの破片が飛び散る中、聖天子を抱えたままの八幡はなんとか態勢を立て直そうと藻掻いた。人一人抱えて行う回避行動に他ならぬ八幡自身が焦燥を募らせる。

“不味い、足を止めたら確実に殺られる——！”

咄嗟に義足を解放し回避行動を取るも、それを見越したかのように飛来した第五射を八幡はついに避け損ねた。

風切り音を響かせながら飛来した弾丸は、高硬度の金属同士が衝突したとき特有の不快な怪音とともに超バラニウムの義肢に衝突する。常人なら下半身が泣き別れしてもおかしくはない衝撃である。アンチマテリアルライフルをなお超える衝撃に八幡は藁屑のように吹き飛ばされた。幸運にも義足で受け止めた弾丸は八幡の瘦身を扶えることなく、しかしその衝撃を余す所なく伝えるには十分だった。

吹き飛ばされ、アスファルトの地面に強かに打ち付けられた八幡は、揺れる頭でふらつきながらも起き上がる。軽い脳震盪に陥つたらしく、もつれるばかりで言うことを聞かない両脚を叱咤する。よくよく見てみれば、言うことを聞かない足は——ブラッククロームの義足の片方は、スラストアーユニットを粉碎され、義足としての機能すら半ば維持できていなかった。

ならば立ち上がることも出来ないのは道理だと足をもつれさせたその瞬間、横合いから伸びてきた腕に支えられ、すんでのところで硬い地面に倒れこむのを逃れた。

「何してんだ馬鹿野郎！ 死ぬぞ！」

まとまらない思考の中、見上げた視界に映ったのは——余りにも見慣れた不幸面。手入れのされていない黒髪を乱れさせながら必死の形相で叫ぶ姿に、何処か他人事のように滑稽なものを感じる。

「聖天子は……聖天子は、どうした」

「今延珠が駐車場まで運んでる！ ここから動くぞ！」

肩を貸されて逃げ込んだ先は、やはり八幡が予想した通りバンの入り損ねた地下駐車場だった。警備員は既に退避していたらしく、無人の空間が二人を出迎える。いや、他にもう二人、蓮太郎と八幡の姿を見咎めた聖天子と延珠が駆け寄ってきた。

「八幡！」

「比企谷さん！ 大丈夫ですか！」

駆け寄る聖天子の姿を見て安堵する。一時は危機に陥ったものの、予期せぬ救援に聖天子の命は救われた。依頼はまだ、終わっていない。

「聖天子……すまない、あんたを——ぐっ」

不意に膝をつき、咯血する。半壊した義足でなく、目に見える傷の他にもう一つ。ア

スファルトに舗装された地面に叩きつけられた際、肋骨が折れて肺腑を傷つけたらしい。こみ上げられ吐き出した血はコンクリートの地面を紅く濡らした。

色を失って駆け寄ろうとする聖天子を手で制し、打開策を模索する。外に出れば狙撃される。かといっていつまでもここに留まるわけにもいかない。現状ではそれもまた一つの手だが、狙撃手をみすみす逃せばまた次回も襲撃を許す可能性があった。

黙り込んでいた延珠が顔を上げ、決心したように言う。

「……妾があゝの狙撃手を追う」

「延珠っ！」

その言葉に反応したのは蓮太郎だった。

「今すぐに追わないと間に合わない……八幡は怪我してるし、妾の足なら追いつけると思う」

「何言ってるんだ！ 相手はどんな奴かわからない！ 危険だ！」

蓮太郎が延珠を諭す中、八幡は冷静に思考を巡らせる。他に手立てはないか、致命的な見落としはないか——逡巡したのは一瞬だった。

「……延珠。頼めるか？」

「大丈夫だ！ 妾は狙撃手には相性が良い、きっと何とかなる！」

「……巻き込んでしまって悪いな」

「…………お前」

蓮太郎は僅かに迷ったあと、延珠の肩に両手を置いた。

延珠にティナと殺し合つて欲しくはない。今でもティナが犯人とは信じがたい——だが、仮に犯人がティナだと言うのなら、それを見過ごすことなど出来ない。

「延珠。絶対に帰つてこい」

「…………うむ！ 妾に任せるが良い！」

延珠は一瞬ほかんとした顔を見せたが、腰に両手を当てると胸を張つて満面の笑みで宣言する。

行つてくる、と瞳を赤熱させると、手近なビルの側面を駆け上がり次々と高いビルへ飛び移っていく。

せめて義足が無事ならば、と八幡は菌噛みした。スラストユニットを装着し、機械化歩兵の中でも随一の機動力を持つ八幡であれば延珠とともにティナを追うことはそう難しくはなかったはずだった。もしくは銃があればカウンスナイプの算段が立てられたものを……

野次馬の喧騒が鬱陶しい。普段ではそう気にしない喧騒も、身を焦がすような焦燥の中であつては八幡の神経を逆撫でするも同然だった。だが焦燥のほどで言えば、蓮太郎の方が遥かに上だろう。延珠の保護者も同然である蓮太郎からすれば、彼女をティナ追

撃に差し向けることは苦渋の決断であった筈だ。

ブウウウン、と虫の羽音のような音を八幡の耳が捉えたのはその時だった。

聞き覚えのある音。まるで雀蜂が羽ばたいている時のような鈍い羽音。一度目の狙撃の時にも経験した、八幡にとつては既知のもの。

またか、と八幡は周囲に視線を巡らせる。数瞬後、八幡が視界に捉えたのは飛翔する球状の黒い物体だった。拳大の球体が蜂や蜻蛉のようにホバリングし、ほとんど音もなく飛び回る様は、悪い夢でも見ているかのようだ。そしてその球体が生物のような挙動で中心のカメラを向けている事に気付いた瞬間、八幡は懐のホルスターからグロック拳銃を抜き放っていた。一目で知れた。これは「目」だと。そしてその脅威度まで察せられた瞬間、八幡は球体のカメラアイを撃ち抜いていた。

カメラアイを撃ち抜かれた球体は一瞬激しい挙動で飛び回ったものの、高度を保つことは叶わず硬質な音とともにコンクリートの地面に落下した。

「()は……」

「なんなんだよ、それ」

飛翔する球体のカメラ、としか形容のしようがなかった。一見コンパクト化されたドローンのようなではあったが、その隠密性は比べ物にならないだろう。操作方法がどのようなものであれ、的確な使い方をすれば恐ろしい補助兵装になることは想像に難くな

い。

「里見さん！ 比企谷さん！ 今すぐ延珠さんを戻して！」

球体をつま先で小突く蓮太郎と八幡に、聖天子が走り寄る。蒼褪めた表情で半ば悲鳴のような声をあげる姿は、普段の落ち着き払った姿とは似ても似つかない。

「聖天子？ おい、どうしたん——」

「比企谷さん、私の権限でティナ・スプラウトの名前をIISOに照会しました！」

蓮太郎の言葉を遮ってまで堰を切ったように話す聖天子。だが八幡にとっては狙撃犯の可能性がある相手の情報は喉から手が出るほど欲しいものである。

八幡は続きを聖天子に促した。

「ティナ・スプラウトの序列は九十八位。『NEXT』と呼ばれる強化兵士で、モデル・オウルのイニシエーターです。延珠さんでは殺されてしまいます！ 早く彼女を戻して下さい！」

序列——九十八位。

聖天子の言に蓮太郎と八幡は戦慄する。

怨敵蛭子影胤よりもなお高い、序列百番の壁を超えた猛者。

かつて蓮太郎と八幡が撃破した影胤でさえ、勝利できたのは影胤が蓮太郎、八幡と連戦したからであり、それ以上に運の要素が絡んでいたからである。それ以上の強さを持

つ相手に延珠が単騎で挑んだりなどしたら——

慄然とする思考の傍ら、八幡は状況を冷静に分析していた。

モデル・オウル。フクロウのイニシエーター。フクロウは夜闇を見通し、人間を超える動体視力を持ち、その視力は人間の八倍にも及ぶ。

そしてその序列九十八位と言うのが真実であるならば、八幡がマンションで襲われたとき生きていられた筈がない——彼女が遠距離戦闘を主体とするイニシエーターでない限りは。

つまり、今回の狙撃事件の実行犯は彼女である可能性が高い——そこに思考が至つてから、八幡は己の致命的なミスを痛感した。テイナが確かな戦術眼を持つならば、自分の位置が特定され距離を詰められる事態も想定している筈だ。だとすれば、延珠は自ら畏にかかりに行くようなものだ。フクロウの動体視力を持つてすれば、ウサギの挙動を捕捉することはそう難しいことではない。近接されない限り狩人とはテイナであり、獲物は延珠ウサギなのだ。

「里見！ 連絡を！」

「今延珠にかけてる！」

里見の声は八幡以上に切羽詰まっていた。蓮太郎が八幡と同様に事態を把握しているのかは不明だが、決して頭の回転が悪い男ではない。八幡の声音を察した事で蓮太郎

の焦燥に拍車をかけたらしい。

不意に、スマートフォンに耳を当てていた蓮太郎が弾かれたように頭を上げた。

「延珠？ 延珠かッ！ 良かった！ 今すぐ戻ってこい、態勢を立て直すぞー！」

返答はなかった。聞こえるのは、電話口から漏れ出る僅かな呼吸音のみ。

「延珠……？」

反応のない電話口に、蓮太郎が怪訝な声で問いかける。答えはない。そも——電話の向こうでスマートフォンを手にとっているのが、果たして彼女であるのかどうか。

「おい……まさか……ティナ、なのか……？」

蓮太郎の問いかけに答えはない。

その沈黙が、何よりも雄弁に物語っていた。

延珠のスマートフォンがティナの手にあるという事実は——藍原延珠は、ティナ・スプラウトに殺害ないし無力化された。そう捉えて間違いはない。

嘘だろ、と蓮太郎の乾いた唇からうわ言のように漏れ出る。そのまま蓮太郎は冷たいコンクリートの地面に両膝をついた。

手元のスマートフォンは既に延珠の連絡先とは繋がっておらず、画面には不通表示が映し出されている。

蓮太郎のスマートフォンが手元から滑り落ちる音が、閑散とした駐車場に虚しく響い

た。

目には目を、兵士には兵士を 前編

「第二回非公公式会談の会談場所となつたのがこの『鶴登呂亭』。その正面から狙撃地点となつた建設途中の高層ビルの間の距離は、約一五〇〇メートル——前より遠いけどここから奴さんが撃ってきたんはまず間違い無い」

世界有数の重工業産業を担い、東京エリアにその本社を置く司馬重工本社ビル——その一角に敷設された司馬重工の令嬢たる司馬未織の私室に、比企谷八幡は招き入れられていた。

八幡の目の前では和服を纏つた未織が青白く光るホログラムディスプレイを手に持つた扇子で操作している。案の定映し出されているのは、狙撃地点と着弾地点を模した3DCG映像である。

以前勾田高校の生徒会室に似たような理由で招かれたことがあつたが、司馬重工の令嬢の私室はかつての生徒会室とは一線を画していた。

最先端技術によつて組み上げられた、機械的で整然とした部屋である。ホログラムによつて組まれるディスプレイも、未織の動きを察知して作動するセンサーも、部外者で

ある八幡を今も追尾し続けているカメラも、悉くが最先端技術の結晶だろう。一部では……というより、かなりの分野で董の研究室を上回っているだろう。そもそも、たまに来る里見が掃除をしなければ足の踏み場もないほど雑然とした部屋と比べるほうがどうかと思うが。

なるほどこれでは年頃の女子が男を自室に招いたところで、不安要素など欠片もあるまい。それ以前にこの部屋で未織に邪な感情を抱ける男のほうが相当肝が座っている。「これが、今回の狙撃で使用された弾丸。口径は既存の弾丸のどれとも一致せず、どれよりも大きい。勿論これが使用できる銃なんて存在しない」

八幡の目の前に差し出されたのは警察の鑑識が使うような証拠品袋に入れられた計五発の弾丸である。

八幡は証拠品袋の中に入った弾丸をまじまじと見て、かぶりをふった。

「12. 7 mmより明らかにデカイな。まさか14. 5 mm弾か？」

そう言つて八幡は弾頭の僅かに歪んだ弾丸を袋の上から弄んだ。そして改めてその大きさに閉口する。こんなもので狙撃されたら原型を留めないどころの話ではない。威力はアンチマテリアルライフルすら優に超え、装甲車ですら貫通を許すだろう。上半身を打ち抜かれれば木っ端微塵に四散することは想像に難くない。既にその光景を八幡は目の当たりにしている。

護衛隊のポリカーボネート製のバリステイクシールドを粉碎し、機動隊の頑強な防護服をもろとも四散させた悪夢の如き光景。頭部を衝撃波で頸部もろとも吹き飛ばされたバンのドライバーも同様、痛みすら感じることなく——いや、自分が撃たれたことすら理解せず絶命したことだろう。人型に向けるには過剰極まりない殺傷力ではあるが、その点についてだけはむしろ慈悲深いとも言えるかもしれない。

弾丸を手で弄んでいた八幡が、ふとなにかを見咎めたかのように弾丸をしげしげと見つめる。弾丸が鈍色ではなく、見慣れた黒い光沢を放っているのだ。

「こいつは……まさか、超バラニウムか？」

「せや。ただでさえ特注の弾丸で金かかっているつてんに、バラニウム製じゃなく更に高コストな超バラニウム合金を使うとる。なんでわざわざそんなことしたのかは、まあ心当たりがないわけでもないんやけど……」

そう言つて、未織は言葉を切った。どう説明したものか思案している様子である。

そも、今回の狙撃で何故超バラニウム製の弾丸が使用されたのかは、八幡としてはとんと理解が及ばない。そも、今回の狙撃の対象は聖天子であり、言うまでもなくガストレアではなく人である。わざわざバラニウムを使う意味はなく、超バラニウム合金であつても同様だ。ティナの得物がアンチマテリアルライフルをなお超える破壊力を持つ以上、弾芯の硬度を高めて貫通力を上げるといふ意味合いも薄い。

思索に耽る八幡に、未織が声をかけた。

「狙撃対象が人であり、ガストレアではない。貫通力を高めるにも、聖天子はせいぜいリムジンに乗る程度だから、それなら軍用のフルメタルジャケット弾で事足りる。

なら、なんでわざわざ高価な超バラニウム合金を使うたのか——それはな、比企谷ちゃん。目的が狙撃対象やなく、銃身のほうやったからや」

「……つまり？」

「比企谷ちゃん、ムカデ砲って知つとる？」

「……確か、第二次大戦時にナチスが開発した固定砲台だろ」

未織の唐突な質問に間を空けて答えながらも疑問符を浮かべる。質問してきた以上そこに答えがあるのだろう。それに兵士としてそれなりに兵器に精通する八幡は、その概要をある程度知識として修めていた。

「せや。正式名称V3 15センチ高圧ポンプ砲は、ナチスドイツがロンドンに直接打撃を与えるために作られた報復兵器。その本質は長大な砲身内で砲弾を複数回加速することによる超長距離砲撃にあつたんや」

「砲弾を複数回加速……？　そうか、それならあの弾速にも説明がつく」

未織の説明により、八幡に理解の兆しが現れる。もとより頭の回転は早い方である。丁寧な説明を受ければ概要を理解することに苦労はなかつた。

「狙撃手の使用する銃にもその構想を落とし込んだという仮定が正しければ、や。ただ、もともと砲全長が数十メートル単位の兵器を個人携行兵器にまでスケールダウンしたんやから、相応の無理があつたはずや。それでも、最先端技術を結集させれば、理論的には不可能やない」

最新の発射薬、高価極まる精密機器、メンテナンス用の機材、e t c e t c …… それらにかけるコストの割に合うかはともかく、完全な個人専用の銃器としてチューニングを施せば、運用自体は理論的に不可能ではないだろう。

「あとは弾丸と銃身に使用する素材……高い耐熱性に一定の軟度、そして圧倒的な硬度……フルメタルジャケットよりも超バラニウム合金の方が適任や」

八幡は手で弄んでいた弾丸をテーブルの上に投げ出すと顔をしかめ、頭をかいた。つい先日、行方不明だった延珠がモノリス郊外の廃墟で発見された。彼女は致死量の数十倍もの麻酔を静脈投与されたのち用済みの道具を放るかの如く捨て置かれていたという。

保護され緊急入院した延珠に縋る蓮太郎の憔悴ぶりは記憶に新しい。延珠は負った負傷の回復の為に費やした代謝促進による極度の飢餓、そして栄養失調に侵されていたが、逆に言えばそれだけの症状で済んだとも言える。被弾したときの弾丸や破片が体内に残ったまま再生することもなく、あれだけの負傷を負ったにも関わらずを経過は良

好、安静にしていれば数日後には目を覚ますとだろう。むしろ入院すべきは蓮太郎の方だと医師より宣告を受けていた。

蓮太郎は延珠と違い肉体面ではただの人間である。延珠が死んだと聞かされ発見されるまで何も口にしなかったに違いない。発見が遅れば蓮太郎は餓死していたことだろうという程の憔悴ぶりだった。

彼らの責任は自分にある。その自覚はあるが、それ以上に現状の打開策が八幡には思いつかなかつた。

「司馬。欲しいものがある」

渋い顔をしながら口を開いた八幡に、未織は首を傾げながら話を聞き——それでいいのかと胡乱な表情を見せながらも納得した。

「別に構へんけど……あんなアナクロなこと本気でやるん？」

「めんどくさいのはわかるが、とにかく頼んだ」

現状で出せる案はこれしかない。その可能性がいくら低かろうと、少なくとも義足が片方大破し八幡が取れる案の中では一番マシだと言えるものだった。

×

×

×

司馬重工本社ビルを後にした八幡は、そのままの足で勾田市の大学病院地下を訪れていた。

『四賢人』室戸董の住居たる地下研究室である。

照明が壊れているのか市販の豆電球のような頼りない光源しかない研究室は、乱雑に積まれた資料や怪しい液体の入ったビーカー、更にはアダルトゲームといった類のパッケージの山が所々に散乱しており、混沌とした様相を呈していた。

典型的な整理整頓の出来ない人間の住む部屋だと思いつつながら、八幡は勝手知つたる風体で山々を避けながら奥へ奥へと歩いていく。気分はまるで秘境探索者だ。ジャングルの奥地にだつてこんな珍妙な場所はあるまい。

とんがり帽子の魔女がプリントされた人よけをくぐり、刺激臭のような強烈な芳香剤の匂いに鼻をつまみながらアダルトゲームの小山を跨いだ先には、よれた白衣を纏つた董が長い足を組んでスツールに座り込んでいた。

皺のよつた資料をぶつぶつと言いつつと言いつつながらめくる董の様子は、傍から見ても苛立ちを隠しきれていない。

「センセ」

「……ん、八幡くんか。遅かったじゃないか、蓮太郎くんはもう来たよ」

資料に落としていた視線をこちらに向けた董は、手入れを怠っているのか艶を失った髪を手櫛で雑に梳いた。

目の下に隈を作り、苛立ちを隠さない董には普段の美貌もみる影もない。

「どうしました、ひどい顔してますが」

「まずはかけたまえ。コーヒーはいるかね？ 少なくとも豆だけは上等だよ」

「いただきます」

董は立ち上がると手元の資料を八幡の方へ放り、コーヒー豆をサーバーに突っ込んだ。八幡は宙をひらひらと舞う紙束を掴み取ると、内容にさつと目を通した。

「君が先日拾ってきた球形物ビット、あれの解析が済んだ。細かい精査はまだだが、ある程度の内容は解明したといつていい」

ガリガリとミルが硬い音を響かせるのを尻目に董が振り返る。

「それにはあの球形物ビットのおおまかなスペックを書き記してある。君がカメラアイをぶち抜いてくれたおかげで、大雑把なことしかわからなかったがね」

ついでに自爆装置の信管もぶち抜いてくれたからプラマイゼロかな、と董は鼻で笑った。

「このサイズに爆薬まで埋め込んでるのかよ」

「とはいっても微々たる量だ、自壊用だろうし至近距離で起爆しても死にはしないさ。私も怪我をせずにすんだ」

八幡にコーヒーが注がれたビーカーを差し出すと、董もまたコーヒーを睨りながらどつかとスツールに腰を下ろした。

「さて、これは蓮太郎くんにも話したが、件の狙撃手のプロモーター、そいつは私の既知だ。以前に話しただろう？ 『四賢人』が一角、エイン・ランドだよ。奴について君はどれほど知っている？」

『NEXT』の責任者つてことぐらいですが。生憎彼とは面識がないもので」

「ふむ。当然だね」

董はやや型の古いノートPCを作業台の隅から引っ張り出した。内蔵されたドライブには既にディスクが入っているらしく、ほどなくして起動したノートPCはプロジェクトターと連動し、画面を映し出す。

再生された動画の画質は荒く、BGMもなければろくに編集された気配もなかった。まさしくただの「記録」といった風情だ。

動画の中では、軍人と思しき屈強な体格をした禿頭の男が、アイマスクをしたまま拳銃を構えていた。白い殺風景な部屋だ。射撃場とでも言うべきか、男の約一五メートルほど前方には人型のターゲットが置いてある。

盲目のまま標的を撃ち抜こうというわけではないらしく、禿頭の男は纏っていたジャケットのポケットから見覚えのある拳大の球形物を三つほど取り出した。虚空に放り投げると球形物はそのままコンクリートに落下することは無くふわりと浮き上がり、男の周囲を旋回しはじめた。

男がまるで行け、とでも言っているかのように腕を振り下ろすと、旋回していた球形物は一齐に標的へと飛んで行つた。男が拳銃を構え、銃爪を引く。ぱん、と乾いた音が何度か響き、標的の中心に弾痕が刻まれた。

「……これは？」

「君はブレイン・マシン・インターフェイスという単語に聞き覚えはあるかい？」

「いや、と首を振る八幡に董は続ける。

「その名の通りB M Iは被験者の思考によつて動く。古くは生体工学バイオニクスに端を発する生体電流によつて駆動する機器さ。君や蓮太郎くんの義肢にも幾らか応用されている技術だよ。これは被験者の脳に極小のニューロチップを埋め込んでいるのさ」

「それがこの球形物のカラクリの正体だと？」

「その通りだ。今回の狙撃手に施された手術はこれだけじゃない。狙撃には拳銃や突撃銃アサルトライフル以上に手ブレの影響は大きいと言うじゃないか。おそらく体内に金属製のパラセンサーを仕込んで心臓の鼓動と呼吸による手ブレを完全にシャットアウトしているは

「ずだ。このくらいの処置なら、仮にも天才と言われた奴なら鼻くそをほじりながらだつてできる」

「——何？」

董の放つた聞き逃せない言葉に、八幡は反駁した。

「待つてくれ、先生。狙撃手に手術だつて？ 今回の狙撃手はイニシエーターで、イニシエーターに外科手術なんか……」

「そうだ。もちろんバランサー程度なら八幡も董の手によつて仕込まれている。しかしそれは八幡が《奪われた世代》であつて、ガストレアウイルスの恩恵を受けていないがためである。《無垢の世代》のイニシエーター達は、そもそもがバラニウム以外による外傷をほとんど受け付けない。手術のしようがないのだ。」

「……まさか」

「そう、そのまさかだ。エイン・ランド、あの外道はね、健康体の《子供たち》に成功率極小の機械化兵士手術を施しているんだよ。バラニウム製の機器を使ってね」

「そんな馬鹿な。プロモーターが機械化兵士だつて線はないのか？ I I S O に情報があつて以上民警だろう。相方のプロモーターがいるはずだ」

「それはない。ティナ・スプラウトのプロモーターはエイン・ランド本人だと言つたらう？ 幾ら天才でも自分の脳みそに自分自身でニューロチップを埋め込むなんて芸当は

できないよ」

「……他に協力者がいる可能性は？」

「その確率も低いだろう。奴はプロ意識が高い。己のイニシエーターだけで事を成し得ようとするはずさ」

《子供たち》はバラニウム以外による外傷に対し強い耐久性と再生能力を誇る。それは翻ってバラニウム製の機器による手術をエインは敢行したことと同義だ。

もともとが成功率の極めて低い機械化兵士手術である。蓮太郎や八幡のように手術を受けるか、さもなければ死ぬかの二択しかなかった人間しか機械化兵士の是非を問われることはない。

再生能力を阻害するためにバラニウム性の機器で身体を開けば、再生能力はもとより生命力すらも大きく減じられる。身体の未発達な《子供たち》に対しては、瀕死であろうとも通常の機器で施術される一般人よりも成功率は更に低かったに違いはない。一体何百人の《子供たち》が手術室に連れ込まれ、そしてそのうちの何人が生還したのだろうか。

「機械化兵士プロジェクトに携わった私やエインを含む四人の責任者はね、結成前に一つの誓いを立てたんだ。『我々は科学者である前に医者であろう』とね。それは手術の圧倒的成功率の低さもあつたが、なにより患者の意思を尊重し、生命に対する畏敬の念

を忘れないためだ。覚えているかい？ 君が下半身を丸ごとガストレアに食い千切られ、瀕死のまま私のラボに運び込まれてきた日を。あのとき私は君に問うたね。手術を受け、私に命以外の全てを差し出すか、あるいはこのまま死ぬか、と」

そして八幡は超バラニウムの義肢を手に入れた。

忘れた事はない。あの日、朦朧とする意識の中、白衣を纏った董が八幡に問うたあの言葉を。生という名の報復か、汚辱にまみれたままの死か——彼は受け入れた。報復と言う名の未来を。あの呪わしいガストレアへの報復のため、悪魔に魂を売り払う事も厭わなかった。俺から奪っていった分だけ、今度は貴様らから奪い尽くしてやると。もう五年近くも前の話だ。

しかし思えば、確かに董は八幡の意思を尊重していた。生か死かという究極の二択ではあったが、八幡には選択の余地があったのだ。

「我々は医者だ。私たちの技術は人の命を救うためにある。外傷を治療し、病魔を癒し、失われた四肢を取り戻して、死に瀕した患者をこの世に繋ぎ止めるのが私たちの責務だ。決して患者に望まぬ施術を強いるためにあるんじゃない。まして右も左もわからぬ《子供たち》に、生きて帰れるかもわからない機械化手術を施すなどと……ッ!!」

董が台に拳を叩きつけた。衝撃で台の上のピーカーが跳ね上がり、リノリウムの床の上に落下する。ぱりん、という高い音と共にピーカーが砕け散り、半ばほど残ったコー

ヒーが広がっていく。

ビーカーの破片を拾い上げながら、八幡は董の怒りの度合いを感じ取った。薄暗い照明と、普段から資料や器具が散乱しているが故に気付かなかつたが、見てみれば董の周囲には飛び散ったプラスチックや試験管の破片や、破れた資料の束が散乱している。八幡が訪れたときから苛立っていたのは傍目からでもわかつたが、事前に蓮太郎がこの事実を伝えていたのが原因だろう。董の激昂の具合は今回の比ではなかつたはずだ。

肩で息をしていた董が大きく息を吐き出し、再び脚を組んだ。やや落ち着いた様子の董が口を開く。

「思考駆動型インターフェイス『シエンフィールド』。奴が切ってきた手札はそれだ。失敗作だと思っていたんだが、どうやらこの数年で完成させたらしいな」

「失敗作？」

八幡の問いに董は頷いた。手元の完全に動作を停止した球形物——『シエンフィールド』を長い指で弄びながら続ける。

「ああ。映像にあるこいつのプロトタイプはね、脳に埋め込まれたニューロチップが強い熱を発して被験者の脳を焼いてしまうんだ。映像の男も結局死亡しているし、失敗作のまま終わったと思っていたんだがね。『シエンフィールド』自体の性能も上がっているようだ」

言い切った董はさて、と前置きし八幡の方へ振り返った。

「八幡くん。グッドニュースとバッドニュースがある。どちらから聞きたい？」

「じゃあ、グッドニュースを」

「いいだろう。まず、プロモーターであるエイン・ランドの戦闘力は皆無だ。断言しよう。そこらの中学生だって金属バットがあれば殴り殺せる」

「バッドニュースの方は？」

「IP 序列九十八位という数字は、ティナ・スプラウト単体の戦闘力によって保持されているという事だ」

国際イニシエーター¹監督機構⁰が発行するIP 序列——その『IP』は、イニシエーターとプロモーターの頭文字であり、序列は民警ペアが挙げた戦果プラス、ペアによる戦闘能力の総合値によって算出される。

つまりエイン・ランドの戦闘力が皆無である以上、その九十八位という規格外の数値はティナ個人の戦闘力によってもたらされているものであり——極論すれば、かつて死闘を繰り広げた蛭子影胤、蛭子小比奈ペア、あの二人よりもおティナ個人の戦闘力は高いということである。

八幡はふと頭を上げた。蓮太郎が事前にここに来ていたというのなら、董からこの話を聞かされていたはずだ。

「先生、里見は？」

「行つたよ。ティナ・スプラウトを倒すつてね」

「何故止めなかつたんです」

「止めたさ。理詰めでも説得したし、情にも訴えた。私の声は彼には届かなかつたようだがね」

やれやれ、と董はかぶりを振つた。力無い笑みの奥には諦観が滲んでいる。

言葉では蓮太郎は止まらない、というのには八幡も同意見だつた。董を責めるのは筋違いだ。

「彼は私の希望だつた。表面上こそひねくれてはいるが内面はまつすぐで、そのありようは私には眩しい。眩しいくらいの光だ。闇に生きる私に止められるはずもないのさ」

「先生……」

「蓮太郎くんが行くんだ、どうせ君も行くのだろう？ リスクは避けながらも結局は首を突つ込む君の性質はわかつてるんだ。『シエンフィールド』の性能を記した資料は君にあげるよ。 餞別だ」

×

×

×

生温い湿気を含む空気が肌にまとわりつく中、ティナ・スプラウトは覚醒した。

カーテンの隙間から差し込む月明かりが肌を青白く照らす。午前三時。夜中だ。

時刻を確認しながら汗を拭う。湿った前髪や下着が肌に張り付くのが酷く不快だ。

仮拠点にしているアパートの中には、食べ散らかしたジャンクフードの残骸が散乱し、脱いだ衣服がそこかしこに散らばっている。すぐにでも引き払う拠点故にそこまで頓着しなかったというのもあるが、それにしても生活感に溢れすぎている。

すぎすぎと痛む偏頭痛めいた頭痛に頭を抑えながら簡素なベッドから起き上がると、不意に傍のテーブルに転がった端末が振動した。

液晶に写し出される発信者の名は――

「私です」

『何をしていた。何度もコールしたのだぞ』

「申し訳ありませんマスター。……少し仮眠をとっていました」

『……第三の警護計画書が流れてきた。そちらの端末に送る』

簡素な電子音を響かせ送られてきた情報をホロディスプレイモードに切り替えて確認する。虚空に投影されたホログラムは東京エリアの複雑な地形を映し出し、警護ル―

トを詳らかにする。

ティナはそのルートの拭いきれぬ違和感に眉をひそめた。

「マスター」

『なんだ？』

「この警護計画ですが、違和感があります」

『……ふむ？ 何が言いたい』

「この警護ルートですが、あからさまな狙撃ポイントが一つ、あつらえたようにあります。しかも会談の場所も以前のガラス張りの高層ホテル——まるで狙撃してくれと言わんばかりです」

『要領を得んな。簡潔に言え』

「罨ではないかと」

端末を介してエインは沈黙した。情報を整理し黙考する気配が伝わってくる。

『聖居内に内通者の存在が露見した形跡はない。杞憂だ』

「あからさま過ぎます、マスター。なんらかの罨が仕掛けられているのは明白でしょう」

『杞憂だ、と言った。貴様は余計なことを考えるな』

にべもない。しかしティナは食い下がった。

「嫌な予感がします。会談はまだ続くのでしょうか、今回ばかりは様子見に徹した方がい

いかと」

『ならぬ。我が主は二度の機会を逃して大変ご立腹だ。今回で確実に仕留めろ』

「……」

『おい……ティナ。ティナ・スプラウト』

ふと、エインの声が俄かに剣呑な響きを帯びた。知らず身体が硬直する。

『前回、暗殺を失敗した貴様を追ったイニシエーターがいたな』

「はい」

『先ほど、そいつが生きているという情報があった』

「……確かに殺したと思ったのですが」

苦しい言い訳だった。大袈裟に驚いてはみたが、相原延珠の情報をエインがどれほど掴んでいるかに賭けるしかない。現状を知れば手心を加えたことは露見するだろう。

『ティナよ、貴様よもや……私の命令に背いてはいまいな？』

「無論です、マスター」

不気味な沈黙が場を支配した。張り詰めた空気の中、ティナは電話の主に悟られぬよう、手汗を拭い、唾液を嚥下する。

『……ティナ。私の可愛い作品。今一度貴様に問う。貴様の主は誰だ？』

エインの声が殊更に硬く冷たく、しかし微かに嗜虐の色を帯びる。自らの道具に、今

一度刷り込もうというのだ。そしてそれは自分の存在がなんなのかティナに再び自覚させるものだ。

「……貴方です。プロフェッサー・ランド」

『貴様は誰のおかげで生かされている？』

「すべて貴方のおかげです。プロフェッサー・ランド」

『貴様はなんだ？』

「貴方の道具です。プロフェッサー・ランド」

『……ならばいい。自覚せよ。忘れるな。貴様が私によつて生かされていることを』

「はい」

『もはや後はないぞ、ティナ。失敗は許されん。見限られなければ事を成せ』

「……もし、畏だつた場合は？」

ティナは反駁した。精一杯の抵抗だつたと言つていい。

しかしエインはどこまでも頑なだつた。

『畏ならば食い破れ。その上で聖天子を抹殺しろ。あの程度の民警風情に遅れをとることとはあるまい。だが万が一、敗北するようなことがあれば——』

エインは言葉を切つた。

『死ね』

ティナは目を閉じた。小さな手を痛いほどに握りしめる。見限られることなどわかってきた。

『自害しろ。私の作品に失敗作はいらん』

それだけ告げると、エインは通信を切った。ティナの返答すら聴く間もなく。

ティナはベッドの上に座り込むと、そのまま膝を抱えてうずくまった。あれほど不快に感じていた汗は冷え、濡れた髪や下着が体温を奪っていく。

前回の襲撃の時点で、ティナの狙撃を妨害した民警——比企谷八幡は無力化したと見ている。アンチマテリアルライフルをなお超える威力と貫通力の弾丸をその身に受けたのだ。当てた、という直感があった。ならば、その弾丸が身体のどこに当たっていたとしても即死しないしは致命傷、最低でも戦闘力は喪失したのは間違いない。ならば、目の敵は里見蓮太郎のみ。

もし、とティナは空想する。もし、八幡のコンディションが万全で、蓮太郎と組んで挑んできたとしたら、ティナもまた遅れをとったかもしれない。しかし、残る蓮太郎一人ではどう足掻いてもティナを破ることは不可能だ。まるで赤子の手を捻るかのように蓮太郎は翻弄され、その身を四散させるだろう。

向かってきたなら殺すしかない。助けてくれたのに、面倒を見てくれたのに——

「——お願い、来ないで……」

テイナはシャワーすら浴びずに手元の毛布をかき抱いた。窓にかけられたカーテンの隙間から白みはじめた空が見える。もうすぐ、夜明けだ。もうここも引き払わなければ。

目には目を、兵士には兵士を 後編

東京エリア——

二〇二一年にガストレアによる侵攻を受ける以前より、一千万を超える人口を保有するメガロポリスであった東京は、侵攻後に東京エリアと名を変えた後もやや人口が減りこそすれ、その高層建築の数々や近代開発の波により、大阪エリア、仙台エリアとは今なお一線を画す規模を誇っていた。

東京エリアを囲むように建造された、天を衝く漆黒の威容——モノリス付近こそ打ち棄てられ、今はホームレスしかいない廃ビル群が残されるばかりであったが、モノリスから一メートルでも離れるよう、増築に増築を重ねた超高層建築は中心に向かい乱立している。

そういう歪いびつでありながらも心理的には当然ともいえる発展を遂げた東京エリアは、その性質上モノリス付近の外側に対しては、中心付近の内側と比べ酷く無関心だ。つまりは上流階級の市民様は内側に引きこもり、除け者は外側に吹き溜まる、というのがガス

トレア大戦後の常識だった。

比企谷八幡は内側とも外側ともつかぬ微妙な塩梅の位置に開いていた、落ち着いた雰囲気喫茶店で一服しながら、東京エリア全体の地図と聖天子の警護計画書を眺めていた。既にどちらとも赤や青のボールペンで幾度となく添削がなされており、持ち主の熟考具合が窺える。

誰が見ているかもわからぬ喫茶店で無造作に重要書類を広げるのは不用心と思われるかもしれないが、監視カメラもなく、人の来ない奥まった席で見ると分には問題はないと判断していた。たまたま聖天子暗殺計画の関係者がたまたま同じ喫茶店に居合わせ、八幡の手元の資料を覗くことはまずないと判断した結果である。

八幡は頬杖を外し控えめに伸びをすると、冷め始めた傍らのコーヒを啜る。徹夜を重ねて睡眠不足に陥った脳がカフェインを求めている。人の住める状態ではなくなったマンションを引き払い、愛猫カマクラを葦に預けて仮拠点に移動、それから一睡もせず動き続けていた八幡には確実に疲労が蓄積していた。ここらで一息入れたいところだったが、状況は未だ予断を許さず、作業の進行具合によってはもう一徹ほど覚悟しなくてはならない。甘党の彼は砂糖とミルクをいつもより気持ち多めに投入すると、一息に飲み干した。

気分を一新した八幡は再び資料とにらめっこを始めた。

手元の警護計画書は、以前の警護二回とは打つて変わつて杜撰とも取れる仕上がりであり、あからさまな狙撃ポイントが一つ、まるであつらえたかのように存在している。勿論、これは狙撃手を誘い出すための罠である。聖天子を護送するルートに一つ。そして今回の会谈場所は以前にも使用した高層ホテルである。そして会谈をする階層は全方位がガラス張り——もちろん、アンチマテリアルライフルの狙撃を到底凌げるものではない。

つまりは、狙撃犯であるティナには代償として最低でも二回のトリガーチャンスを与え——代価としてティナの狙撃ポイントを割り出そうというのだ。

とはいえ、すでにその作業は昨夜の内に完了していた。東京エリアは中心部に近づくのに従い、高層建築物が加速度的に増加する。会谈場所の高層ホテルもその例に漏れず、周囲に高層ビルが乱立している以上、建物自体が狙撃の障害とならないよう狙撃ポイントは厳選しなくてはならない。そして狙撃に関しては、より標的と高度が近い場所を選ぶのが定石だ。標的が狙撃地点より高過ぎると射角が取れず、撃ち下ろしの射撃では弾道計算が複雑化し、狙撃の難易度が飛躍的に高まる。ティナの技巧をもってすれば多少の高度差があっても不可能ではなからうが——恐らく、今の彼女にはもう後がない。

彼女のバックについているエイン・ランドの性質については董より聞かされていた。

プライドと自尊心が高く、プロ意識の強い男。そんな男がティナの任務失敗をそう何度も許すはずがない。絶好の機会を得た今回、相当彼女にプレッシャーをかけている事だろう。ティナは可能な限り成功率を高めようとするはずだ。

その上で、道中の狙撃と会談時の狙撃——両方に臨める狙撃ポイントは四箇所。内二つはエリアの内側にあり、片方は高層マンションの屋上。これは人が多く居住している以上減音が困難な得物を持つティナが選ぶとは言い難く、もう片方は給水塔が邪魔をして狙撃する場所が確保しづらい。なにより人通りの多い大型の交差点が至近にあり、更に逃走経路の確保が困難。

消去法により外部居住区——外側の、ガストレア大戦以前の名残である廃ビル群の屋上と、より東京湾沿いに位置する打ち棄てられた高層マンションに絞られていた。

昨夜未明に近辺の古いアパートが火事になる騒ぎがあったらしい。事故や自然発火などではなくあからさまな放火だったことと、築数十年以上の古い木造建築だったため、柱や基盤が腐っていたのか建物が丸ごと倒壊し、作動した火災報知器もほとんど意味をなさなかったという。

消防車が駆けつけたときには大量の火の粉を巻き上げながら倒壊していたというが、幸いにして居住者が一人しかおらず、その一人も外出中だったため怪我人が出ることもなかった。延焼する前に建物が倒壊したお陰で火の手は燃え移る対象を失い、目立った

被害はアパート単体で済んだという。

不思議な点があるとすれば、外出中だったという居住者が未だに姿を現さない点だ。本人からすれば外出中に住処と財産をまるごと失ったことになるから、なんの保険に入っていないかつたとしても失踪というには違和感がある。

八幡はその居住者を狙撃犯であるティナだと睨んでいた。近隣住民に聞き込みをした結果、アパートに出入りしていたのは年端のいかぬ少女だったという。居住者名簿にはあからさまな偽名が使用されており、医療機関や空港の顧客名簿にもその名は見られなかった。更に言えば倒壊したアパートの残骸からは、少女用とみられる衣服の燃え滓が発見されている。

偽の警護計画書が情報リーク容疑者に流されたのが一昨夜。そして昨夜未明にアパートが焼け落ち、住人は姿を消した……会談は警護計画書が作成されてから三日後。つまり明日の夜ということになる。間近に迫った任務に備え、拠点を放棄しその身を隠匿した、というのが真相だろうか。八幡は狙撃ポイントの特定と平行してティナの行方を追ってはいいたが、アパートの倒壊の報を受けてから搜索の手を完全に打ち切った。拠点を捨て雑踏に紛れる対象を追うのは困難だ。あとは予測できる狙撃ポイントに先んじて急行し、トラップを仕掛けておくのが最善の手だろう。

単独で事前に打っておける手はほとんど打った。ならば思考を無駄に費やして時間

を浪費する事もない。

八幡は思考の海に埋没していた意識を引き揚げると、手元の資料を畳んで席を立つた。

×

×

×

病室のカーテンの隙間から差し込む日光が角度を変えて白いシーツの上を滑っていく様を、里見蓮太郎は面会用の椅子に腰掛けながら見守っていた。

傍らのベッドには病院服を纏った延珠が横たわっている。彼女は保護されて以来、未だ一度も意識を回復させていないが、それでもガストレアウイルスの強力な治癒力は延珠の身体から綺麗に銃創を消し去っており、傍目から見れば眠っているだけのように見える。

延珠が保護されてから実に二日が経過していた。胴体に風穴を開けられただけに留まらず、致死量の数十倍の麻酔を静脈注射されて郊外に放置されていた延珠は、外見こそ今では問題はないが、意識の回復に今しばらく時間がかかるものと思われる。次回の

会談までに目を覚ますかどうかは五分といったところだ。

蓮太郎は董と決別してから、司馬重工本社ビルのVR訓練室でシミュレータ訓練を行う以外の時間のほとんどを延珠の面会時間に当てていた。司馬重工のテクノロジーを結集したVR訓練室は仮想空間が現実世界もかくやという再現度を誇り、各種兵器、爆薬が使用できあらゆる訓練が可能だった。

しかし、如何に司馬重工の誇るテクノロジーが蓮太郎の技術を向上させようとも、彼のメンタル面のケアまでは行えない。無心になって対狙撃手戦のシミュレートをこなしながら、蓮太郎は言いようのない焦燥感と無力感に苛まれていた。蓮太郎のティナとの関わりは、きつかけこそ八幡からもたらされたものであれ、彼よりもよほど長いあいだ彼女と関わってきた。故に聖天子襲撃犯が彼女だと知らされたときの衝撃はひとしおだったし、延珠が重傷を負って保護されたと聴いた時も無力感と罪悪感にうちのめされた。

蓮太郎は銃を握りすぎてマメが潰れた指先で延珠の頬を撫ぜ、枝毛など見つかりようもないさらさらの髪を梳いた。呼吸と共に膨らみかけの胸を上下させ、穏やかな表情で眠る無垢な寝顔が愛おしい。このまま待っていればすぐにでも起き出してきそうなのに穏やかな寝顔が蓮太郎の心を苛んだ。もっと早くにティナが襲撃犯だと気付いていれば、こんな結果にはならなかつたはずだと。

己の怠慢が聖天子を危険に晒した。己の怠慢が八幡から住む場所を奪った。そして今、己の怠慢が延珠をこんな目に遭わせている。

なによりも許せないのは己自身だった。他でもない蓮太郎自身が自分自身を責め立てる。気付けず、阻めず、守れなかった、己の無能を許すなど。

だが——仮に。テイナが聖天子暗殺を企てると一週間前の己に忠告したとして、蓮太郎自身はその忠告を聞いただろうか。脳裏にテイナの無垢な笑顔がちらついていた。おそらく蓮太郎は一笑に付したに違いない。そんなはずがあるものかと。延珠の寝顔を眺めながら、蓮太郎はテイナとの短くも穏やかな日々を回想する。少なくともテイナは、蓮太郎に対して一度たりとも負の感情を覗かせたことはなかったし、本心からの笑顔に向けてくれていた。一週間ほどの短い間ではあったが、彼女の心根は理解しているつもりだった。言動と行動は適当なきらいはあったが、少しだけ見栄っ張りで、いつも眠そうな顔も愛嬌があった。そんな彼女に親しみさえ感じていたのだ。一体どうして疑えようか。

苦悩と葛藤に蓮太郎は頭を抱えた。シミュレータで酷使した全身がじくじくと痛む。募る焦燥感と無力感に蓮太郎に自傷に近い修練を課し、つい数時間前、未織に丸一日のVR訓練室の使用禁止を言い渡されたのだ。

不意に病室に響いたノックの音に、蓮太郎は肩を跳ね上げた。延珠の眠るこの病室は

個室である。であればノックの主は延珠もしくは蓮太郎の関係者であり、赤の他人はありえない。

果たしてカラカラと扉を開けて病室に入ってきたのは、見慣れた黒のロングヘアと黒いセーラー服。天童木更だった。

「木更さん……」

「未織のところに行ったなら里見くんは帰したつていうから、きつとここだと思つて来たの」

蓮太郎の横に、立てかけてあつたパイプ椅子を広げて座つた木更は静かな寝息をたてる延珠に目を落とす。

「聖天子様の非公式会談の警護計画書ができたらしいわ。メールで送つたけど、見た？」

「……いいや」

「そう思つて来たのよ。里見くん随分自分を責めてるみたいだし、言われるまで気づかないと思つて」

呆れたように嘆息する木更を見て、蓮太郎は自らの不明を恥じた。鍛錬に腐心するのはいいが、日程すら把握せずにどう聖天子を守り、ティナを捕捉しようと言うのか。

「……それで？ 会談の日は？」

「明日の夜九時からよ。会談場所は最初に使つた高層ホテル」

「あそこか……」

聖天子の護衛として動いていたわけではない蓮太郎だが、過去二回の護衛計画についてはおおまかな概要を八幡から聞かされていた。高層ホテルも鶴登呂亭も、天童を木更と出奔する以前ならともかく、小市民である蓮太郎には縁もゆかりもない場所だ。

蓮太郎が聞かされた高層ホテルの場所を記憶から探りあてる中、木更が沈鬱な表情で口を開く。

「ねえ里見くん……無理しなくていいのよ。延珠ちゃんもこんな大怪我するような相手なんでしょう？ 危険すぎるわ」

木更の言葉に、蓮太郎は黙ってかぶりをふった。

目を合わせようともしない蓮太郎に木更は身を乗り出して、蓮太郎の双眸を覗き込む。頑なに子供を諭すように。

「比企谷くんだって襲われたって言うじゃない。それに義肢が破損したって……。このままじゃ里見くんだって襲われるかもしれないでしょ。藪をつつく必要なんてない」
「……だめだ。ティナは俺が止めなきや」

「どうして!」

木更は悲鳴のような声をあげた。

「どうしてそこまで固執するの!? あのティナっていう子、序列九十八位なんでしょう

？ 里見くんじゃ殺されちゃう！」

「じゃあ、黙って聖天子様を殺させろっていうのかよ！」

思わず木更は口籠った。

蓮太郎もまた、咄嗟に放ってしまった怒声に他ならぬ自分自身が面食らう。ばつが悪そうに目をそらすと気まずげに口を開く。

「比企谷は襲撃自体は凄いらしいがこの前の狙撃で負傷した。次の会談じゃあいつが聖天子を守り切れる公算は低い。それに——」

言葉を切る。

揺れる木更の瞳に目を合わせ、続けた。

「——あの子は、顔見知りなんだ。

聖天子が危険に晒されてるっていうなら、その責任の一端はティナのことを見抜けなかった俺にある」

束の間、沈黙が病室を支配した。

木更が蓮太郎の瞳をじっと見つめる。普段なら数秒も持たずに顔を赤くして目をそらす蓮太郎だが、今回に限っては真剣だとばかりに目を逸らさない。

決意は固いとみて、木更は呆れたように嘆息した。

「ほんとに、変なところで頑固なんだから。おばか」

「ごめん、木更さん。でも——」

ふと、息がかかる距離までに互いの顔が接近していたことに気付き、蓮太郎は慌てて顔をそむけた。ついさつきまで呼気のふれていた唇を手で抑える。

そんな蓮太郎の様子を目の当たりにした木更は瞬時に顔を真っ赤にすると、胸元を突き飛ばして乗り出していた身体を元に戻す。

「あだっ」

「ばっ、な、なに意識してるのよ！ 真面目な話してたのに！ ばか！ このお婆か

！」

「そんな無茶な……」

掌底をくらった胸元を撫でさすりながら蓮太郎がぼやいた。控えめな抗議にジト目を向けた木更は、頬の紅潮を隠すようにそっぽを向いてふんと鼻をならす。

「ごめん」

「……まあいいわ。それと、実は比企谷くんから伝言があるの。電話かけても出ないっていうから」

「比企谷から？」

制服の尻ポケットからたスマートフォンを取り出した。電源ボタンを押しても沈黙したままだ。延珠が負傷してから使う機会がなかったため存在すら忘れていた。最後

に充電したのは一週間近く前だった気がする。

「……どうせそんなことだろうとは思ってたわ」

項垂れる蓮太郎に助け舟を出すように木更は口を開いた。

「再充電するのも面倒だから口頭で伝えるわね。心して聞きなさい。」

——ティナ・スプラウト捕捉の算段がついた。概要の説明をするため今夜十八時まで
に司馬重工本社ビルまで来られたし。なお強制はしない。だそうよ」

蓮太郎の目が驚愕に見開かれた。一瞬だけ瞑目すると、力強く頷いて立ち上がる。
願ってもない提案だ。断る理由なんてどこにもない。

×

×

×

司馬重工本社ビルに着くや否や小さな会議室と思しき部屋に案内された蓮太郎を、未
織と八幡が出迎えた。

明かりはなく無機質なシステムデスクと椅子が並ぶばかりである会議室は青白いホ
ロディスプレイやプログラムに支配され、やや薄暗いものの光源に困ることはない。

勾田高校の生徒会室もまた日進月歩の現代科学を実感させたが、それを差し置いてなお一線を画す最新のテクノロジーを結集したような部屋である。

「里見ちゃん、いらっしやい」

いつものように着物を纏った未織は、手元で扇子をくるくると弄びながらホロディスプレイを操作する。各種センサーが未織の一挙手一投足を逐一観察し、それに応じた操作を完了させる。蓮太郎にはセンサーの位置もそれらのハイテク機器の理屈もわからない。畳とちゃぶ台で生活している彼には意識しづらいことだったが、目の前でこれだけ情報が目まぐるしく動く現代の科学がどれほど進んでいるのか再認識させられる。しかもこれがただの小さな会議室で、数あるうちのひとつだというのだから驚きだ。

対する八幡は未織と対照的だ。薄暗い会議室の隅に配置されたL字型のソファに腰掛けた八幡は、頬杖をついてデスクの上にノートパソコンを開いている。ブルーライトカットと思しき銀縁の眼鏡をかけた彼は、普段の目の腐り具合が緩和されより理知的な印象を受ける。

「とりあえずは次の警護計画について話そか」

「ああ」

八幡も作業を終えたようで、薄型のノートパソコンを閉じると向き直る。会議進行は八幡が務めるようで、ちらりと未織を見ると口を開いた。

「……一週間程度の間に聖天子暗殺未遂事件が二度起こった。どちらも普段は政務でほとんど聖居にいる聖天子が、非公式会談をするために外に出たときのことだ。どちらとも狙撃、しかも一キロ以上離れた超遠距離狙撃だ。ここまではいいな？」

蓮太郎は頷いて続きを促した。

「過去二回の狙撃で……いや、二回目の狙撃で、俺は負傷及び義足が片方破損した。推進剤漏れこそ起きなかったが、スラスターノズルと可変翼機構をやられて事実上戦闘機動は不可能だ。更には応援にきて貰った延珠も重傷……これについては、謝罪のしようもない」

八幡はそう言つて深々と頭を下げた。

本心だった。延珠に狙撃手の追撃を任せ、結果として一時的に行方不明、重傷を負わせるという事態を引き起こした。

「い、いきなり謝んなよツ。それにその件は別にお前が悪いわけじゃないだろ。提案したのはお前だけど、延珠にティナの追撃をさせたのは俺だ」

唐突に頭を下げられ、誰よりも面食らっていたのは他ならぬ蓮太郎だった。蓮太郎にとっては、自分たちが勝手に助けに行つて勝手に負傷したようなものだ。

そうか、と八幡は頷くと話を戻す。

「件の狙撃手——ティナ・スプラウトの捕捉だが、そうだな。里見はまだ見ていないだろ

うからこの警護計画書を渡しておく」

そう言つて手渡されたのは数枚の資料。第一区にある聖居から会談場所の高層ホテルまでの地図と、警護ルート、警護手段と護衛官の配置まで詳らかに言及してある。

「おい、これつて機密資料だろ。未織や俺みたいな部外者に見せちまつていいのよ」「どつちにしろ襲撃は確定してるんだからいいんだよ。それにその計画書はダミーだ」「なんだつて？」

ほら、とデスクの上に広げた資料の地図部分を八幡が指差す。よく見れば色付きボールペンで但し書きがいくつも書いてあり実に見やすい。

「このルートにあからさまに狙撃できるポイントがある。他に通る道なんていくつもあるのに、だ。そして今回の会談場所である高層ホテル。最上階は全方位ガラス張りだ。これらを餌にティナ・スプラウトを釣る」

なるほど、と蓮太郎は得心した。

八幡が未織に視線をやると、頷いた未織は手元でくるくると扇子を操つて虚空に浮かぶホロディスプレイを操作する。次の瞬間青白い光を放ちながら聖居から高層ホテルまでの3DCGがホログラムで表示された。警護ルートと予測できる狙撃地点が表示され、直線で結ばれる。

「その二点をスナイプできる地点は、ここの外周区の廃ビル群。そして海岸沿いの一際

高い高層マンションの屋上だ。このどちらかにおそらく奴は現れる」

「えらく自信ありげに言うな」

「確証があるからな。それと、偽の警護計画書は聖居内の情報リーク容疑者全てに流してある。本物はこっちだ」

八幡の言葉に呼応するように、浮かんでいたホログラムに上書きされるように新しい警護ルートが表示された。こちらは偽の警護ルートに比べると随分慎重で、建物の影に隠れ、狙撃しづらいように巧妙にルートを選択している。当然ながら聖天子は偽の方を外れ本物のルートで高層ホテルまで向かうことになる。

「今の俺には機動力がなく、近接戦闘が不可能だ。だから俺は奴に対しカウンタースナイプを仕掛ける。廃ビル群と高層マンション、この二点を狙い撃てるポイントでな。」

だが、それだと一手足りない。奴の狙撃手としての技量は確実に俺以上だ。『シエンフィールド』の恩恵なしで先制しても五分がいいところだろう。だから里見にはティナ・スプラウトを捕捉次第、接近して襲撃をかけてほしい」

わざわざ直接対決の機会を譲ってくれるということか。願っても無い相談だと蓮太郎は戦意を漲らせる。もとより蓮太郎には狙撃の素質がなく、近接戦闘に特化したプロモーターである。ティナが聖天子と八幡に気を取られてくれるなら接近は容易いだろう。

「どちらに奴が現れても対応できるように二点間のちようど中間……ここに待機してくれ。現場に急行できるように司馬がバイクを貸してくれる。運転はできるよな?」

「民警ライセンスとつてから一年くらい運転してないけど、たぶんいけるだろ」

「なら、明日までに慣らしておいてくれ。当日は最悪乗り捨ててもいい」

説明を続ける八幡にホログラムの操作を止めた未織が、会議室の隅にあった一メートル強ほどある長物を差し出す。

「比企谷ちゃん。これ、頼まれとつた銃。整備済みですぐにも使えるけど……試射はどうする?」

「射撃場を貸してくれ。仮眠とつてからでも慣らしておきたい」

「ええよ」

そういつて未織は八幡に銃を手渡した。長大な銃身に重厚感のあるフォルム。見覚えのある銃身に蓮太郎が声をあげる。

「L96狙撃銃か?」

「いや、違う。こいつはL96の銃身を、338ラプアマグナム弾用に改良したL115A1だ。ティナ・スプラウトと超遠距離狙撃で張り合うならこのくらいじゃないかな」

八幡は銃身を抱え、取り付けられたスコープや銃身下部の二脚銃架パイポットを確認する。

もとより精度の面ではほかの狙撃銃の追隨を許さないほどの性能を誇るL96A1だが、その優秀さゆえに他国へ輸出、ライセンス生産がされているほどである。国や軍、法執行機関など使用条件により様々なモデルが開発されてきたが、中でも特に長距離狙撃に適しているモデルがこの『L115A1』だった。

「対策の手段はこれだけじゃない。狙撃地点を予測できるってことは先手をうてるってことだ」

「まだあるのか？」

「とりあえずはティナ・スプラウトの出現予測地点をこの二点と断定したうえで、予測地点付近に通信妨害装置を設置した。局地的な電波妨害^{ジャミング}を仕掛けることで『シエンフィールド』を無効化する」

予想だにしなかった手段に、蓮太郎は面食らった。如何なる天候条件、狙撃対象でも意に介さず撃滅してきた神算鬼謀の狙撃兵。蓮太郎は圧倒的索敵能力の差の不利をやむなしとした上で対決しようとしていたが、八幡はその索敵能力そのものを無効化する手段に出ようというのだ。

「とはいえ奴もまた機械化兵士だ。ある程度の電波妨害^{ジャミング}対策はしてあるだろうから慢心するつもりはない。そのためにも司馬に協力を仰いだ。ただ、ティナ・スプラウトと近接戦闘をするなら戦域突入と同時に俺たちとは一切連絡が取れなくなると思ってくれ」

ティナを止めると決意した当初こそ、延珠を下したティナに対し絶望的戦力差を覚悟して挑もうとしていたが、『シエンフィールド』の無効化、更に八幡による狙撃の援護があれば、近接戦闘によるティナ無力化もにわかには現実味を帯びてくる。

今日まで未織のもとで積んでいた対狙撃手シミュレータの戦闘訓練も無駄にはなるまい。

「おおまかな説明は以上だ。他に何か質問は？」

ふむ、と蓮太郎は腕を組むと、ややあつて説明中に感じた疑問について口を開いた。「……ティナの位置を今のうちに捕捉して会談前に叩くことは出来ないのか？ 準備ができていない段階で奇襲をかけた方が成功率は高いと思うんだが」

「今朝未明にティナ・スプラウトらしい少女が拠点と思しき古アパートを焼き払った。明日の夜まで拠点を棄てて街中に潜伏する気だろう。こうなったら当日夜まで捕捉は困難だ」

質問はもうない様子の蓮太郎に、話は終わりだと八幡は立ち上がった。

「細かい指示は後で伝える。何かあつたら連絡してくれ」

「里見ちゃん。今日は一日ゆっくり休んで、明日また午前中にシミュレータ訓練でおさらいしたろ。比企谷ちゃんはどうする？」

「家に帰る時間も惜しい。悪いが仮眠室を貸してくれ」

「ええよ。比企谷ちゃんの高貴な寝顔たつぷり撮ったる」

八幡は欠伸を噛み殺しながら伸びをすると、銀縁の眼鏡と外して目元を拭う。切れ長の眼の下には薄っすらと隈ができており、彼の疲労具合が窺える。

L115A1を収納したライフルケースを担いだ八幡が自分の肩を揉みほぐしながら未織と共に会議室を後にする。

彼らを見送った蓮太郎は、両手で頬を張って気を引き締めた。
後は明日の夜を待つだけだ。

神算鬼謀の狙撃兵

清涼な夜の爽気が頬を撫ぜる。

日はとうに沈み、青白い月明かりとカーテンを揺らす風のそよ音だけが支配する暗がりの病室で、蓮太郎の意識は覚醒した。

生温い熱気が夜を支配していた数日前とは打って変わって、頬を撫ぜる爽気は連日の猛暑で疲れた身体に心地よい。

昏睡している延珠の寝顔を眺めながら微睡んでいたところまでは覚えていたが、どうやらそのまま寝こけてしまったらしい。その間に延珠の意識も回復しているかもしれないと淡い期待を抱いたが、隣のベッドの延珠は蓮太郎が眠りこける以前と変わらず穏やかな寝息を立てている。しかし蓮太郎はなんら落胆の色も見せずに、延珠の穏やかな寝顔を慈愛に満ちた眼差しで見遣る。

決戦の夜だった。これから数時間の間にすべてが決まるとは思えないほどに、東京の

夜は澄み渡り、穏やかに凧いでいる。

もし延珠に意識があつたのなら、葦や木更のように蓮太郎を止めたのだろうか。真意は未だ昏々と眠り続ける彼女にしかわからない。だが、もし延珠が蓮太郎を止めたとしても、彼が止まることはなかっただろう。それは延珠を傷付けられたという私怨でも、守れなかつたという自責でもない。もうこれ以上ティナに人を殺して欲しくないという願ひだつた。

蓮太郎は一瞬瞑目すると、決意も新たに立ち上がる。

程なくして——少なくとも、夜明けまでには延珠は目を覚ますことだろう。昏睡から目覚めた彼女を悲しませることはしたくない。かといつて蓮太郎にティナを手ずから殺すつもりなど毛頭なかつた。もし八幡が同じ立場だつたとしたら、襲撃を受けた際一度は仕留め損ねたとはいえ、今度こそ確実に息の根を止めようとしただろう。そうでなくても、今晚彼が実行するカウンタースナイプでは、戦闘能力を奪つた上で無力化などという生温い考えを持ち込む筈はない。

願わくば殺してくれるなど蓮太郎は切に願つた。八幡の狙撃は援護に限り、ティナとの決着はあくまでも己の手でつけたかつた。己の怠慢が招いた結果なら、己の手で始末をつけるべきだ。

どうしようもない我儘だと思つた。あまりにも度し難い、唾棄すべき甘さだ。

己がどれほどの困難に挑むのかはわかっていた。テイナを殺すまいと手を緩めれば、殺されるのは己なのだ。否、己に限った話ではない。蓮太郎を殺した後に、その牙が向けられるのは他ならぬ聖天子なのだ。

何一つ取りこぼさずすべてを手に入れる。そんな許されざる決意を満身に漲らせ、蓮太郎は静かな足取りで病室を後にする。

昏々と眠り続ける延珠の寝息だけが、夜の病室に残された。

×

×

×

澄み切った夜空に眩しさを感じるほどの満月が煌々と周囲を照らす中、比企谷八幡はそこにいた。

東京エリア南岸部から僅かに離れた区画にある、モノリスとはほど近い高層建築の数々。市民の居住区とは離れ、一般企業の雑多なビルが点在する区画の一部ではあるが、モノリスに近いこともあり有名企業が利権争いをしている東京エリア中心部とは趣を異にして、活気も人気も幾分薄い。しかしその中の利権争いに疲れた奇特大企業

が、モノリス付近の地価の安さに物を言わせ新たな支部として高層ビルを建築しようとしているのが、今八幡が潜むビルである。

外周区である三十九区とは区画を跨いでこそいるもの、モノリスにほど近い区画の特徴の例に漏れず、高層建築の数は多くない。

テイナの予測出現ポイントが打ち捨てられた廃ビル群及び高層マンションである以上、射角を取るためにも両方に射線が通り、かつ高度を取らなければならぬ。その二つの条件を満たす狙撃ポイントが確保できたのは全くの僥倖と言ってよかつた。

建築途中で鉄骨が剥き出しになり、資材や廃材が転がるばかりであるこのビルも、日中の喧騒とは打って変わり工事が中断される夜の間は簡易的な施設がされるのみで侵入自体は容易い。八幡のような例外を除いて侵入する目的そのものが想像し難い建築途中のビルは、警備員はおろか監視カメラの一つも設置してはいない。エレベーターの電源が落とされているため、地上数十階の階段を踏破しなければならぬ手間を除けばまさに理想的な立地といえた。

現場作業員が居なくなるのを見計らって建物内に侵入した八幡は、無人の階段を二十分近くかけて登りきり、最上階と思しき建築途中の支柱の影に潜んでいた。放置された重機と点在する支柱、資材ばかりである雨ざらしの最上階は煩雑な見た目の割にやたらと風通しが良く、青白い月明かりしか光源がないため妙に寒々しい。

そんな季節外れの肌寒さも、手元の狙撃銃の銃身を撫ぜながらスコープを覗く八幡の意中にはない。時折思い出したかのようにインコムに囁きかける口調は機械じみて事務的だ。

「ここに張り始めてから丁度二時間が経過した……司馬、そつちはどうだ？」

『——生体反応は未だなし。一応司馬重工の衛星からの監視も続けてるけど、動きは見られへんなあ』

事務的な八幡の口調に反し、無線越しにぼやく未織は平常運転だ。

廃ビル群と高層マンションの残骸を、狙撃銃と観測手用のスコープで交互に監視するのは些か難儀ではあったが、普段単独で動く八幡には相方となるイニシエーターが存在しないためそれを弁えた上で行動するしかない。

狙撃において必要なものは、何にも増して「忍耐」である。排除すべき標的を、「殺せる」と確信するその時まで、何日でも何時間でも待つのが狙撃の真理だ。豆鉄砲のような口径の銃を持った俳優が、鮮やかな一射で以ってハインド攻撃ヘリを撃墜する——そんな失笑ものの茶番はB級映画の中でしかありえない。

様々な銃を手には、様々な戦場で待ち伏せる——あるいは熱砂の上で灼けつくような太陽に照らされながら、あるいは寒風吹き荒ぶ雪国でその身を凍えさせながら。いつ現れるかもわからない、そもそも現れるのかすらわからない標的を撃ち抜くために、来るべ

き必殺の時を延々と待ち続けるのだ。

戦場に身を置き続けて数年経った八幡も、決して突撃銃や短機関銃よりも狙撃銃アサルトライフル、サブマシンガンの銃把を握り慣れていると言うつもりはない。それでも、決して狙撃手スナイパーという過酷な任務に身を置くものの心理を弁えていないというわけではなかった。

むしろ、ただ「殺せ」と命じられるだけだったそれまでの任務に比べれば、標的が現れる場所も時間もわかっているだけに、精神的負担は遥かに軽かった。ティナ・スプラウトが狙撃で聖天子を仕留めようとするのは確定的。更にわざわざ目の前に垂らしてやった餌に食いつかないはずもない。であるならば、予測した狙撃ポイントを監視しながら座して待つだけのことだ。焦る要素など微塵もない。

八幡は高層マンションの屋上に向けて据えてあつた観測手用のスコープから目を離すと、L115A1を構えて廃ビル群の監視に移る。

前方一キロ余りにそびえ立つ、全高三〇〇メートルはあろうかという廃墟。ガストレア大戦の爪痕として所々が崩落し、コンクリートが剥がれ剥き出しの骨組みが点在する中、それでも耐震工事が繰り返され頑丈に造られた素体は放置される以前の威容をそのままに、崩れ落ちる気配など寸分もうかがわせない。

光量増幅装置の内蔵されているスコープは、月明かりなど存在しない夜にも一定の距離効果を発揮する。今夜のような眩いほどの月夜ならば尚更に、静謐に沈むはずの夜闇

を詳らかに暴き出す。廃ビル群の全体を俯瞰するように監視していた八幡の視界の端に、昏い色のドレスが翻った。

暗視スコープの暗緑色の視界の中に、おぼろげに浮かび上がる小さな体躯。高倍率テレスコピックサイトに切り替えて確認してみれば、距離ゆえに顔立ちこそ確認できないものの、白い肌にプラチナブロンドはティナ・スプラウトに相違ない。

無人となった高層ビルの屋上に忽然と姿を現したティナは、吹き付ける強風を歯牙にもかけず長大な鋼の銃身を傷んだコンクリートの上に横たえる。

「司馬。標的を捕捉した。南西方向、廃ビル群の一番高いビルの屋上だ」

『——こつちも今捕捉したで。電波妨害はどないする？』

「俺の指示を待ってくれ。ぎりぎりまで警戒させたくない。聖天子のホテル到着まで……いや、偽の警護ルート第一狙撃ポイントまであと何分くらいだ？」

『——せやなあ……およそ二十分、てところやな』

「了解。それまでに仕掛ける」

一切の私情を交えず、獲物の挙動を観察する目は腐敗の色を見せず冷徹だ。

声音までもが冷え切る八幡の変貌は未織にとつては馴染みの薄いもので、些か居心地が悪い。表面上こそ平静を取り繕ってはいるが、やはり未織とて戦場に身を置かぬ市井の出である。八幡や蓮太郎などといった『兵士』の属性をもつ者達とは根本的な乖離が

あつた。

「——里見。聴こえるか？」

『——感度良好だ。どうした？』

突然の無線にも、即応態勢にあつた蓮太郎からの応答は迅速だった。僅かに気負いの見られる声音は少しばかり強張っていたが、ここぞというときの蓮太郎の働きに疑いを持つ八幡ではない。

「ティナ・スプラウトを捕捉した。廃ビル群の屋上に伏せている。これから仕掛けるが、不測があつた時は例の仕掛けを起動する。一帯に電波妨害がかかるから無線はできないものと思つてくれ」

『——ああ、わかつた』

無線を切つた八幡は、スコープで油断なくティナを見据えながら懐の信号銃を意識した。八幡がティナの反撃によつて不覚を取つた場合、信号弾を打ち上げる手筈となつていた。蓮太郎もまた然りである。

そうでなくても八幡の状況は未織が把握しているし、そもそも信号弾を撃ち上げられないほどのダメージを受けたなら手遅れである。無線が使えなくなるがゆえの苦肉の策ではあるが、初めから無線を使った緻密な連携など想定していない状況ゆえに、デメリットは皆無だった。

二〇倍に拡大された視界の向こうで、ティナが懐から拳大の球形物を取り出して虚空に放る。合計三つ放り投げられた『シエンフィールド』は、重力に逆らうようにふわりと浮き上がると音もなく飛翔していく。途中で二手に別れたそれらは道中と高層ホテルの二方向を監視するつもりだろう。

予想通りの展開に内心ほくそ笑みそうになった八幡は、しかし次の瞬間ティナがとつた行動に目を細めた。

伏射態勢に移行したティナのドレスの裾から、音もなく虚空に躍り出たもう二機の『シエンフィールド』。くるくるとティナの周囲で旋回したそれらは、示し合せるように互いをカメラアイで確認すると、警戒するようにビル周辺を漂い始めた。

まさに想定外の事態である。同時に使用可能な『シエンフィールド』は三機までだと董に事前に言い含められていただけに、それらの性能分析が盤石ではなかった事実が詳らかになる。

しかしその程度の事実には狼狽する八幡ではない。そもそもが妨害する対象を選ばない電波妨害装置ならば、範囲内に存在する限り何機いようと『シエンフィールド』を無効化する事だろう。

「司馬。ティナ・スプラウトが『シエンフィールド』を展開した。明らかに数が多い。上限は不明だが——大勢に影響はない」

冷静に報告しながら、八幡の心中は落ち着いていた。

ティナの機械化能力たる『シエンフィールド』は、展開すればするだけカバーできる範囲は増えるがその分脳への負担が増える諸刃の剣である。それらを問答無用で黙らせる電波妨害による大音量のノイズは、展開する数が多いほどティナの脳を責め苛むだろう。

しかし、如何に『シエンフィールド』の数が電波妨害に及ぼす影響がないとは言え、八幡が奇襲を敢行する前ならばその脅威度は依然健在だ。蓮太郎がティナの籠城するビルに近接すれば、浮遊する『シエンフィールド』に感知されるのは確実である。兵士とはいえ隠行の心得がない蓮太郎が『シエンフィールド』の搜索の目を潜り抜けられる可能性は低い。

それまでに決める、と冷え切った視線をティナに据えると不敵に嘯いた。
チャールズ・ホイットマンごっこはこれまでだ、と。

満月を背にバレットM82改を構えていたティナの脳内に、不意に大音量のノイズがかまびすしくなり始めた。

現在展開している五機の『シエンフィールド』から送られてくるはずの情報は、電波

を送受信するまでの間に想定外のノイズに見舞われ情報信号としての意味をなさない。
「……………ツ!?!?」

飽和するノイズと情報にティナは悶絶してコンクリートの上を転がった。経験したことのない事態に混乱したティナは、しかし津波のように襲いくる無意味な情報信号の山に頭を抑えることしかできない。

ビルの壁面をなぞるように警戒していた『シエンフィールド』は、主の混乱を表すように、そして混じるノイズがバグの様にその挙動を危うく揺らす。

まさに慮外の一撃、電波妨害^{ジャミング}の効果は劇的だった。

対人戦、狙撃に関して圧倒的なほどのアドバンテージを誇っていた『シエンフィールド』は、外部居住区たる三十九区を覆い尽くすノイズによって完全に封殺された。

しかしティナもいつまでも混乱に陥っているわけではない。気が狂うほどのノイズと情報信号の嵐を振り払う様に『シエンフィールド』との接続を打ち切ると、荒い息を吐き出しながら偏頭痛めいた痛みを顔に確かめた。

「まさか、こんな事をしてくるなんて……………」

操縦主を失った『シエンフィールド』が、硬質な音とともにコンクリートに落下する。今日までティナの狙撃を支えてきたそれも、こうなつては最早路傍の石も同然である。

ティナの兵士としての知識、常識に当てはめれば、経験こそないものの一目瞭然だつ

た。

ノイズ・ジャミング。強いノイズ電波を発信し、周辺の電子機器を無効化するそれはティナの『シエンフィールド』も例外ではない。ノイズ電波を発している以上それらを発生させる装置が周囲に設置してあるはずだが、簡単に見つかるような場所にあるはずもなし、それ以上に『シエンフィールド』を失ったに等しいティナには、それらの搜索そのものが困難である。

そしてその装置が近辺にあるということは、ティナがこの場所を潜伏地点として選ぶ事が露見している事を意味し――

確信にも似た予感がティナの背筋を戦慄で凍らせる。

次の瞬間、慄然とするティナの真横のコンクリートを、闇夜を切り裂き飛翔した漆黒の弾丸が抉り穿った。

砕け散るコンクリート片から顔を庇いながらも、ティナは動揺に身を竦ませていた。今まで数々の狙撃任務をこなしていながら――彼女は今まで一度も、自分が狙撃される状況に陥ったことがなかったのだ。

それでも苛烈なまでの訓練を施されたティナの身体は、敵弾に身を晒したまま硬直する事をよしとはしなかった。

手元のバレットM82改を抱えると、膝立ちの態勢から弾かれるように身を翻し、手

近な給水塔の陰に転がり込む。——追撃は、ない。

相手も俄^{にわか}仕立ての狙撃手^{スナイパー}というわけではないらしい。畏と予感しながら飛び込んだとはいえ、潜伏を始めてから数十分と経たずにティナの位置を探り当てた相手が素人のはずもない。

初撃のみで射撃方向を割り出せたのは、ティナの天性の戦闘勘と僥倖に恵まれたものと思つて良かった。懐から手鏡を取り出したティナは、給水塔の陰から手首だけを覗かせる。

廃ビルの屋上に伏せていたティナを狙い撃てるのは、より高所に陣取っている者のみ。それに射撃方向まで割り出せていたならば、敵が伏せている場所がどこかは自ずと察しがつく。

外部居住区を多く擁する三十九区。その北東に位置するのは一般企業の雑多なビルがほとんどの三十八区。それらの中でこの廃ビルより高所があるとすれば、あの建設途中の高層ビルしかない。

身を乗り出し過ぎていたティナを狙い撃つたのか、高層ビルの最上階が明滅した。しかし飛来した弾丸はティナを抉ることは叶わず、遮蔽物^{カバ}となつている給水塔に着弾する。

距離は目算で一キロ強。それだけでも相当の腕を持つと思つていいが、地上三〇〇

メートル以上の高層階ではその強風も侮れない。初弾が外れたのは横殴りの強風に弾道がズレたからと言つても過言ではあるまい。仮に今夜が無風の夜ならば、ティナは今頃風化したコンクリートの上で無残な骸を晒していたことだろう。

しかし如何にティナが『シエンフィールド』を失ったとはいえ、こと狙撃という点において誰にも劣るつもりはなかった。

『シエンフィールド』を奪い、ティナの位置を特定したカウンタースナイプの技量は驚嘆に値するだろう。だが最も重要な初撃を外し、位置を露見させた以上相手はティナに對するアドバンテージを失つたも同然。そしてティナの手元にバレットM82改がある以上、相手がアンチマテリアルライフルを持つていたとしてもティナの優位性は揺るがない。

己を鼓舞したティナはしかし樂觀的観測に身を任せることなく、冷静に状況を推し測り――

撓めた脚をバネのようにして給水塔の陰から飛び出した。

距離が一キロ以上離れているならば、弾丸の撃発から着弾までのタイムラグはおおよそ一秒。狙撃の腕がどれほど優れていたとしても、フィジカル面で圧倒的な優位性を誇るイニシエーターを捉え切れる筈はない。

再び明滅――回避運動。翻るドレスの裾を擦過する弾丸に肝を冷やしながら第三射

を躲してのけたティナは、コンクリート面を転がって伏射態勢プロローニングに移行する。

ティナの握るバレットM82改は個人携行火器として圧倒的な初速と有効射程を誇る。アンチマテリアルライフルの一・五倍の初速を誇る弾丸は撃発から着弾までのタイムラグが大幅に短縮され、回避は非常に困難だ。対象が高速で移動しているならばともかく、歩行かちの相手にティナの弾丸を逃れうる術はない。

そう意気込んでスコープを覗き込んだだけに、ティナの視界に入ってきたものが彼女にもたらした狼狽はひとしおだった。

常人の八倍の視力を誇り、闇夜を容易く見通す暗視性能。そのティナの類稀なる能力を近代機器たる高倍率テレスコピックサイトで底上げした視認性は、一キロ先にある人物の容貌すら判別可能だった。

癖つ毛のある黒髪、すらりとした長身痩躯、冷え切った殺意に凍える視線——それが向けられる先が自分であること事実を目の当たりにして、それでもティナは暗殺の邪魔はさせじと照準に必中の視線を同期させた。

テレスコピックサイトを覗き込んでいた八幡は、憎々しげに舌打ちした。

ティナ・スプラウトの捕捉、電波妨害ジャミングによる『シエンフィールド』の無効化、超長距

離狙撃による先制——すべてが万事滞りなく、盤石のままに進んだ。緻密に練られた計算は、最後まで捕捉されたという事実を露見させずティナを絶命せしめる筈だった。

——よりもよつて肝心の初撃を外した。

不慣れな超長距離狙撃だったこともある。夜間で視認性が悪かったというのもある。装備を換装し他の銃を扱ったから、地上三〇〇メートルという強風吹き付ける高所で事に及んだから、など挙げる理由は枚挙に暇がない。

それでも、狙撃における要所である初撃を逸したという事実は容認し難い事態だった。

初速三〇〇〇フィート、五〇〇〇フットポンドに及ぶ運動エネルギーは、銃爪を引き切る刹那に巻き起こった強風によって標的を僅かに逸れて着弾した。

更に、遮蔽物から誘い出すための第二射、回避位置を予測して放った第三射までもが辛くも回避され、そして今、反撃のため伏射態勢に入ったティナはこちらを狙い撃とうとしている。

刹那、ビルの屋上で瞬く銃口炎——着弾。

風切り音と共に飛来した大質量の弾丸は、しかし八幡を扶ることなく脇に逸れて林立する支柱の一部を粉碎した。その軌道から敵狙撃手の動揺を見て取った八幡は、回避運動を取ることなく遊底を操作し空薬莖を排出する。

ティナの持つアンチマテリアルライフルの初速ならば、一キロ以上先の標的であつても着弾まではゼロコンマ数秒。当然着弾までのタイムラグが短ければ“先読み”も容易い。義足が片方破損し高機動を失つた八幡に、ティナの弾丸を回避しうる手段は持ち合わせてはいない。

“回避の意味はない——”

そう弁えた上で、八幡は冷静に照準を一キロ先のティナに定める。

ティナが再度発砲——今度は更に近かつた。至近に着弾した弾丸はコンクリート片を飛散させ、八幡の頬を切り裂く。『シエンフィールド』を失つたとはいえ、この距離、この強風でこの技量は驚異的だ。

次は当ててくるだろう——確信にも似た予感があつた。じわじわと誤差を修正しつつある弾丸が、次も都合よく外れるなどと楽観する八幡ではない。むしろ先の二発が外れてくれたことを天に感謝すべきだ。

大きく吐気を吐き出した。呼吸と鼓動と殺意を同期させる。一〇〇〇メートル調整している零点補正点より照準を僅かに上にずらし、過去三度の誤差を修正する。鼓動による振動も、呼吸による照準のブレも体内に金属製のバランスを埋め込んでいる八幡には無縁だ。

轟々と吹き付けていた強風が不意に弱まつた。四度目にしてようやく到来した絶好

の機会。長年培ってきた経験と戦闘勘が、天啓のように八幡の耳に囁きかける——今だ、と。

躊躇うことなく必中の予感と共に銃爪を引いた。雷管を叩き撃発した弾丸が、炸薬の轟音を夜空に朗々と響かせる。銃口制退器から燃焼ガスが噴出され、338ラプアマグナムが高速回転しながら銃身から射出される。

轟音と反動に目を細めたその刹那、八幡は見た。スコープの先のプラチナブロードの矮躯、その得物の発する銃口炎を。

弾かれたように転がったのは脊椎反射の領域だった。もしくはティナもまた撃つてくるという予感めいたものを感じていたのかもしれない。しかしその弾丸を避け切るには、人間の反射速度では限界があった。

「つぐ、ああああ……ッ!!」

『——比企谷ちゃん!? 何があったん!? 比企谷ちゃん!』

八幡の絶叫に悲鳴のような声で未織が無線を超越す。しかしそれに応答している余裕は八幡にはなかった。

夜気を裂いて飛来した弾丸は、転がるために力を込めた左上腕部を掠めるようにして擦過した。皮下一センチ程度の肉を抉るに留まった弾丸は、しかしその衝撃波で周囲の肉をごっそりと抉り取り、上腕骨を諸共に粉碎していた。背後には血飛沫と肉片が飛び

散り、白いコンクリート面を紅く彩る。

そもそもがアンチマテリアルライフルの弾丸でさえ、人体に命中すれば良くて即死か悪くて致命傷、狙撃された部位は確実に欠損すると言われるほどである。それすら上回る威力の狙撃を受けて、胴体を四散させず、なおかつ四肢のどれも欠損しなかった結果は奇跡に等しい僥倖と言えた。

取り落としたL115A1にも頓着する暇なく、傍らの支柱の陰に転がり込んだ八幡は、己の腕の惨状を目の当たりにして、身につけていた衣服を破ると脇下をきつく緊縛して止血する。

顔こそ平静を装っていたが、顔色は真つ青で額に脂汗が滲んでいた。義足に続いて二度目の被弾。今度こそ重傷である。

『——比企谷ちゃん！ 比企谷ちゃんツ!! 応答してツ、比企谷ちゃん!』

「司馬、左上腕部に被弾した。戦闘続行は不可能だ」

『——被弾って……!』

色を失う未織に、八幡は努めて冷静に声をかけた。

「正直痛くて死にそうだが、幸運にも五体満足だ。だがティナ・スプラウトの現状まで確認はできない。次善策でいく」

『……わかった。あと、今からへりを向かわせるで』

「今にも失血死しそうで気が気じゃないんだ、助かる」

あからさまに安堵したような未織の声音に軽口で応じる。青褪めた顔を見られずにすんだのは幸運だった。

大きく溜め息をついた八幡は、傍らに転がるL115A1にちらりと視線をやつて、無事な方の右手で懐から信号銃を取り出すと上空に撃ち出した。

煙を引いて撃ち上がった信号弾が、眩いばかりの光を発し始める。蓮太郎が気付くかは完全に運だ。

支柱の陰から廃ビル群を睨み据える。元よりすべてが上手くいくなどと考えるのはなかつた。失敗を想定してこそ幾つもの策を立てるのが常識だ。八幡の瞳は未だ諦観は滲んでは居なかつた。

最後の手段だ。あの摩天楼を地に墜とす。

最後に放った弾丸の、その弾道を見届けることは叶わなかつた八幡だが、効果がなかつたかと問われればそれは否である。

己のダメージに気を取られ正常な判断をし損ねたか、確認し損ねたならば敵はまだ健在だとする偏執的な念の入りようなのか。

少なくとも、八幡が放った。338ラプアマグナムはティナ・スプラウトの暗殺任務を続行不可能にするだけのダメージを与えていた。

ティナがバレットM82改の弾丸を撃発したその刹那、飛来したバラニウムの弾丸は彼女の親指を吹き飛ばし、超バラニウムの及んでいない合成樹脂のグリップを粉碎していた。

持ち手と握力を同時に欠損したティナは、手元から転がり落ちるM82を眺めながら今度こそ観念した。

最早暗殺を続行するだけの手段はない。偵察兵器として破格の性能を誇った『シエンフィールド』は封殺され、虎の子にして頼みの綱であったM82改は砕け散った。

接近して強襲をかけようにも、遠距離型のイニシエーターであるティナに護衛を突破する力はない。親指を欠損した右手は武器を保持することは叶わず、バラニウム弾での負傷は再生まで非常に時間がかかる。

冷やかな諦観がティナを打ちのめした。
頰くまれたティナの耳に、甲高い破裂音が忍び込んでくる。

ばん、ばんと連続する破裂音は、ティナの座する摩天楼の遥か下から響いてくるものだ。否、むしろ破裂音というよりは――

「な――ま、まさか……ッ！」

悲鳴じみて声をうわずらせるティナは、給水塔に預けていた背を跳ね上げて立ち上がる。ふと顔を上げた先にはどういいうわけか信号弾が上がってはいたが、その意図を読むだけの猶予は残されてはいなかった。

爆発。

間違いない。爆発音こそ密やかに、ビルの外にも微かに聞こえるほどの小さなものはあつたが、それが逆にティナの焦燥感を募らせる。

爆破解体だ。^{デモリッション}ティナを仕留めたか確認し損ねた八幡は、なおも暗殺任務の妨害を盤石とすべく、文字通り足元から崩しにかかったのだ。

地上三〇〇メートルを超える高層から地表に叩きつけられれば、いくら優秀なインシエーターであるティナといえども死は免れない。よしんば生き^{ながら}存えたとしても、得物も射角も失ったティナに任務の続行は不可能だ。

落下への準備も、屋外への脱出もすべてが遅かった。

ティナが八幡の意図を察したその瞬間には、足元が崩れ自由落下へ移る時の浮遊感とともに、ティナは虚空へと投げ出されていた。

×

×

×

天に聳え立つ摩天楼——全高三〇〇メートルにも達しようかという威容が、轟音と共に崩れ去っていく様。

その一部始終をアイドリングさせたままのバイクに跨った蓮太郎は見届けた。

破壊は執拗で、徹底的で、そして完璧だった。

放置された廃ビルの構造をすべて把握していなければ不可能だろうその所業。下階層の支柱全てを最小限の爆薬で、しかし徹底的に破壊したその手際。

短時間の間にその重量を支える芯を根こそぎ奪われた廃ビルは、横倒しになるでもなく地面に吸い込まれるようにして崩れ去った。

爆破解体デモリッションにおいて、周囲に被害をもたらすものは、轟音でも降り注ぐ破片でもなく、なによりも撒き散らされる粉塵である。

廃ビル内の淀んだ空気は建物の崩落に巻き込まれ行き場を失い、さながらダウンバーストのように地面に叩きつけられ四方へ散逸した。その際大量の資材、重機、コンクリート片の欠片を巻き込んだ粉塵は数百メートル先まで飛散する。

もうもうと広がる粉塵から顔を庇い、咳き込みながらも蓮太郎は廃ビルの残骸から目を離さなかった。

八幡よりもティナ本人よりも、彼女の生存を信じていたのは蓮太郎だった。

あの延珠を下したティナが死ぬはずはない。これで終わりになどなるはずがない。ビルが崩れ落ちてもなお弛緩することを許さない空気が蓮太郎に告げていた。

如何に手傷を負つていようと、戦闘続行が困難になつていようと、彼女との因縁に決着をつけるのは己でなくてはならない。

おそらく彼女は生きているだろう。そして生きているならば離脱して再起するに違いない。蓮太郎はそれを許すつもりはない。

粉塵の向こうに、昏い色のドレスが翻る。

闇と粉塵で判然としない視界も、しかしティナならば真昼も同然に見通すに違いはない。ならばこちらがティナを捕捉したならば、即ち彼女もまた蓮太郎を見ているということだ。

逆巻く颶風のように粉塵を蹴散らしたティナが、コンバットダガーを左手に猛然と肉薄する。

義眼の演算によつて鈍化した視界の中で、蓮太郎もまた応じるようにバラニウムの義肢を突き出し――

今宵最後の戦いの幕が、音もなく切つて落とされた。